茨城県自然博物館(仮称)建設 用地内埋蔵文化財調査報告書II

高崎貝塚

平成6年3月

財団法人 茨城 県 教育財団

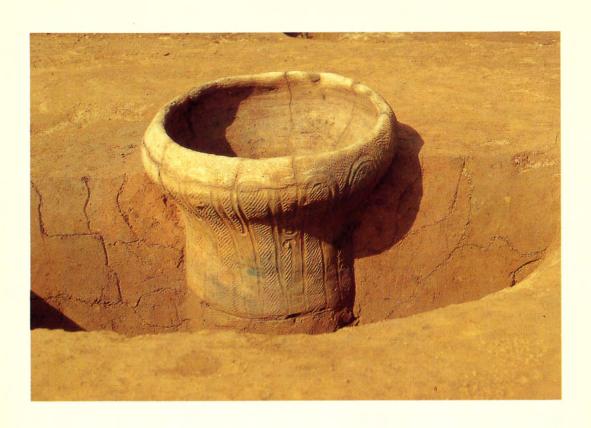
茨城県教育財団文化財調査報告第88集

茨城県自然博物館(仮称)建設 用地内埋蔵文化財調査報告書II

> th さき かい づか 高 崎 貝 塚

平成6年3月

財団法人 茨城 県教育財団





第50号住居跡埋甕炉(上)・第51号住居跡出土双耳土器(下)



高崎貝塚全景

自然に触れ、親しみ、楽しみながら地球の生い立ちや自然の仕組み、人間と環境を学ぶことを目的として、茨城県は、岩井市大字大崎に「茨城県自然博物館(仮称)」の建設を計画しました。その建設予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である原口遺跡、北前遺跡及び高崎貝塚が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会と埋蔵文化財発掘 調査事業について委託契約を結び、平成2年4月から平成4年3月 まで埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成3年度に調査を行った高崎貝塚の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、ひいては、教育・文化の向上の一助として、広く活用されますことを希望いたします。

なお,発掘調査及び報告書の刊行にあたり,委託者である茨城県 教育委員会をはじめ,岩井市,岩井市教育委員会等関係機関及び関 係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し,衷心より感謝 の意を表します。

平成6年3月

財団法人 茨城県教育財団 理事長 礒 田 勇

例 言

- 1 本書は、平成3年度に茨城県教育委員会の委託により、財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県岩井市大字大崎字栗山417外に所在する高崎貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 高崎貝塚の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。 平成4年度初めの組織改正により、従来の企画管理課は、企画管理課と経理課の二課に分かれることになった。

理		事		長		田		勇	昭和63年6月~
					小	林		元	昭和63年4月~平成3年7月
副	理	튁	ļ.	長	角	田	芳	夫	平成3年7月~
専	務	玛	里	事	中	島	弘	光	平成5年4月~
常	務	Ę	里	事	本	田	三	郎	平成3年4月~平成5年3月
=	マケィ			=	_	木	邦	彦	平成元年4月~平成4年3月
事	務)ī		長	藤	枝	宣	_	平成4年4月~
### ī	蔵 文	ル目	才 空区	長	石	井		毅	平成2年4月~平成5年3月
生/	以又	16 8		- X	安	蔵	幸	重	平成5年4月~
	課			長	北	沢	勝	行	平成2年4月~平成4年3月
企	課			長	水	飼	敏	夫	平成4年4月~(平成2年4月~平成4年3月 企
画管	+ 4	任 調	日本	吕	根	本	康	弘	画管理課長代理) 平成3年4月~平成5年3月
理		工部任課				井	及正	JA →	平成5年4月~
課	主	ı д/•	ı н.	事	吉	井	正正	明	平成元年4月~平成4年3月
坏	主			事	杉	Щ	秀		平成4年4月~
	課			長	藤	Ш	和	行	平成4年4月~平成5年3月
経	課			長	小	幡	弘	明	平成5年4月~
	課	長	代	理	鈴	木	\equiv	郎	平成5年4月~
理	主			任	飯	島	康	司	平成4年4月~(平成3年4月~平成4年3月 企
	主			事	大	貫	吉	成	画管理課) 平成4年4月~平成5年3月(平成2年4月~平成
課	土			尹		昗		13%	4年3月 企画管理課)
	主			事	軍	司	浩	作	平成5年4月~
∃E	課長	- (部	長兼	務)	石	井		毅	平成元年4月~平成5年3月
調		통(部			安	蔵	幸	重	平成5年4月~
査	1	主第			柴			正	平成3年度
課		任訓			大	森	雅	之	平成3年7月~平成4年3月調査
		任訓	計 査	員	鶴	見	貞	雄	平成3年7月~平成4年3月調査
整理	課			長	沼	田	文	夫	平成2年4月~平成5年3月
理課	課	<i>⊱</i> = = 1	ur -4-	長		文津	4	久 ##	平成5年4月~
	王	任訓	司 負	: 貝	鶴	見	貞	雄	平成5年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第4章「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、遺構・遺物について国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、栃木県立博物館 橋本澄朗氏、茨城県立歴史館斎藤弘道氏に御指導いただいた。
- 5 貝の成長線及び獣魚骨の分析については埼玉大学の小池裕子氏に,また炭化材の樹種同定等 についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果については付章として報告する。
- 6 発掘調査及び整理に際して御指導・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係各位に対し、 深く感謝の意を表します。

7 遺跡の概略

遺跡名	高崎貝塚												
フリガナ	タカサキカイヅカ												
副題	茨城県自然博物館	茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書II											
シリーズ	茨城県教育財団文化財調査報告第88集												
著 者	鶴見 貞雄	鳥見 貞雄											
編集機関	財団法人 茨城県	财团法人 茨城県教育財団											
発行機関	財団法人 茨城県	教育財団											
住 所	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2												
発行日	1994(平成 6)年	1994 (平成 6) 年 3 月 31日											
所収遺跡	市町村	コード	北	緯	東	経	標	画					
高崎貝塚	岩 井 市 (08218-	35°59′5	56" 139°55′54" 17.8m				m					
所収遺跡	主な時代	主な	遺構		主	な遺	物						
高崎貝塚	縄 カラ カラ カラ	住居跡7軒, 10軒, 10軒, 11軒, 14軒, 11軒, 11軒, 11軒, 11軒, 11年, 11-	ル 4基ル 3基ル 1基	土器, 土器, 土器, 土器, 土器,	磨製石土製円板土器片針土製紡土玉, 低石, 古銭	礫石斧,高斧,石皿, 反,(打製・ 垂,石鏃,「 垂車,砥石 剣形模造品 剣形模造品 皿,石鏃,高	石匙, 磨製) 石斧 貝, 獣魚骨 こなど こなど	などなどなど					

目 次

序

例言

目次		
第1章 調	周査経緯	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査経過	1
第2章 位	立置と環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歷史的環境	4
第3章 調	周査方法	8
第1節	地区設定	8
第2節	基本層序の検討	8
第3節	遺構確認	9
第4節	遺構調査	9
第4章 追	遺構・遺物の記載方法	11
第1節	遺構の記載方法	11
第2節	遺物の記載方法	13
第5章 道	貴跡及び遺構と遺物	17
第1節	遺跡の概要	17
第2節	遺構と遺物	17
1 5	竪穴住居跡	17
2 =	土坑跡	233
3 =	井戸跡	284
4 }	溝	288
5 à	遺構外出土遺物	293
第6章	まとめ	305
付章(高	崎貝塚出土動物遺体について/高崎貝塚遺構内出土炭化材の樹種同定について) …	313

挿 図 目 次

第 1 図	高崎貝塚周辺遺跡分布図5	第 36 図	第15号住居跡出土遺物実測•拓影図58
第 2 図	調査区呼称方法概念図8	第 37 図	第22号住居跡実測図59
第 3 図	高崎貝塚基本土層図8	第 38 図	第22号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…60
第 4 図	高崎貝塚調査区全体図16	第 39 図	第22号住居跡出土遺物実測図(2)61
第 5 図	A地区遺構配置図18	第 40 図	第23号住居跡実測図63
第 6 図	第11号住居跡実測図19	第 41 図	第23号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…65
第 7 図	第11号住居跡出土遺物実測•拓影図20	第 42 図	第23号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…66
第 8 図	第20号住居跡実測図21	第 43 図	第23号住居跡出土遺物実測図(3)67
第 9 図	第20号住居跡出土遺物実測•拓影図22	第 44 図	第37号住居跡実測図69
第 10 図	第21号住居跡実測図23	第 45 図	ヤマトシジミ殻長•殻高分布図70
第 11 図	第21号住居跡出土遺物実測•拓影図25	第 46 図	第37号住居跡出土遺物実測•拓影図71
第 12 図	第24号住居跡実測図27	第 47 図	第10号住居跡実測図72
第13図	第24号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…28	第 48 図	第10号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…73
第14図	第24号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…28	第 49 図	第10号住居跡出土遺物実測図(2)74
第 15 図	第24号住居跡出土遺物実測図(3)30	第 50 図	第8号住居跡実測図76
第16図	第1貝ブロックハマグリ殻長・	第 51 図	第8号住居跡遺物出土状況図77
	殼高分布図31	第 52 図	第8号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…78
第17図	第25号住居跡実測図及び	第 53 図	第8号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…79
	遺物出土状況図32	第 54 図	第1号住居跡実測図82
第 18 図	第3貝ブロックハマグリ殻長・	第 55 図	第1号住居跡遺物出土状況図83
	殼高分布図33	第 56 図	第1号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…84
第19図	第25号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…34	第 57 図	第1号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…85
第 20 図	第25号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…35	第 58 図	第2号住居跡実測図88
第 21 図	第25号住居跡出土遺物実測図(3)36	第 59 図	第2号住居跡出土遺物実測•拓影図89
第 22 図	第12号住居跡実測図38	第60図	第 3 号住居跡実測図91
第 23 図	第12号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…39	第61図	第3号住居跡出土遺物実測•拓影図92
第 24 図	第12号住居跡出土遺物実測図(2)40	第 62 図	第 4 号住居跡実測図93
第 25 図	第14号住居跡実測図42	第63図	第 4 号住居跡出土遺物実測•拓影図94
第 26 図	第14号住居跡出土遺物実測•拓影図43	第 64 図	第 5 号住居跡実測図96
第 27 図	第18号住居跡実測図44	第 65 図	第5号住居跡出土遺物実測•拓影図97
第 28 図	第18号住居跡出土遺物実測•拓影図45	第 66 図	第6号住居跡実測図99
第 29 図	第 9 号住居跡実測図47	第 67 図	第6号住居跡出土遺物実測•拓影図 …100
第 30 図	第9号住居跡出土遺物実測•拓影図48	第68図	第7号住居跡実測図101
第 31 図	第16号住居跡実測図50	第 69 図	第7号住居跡遺物出土状況図102
第 32 図	第16号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)…51	第70図	第7号住居跡出土遺物実測•拓影図(1) 103
第 33 図	第16号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)…52	第71図	第7号住居跡出土遺物実測図(2)104
第 34 図	第19号住居跡実測図55	第 72 図	第7号住居跡出土遺物実測•拓影図(3) 105
第 35 図	第15号住居跡実測図56	第 73 図	B地区遺構配置図108

第74図	第53•54号住居跡実測図110	第114図	第40号住居跡出土遺物実測・拓影図(4)157
第 75 図	第54号住居跡出土遺物実測•拓影図 …111	第115図	第40号住居跡出土遺物実測•拓影図(5)158
第 76 図	第55B号住居跡実測図·····112	第116図	第40号住居跡出土遺物実測•拓影図(6)159
第 77 図	第55 B 号住居跡出土遺物実測•拓影図113	第117図	第40号住居跡出土遺物実測図(7)160
第 78 図	第52号住居跡実測図114	第118図	第47号住居跡実測図162
第 79 図	第52号住居跡出土遺物実測•拓影図 …115	第119図	第47号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)163
第 80 図	第56号住居跡実測図117	第120図	第47号住居跡出土遺物実測図(2)164
第 81 図	第56号住居跡出土遺物実測•拓影図 …118	第121図	第50号住居跡実測図166
第 82 図	第57号住居跡実測図119	第122図	第50号住居跡出土遺物実測•拓影図 …167
第 83 図	第57号住居跡出土遺物実測•拓影図 …120	第123図	第42号住居跡実測図169
第 84 図	第58号住居跡実測図121	第124図	第42号住居跡出土遺物実測•拓影図 …170
第 85 図	第58号住居跡出土遺物実測•拓影図 …122	第125図	第44号住居跡実測図172
第86図	第59号住居跡実測図124	第126図	第44号住居跡出土遺物実測•拓影図 …173
第87図	第59号住居跡出土遺物実測•拓影図 …125	第127図	第51•61号住居跡実測図175
第 88 図	第53号住居跡出土遺物実測•拓影図 …127	第128図	第51号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)・・・・・177
第89図	第62号住居跡実測図127	第129図	第51号住居跡出土遺物実測図(2)178
第 90 図	第62号住居跡出土遺物実測•拓影図 …128	第130図	第43号住居跡実測図179
第 91 図	第55A号住居跡実測図·····129	第131図	第43号住居跡出土遺物実測•拓影図 …180
第 92 図	第55A号住居跡出土遺物実測・拓影図130	第132図	第61号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)183
第 93 図	C地区遺構配置図131	第133図	第61号住居跡出土遺物実測図(2)184
第94図	第29号住居跡実測図132	第134図	第46号住居跡実測図185
第 95 図	第29号住居跡出土遺物実測•拓影図 …133	第135図	第46号住居跡出土遺物実測•拓影図 …186
第 96 図	第30号住居跡実測図134	第136図	第27号住居跡実測図187
第 97 図	第30号住居跡出土遺物実測•拓影図 …135	第137図	第27号住居跡出土遺物実測•拓影図 …189
第 98 図	第32号住居跡実測図137	第138図	第31号住居跡実測図191
第 99 図	第32号住居跡出土遺物実測•拓影図 …138	第139図	第31号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)193
第100図	第33号住居跡実測図139	第140図	第31号住居跡出土遺物実測図(2)194
第101図	第33号住居跡出土遺物実測•拓影図(1) 140	第141図	第35号住居跡実測図195
第102図	第33号住居跡出土遺物実測・拓影図(2) 141	第142図	第35号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)196
第103図	第36号住居跡実測図142	第143図	第35号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)197
第104図	第36号住居跡出土遺物実測•拓影図 …143	第144図	第39号住居跡実測図200
第105図	第60号住居跡実測図144	第145図	第39号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)201
第106図	第60号住居跡出土遺物実測•拓影図 …145	第146図	第39号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)202
第107図	第28号住居跡実測図147	第147図	第41号住居跡実測図205
第108図	第28号住居跡出土遺物実測•拓影図 …148	第148図	第41号住居跡出土遺物実測図(1)206
第109図	第40号住居跡実測図150	第149図	第41号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)207
第110図	第40号住居跡遺物出土状況図151	第150図	第41号住居跡遺物出土状況図208
第111図	第40号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)154	第151図	第45号住居跡実測図211
第112図	第40号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)155	第152図	第45号住居跡出土遺物実測図(1)212
第113図	第40号住居跡出土遺物実測•拓影図(3)156	第153図	第45号住居跡出土遺物実測•拓影図(2)213

第154図	第49号住居跡実測図216	第194図	第82号土坑実測図252
第155図	第49号住居跡出土遺物実測•拓影図 …217	第195図	第96号土坑実測図253
第156図	第26号住居跡実測図219	第196図	第96号土坑出土遺物実測•拓影図253
第157図	第26号住居跡遺物出土状況図220	第197図	第107号土坑実測図254
第158図	第26号住居跡出土遺物実測図(1)221	第198図	第108号土坑実測図255
第159図	第26号住居跡出土遺物実測図(2)222	第199図	第108号土坑出土遺物実測•拓影図255
第160図	第26号住居跡出土遺物実測•拓影図(3) ·····223	第200図	第110号土坑実測図256
第161図	第34号住居跡実測図226	第201図	第110号土坑出土遺物実測•拓影図256
第162図	第34号住居跡出土遺物実測•拓影図(1)229	第202図	第111号土坑実測図257
第163図	第34号住居跡出土遺物実測•拓影図(2) ······230	第203図	第111号土坑出土遺物実測•拓影図257
第164図	第 3 号土坑実測図233	第204図	第115号土坑実測図258
第165図	第3号土坑出土遺物実測•拓影図233	第205図	第115号土坑出土遺物実測•拓影図258
第166図	第 4 号土坑実測図234	第206図	第116号土坑実測図259
第167図	第 4 号土坑出土遺物実測•拓影図234	第207図	第116号土坑出土遺物実測•拓影図260
第168図	第 8 号土坑実測図235	第208図	第118号土坑実測図261
第169図	第10号土坑実測図236	第209図	第118号土坑出土遺物実測•拓影図261
第170図	第10号土坑出土遺物実測•拓影図237	第210図	第119号土坑実測図263
第171図	第17号土坑実測図238	第211図	第119号土坑出土遺物実測•拓影図263
第172図	ハマグリ殻長•殻高分布図239	第212図	第123号土坑実測図264
第173図	第17号土坑出土遺物実測•拓影図239	第213図	第123号土坑出土遺物実測•拓影図264
第174図	第22号土坑実測図240	第214図	第128号土坑実測図265
第175図	第25号土坑実測図240	第215図	第128号土坑出土遺物実測•拓影図265
第176図	第34号土坑実測図241	第216図	第132号土坑実測図266
第177図	第34号土坑出土遺物実測•拓影図241	第217図	第132号土坑出土遺物実測•拓影図266
第178図	第35号土坑実測図242	第218図	第135号土坑実測図267
第179図	第35号土坑出土遺物実測•拓影図242	第219図	第135号土坑出土遺物実測•拓影図268
第180図	第40号土坑実測図243	第220図	第140号土坑実測図269
第181図	第40号土坑出土遺物実測•拓影図243	第221図	第140号土坑出土遺物実測•拓影図269
第182図	第45号土坑実測図244	第222図	第143号土坑実測図270
第183図	第45号土坑出土遺物実測•拓影図244	第223図	第143号土坑出土遺物実測•拓影図271
第184図	第57号土坑実測図245	第224図	第144•145号土坑実測図272
第185図	第57号土坑出土遺物実測•拓影図246	第225図	第144号土坑出土遺物実測•拓影図273
第186図	第67号土坑実測図247	第226図	第145号土坑出土遺物•拓影図274
第187図	第67号土坑出土遺物実測•拓影図247	第227図	各土坑出土遺物実測•拓影図(1)281
第188図	第77号土坑実測図248	第228図	各土坑出土遺物実測•拓影図(2)282
第189図	第77号土坑出土遺物実測•拓影図249	第229図	各土坑出土遺物実測•拓影図(3)283
第190図	第78号土坑実測図249	第230図	第1号井戸実測図284
第191図	第78号土坑出土遺物実測•拓影図250	第231図	第 2 号井戸実測図285
第192図	第80号土坑実測図251	第232図	第 3 号井戸実測図286
第193図	第81号土坑実測図251	第233図	第 4 号井戸実測図286

第234図	第 5 号井戸実測図286	第244図	土坑•遺構外出土石器実測図(3)300
第235図	第5・6号井戸、第2号溝出土遺物実測・	第245図	土坑•遺構外出土石器実測図(4)301
	拓影図287	第246図	各土坑•遺構外出土遺物(土製品)実測•
第236図	第 6 号井戸実測図288		拓影図303
第237図	第 1・2・3 号溝実測図291	第247図	古銭拓影図303
第238図	第 4・5・6 号溝実測図292	第248図	縄文時代住居跡時期別分布図(1)307
第239図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)294	第249図	弥生時代·古墳時代住居跡
第240図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2)295		時期別分布図(2)309
第241図	遺構外出土遺物実測•拓影図(3)296	第250図	第10号土坑出土貝分析図315
第242図	土坑・遺構外出土石器実測図(1)298	第251図	第57号土坑出土貝分析図316
第243図	+坑•潰構外出土石器実測図(2) ·······299		

表 目 次

表1	高崎貝塚周辺遺跡一覧表6	表7	第17号土坑内貝塚動植物遺存体組成表 …239
表 2	第24号住居跡内貝塚動植物遺存体組成表…31	表 8	第57号土坑内貝塚動植物遺存体組成表 …245
表 3	第25号住居跡内貝塚動植物遺存体組成表…33	表 9	第1441号土坑内貝塚動植物遺存体組成表273
表 4	第37号住居跡内貝塚動植物遺存体組成表…70	表10	土坑一覧表275
表 5	住居跡一覧表231	表11	高崎貝塚出土炭化材の樹種320
表 6	第10号土坑内貝塚動植物遺存体組成表 …236		

写真図版目次

- PL1 菅生沼と高崎貝塚(中央)・北前遺跡(手 PL19 第60号住居跡、第28号住居跡、第28号住居 前)、高崎貝塚上空から菅生沼を臨む
- PL2 試堀 (A地区),表土除去 (B地区),遺構 確認状況(C地区)
- PL3 調查風景(C地区), 第20号住居跡, 第24号 住居跡
- PL4 第24号住居跡貝·遺物出土状況(1), (2), 第 24号住居跡遺物出土状況
- PL5 第24号住居跡第1貝ブロック層断面,第25 号住居跡貝ブロック出土状況,第25号住居 跡遺物出土状況
- PL6 第25号住居跡第3貝ブロック,第12号住居跡 遺物出土状況,第9号住居跡遺物出土状況
- PL7 第9号住居跡磨製石斧出土状況,第16号住 居跡,第16号住居跡遺物出土状況
- PL8 第15号住居跡,第15号住居跡遺物出土状況, 第22号住居跡 **
- PL9 第22号住居跡ミニチュア土器出土状況,第23 号住居跡遺物出土状況,第10·11号住居跡
- PL10 第10号住居跡遺物出土状況,第8号住居跡。 第8号住居跡遺物·炭化材出土状況
- PL11 第8号住居跡紡錘車出土状況, 第8号住居 跡磨製石斧出土状況, 第1号住居跡溝状掘 り方確認状況
- P L12 第1号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡
- PL13 第3号住居跡,第3号住居跡遺物出土状況, 第4号住居跡
- PL14 第4号住居跡剣形模造品出土状況,第5号 住居跡, 第5号住居跡遺物出土状況
- PL15 第6号住居跡遺物出土状況,第7号住居跡, 第7号住居跡遺物出土状況
- P L 16 第 7 号住居跡遺物出土状況, 第54号住居跡, 第52号住居跡
- P L 17 第52号住居跡遺物出土状況, 第56号住居跡。 第58号住居跡
- PL18 第29号住居跡,第30号住居跡,第32号住居跡

- 跡遺物出土状況
- PL20 第40号住居跡,第40号住居跡遺物出土状況, 第47号住居跡
- PL21 第50号住居跡,第50号住居跡炉掘り方,第 50号住居跡埋甕炉
- PL22 第50号住居跡埋甕炉と石,第51号住居跡遺物出 土状況,第51号住居跡磨製石斧出土状況
- PL23 第43号住居跡,第61号住居跡遺物出土状況, 第27号住居跡遺物出土状況
- PL24 第31号住居跡,第35号住居跡,第39号住居跡
- PL25 第41号住居跡,第41号住居跡遺物出土状況。 第45号住居跡
- P L 26 第45·51·61号住居跡, 第45号住居跡遺物 出土状况,第45号住居跡粗製器台出土状況
- PL27 第49号住居跡土層セクション・遺物出土状 况,第26号住居跡,第26号住居跡遺物出土 状況
- PL28 第26号住居跡遺物·炭化材出土状況,第34 号住居跡,第34号住居跡遺物出土状況
- PL29 第4・8・17・22・25・34号土坑、第10・ 17号土坑貝出土状況
- PL30 第35·45·57·78号土坑, 第57号土坑(6 層内) 長骨出土状況, 第57号土坑(9層内) 土器出土状况,第57号土坑貝出土状况,第 77号土坑遺物出土状況
- PL31 第81·82·96·107·116号土坑, 第108号土 坑遺物出土状況,第116号土坑遺物出土状 況,第118号土坑集石状況
- PL32 第119·143号土坑, 第132·135·140·145 号土坑遺物出土状況,第144号土坑貝ブロッ ク出土状況,第5・6号溝
- PL33 第1号溝・第1号井戸, 第2・3・4・6 号井戸,第6号井戸遺物出土状況,遺構外 遺物出土状況(A・C地区)
- PL34 第9·11·12·20·24·25号住居跡出土縄 文式土器

- P L 35 第16·22·23号住居跡出土縄文式土器
- PL36 第1・8・10・23・37号住居跡出土縄文式 +器・弥生式+器・+師器
- PL37 第1・2号住居跡出土土師器
- PL38 第4・5・6・7号住居跡出土土師器
- PL39 第7号住居跡出土土師器
- P L 40 第7・30・33・40号住居跡出土土師器・縄 文式土器
- PL41 第40号住居跡出土縄文式土器
- P L 42 第40・47・50・51・61号住居跡出土縄文式 土器
- PL43 第27・31・35・46号住居跡出土縄文式土器・ 弥生式土器・土師器
- PL44 第35·39号住居跡出土土師器
- P L 45 第39·41号住居跡出土土師器
- P L 46 第41·45号住居跡出土土師器
- PL47 第45·49号住居跡出土土師器
- PL48 第26·49号住居跡出土土師器
- P L 49 第26号住居跡出土土師器
- PL50 第26·34号住居跡出土土師器
- PL51 第2・3・10・21・43・48・57・85・108号 土坑出土縄文式土器
- PL52 第116・132・140・141・143・145号土坑及 び遺構外出土縄文式土器
- PL53 第5・6井戸及び遺構外出土縄文式土器・ 土師器
- P L 54 第 8 号住居跡出土弥生式土器片(1) (2)
- P L 55 第10 · 27 · 31号住居跡出土弥生式土器片
- PL56 第26・27・31号住居跡出土弥生式土器片, 第28号住居跡出土縄文式土器片
- P L 57 第29·30·32·33号住居跡出土縄文式土器片
- PL58 第77・78・108・110・111・118号土坑出土 縄文式土器片

- P L 59 第119・123・128・140・143・144号土坑出 土縄文式土器片
 - PL60 第24号住居跡出土縄文式土器片(1)・(2)
 - P L 61 第25号住居跡出土縄文式土器片(1) (2)
 - P L 62 第40号住居跡出土縄文式土器片(1) (2)
 - P L 63 第22·23号住居跡出土縄文式土器片
 - PL64 各遺構及び遺構外出土土製品(土玉)
 - PL65 各遺構及び遺構外出土土製品・石器・石製 品・古銭
 - PL66 各遺構及び遺構外出土石器(1)
 - PL67 各遺構及び遺構外出土石器(2)
 - PL68 各遺構及び遺構外出土石器(3)
 - PL69 各遺構及び遺構外出土石器(4)
 - PL70 第57号土坑9層出土獣焼骨細片(左)・クロ ダイ歯骨(右),第57号土坑出土獣骨(No473 は6層中出土長骨片・下はイノシシの腓骨)
 - P L 71 第57号土坑 9 層出土ネズミ類・脊椎骨 (上)・椎体 (下左)・尾骨 (下右)
 - PL72 第57号土坑9層出土魚骨片など(左)・魚椎 体(右)
 - PL73 第57号土坑9層出土の土器内魚骨(No.472) (上),第57号土坑出土ネズミ顎骨・寛骨・ 大腿骨など
 - PL74 第24号住居跡 (第1貝ブロック出土貝類) (上)・第2貝ブロック出土貝類 (下)
 - PL75 第25号住居跡(第3貝ブロック出土貝類),第 37号住居跡出土貝類,第10号土坑出土貝類
 - PL76 第17·57·144号土坑出土貝類
 - PL77 第34号住居跡貯蔵穴出土果実の種子,第15 号住居跡炉出土くるみ,第17号土坑(5層中)出土ドングリ,第26号住居跡出土甕(3) 内面籾痕,第34号住居跡出土カヤ
 - PL78 炭化材の顕微鏡写真

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県教育委員会は、自然環境に恵まれ、緑豊かな菅生沼西岸台地の岩井市大字大崎に「茨城県自然博物館(仮称)」の建設を計画した。自然博物館は、児童、生徒をはじめ多くの人々が自然界の仕組みや茨城の自然の特色などを楽しく学び、自然を愛する豊かな人間性及び科学する心を養える博物館として計画されたものである。

この建設事業に先立ち,茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室は,茨城県教育委員会へ建設予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し,茨城県教育委員会は,現地調査を実施し,建設予定地内に原口遺跡,北前遺跡及び高崎貝塚の3遺跡が所在することを回答した。平成2年2月に,茨城県教育委員会は,茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室と文化財保護の立場から,埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

その結果、現状保存が困難であることから、記録保存の処置を講じることとなり、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県教育庁文化課自然博物館建設準備室と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成3年7月1日から高崎貝塚の調査を実施することとなった。

第2節 調查経過

高崎貝塚の発掘調査は、平成3年7月1日から平成4年3月31日までの9か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、その概要を月ごとに記述する。

- 7 月 2日から現場倉庫等の設置、調査器材搬入などの諸準備を行った。調査区は第4図に示したようにA・B・Cの3区に区分し、諸準備と併行してA区の小調査区の試掘調査を開始した。縄文時代から古墳時代にかけての多量の土器片とともに住居跡・土坑等の遺構が確認されたため、8日から重機による表土除去に入り、同時に遺構の範囲確認作業を行った。古墳時代の遺構は谷津に面して、東側に片寄って見られた。23日から遺構調査を開始した。
- 8 月 A地区の遺構調査を継続して行った。古墳時代の遺構調査はほぼ終了し、A地区西側の 弥生時代・縄文時代の遺構調査に入った。
- 9 月 中旬ごろは雨天日が多く、調査はやや遅れ気味であった。縄文時代前期の土器片が多い 調査区北西部は、住居跡の壁の確認が難しく時間がかかった。12日からB地区の除草作業 を開始し、25日から小調査区の試掘調査に入った。30日からはC地区の試掘調査に入った。

両地区では多量の縄文式土器片とともに、住居跡・土坑等の遺構が確認された。

- 10 月 A地区は第18号住居跡まで調査を終了し、第19~24号住居跡及び第47号土坑までの調査 を継続して行った。B地区は22日から、C地区は28日から重機による表土除去に入り、並 行して遺構確認作業を行った。
- 11 月 引き続きB・C地区の遺構確認作業を行う。その結果、竪穴住居跡30軒・土坑100基・溝 4条を確認した。18日からC地区の遺構確認作業に入る。A地区南半は遺構の確認がしづ らかったので、2×2mの調査区を組み、掘り下げを行った。26日、栃木県立博物館の橋本 澄朗氏を迎え、班内研修を行った。
- 12 月 A地区は第57号土坑内貝塚の貝の取り上げ及び補足調査を行った。C地区は第26~42号 住居跡及び第72~119号土坑の遺構調査を進めた。27日から翌月5日まで年末・年始の休業 に入った。
- 1 月 6日から調査を開始した。30日までに竪穴住居跡37軒・土坑114基・溝2条・井戸1基の 調査を終了した。
- 2 月 2日に降雪,3日は一日中除雪に追われる。4日から作業員を2班に分け、B・C地区の併行調査となる。19日には委託者並びに岩井市教育委員会に対して、報告会を実施した。 また、29日には現地説明会を実施し、約250名の参加者があった。
- 3 月 17日までに遺構調査を終了し、19日には航空写真撮影を実施した。事務所では諸帳簿の 点検、調査区では安全対策を行い、26日に現場事務所を閉鎖した。



除雪作業

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

高崎貝塚は、茨城県岩井市大字大崎に所在し、岩井市役所の南南東約5.6kmに位置している。岩井市は、茨城県の南西端に位置し、市域は南北にやや長く、東西約12km・南北約16km、面積は91.46kmである。北は猿島町、東は水海道市、西は境町、南は利根川を挟んで千葉県野田市に接している。当市は東京都心から45km、常磐自動車道の谷和原ICから約15分という近距離にあり、市の中心部を国道357号、県道古河岩井線・結城岩井線が通り、県西と県南地域、茨城県と千葉県を結ぶ交通の要衝である。さらに、市の北部を首都圏中央連絡自動車道(圏央道)が横断する計画もある。

岩井市域は猿島台地の南東部に位置し、洪積台地と利根川・飯沼川・東仁連川やその支流によって形成された沖積低地から成り立っている。猿島台地は北西から南東方向へ延びており、標高15~20mで、利根川をはじめ飯沼川・東仁連川支流の小河川により開析された谷津が樹枝状に入り込み、複雑な地形を呈している。

猿島台地の基部を構成する地層は、貝化石を含む成田層(見和層)である。この貝化石を含む 地層には小形有孔虫の化石も入っており、この有孔虫を調べることにより、古鬼怒湾時代の気候 や植生などの古環境を復元することができる。さらに、成田層の上に黄褐色砂や黄褐色粗砂を含 む竜ケ崎砂礫層、その上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして、表土の下を厚く覆う赤褐 色の関東ローム層となっている。菅生沼は、かつて東京湾に流入していた利根川による砂質堆積 物によって、支流の谷口が閉塞されて出現した湖沼である。同様の水海沼・長井戸沼などは現在 干拓され、水田となってしまった。

現在, 菅生沼の面積はおよそ2.3km²であるが, 低湿地化がかなり進んでいる。沼の両岸台地は, 小さな谷によって複雑に開析されており, 往時の沼の周囲の複雑な地形を彷彿させる。

高崎貝塚は菅生沼の西岸の北側と南側を谷津に挟まれた、小さく東に延びる舌状台地上に所在し、標高はおよそ17~19mで、沖積低地との比高はおよそ9mである。遺跡の所在する台地は畑地として利用されおり、それを囲む台地縁辺部には落葉樹・常緑樹の混合林が発達している。さらに当遺跡の南2kmには、利根川によって形成された沖積低地が広がっている。

第2節 歷史的環境

猿島台地の南東部に位置する岩井市には、『茨城県遺跡地図』によれば、数多くの遺跡が分布している。しかし、現在までのところ、岩井市内の遺跡発掘調査例は極めて少ない。昭和50年に、岩井市教育委員会が上出島古墳群の発掘調査を行ったのが最初の例である。

1990年代には、岩井市史編さん事業に伴い市史編さん室の自然考古部会によって、拾二ゴゼ貝塚・駒寄遺跡・高山古墳〈9〉などの調査が実施されている。ここでは、岩井市及びその周辺の遺跡について、時代を追って概観することにする。

旧石器時代の遺跡としては、北前遺跡〈2〉・篠山南遺跡〈23〉があげられる。平成3年に調査された北前遺跡では、調査区内から安山岩・頁岩製のスクレイパー及び多量の剝片が出土している。また、菅生沼の東側台地上に位置する水海道市篠山南遺跡では頁岩製のスクレイパーが採集されている。

縄文時代の遺跡は,市内とその周辺に多く分布するようになる。飯沼川から菅生沼及び鬼怒川 流域は、台地上に貝塚が数多く見られ、貝塚の形成と海進・海退による汀線の変動の研究には重 要な地域である。水海道市北部に位置する縄文時代早期の花島貝塚(貝柄山貝塚)は、昭和16年 (4)(6) に江坂輝弥らによって調査が行われ、サルボウ、マガキ、ハマグリ、オキシジミ等の貝を含んだ 目層から条痕文系の土器片及び石器類が出土している。また、菅生沼の南東台地上に位置する水 海道市の奥山 C 遺跡 〈33〉・奥山下根遺跡〈37〉では、撚糸文系・沈線文系・押型文系・条痕文系 +器などの良好な資料が出土している。前期の遺跡は、岩井市内では高崎貝塚〈5〉と北前遺跡 などがある。北前遺跡は平成2・3年に茨城県教育財団によって調査された遺跡で、黒浜式期の 住居跡4軒が地点貝塚とともに調査されている。同時期の遺跡として,水海道市大生郷遺跡があ p. 大牛郷遺跡調査会によって10軒の住居跡が調査されている。中期から後期にかけての遺跡は、 幸 安萩貝塚〈6〉・法師貝塚・宝光院貝塚〈16〉などがある。これらの遺跡からは、加曽利E式期か ら加曽利B式期にかけての土器片が採集されているが,現在は湮滅した遺跡も多い。後期の遺跡 は南境木遺跡 <20>・内守谷本郷遺跡 <29>・東浦遺跡 <17>・原口遺跡 <1> などがある。南境木 遺跡からは堀之内式期の土器片が採集されている。また,原口遺跡は平成2年に茨城県教育財団 (12) によって発掘調査が実施され、堀之内式・加曽利B式期の住居跡11軒にともなって多量の遺物が 出土している。後期から晩期の遺跡は,内守谷館の台遺跡 <30>・拾二ゴゼ貝塚などがある。拾二 ゴゼ貝塚は、利根川の氾濫原に西面する台地端のゆるい傾斜地上に位置しており、後期後半が中 心の汽水系貝塚(ヤマトシジミ主体)であるが、晩期安行Ⅲ式期の土器も出土している。

弥生時代の遺跡は、大崎遺跡〈3〉・本郷南志辺遺跡〈27〉・貝置前沼遺跡〈21〉などが確認されているが、当市も含め、周辺の市町村での調査例は少なく不明な部分が多い。

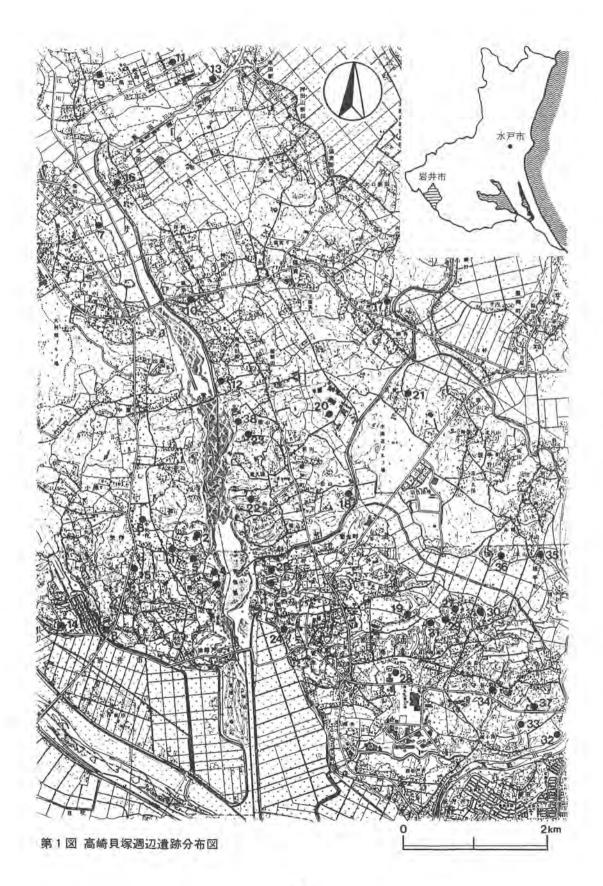


表 1 高崎貝塚周辺遺跡一覧表

31Z E3	d The		時		代		番号	名 称		時		代	
番号	名称	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈以降	借写	4 10	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈以降
1	原口遺跡		0				20	南境木遺跡		0			j
2	北 前 遺 跡	0	0		0		21	見置前沼遺跡			0		
3	大崎遺跡			0			22	向 山 遺 跡		0	0		
4	高崎台地遺跡		0				23	篠山南遺跡	0				
5	高崎貝塚		\circ	0	0	0	24	大並遺跡				0	
6	矢 作 貝 塚		0				25	上野古墳				0	
7	辺田古墳群				0		26	上野A遺跡		0			
8	矢作古墳群				0		27	本郷南志辺遺跡			0		
9	高山古墳				0		28	向地遺跡				0	
10	上神田山古墳群				0		29	内守谷本郷遺跡		\circ			
11	榊山古墳群				0		30	内守谷館の台遺跡		\circ			
12	下神田山古墳群				0		31	内守谷向地遺跡		0		0	
13	浅間塚古墳群				0		32	奥山A遺跡		0		0	
14	香取神社脇貝塚		0				33	奥山C遺跡		0			
15	稲荷塚古墳			l.	0		34	西原遺跡		0			
16	宝光院貝塚		0				35	坂手日之王神遺跡		0			
17	東浦遺跡		0				36	坂手萱場貝塚		0			
18	大塚戸城跡				1	0	37	奥山下根遺跡		0		0	
19	菅 生 城 跡						38	大塚戸篠山古墳群					

古墳時代の遺跡は数多く確認されている。縄文時代と複合する北前遺跡では、古墳時代前・中 期の住居跡33軒が調査されており、高崎貝塚の該期の集落との関連性が注目される。また、水海 (5) 道市奥山A遺跡〈32〉では前期の住居跡3軒,駒寄遺跡・水海道市大並遺跡〈24〉及び西原遺跡 <34〉では中期の住居跡が合わせて18軒調査されている。古墳は、茨城県立岩井西高等学校建設 に伴い発掘調査をした上出島古墳群をあげることができる。3基の古墳のうち、第2号墳は全長 56mの前方後円墳であり、その後円部墳頂と墳丘の裾部から壷形埴輪の配列が検出されている。さ らに、後円部に設けられた粘土槨からは、滑石製勾玉・管玉・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉄針が出土し ており、出土遺物から築造年代は5世紀の前半頃に比定されている。当遺跡の北約6.5kmに所在す る高山古墳は、岩井市を代表する円墳であるが、明治45年に土取りにより破壊されてしまった。 その際出土した直刀・金環などは東京国立博物館に収蔵されている。平成2年、筑波大学により 再調査されたが遺存状況が悪く、墳形・規模を確認することができなかった。主体部は、雲母片 岩(筑波石)を使用した横穴式石室である。高山古墳の南には辺田古墳群〈7〉・矢作古墳群〈8〉 などが所在する。菅牛沼の東側台地上に所在する大塚戸篠山古墳群〈38〉では、9基の古墳が現 存している。その中で、平成2年水海道市教育委員会によって調査された5号墳は周溝を持つ墳 丘径15mの円墳で,出土した土器から7世紀中頃に比定されている。下神田山古墳群〈12〉には、 径約20mの坊地塚古墳(円墳)や前方後円墳が数基残っている。

律令制以後、岩井市は下総国相馬郡に属した。承平5年(935)に始まった平将門の乱では岩井

市が表舞台となっている。中世の城館跡としては、大塚戸城跡〈18〉、菅生城跡〈19〉があり、菅生城には、その城にまつわる民話が今に伝えられている。江戸時代に入ると、飯沼を中心に新田開発が積極的に行われていった。

※遺跡名の次の〈 〉内の数字は、表1・第1図の該当遺跡番号と同じである。

註•参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』1990年
- (2) 岩井市教育委員会 『上出島古墳群』 1975年
- (3) 水海道市教育委員会 『水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図』 1992年
- (4) 江坂輝弥・吉田格 「貝柄山貝塚」 『古代文化』 13-9 1942年 長良信夫・江坂輝弥 「貝柄山貝塚及び指扇五味戸貝塚発見の貝類」 『古代文化』 13-9 1942年

江坂輝弥 「貝柄山貝塚」 『茨城県史料考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年

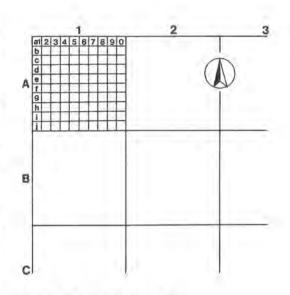
- (5) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2 奥山 A 遺跡・奥山 C 遺跡・西原遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第31集 1986年
- (6) 斎藤弘道 『県内貝塚における動物遺存体の研究(1)』 茨城県歴史館 1978年
- (7) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書1』 1982年
- (8) 今井隆助 『北下総地方史』 崙書房 1974年
- (9) 茨城県『土地分類基本調査 水海道』 1984年
- (10) 水海道市史編さん委員会 『水海道市史(上巻)』 1983年
- (11) 茨城県教育委員会 『重要遺跡調査報告書 II (城館跡)』 1985年
- (12) 茨城県教育財団「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書 I 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第83集 1993年
- (13) 岩井市史編さん委員会「岩井市の遺跡」『岩井市史遺跡調査報告書』第1集 1992年
- (4) 茨城県教育財団「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 1 奥山 B 遺跡・奥山下根遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第29集 1985年
- (15) 水海道市教育委員会「大塚戸篠山古墳群第 5 号墳発掘調査報告」 『水海道市埋蔵文化財調査報告』 第 2 集 1993年
- (16) 茨城県教育財団「大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書 大生郷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告**刈**』 1981年
- (17) 岩井市教育委員会 『岩井の民話』 1988年

第3章 調查方法

第1節 地区設定

高崎貝塚の発掘調査を実施するにあたり, 遺跡及び遺構の位置を明確にするために調 査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第IX系のX軸(南北)+320m、Y軸(東西)+7,200mの交点を基準として40m方限を設定し、この40m四方の区画を大調査区とした。さらに、この大調査区を東西、南北にそれぞれ10等分して、4m四方の小調査区を設定した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。大調査区は、北から南へA、B、C……、西から東へ



第2図 調査区呼称方法概念図

1, 2, 3 ·········とし,「A1区」,「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c ·········j, 西から東へ1, 2, ·········0とし, 小調査区の名称は, 大調査区の名称を 冠し,「A1dɪ」「B2ez」のように呼称した。

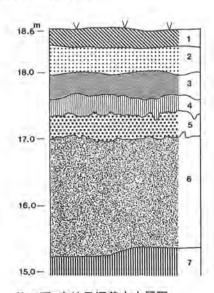
なお、基準点の杭打ち測量は、財団法人茨城県建設技術公社に委託した。

第2節 基本層序の検討

1 高崎貝塚

高崎貝塚においては、調査区域にテストピットを設 定し、第3図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は暗褐色の表土層(耕作土)であり、厚さは20~25cmを測る。第2層は30~40cmの厚さの明褐色土で炭化粒子・焼土粒子を少量含む。1・2層とも遺物包含層である。第3層は35~40cmの厚さのソフトローム層で、明褐色を呈している。第4層は25~30cmの厚さの漸移層で、炭化粒子を含み褐色を呈する。第5層はにぶい褐色のブラックバンド層で、炭化粒子・焼土



第3回 高崎貝塚基本土層図

粒子を含み、厚さは30~40cmである。第6層は170cmの厚さのハードローム層で、橙色を呈しわずかに焼土粒子が混じる。第7層は灰褐色の粘土層で、火山性の砂粒を多量に含む。

第3節 遺構確認

高崎貝塚の調査前の状況は畑地であり、縄文式土器・土師器片が採集できることから、該期の 遺構の存在が予想された。しかし、貝塚については貝の散布は見られなかったので、湮滅もしく はエリア外の雑木林の中に存在するものと考えられた。

遺構確認は次のような方法で実施した。まず、A地区に小調査区を設定し、調査面積の16分の1、次いで8分の1の割合で試掘調査を行い、遺構の確認を試みた。その結果、縄文式土器・弥生式土器・土師器の破片とともに、住居跡や土坑・溝と思われる遺構が確認された。B・C地区においても小調査区の試掘調査を行い、遺構の存在が認められた。表土の厚さも30~40cmであることが判明したので、この試掘調査の結果をふまえ、調査区域全面にわたり重機による表土除去を実施した。その後、遺構確認作業を行い、A・B・C区を併せて、住居跡59軒・土坑159基や井戸6基、溝6条を確認した。

第4節 遺構調査

高崎貝塚における遺構の調査は、次のように実施した。

住居跡の調査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設定し、四分割して掘り込む「四分割法」を基本とし、地区の名称は、北から時計回りに1~4区とした。重複している場合には、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。土坑の調査は、長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施した。溝の調査は、適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し、掘り込みを実施した。

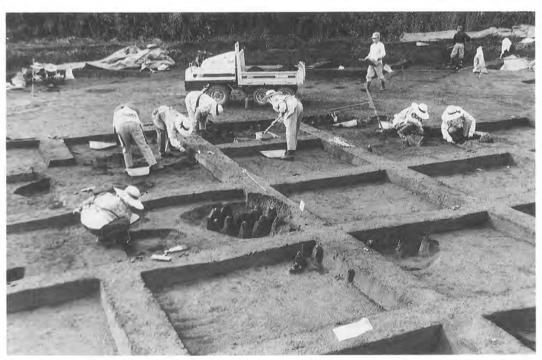
土層観察は、色調・含有物・混入物の種類や量及び粘性・締まり具合等を観察し、分類の基準とした。 色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。 遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で実施した。

また、土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準とし、標高を測って水平にセット した水糸を基準にして実測した。遺物は、原位置で遺物番号・出土位置及びレベル等を遺物出土 状況図や遺物台帳に記録して収納した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。 図面や写真に記録できない事項に関しては、そのつど野帳に記録し、これを調査記録カードや遺構カードに整理した。



住居跡発掘作業風景



作業風景

第4章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

1 使用記号

名称	住居跡	土坑	溝	井戸	ピット (住居跡)	その他
記号	SI	SK	SD	SE	P ₁	SX

2 遺構の実測図中の表示



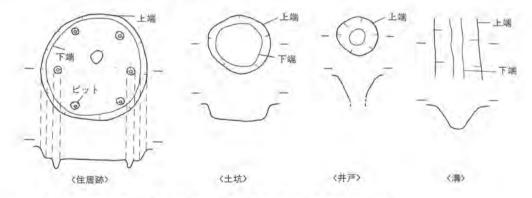
3 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと、調査順に付したが、整理の段階で 遺構でないと判断したものは欠番とした。

4 土層の分類

土層観察の結果は、図版実測図中に記載した。撹乱層については「K」と表記した。

5 遺構実測図の作成方法と掲載方法



- (1) 各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図を60分の1の縮尺にした。
- (2) 溝は、縮尺100分の1の原図を200分の1の縮尺にした。
- (3) 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り、 一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
- (4) 本文中の記載について
 - ① 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

- ② 「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記述した。
- ③ 「平面形」は、現存している形状の上端部で判断し、方形・長方形・円形及び楕円形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。なお、[]を付したものは推定形を表す。

方形,円形·······短軸〔径〕: 長軸〔径〕= 1:1.1未満 長方形,楕円形······短軸〔径〕: 長軸〔径〕= 1:1.1以上 また,形の整わない遺構については,不整○○○形と表示した。

- ④ 「規模」は、平面形の上端部の計測値であり、長軸〔径〕、短軸〔径〕をm単位で表記した。なお、()を付したものは現存値を表し、[]を付したものは推定値を表す。
- ⑤ 「主軸方向」は、炉を通る線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、東(E)・西(W) に何度ふれているかを角度で表示した。なお、[] を付したものは推定を表す。

【例】N-10°-E [N-25°-W]

- ⑥ 「壁」は,床面からの立ち上がり角度が $81^\circ \sim 90^\circ$ を垂直, $65^\circ \sim 80^\circ$ を外傾, 65° 未満を緩斜, さらに 90° 以上を内傾とした。壁高は,残存壁高の計測値である。
- ⑦ 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。規模は床面からの計測値とした。
- ⑧ 「床」は凹凸や平坦等の様子を示し、床質等は解説の中で述べた。
- ⑨ 「ピット」は,その住居跡に伴うと考えられるピットを $P_1 \cdot P_2$ で表示し,さらに,ピットの直径と深さを記述した。
- ⑩ 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径、短径及び深さを示した。
- ① 「覆土」は、堆積状態の特徴などを記述した。
- ② 「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態を記述した。また、遺構の平面図中に第2節1に示した記号を用い、出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した番号は、遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。
- ③ 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。
- 6 一覧表の見方について
 - (1) 住居跡一覧表

住居跡位置	主(長)軸	平面形	規 模 (m) (長軸×短軸) 〔径〕×〔径〕	壁高	床画		内	部施	設		炉	羅士	出土遺物	備	考
番号型画	方 向	十山沙	(長軸 / 亞軸) (径) × [径]	(cm)		壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口	<i>N</i> -	復工	山上退物	. VHI	~~

- ① 床面は、凹凸、平坦及び緩い起伏等の様子を示し、締まり等は解説の項で記述した。
- ② ピット数は主柱穴・入口も含め、住居跡に伴うと考えられる総数を表示した。

- ③ 炉及び貯蔵穴はその数を記し、検出されない住居跡については「/」とした。
- ④ 覆土は、堆積状態の「自然」・「人為」を表示した。
 - ⑤ 出土遺物は、その種類を記した。
- ⑥ 備考は、はじめに時代(縄文・弥生・古墳)、つぎに重複関係や特徴等を記述した。
 - ⑦ その他の項目については、第4章第1節5の記載方法に準じた。
- (2) 土坑一覧表

土坑		長径方向	平面形	規	模	壁面	底面	漫土	出土遺物	備	考	図版番号
土坑番号		(長軸方向)		長径(m)×短径(m)	深さ(cm)					Ani		

- ① 深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値(cm)で表した。
- ② 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

81°~90°の傾き 65°~80°の傾き 65°未満の傾き

垂直

外傾

緩斜

(3) 底面は、下記の基準で分類し表示した。

平坦 皿状 凹凸

④ その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

第2節 遺物の記載方法

本書における遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。また、遺跡から出土した遺物につい ては、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

1 使用記号

土器	土製品	石器·石製品	金属製品	骨	拓本土器
P	DP	Q	M	В	TP

● 土器 ○ 赤彩土器 ★ 土製品 △ 石器・石製品 □ 金属製品

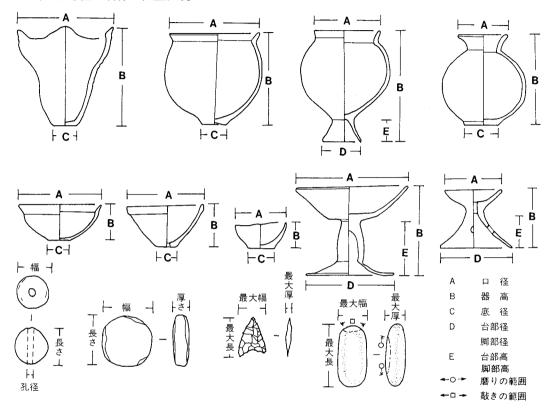
▲ 骨 ■ 自然遺物

- 2 遺物実測図の作成方法と掲載方法
 - (1) 土器の実測は四分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を示した。
- (2) 土器拓影図は、右側に断面図を示した。
 - (3) 石器・石製品及び土製品は、展開図法を基本とした。
- (4) 実測図中の表示方法





- (5) 遺物は,原則として実測図を3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。それらについては、個々にS=1/4等と表示した。
- (6) 各部位の名称と法量表現



- (7) 遺物に付した番号は、土器、土製品、石器・石製品、金属製品ごとに通し番号をつけ、遺構実測図、図版、写真及び一覧表の備考欄に記した。
- 3 出土遺物観察表について
 - (1) 土器観察表

ア 縄文式土器・弥生式土器

図版番号	器種	法 量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考

イ 土師器

図版番号	器 種	法 量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

- ① 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。以下、(2)・(3)・(4)も同様である。
- ② 法量は、 $A\cdots$ 口径・ $B\cdots$ 器高・ $C\cdots$ 底径とする。なお、()を付したものは現存値を表し、「 〕を付したものは復元推定値を表す。
- ③ 器形の特徴は、底部・体部等の各部位について記した。
- ④ 手法の特徴は、土器の成形・整形について記した。
- ⑤ 色調は「新版標準土色帖」を使用した。焼成については、「良好」・「普通」・「不良」に分類し、硬く焼き締まっているものは良好、焼きがあまく器面が剝離しやすいものは不良とし、その中間のものを普通とした。
- ⑥ 備考は、土器の残存率・実測 (P) 番号、その他必要と思われる事項を記した。

(2) 土製品一覧表

ſ	図版番号	器	種	法	量(cm)	孔径	重量	残存率	備	考	
	凶似钳勺	伯计	但里	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	спц		
												-

- ① 重量の欄で,()を付した数値は,一部を欠損しているものの現存値である。
- ② 備考の欄は,実測 (DP) 番号,出土位置,その他必要と思われる事項を記した。

(3) 石器・石製品

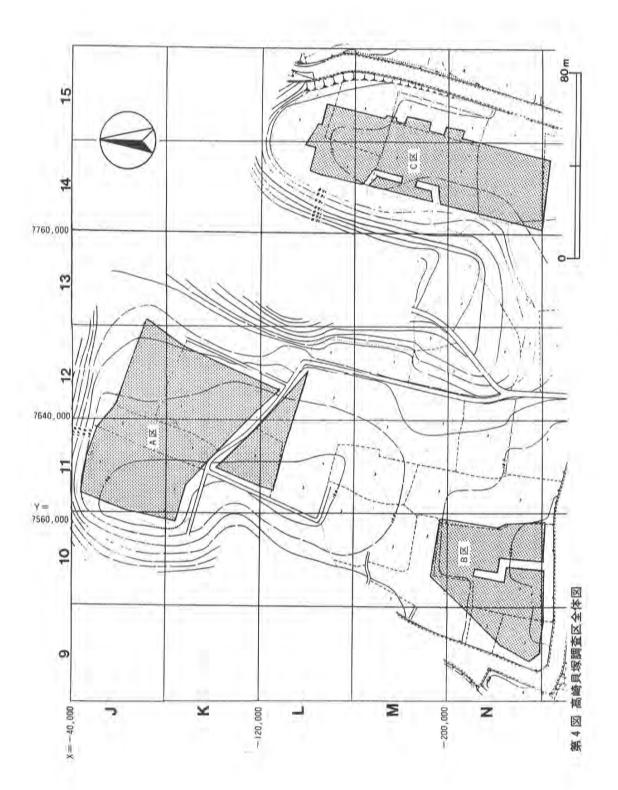
网尼辛旦	器	種	法		-	量	石	質	備	老
図版番号	布	悝	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	711	只	νн	.,

① 備考の欄は、実測(Q)番号、その他必要と思われる事項を記した。

(4) 古銭

図版番号	銭	名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	出土地点	備	考

① 備考の欄は、出土位置、その他必要と思われる事項を記した。



第5章 遺跡及び遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

高崎貝塚は岩井市の南東部,大崎地区の標高17~19mの菅生沼を東側に望む台地上に所在している。台地には谷津が樹枝状に入り込み、複雑な地形を呈している。畑地として利用されている台地平坦部からは縄文式土器・弥生式土器・土師器片が採取でき、縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であると考えられた。

調査は調査区をA~C区に区分して実施し、確認された遺構は竪穴住居跡59軒・土坑159基・溝6条・井戸6基である。

縄文時代の遺構は、早期から後期にかけての住居跡41軒が調査区全域にみられる。また、早期の炉穴跡24基、早・前・後期の貝を含む土坑4基など、土坑も多くみられた。特に、C地区においては早期の住居跡・炉穴・貝を含む土坑が近接した位置でみられている。

弥生時代の遺構は、後期に編年される住居跡が $A \cdot C$ 地区においてそれぞれ 2 軒ずつ確認されたが、遺物は少ない。

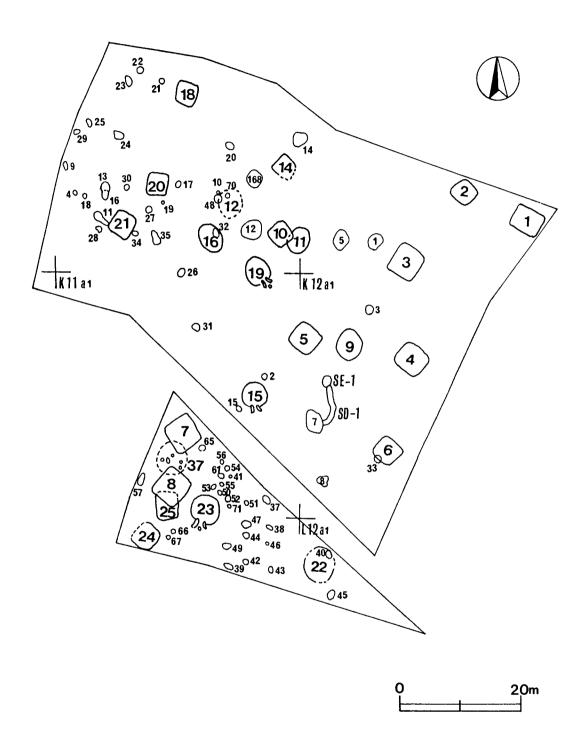
古墳時代の住居跡は、A・C地区で合わせて14軒確認された。いずれも前・中期の時期で、形 状は方形が多い。溝・井戸及び一部の土坑は近世以降のものと思われる。

遺物は、遺物収納箱で126箱ほどである。遺構外からも多量の縄文式土器片が出土している。住居跡からは縄文時代の深鉢、弥生時代の壺、古墳時代の壺や甕・高坏・坩・器台など、また、磨製石斧・打製石斧・石鏃・石錐などの各種の石器・石製品、土錘・土製紡錘車・土玉などが出土している。また、縄文時代の住居跡内地点貝塚からは内湾砂泥性の各種の貝、土坑内貝塚からも汽水性の貝や獣骨・魚骨類が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡からは59軒(縄文時代41軒・弥生時代4軒・古墳時代14軒)の住居跡が確認されている。同じ舌状台地に設定されたA・B地区においては,縄文時代の住居跡(24軒)が調査区のほぼ全域に見られる。弥生時代の住居跡(2軒)はA地区の中央部に,古墳時代の住居跡(7軒)はA地区の東側に片寄って見られる。谷津を挟んで東側の台地に設定されたC地区においては,縄文時代の住居跡(17軒)が調査区の中央部を除く全域で,弥生時代の住居跡(2軒)が調査区の北西部で,古墳時代の住居跡(7軒)が台地の縁から離れて東側に見られた。これらのうち,縄文・弥生・古墳時代の住居跡17軒が2~3軒ずつ重複していた。また,縄文時代早・前期の住居跡は



第5図 A地区遺構配置図

台地の北西縁辺部に片寄って見られたが、遺存状態は悪い。

以下,確認された住居跡の特徴や出土遺物について,各地区ごと時代順に記載していくことにする。

(A地区) 縄文時代

第11号住居跡 (第6図)

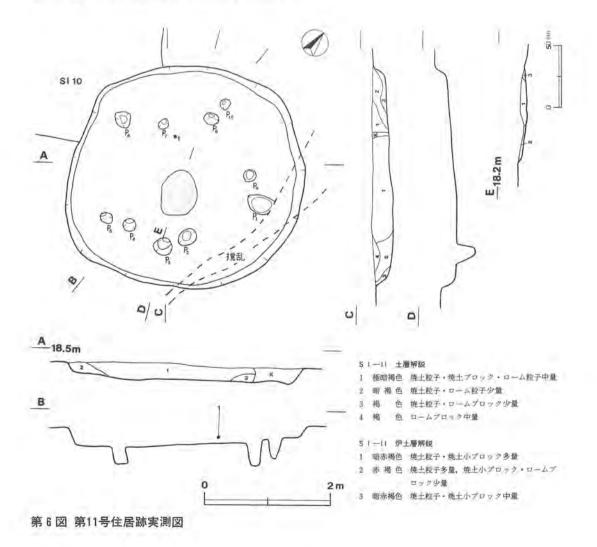
位置 J11i。区。

規模と平面形 長径4.05m・短径3.80mの不整円形。

重複関係 北西側を、第10号住居跡によって掘り込まれている。

壁 壁高20~29cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。



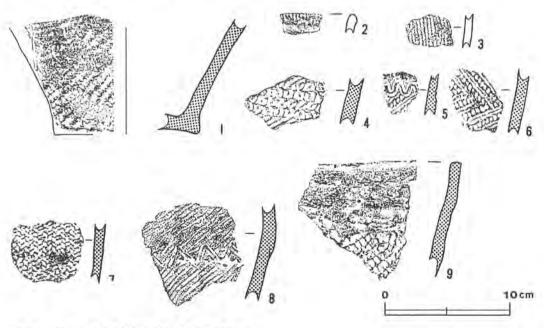
ピット 10か所。 $P_2 \cdot P_4 \cdot P_7 \sim P_8$ は径 $18 \sim 30$ cmのほぼ円形で深さは $9 \sim 43$ cmとややばらつきがあるが,配列から主柱穴と考えられる。 $P_5 \cdot P_{10}$ は径20cm程の円形で深さが $25 \sim 32$ cmあり,位置から補助柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_6$ は性格不明である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径78cm・短径60cmで、床を10cm程掘りくぼめて地床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっているが、あまり硬くはない。

覆土 4層に分層される。壁際にローム小ブロック・焼土粒子を含む3層、焼土粒子をわずかに含む2層が堆積してのち、1層の暗褐色土が全体を覆うように入っている。4層は全くしまりがなく、後世の掘り込みであろう。

遺物 炉の周りの1層中から縄文時代前期前半 (関山式・黒浜式) の土器片が多く出土している。 器形の分かる土器はなく、すべて破片である。1の深鉢は炉の北西側1層中の出土である。

所見 床上出土資料がほとんどなく、1層中からの出土が大半である。覆土下層の土器が縄文時 代前期前半(黒浜式期)に比定できることから、本跡の時期も該期と考えられる。



第7図 第11号住居跡出土遺物実測。拓影図

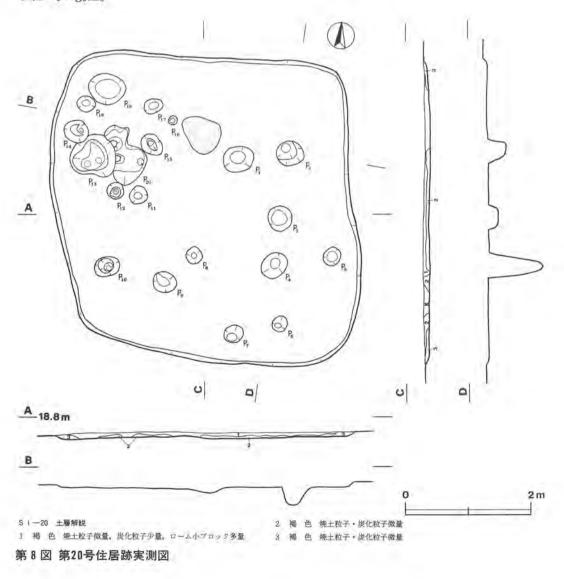
第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	8th	考
第7図		~ 4		底部から胴部にかけての破片。底部は上げ底でミガキが 施されている。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴 部には縄文(単節LRの横回転)を施文しているが、節 はやや不鮮明である。内外面に繊維脱痕有り。	繊維多量	P52 10%	PL34

第7図2~9は覆土中から出土した縄文式土器片である。2は口縁部片で口唇部が肥厚外反し、口唇上に縄文が施文されている。3は2と胎土・色調が同じで、縄文も同種であり同一個体であろう。早期前葉(井草式)の時期である。4はループ文が多段に施されている。5・6は同一個体であろう。直前段合撚の縄文が施文されており、5にはコンパス文が巡る。7は組紐文が施文されている。4~7はいずれも胴部片で、前期前半(関山式)の時期である。8・9は1とともに本跡に伴うものと考える。8は縄文地文に半截竹管による鋸歯文が施された胴部片である。9は第10号住居跡の11の土器片と同一個体であろう。

第20号住居跡 (第8図)

位置 J11gs区。



規模と平面形 長軸4.93m・短軸4.79mの不整方形。

長軸方向 N-8°-W。

壁 壁高4~8 cmで、緩やかに立ち上がっている。

床平坦である。踏み締められた部分は見られない。

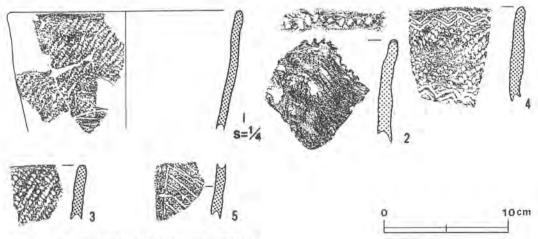
ピット 20か所。 $P_1 \sim P_4 \cdot P_9 \sim P_{11} \cdot P_{15}$ は径 $30 \sim 40$ cmの不整円形で深さが $16 \sim 90$ cmあり、配列及 び規模から判断して主柱穴と考えられる。 $P_5 \sim P_8$ は径30cm程の円形で深さも $23 \sim 28$ cmであるが、性格は不明である。 $P_{12} \sim P_{14} \cdot P_{18} \sim P_{20}$ は近接した位置にあるが、配列及び規模に規則性がなく、性格は不明である。

炉 長軸線上北寄りに付設されている。長径68cm・短径56cmの不整楕円形で、床を8cm程掘り窪めた地床炉である。

覆土 3層に分層される。覆土は薄くしまっている。3層が壁際に堆積してのち,2層がブロック状に入り、その上を1層が覆うように堆積している。いずれも焼土粒子・炭化粒子をごく少量含む褐色土で、ローム土の入り具合で分層している。

遺物 1・2層中から縄文式土器片が出土している。すべて破片で、器形の分かるものはない。 住居廃絶後の自然堆積に伴う流れ込みと考えられる。1の深鉢は1層中からの出土である。

所見 覆土が褐色で、壁の確認しづらい住居跡であった。本跡の時期は、土器が縄文時代早期末 ~前期前半に限られ、大半が前期前半(黒浜式期)であることから、該期と考えられる。



第 9 図 第20号住居跡出土遺物実測·拓影図

第20号住居跡出土遺物観察表

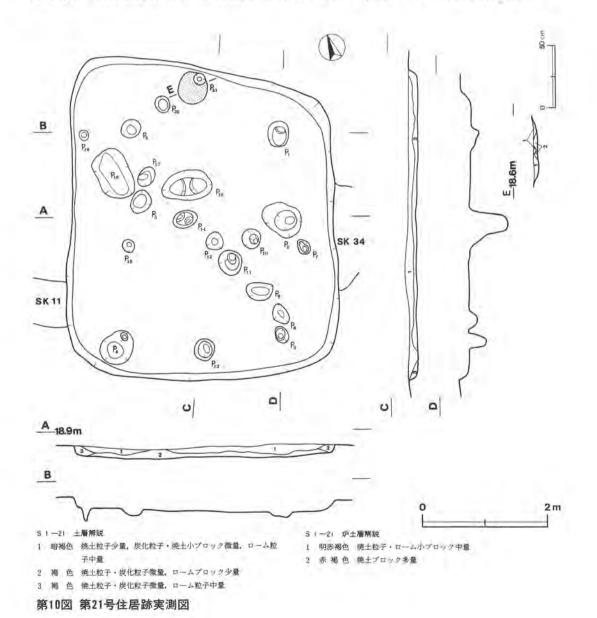
図版番号	100 100 100	壟	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土。色調。焼成	備考
				胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部から口縁部に かけて外傾して立ち上がる。器面全体に縄文(単節LR の横回転)が施され、胴部中位に半截竹管状工具による 横位の沈線が見られる。	繊維少量	P66 10%

第9図2~5は覆土中から出土した縄文式土器片である。2は早期末(茅山式)の波状口縁部 片で、口唇上にキザミが施されている。3~5は1とともに本跡に伴うものと考えられる。3・ 4は口縁部片で単節縄文LRが横回転で施文され、4はさらに縄文を地文に半截竹管による山形 文が上下に施されている。5は無文地に半截竹管による肋骨文が施された胴部片である。

第21号住居跡 (第10図)

位置 J11i。区。

重複関係 第11号土坑によって、西壁の一部が掘り込まれている。また、第34号土坑(炉穴)を



本跡が掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.13m・短軸4.20mの不整方形。

長軸方向 N-23°-E。

壁高 14cm~17cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 21か所。規模にややばらつきがあるが,配列から $P_1 \sim P_6$ が主柱穴と考えられる。 $P_2 \cdot P_4$ は長径58~64cm・短径50cmの楕円形で深さが54~63cmあり, $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \sim P_6$ は長径30~44cm・短径 20~32cmの楕円形で深さ14~28cmである。他のピットについては配列に規則性が認められず,性格は不明である。 P_2 は炉を掘り込んでおり,本跡に伴うピットではないと考えられる。

炉 長軸線上北壁寄りに付設されている。径46cm程の円形で,床を6cm皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっている。

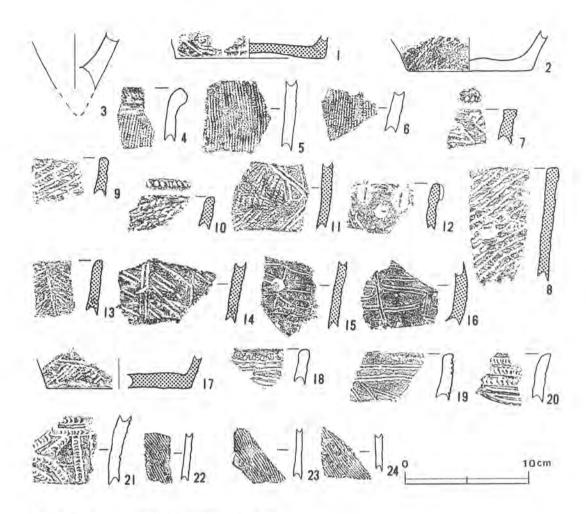
覆土 3層に分層される。2・3層の褐色土が壁際から床全体に薄く堆積してのち、皿状の窪地 に締まりのある1層の暗褐色土が堆積している。いずれにも炭化粒子・焼土粒子がわずかずつ含 まれている。

遺物 中央の覆土中から、やや東西に広がるように縄文時代早期から前期、弥生時代後期の土器 片が出土している。西壁側は2・3層中及び床上から多く出土し、東壁側は1層中から多く出土 している。いずれも破片で、1・2・3の深鉢底部は覆土中の出土である。

所見 縄文式土器片に混じって、弥生式土器が数片1層中から出土している。自然堆積に伴う周囲からの流れ込みと考えられる。土器はいずれも破片で、器形の分かるものはない。本跡の時期は、床上出土の土器も含め大半の土器が縄文時代前期前半(黒浜式期)であることから、該期と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第11図	深 鉢 縄文式土器		やや上げ底気味の底部片。底部外面はミガキが施されている。胴部下端に, ヘラ状工具による格子状の沈線が施されている。内外面に繊維脱痕あり。	白色細砂粒,スコリア, 繊維多量 橙色 普通	P67 10%
2	深 鉢 縄文式土器	B (2.6) C 10.0	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底でミガキ が施されている。胴部は底部から外傾して立ち上がる。 縄文が雑に施文されている。絡条体と思われる。	石英,長石 にぶい橙色 普通	P 68 10%
3	深 鉢 縄文式土器	B (4.3)	尖底部の破片で,直線的に外傾して立ち上がる。施文な し。	長石, スコリア にぶい橙色 普通	P 69 10%



第11図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

第11図4~21は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。4~6は早期前葉(井草式)の時期で、縄文が縦走する。4の口縁部片は口唇部が肥厚外反し、口唇上にも縄文が施文される。7は早期後葉(鵜ヶ島台式)で区画文の交点に円形刺突文が施された口縁部片である。3も早期の時期の尖底部片である。8~17は1とともに本跡に伴うものと考えられる。8・9は軸縄が不鮮明な付加条縄文で、同一個体であろう。10は口唇部にキザミが施され、口縁部は単節縄文LRである。11は縄文地文に半截竹管による沈線が施されている。12は口縁部に縦長の貼縮を持つ。13~17は半截竹管による肋骨文である。15には円形竹管文も見える。17は底部にかけての破片である。18~21は前後後半(浮島・諸磯式)の時期である。18は口縁部片で、縄文地文に半截竹管によるゆるい波状文が施されている。19~21は無文地に弧線や押引き爪形文の施されたグループである。19・20も口縁部片である。22~24は弥生式土器の胴部片で、後期の時期であろう。

第24号住居跡(第12図)

位置 L11b4区。

規模と平面形 長軸 [5.88m]・短軸 [4.50m] の [長方形] で、拡張した住居跡である。 長軸方向 $N-37^{\circ}-E$ 。

壁 東壁残存部で壁高18cm,外傾して立ち上がっている。

 \mathbf{k} 平坦である。南東壁際の P_{17} と P_{28} の間は踏み締められている。

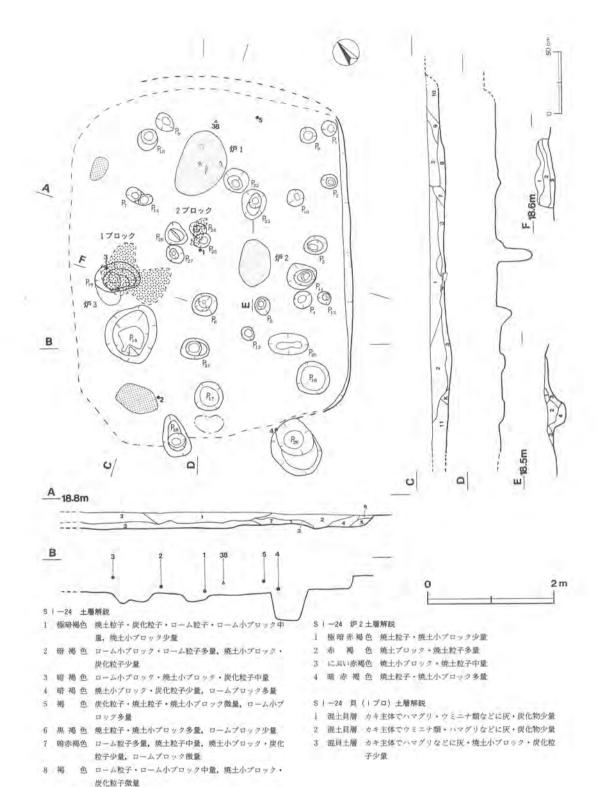
ピット 29か所。 $P_1 \sim P_8$ は規模及び配列から,拡張前の住居の主柱穴であろう。 $P_1 \sim P_5 \cdot P_7 \cdot P_8$ は径24~40cmのほぼ円形で深さ14~24cmである。 P_6 は径44cmのほぼ円形で深さ22cmとやや小さい。 $P_9 \sim P_{15}$ は配列が主柱穴に沿っており,補助柱穴と考えられる。 $P_{16} \sim P_{18}$ は住居南側部分の拡張に伴う柱穴と考えられる。幾分規模が大きく,径42~90cmのほぼ円形で深さは11~17cmである。 $P_{20} \cdot P_{21}$ は補助柱穴と考えられる。 P_{19} は規模の小さい炉を掘り込んでおり,深さ70cmである。また, P_{19} 埋没後,その上に貝がブロック状に堆積している。 $P_{22} \sim P_{27}$ は3か所の炉に囲まれるように位置しており,規模は径26~50cmのほぼ円形で深さが9~59cmである。 $P_{28} \cdot P_{29}$ は性格不明である。

p 3 か所。p 1 は北壁際に存在し,長径110cm・短径73cmの楕円形で床を14cm程掘り窪めた地床 炉である。炉床は焼けて赤くなっている。p 2 は中央からやや東側で長径76cm・短径50cmの楕円形で,床を30cm程掘りくぼめた地床炉である。炉床は焼けて赤くなっている。p 3 はp 2 はって 大半を掘り抜かれているが,南西部が一部残っており,床が10cmの深さまでよく焼けている。

覆土 11層に分層される。 $5 \cdot 10$ 層の褐色土が壁際に堆積してから,焼土小ブロック・炭化粒子などを含む暗褐色の3層が北壁側を除いて,床を広く覆う。北壁側からは $7 \cdot 8$ 層が流れ込んでいる。 $4 \cdot 9$ 層と3層はロームブロックの多少で分層しており,しまりのよい暗褐色土である。皿状の窪地にさらに $1 \cdot 2$ 層が流れ込んでいる。

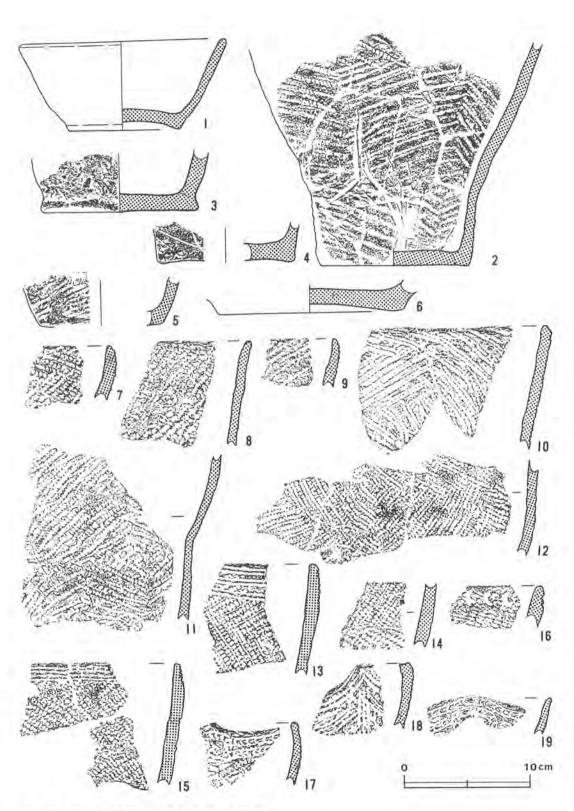
遺物 南西壁側及び炉の周辺から北側にかけての覆土下層及び床上から1の浅鉢など,縄文時代前期の土器片が多く出土している。また,覆土上層からは他時期の土器片も前期の土器片に混じって出土している。2の深鉢は南西壁際から横位の状態で出土している。4・6の底部片は南コーナー寄りの床上,3の底部は西壁寄り貝ブロックの端から出土している。5の底部は2層中である。また,37の磨製石斧・36と38の石皿片が覆土中から出土している。

所見 本跡は住居跡内に2か所の貝ブロック(1・2ブロック)を伴っている。オキシジミ・カキ・ハマグリなどがわずかの炭化物や灰を混じえて、層をなしていた。貝層は覆土の2・3層中からで、住居廃絶後の投棄と考えられる。本跡の時期は、出土遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。平面形及び規模の数値は拡張後のものである。貝以外の獣骨魚骨等は検出されなかった。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と組成比は表2に、また、1ブロックの計測可能な104個のハマグリについては殻長・殻高をグラフ(第16図)で示した。

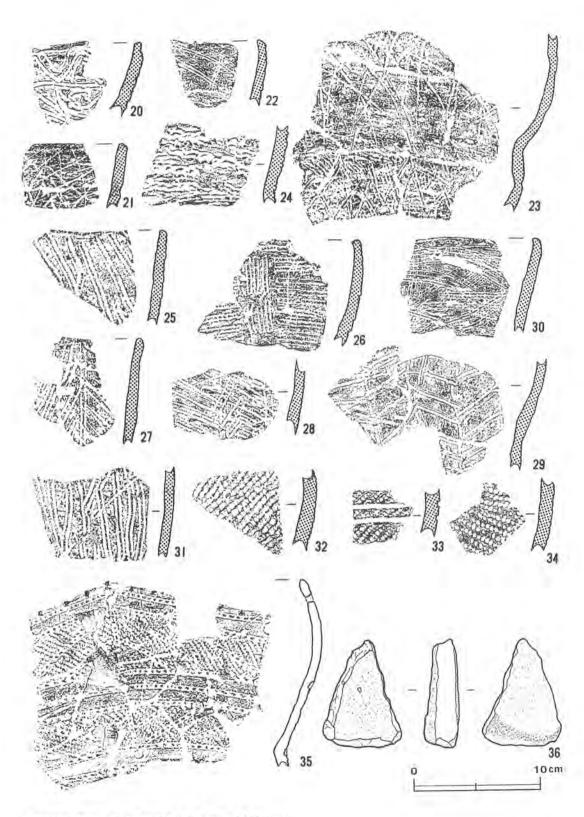


第12図 第24号住居跡実測図

9 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック酸量 10 褐 色 ローム粒子・ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子酸量 11 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子多量,ローム粒子中量



第13回 第24号住居跡出土遺物実測。拓影図(1)

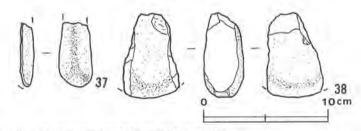


第14回 第24号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第13図 I	浅 鉢 雌文式士器	A 16.7 B 7.2 C 9.1	胴部は一部欠損。底部は上げ底状で、外面に繊維脱痕が 見られる。胴部から口縁部にかけて、外傾して立ち上が る。施文はなく、繊維脱痕が多い。内面はミガキが施さ れている。	細砂粒、繊維 にぶい褐色 普通	P80 PL34 80%
2	深 鉢 劉文式土器	B (17.4) C 11.6	底部から胴部中位にかけての破片。底部は平底で、胴部 は直立して立ち上がり、下半で外傾する。縄文は絡条体 で菱形構成で施文している。	細砂粒、スコリア 繊維、にぶい赤褐色 普通	P81 PL34 30%
3	深鉢縄文式土器	B (4.4) C [12.4]	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。張り出し気味 の底部は平底でミガキが施されている。胴部は外傾して 立ち上がる。雑な縄文が施文されているが、原体は不明。 内面に繊維脱痕あり。	白色細砂粒、繊維 によい橙色 普通	P82 5 %
4	深鉢縄文式土器	B (2.8) G [11.0]	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。上げ底状の底 部は平底で、ミガキが施されている。胴下半部には半載 竹管状工具による斜位の沈縁が見える。内面に繊維脱痕 あり。	白色細砂粒、繊維 にぶい橙色 普通	P83 5 %
5	深 鉢 縄文式土器	B (2.8) C [11.0]	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底でミガキ が施されている。胴部は底部から内彎気味に外傾して立 ち上がる。胴部の縄文は無節の横回転である。	砂粒,繊維多量 明赤褐色 普通	P84 5%
6	鉢 御文式土器	B (2.3) C 15.0	底部片。やや上げ底気味の底部で、内外面繊維脱痕が多 い。	長石、雲母、スコリア 明黄褐色 普通	P 85 10%

第13・14図 $7 \sim 34$ は床上及 び覆土中から出土した縄文式 土器片で、 $1 \sim 6$ とともに本 跡に伴うものである。 $7 \cdot 8$ は単節縄文 R L の口縁部片 で、7 は羽状である。 $9 \cdot 10$



第15図 第24号住居跡出土遺物実測図(3)

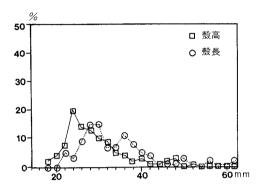
は絡条体の縄文を施文した口縁部片である。11は胴部片で付加条一種付加2条の縄文であろう。12~14は同一個体である。13は付加条一種付加1条の縄文地文に、半截竹管による平行線文が口縁部に施されている。14の下段には単節縄文RLが施文されている。15は口縁部片で、単節縄文LR地文に半截竹管による平行線文が施されている。16は口縁部に半截竹管による爪形文を巡らし、胴部は単節縄文LRである。17は縄文地文で、口縁部に押引き爪形文が施されている。18は波状口縁部片で、縄文地文に半截竹管による斜線文が描かれている。19~31は地文に縄文を持たない。19は押引き爪形文でモチーフを描いている。20は平行沈線間に曲線文を描いている。21・22は雑な格子目文、23は上下で単線と竹管を使い分け、雑な格子目文を描いている。24は雑なコンパス文である。25~30は肋骨文や斜線文であるが、26のみ2単位の縦集合沈線がアクセントとなっている。31は条線文である。32~34は第1貝プロック出土である。35は前期後半(諸磯 a 式)の口縁部片で、単節縄文RL地文に半截竹管による3本の押引き爪形文で文様帯を分けている。さらに波頂部から垂下する押引き爪形文を中心に菱形状に押引き爪形文が施されている。

第24号住居跡出土石製品一覧表

		545	注	÷	1	量	石質	備考
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	12 8	VIEL 1-5
第14図 36	石	m.	(8.7)	(6.4)	2.9	(103.3)	安山岩	Q41, 1層中,破片
第15図 38	石	Ш	(7.0)	(4.6)	3.3	(115.5)	安山岩	Q42,破片,北壁寄り2層中
37	磨製	石 斧	(5.2)	(1.2)	(2.7)	(23.8)	角閃岩	Q43, 破片, 覆土中 PL67

表 2 第24号住居内貝塚動植物遺存体組成表

	~			
	1ブロ	コック	2ブロ	コック
貝 種 名	総重量(g)	組成比(%)	総重量(g)	組成比(%)
オオノガイ	307.1	0.24	9.4	0.53
シオフキ	164.0	0.13	193.5	10.84
ヤマトシジミ	181.5	0.14	0	0
オキシジミ	701.7	0.54	150.7	8.44
ハマグリ	1113.8	0.86	136.3	7.64
アサリ	450.2	0.35	74.3	4.16
サルボウ	97.7	0.08	/	/
カ キ	125104.0	96.73	1127.2	63.14
ウミニナ類	950.7	0.74	76.5	4.29
カキ付ウミウナ	224.5	0.19	17.2	0.96
巻 貝	4.3	0.07	/	/
アカニシ	306.8	0.24	/	/
炭 化 物	0	0	0	0
合 計	129332.6	100.0	1785.1	100.0



第16図 第1貝ブロックハマグリ殻長・殻高分布図

第25号住居跡(第17図)

位置 K11j₅区。

重複関係 第8号住居跡によって, 北半部が掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [4.34m]・短軸 [3.22m] の [長方形]。

長軸方向 [N-9°-W]。

壁 南西部の壁が一部残存しており、壁高は12cmである。

床 やや凹凸がある。南東部・北西部に踏み締まり部分がある。

ピット 17か所。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_6$ は長径38~46cm・短径23~28cmの楕円形で深さ34~43cm, $P_3 \sim P_5$ は径20~33cmのほぼ円形で深さ14~38cmである。規模にややばらつきがあるが,配列から主柱穴と考えられる。 $P_7 \cdot P_8 \cdot P_{10} \sim P_{12}$ は位置から補助柱穴と考えられる。 P_{13} は長径54cm・短径20cmの細長い楕円形で深さ11cmである。南壁寄りの中央に位置する $P_{14} \cdot P_{15}$ とともに,性格は不明である。 P_{17} は径80cmの円形で深さが24cmあり, P_6 の上部を掘り込んでいる。 P_{16} は径78cm程の不整円形で,深さ10cmである。 P_{18} は炉のすぐ南西側に位置しており,径38cm程の不整円形で深さ12cmである。



第17図 第25号住居跡実測図及び遺物出土状況図

いずれも性格不明である。

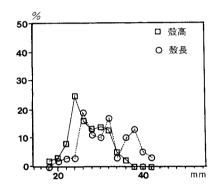
炉 長軸線上やや北寄りに付設されている。第8号住居跡によって削られているが、残存部は長径58cm・短径40cmの不整楕円形である。

覆土 6層に分層される。壁際に3・4層が堆積してのち、ローム小ブロックを含む2層が床全体に薄く入り、その上に1層が堆積している。2・3層中に後世の掘り込みがあり、6層が堆積している。貝ブロックは2層上であり、2層の堆積後投棄されたものであろう。上に乗っている5層には炭化材細片・焼土粒子が含まれており、締まりのない土である。

遺物 南西半部の覆土及び床上から多量の縄文式土器片が出土している。 $P_4 \cdot P_{10}$ 上からは 5 の深 鉢が横位でつぶれた状態で出土した。 $2 \sim 4$ の深鉢底部と27の打製石斧 \cdot 29の砥石は 1 層中から の出土である。 1 の深鉢は第 8 号住居跡の南西壁から,28の石皿は覆土中からの出土である。 P_9 $\sim P_{11}$ の間に堆積している貝ブロックは,カキの層とハマグリ・サルボウの層がはっきり分かれる。

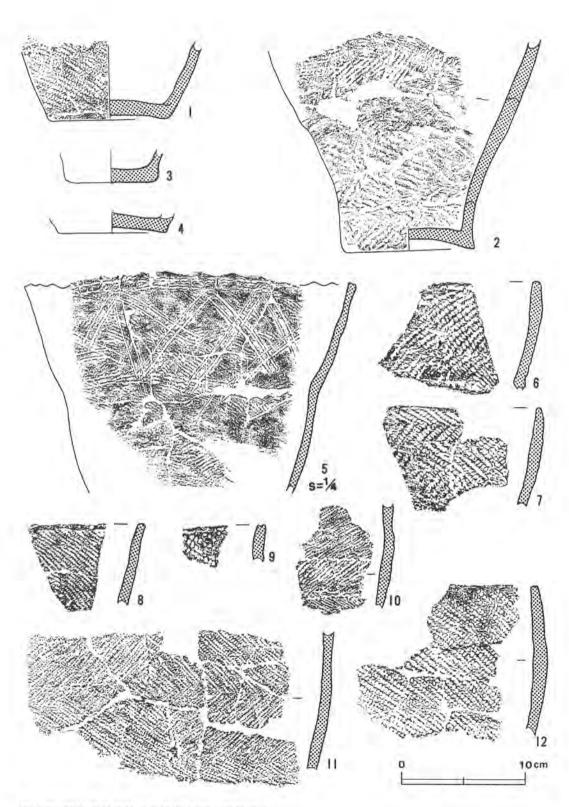
表 3 第25号住居内貝塚動植物遺存体組成表

	1プロック	2プロック	3プロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
貝種 名	総重量(g)	総重量(g)	総重量(g)	総重量(g)	総重量(g)	総重量(g)
	組成比(%)	組成比(%)	組成比(%)	組成比(%)	組成比(%)	組成比(%)
シオフキ	/	7.5	88.1	4.0		
	/	0.9	1.8	0.8	/	
ヤマトシジミ	/	3.2	7.3	2.6		
	/	0.4	0.2	0.5	/	
オキシジミ	4.7	83.1	161.3	59.7		
	4.3	10.1	3.2	10.7	/	
ハマグリ	41.7	311.6	2249.9	291.6	0	0
	37.9	37.9	45.1	52.2	0	0
アサリ	2.9	22.0	232.8	77.0	0	/
	2.6	2.7	4.6	13.9	0	/
サルボウ	6.5	165.4	1388.2	101.5	0	/_
	5.9	20.1	27.8	18.1	0	/
カ キ	52.4	226.9	838.7	22.0	0	0
	47.7	27.6	16.8	3.4	0	0
ウミニナ類	1.8	2.3	19.5	2.1	0	/
	1.6	0.3	0.4	0.4	0	/
アカニシ	/	/	4.7	/	/	/
	/	/	0.1	/	/	/
	110.0	822.0	4990.5	560.5	12.8	10.5
合 計	100	100	100	100	100	100

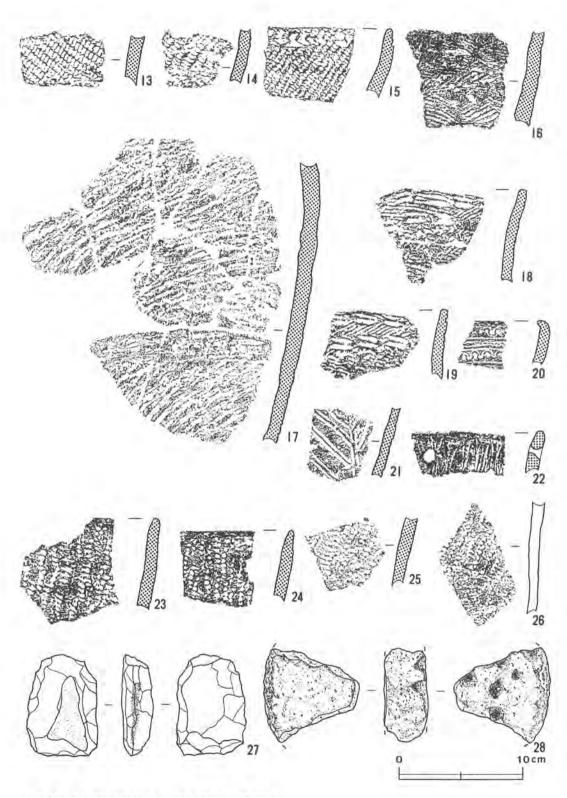


第18図 第3貝ブロックハマグリ殻 長・殼高分布図

所見 壁の立ち上がりが後世の掘り込みなどによって、はっきりとらえられない。また第8号住居跡に掘り込まれていることもあり、平面形は床質及び遺物の広がりからの推定である。西壁側で住居跡内から貝ブロックが6か所 $(1\sim6$ ブロック)確認されている。表3で示したように $2\sim4$ ブロックは



第19図 第25号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)



第20図 第25号住居跡出土遺物実測。拓影図(2)



第21図 第25号住居跡出土遺物実測図(3)

やや大きく、5・6ブロック は極めて小さい。貝層中及び 床上出土の土器が縄文時代前 期前半 (黒浜式期) に比定で きることから、貝の投棄は住 居廃絶後ほどなく行われたも のと考えられる。本跡の時期

は、出土遺物から縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。貝以外の獣骨魚骨等は検出され なかった。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と組成比は表3に、また、3ブロック のハマグリについて、計測可能な63個の殼長・殼高をグラフ (第18図) で示した。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 航	法量(cm)	器形の特敵及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第19図	深 鉢 國文式土器	B (5.9) C 9.6	底部から胴下半部にかけての破片。底部はやや上げ底気味で,外 面は良く磨かれている。胴部は縄文(単節RLの横回転)で、底 部からの立ち上がり部も縄文の上から磨かれている。内面も磨か れている。	細砂粒,繊維 褐色 普通	P 45 15%
2	深蘇	B (16.3) C 10.2	底部から胴部中位にかけての破片。底部は上げ底状、外面は良く 磨かれている。底部から直線的に立ち上がった胴部はやや内彎気 味に外傾して胴部中位に至る。胴部全体に縄文(無節し)をやや 不規則に羽状構成で施文している。下半に半載竹管状工具による 刺突状の短沈線を1条巡らせている。	白色細砂粒、繊維 にぶい褐色 普通	P87 PL34 50%
2	深 鉢 順文式主要	B (16.3) C 10.2	底部から胴部中位にかけての破片。底部は上げ底状、外面は良く 腰かれている。底部から直線的に立ち上がった胴部はやや内骨気 味に外傾して胴部中位に至る。胴部全体に縄文(無節L)をやや 不規則に羽状構成で施文している。下半に半載竹管状工具による 刺突状の短沈線を1条巡らせている。	白色細砂粒、繊維 にぶい褐色 普通	P87 50%
3	深 鉢 御文式土器	B (2.3) C [7.6]	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。やや張り出し気味の底 部は平底。胴部の立ち上がりは無文。	白色細砂粒,繊維少量 にぶい褐色 普通	P88 5 %
4	深 鍵文式上器	C 8.7	底部片。やや上げ底状であり、外面は磨かれている。内面は繊維 脱痕が甚だしい。	細砂粒,繊維多量 明赤褐色 普通	P89 5%
- 5	深鉢	A 35,8 B (20.2)	刷下半部を欠損。器面全体に縄文(無筋R・Lの横回転)を施し、 地文としている。口縁部は小波状で、波状口縁下と頸部に半般竹 管状工具による押し引き文をそれぞれ1条巡らし、文様帯を二分 している。押し引き文間には同一工具による格子目文を施す。施 文は縄文→押し引き文→格子目文の順である。内面横ナデ。	砂粒、繊維多量 褐色 普通	P86 PL34 40%

第25号住居跡出土石製品一覧表

図版番号		gp		gip	gip	205		拉	2		微	-	7094	ett: tr					
凶似借写		器	種	作到	作组	798	(38)	(198)	758	498	458	母 長さ(c	長さ(cm) 幅 (cm)	厚き(cm) 重量(g)	重量(g)	43	質	Wit 5	
第21図 29	砥			E	9.4	8.4	3.8	388.5	砂	岩	Q44, 1層中	PL68							
第20図 27	打	製	石	斧	8.2	5.7	2.5	164.8	凝灰	岩	Q45, 撥型, 1層中	PL67							
28	右			m	(7.6)	(7.7)	3.7	(142.9)	安山	岩	Q46, 破片, 覆土中	PL68							

第19・20図 6~25は床上及び覆土中出土の縄文式土器片で, 1~5とともに本跡に伴うものである。 6~9は口縁部片で縄文のみの施文である。 7は付加条縄文と前々段多条の縄文の羽状構成である。 10~14は縄文のみの胴部片である。 11は付加条一種付加 1 条の縄文を羽状に施している。 12は単節縄文 R L の横回転で,口唇上面にキザミが施されている。 13・14は前々段多条の横回転,15は単節縄文 L R地文で,口縁部に半截竹管による爪形文が巡る。 16は無節縄文, 17は絡条体の縄文を雑に施文した胴部片である。 $18\cdot19$ は同一個体の口縁部片であり,無節縄文地文に半截竹管によるやや長めの押引き文を 2 列巡らしている。 20は口唇部が内彎し,半截竹管による平行線文とコンパス文を施している。 21は胴部片で無文地に肋骨文である。 22は口縁部に補修孔があり,雑な条線文が縦位に施されている。 23~25は無文地にアナダラ属の貝殻腹縁文が施されている。 26も貝殻腹縁文であるが,胎土に繊維は含まれていない。前期後半(浮島 II 式)の時期であろう。

第12号住居跡(第22図)

位置 J11h。区。

規模と平面形 長径 [4.49m]・短径 [4.12m] の [円形]。炉・ピットを掘りあげた段階で,ピットの内外での床質から規模と平面形を判断した。

重複関係 第70号土坑を掘り込んでいる。

壁 覆土の撹乱が甚だしく、壁の立ち上がりを掘り込み段階では確認できなかった。

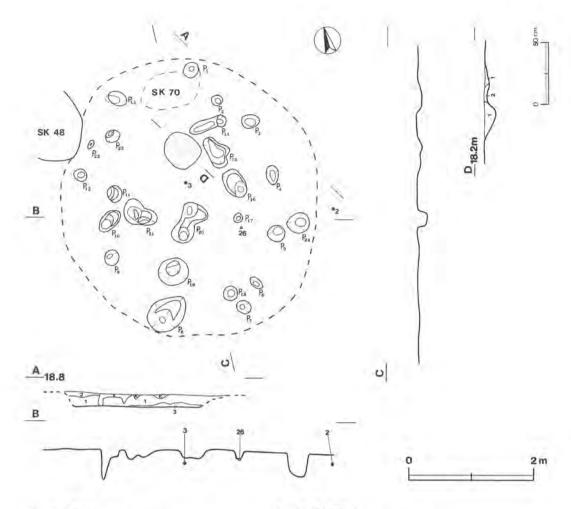
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 24か所。 $P_1 \cdot P_3 \sim P_5 \cdot P_7 \sim P_9 \cdot P_{12} \cdot P_{13}$ は径 $20 \sim 26$ cm(P_8 のみ長径70cm・短径50cm)・深 $211 \sim 40$ cmで,ややばらつきがあるが,位置関係から主柱穴と考えられる。主柱穴の近くのピットは補助柱穴とも考えられるが,性格不明である。

炉 中央部からやや北寄りに付設されている。径52cm程の不整円形で,床を18cm掘りくぼめて地 床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっているが,硬くはなっていない。

覆土 当初,遺物包含層として小調査区を設け掘り下げたため,住居跡にかかる土層を観察することができなかった。小調査区のセクションも撹乱が甚だしく複雑になっている。覆土は3層に分層される。3層は鈍い褐色土で,ロームブロックが多く含まれ,しまりのある土である。2層はソフトロームブロックがまだら状に多く含まれている褐色土で,1層の暗褐色土とはロームブロックの有無で分層した。いずれの土層にも焼土粒子・炭化粒子がわずかに含まれている。

遺物 炉の北側から東側にかけての $1 \cdot 3$ 層中から縄文式土器片が多く出土している。 $1 \cdot 2$ の深鉢は1 層中からの出土である。3 の深鉢は炉のすぐ南側床上から出土している。26 の磨製石斧・27 の磨石は覆土中層からの出土である。



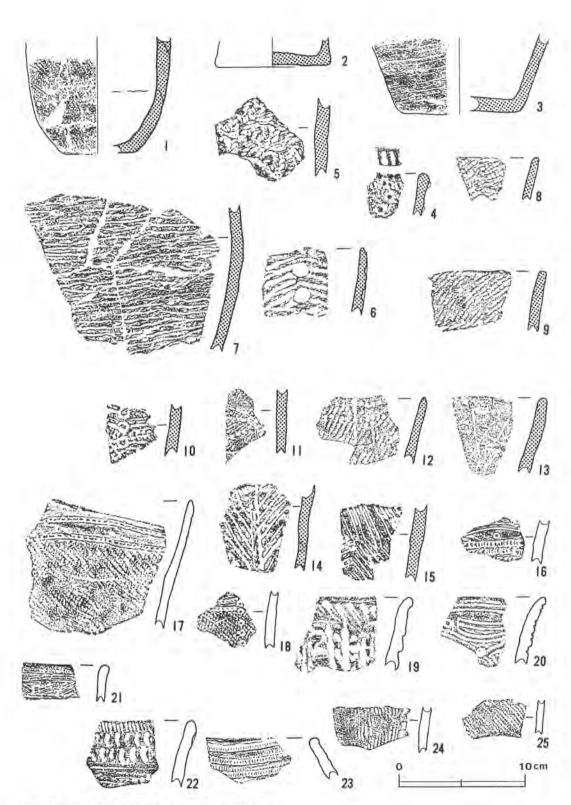
S 1-12 土層解脱

- 1 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量
- 3 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック多量

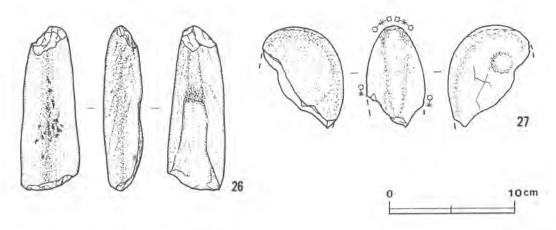
第22図 第12号住居跡実測図

- S 1-12 炉土層解説
- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック多量
- 2. 暗赤褐色 院土粒子・焼土ブロック多量

所見 壁の立ち上がりがとらえられなかったため、ピットの配列から住居跡プランを推定している。床上出土の土器片は少ないが、縄文時代前期前半から後半(浮島・諸磯・興津式期)及び前期末の土器片が混在しており、本跡の廃絶時期を前期後半から末と考えておきたい。



第23回 第12号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第24図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第12号住居跡出土遺物観察表

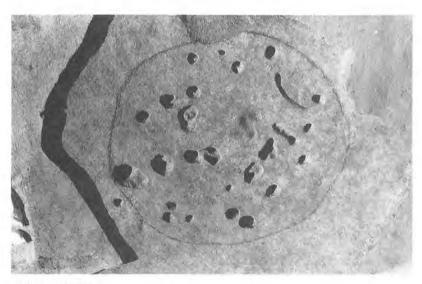
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特質及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第23図	深 鉢 縄文式土器	B (9,2) C [5.6]	底部から胴部にかけての破片。底部は平底。胴部は底部 から内冑気味に外傾して立ち上がる。鯛部には縄文(単 節RLの横回転)を施文している。内面に繊維脱痕が多 い。	長石,砂粒多量,チャート スコリア,繊維 明赤褐色 普通	P53 PL34 40%
2	深 鉢 縄文式土器	A (2.3) B 9.3	底部から胴部の立ち上がりにかけての破片。底部は張り 出しのの強い平底でミガキが施されている。立ち上がり 部に施文は見られない。	細砂粒, スコリア, 繊維多量 赤褐色 普通	P 54 10%
3	深鉢	B (6.1) C [10.0]	底部から胴部にかけての破片。底部は平底。胴部は底部 から外傾して立ち上がり、竹管状工具による肋骨文が施 されている。施文は浅い。外面に繊維脱痕が少しある。	長石,石英,スコリア, 繊維少量 明赤褐色 普通	P55 10%

第12号住居跡出土石製品一覧表

	300	200	質	-	B.	1		注	G .	PE	器		CONTRACTOR CONTRACTOR	
	-5	UH	長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 重量(g)	種	20					図版番号				
PL6	中層	22, 一部欠損,	文 岩	蛇	(300.0)	3.2	4.8	(14.2)	斧	石	製	磨	26	第24図
中層	被熱,	21, 敲きも兼用,	岩	砂	(218.3)	4.3	(6.5)	(8,2)	石			磨	27	

第23図4~23は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。4は縄文地文上に瘤状突起が付いた口縁部片で、口唇上面にキザミが施されている。5は結節した縄で押圧した縄文で、前期前半(関山式)の時期である。6は口縁部片で絡条体の縄文を粗く施文し、その上に円形の刺突文を縦に施している。7は巻きのゆるい絡条体の縄文を施した胴部片である。8・9は口縁部片で、単節縄文RLが施文されている。10・11は縄文地文に竹管文・沈線文・押引き爪形文が施された胴部片である。12は口縁部片で前々段多条の縄文地文に2列の円形刺突文が巡る。13は無文地に格子目文が施された口縁部片、14・15は肋骨文の施された胴部片である。6~15は1~3と

ともに前期前半(黒浜式)の時期である。16~23が本跡に伴うものと考える。16は無文地に竹管文・押引き爪形文・弧線文が施された胴部片である。17は口縁部に2列の押引き爪形文が巡り、胴部は単節縄文(RLの横回転)である。18も17同様で、さらに円形竹管文列が縦位に施されている。19は輪積み痕を残した口縁部片で、口縁直下に斜位のキザミを施し、さらに輪積み痕にも縦の沈線を施している。20は撚糸文地文に沈線によるモチーフを、21も無文地に沈線によるモチーフを描いた口縁部である。22は口縁直下に短沈線、口縁部に太目の爪形文が巡っている。23は変形爪形文が口縁部に数段施されている。22・23は前期末(十三菩提式)の時期であろう。24・25は弥生時代後期の胴部片であろう。24は前々段多条の縄文か。25は付加条一種付加2条の縄文が施文されている。



第12号住居跡

第14号住居跡 (第25図)

位置 J11g,区。

規模と平面形 長軸 [3.84m]・短軸 [3.38m] の [隅丸方形]。

長軸方向 N-42°-E。

壁 北壁・西壁の立ち上がりを確認した。壁高は21cmで、外傾して立ち上がっている。

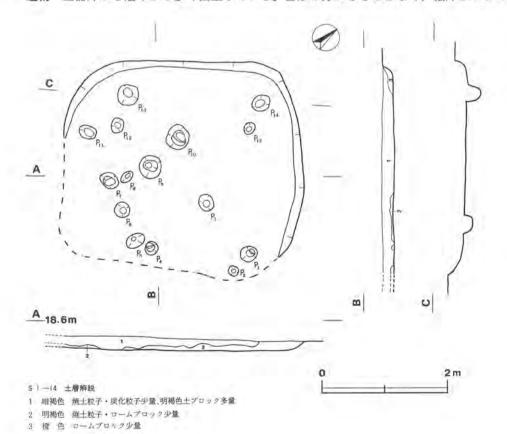
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 15か所。 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_{13} \cdot P_{14}$ は径 $28 \sim 32$ cmのほぼ円形で深さが $14 \sim 20$ cmあり,規模及び配列から主柱穴と考えられる。 $P_2 \cdot P_4 \cdot P_{12} \cdot P_{15}$ は径22cm程の円形で深さが $12 \sim 21$ cmであり,位置関係から判断して補助柱穴と考えられる。他は性格不明である。

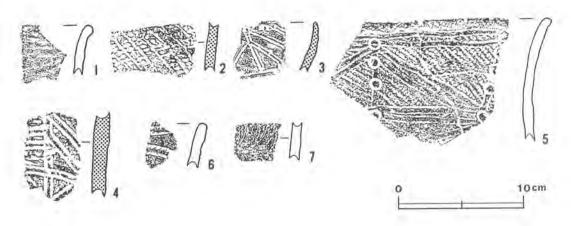
炉確認できなかった。

覆土 3層に分層される。ハードローム小ブロックを含む橙色土の3層が壁際に、ソフトロームブロック・焼土粒子をわずかに含む2層が床上に薄く凹凸をなして堆積している。土器片を多く含む1層は暗褐色で、焼土粒子の他に炭化粒子もわずかに含む。

遺物 土器片が1層中から多く出土している。器形の分かるものはなく、細片ばかりである。



第25図 第14号住居跡実測図



第26図 第14号住居跡出土遺物実測。拓影図

所見 壁のはっきりしないところが多く、特に東側から南側にかけては推定である。エリア外の 包含層からの遺物の出土も多く、さらに住居跡が広がる可能性も否定できない。出土した土器は 縄文時代前期前半(黒浜式期)から後半(浮島・諸磯式期)が混在しており、住居廃絶時期は前 期後半と考えておきたい。

第26図1~7は覆土中出土の縄文式土器片である。1は無文の口縁部片で、口唇部が肥厚外反しており、早期前葉の時期であろう。2は付加条縄文、3・4は無文地に半截竹管による肋骨文が施されており、前期前半(黒浜式)の時期であろう。5は口縁部片で、縄文(単節RLの横回転)地文上に半截竹管による沈線文と円形竹管文が施されている。6も口縁部片で無文地に押引き爪形文が、7はアナダラ属の貝殼腹縁による波状文が施された胴部片である。5~7が本跡に伴うものであろう。

第18号住居跡 (第27図)

位置 J11c。区。

規模と平面形 長軸4.62m・短軸4.00mの隅丸長方形。

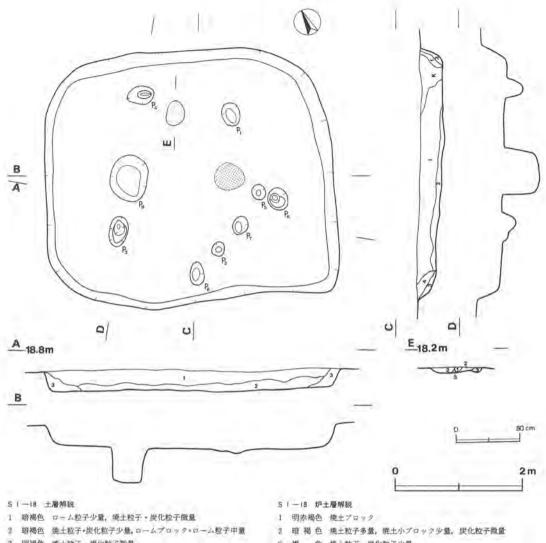
長軸方向 N-114°-E。

壁 壁高30~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 9か所。 $P_1 \sim P_4$ は長径23~50cm・短径20~30cmで深さが10~32cmあり,配列及び規模から主柱穴と考えられる。 P_8 は長径26cm・短径20cmの楕円形で深さが11cmあり,位置的に出入り口施設に伴うピットとも考えられる。 $P_5 \sim P_7 \cdot P_9$ については,性格不明である。

炉 中央からやや北寄りに付設されている。長径40cm・短径30cmの楕円形で、床を10cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。中央部は赤くなって、ブロック状に硬くなっている。 $P_1 \cdot P_2$ 間に



- 3 明褐色 羨土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐 色 炭化粒子少量、焼土粒子微量

色 焼土粒子・炭化粒子少量

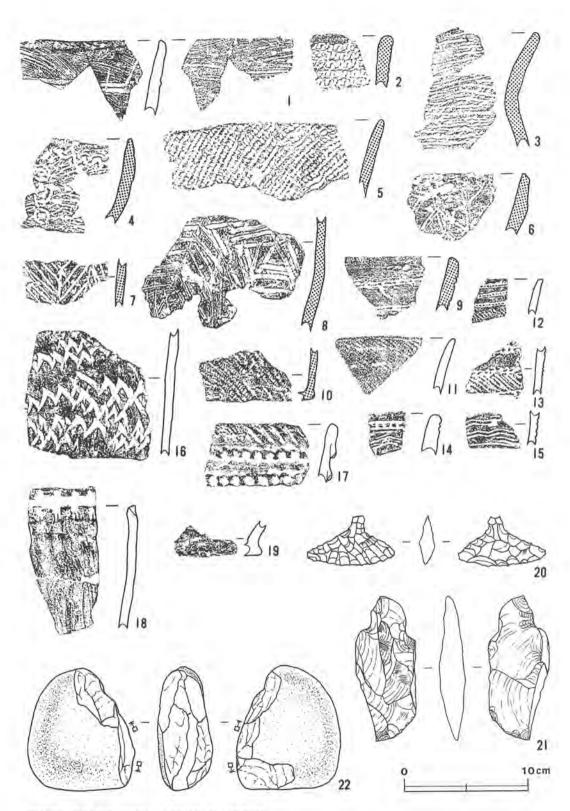
第27図 第18号住居跡実測図

径約45cmのほぼ円形の薄い焼土の広がりが見られるが、床は焼けてなく、炉ではない。

覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む3層・ローム質の4層が壁際に堆積してから、 2層の暗褐色土が広くかつ薄く床全体を覆うように堆積している。さらに、皿状の窪地に暗褐色 の1層が流れ込んでいる。各層には焼土粒子・炭化粒子が含まれるが、2層中が最も多い。

遺物 2層中・1層の下層から多くの縄文式土器片が出土している。器形の分かるものはほとん どない。27の敲石、20・21の石匙は炉の周りの2層からの出土である。

所見 縄文式土器片は1・2層の覆土中からの出土がほとんどであるが、一括投棄という状態で はない。住居廃絶後、ほどなく埋土といっしょに流れ込んだものであろう。土器は縄文時代早期



第28図 第18号住居跡出土遺物実測。拓影図

中葉から前期後半 (浮島 I・II 式期,諸磯 a 式期) が混在しており,住居廃絶の時期は前期後半と考えられる。

第28図1~19は覆土中から出土した縄文式土器片である。1は外削状の口縁部片で、口唇上には細い撚紐の絡条体圧痕が施されている。口縁部以下は擦痕文で微隆線によって文様帯が二分されており、早期中葉(子母口式)の時期である。2はループ文が多段に施される口縁部片で、前期前半(関山式)の時期であろう。3~10は前期前半(黒浜式)の時期である。3は外反する口縁部片で、絡条体による縄文が施され、4は絡条体を地文にコンパス文・円形竹管文が施されている。5は縄文(前々段多条か)施文のみの口縁部片、6・7は無文地に半截竹管による肋骨文である。8も肋骨文であるが、施文は雑である。9は無文地に押引き爪形文が施されている。10は前々段多条を施文した底部にかけての破片である。11~19は本跡に伴うものと考えられる。11は口縁部片で単節縄文RLが施文されている。12も口縁部片で単節縄文LR地文に半截竹管による押引き爪形文が施されている。13は押引き爪形文による区画内に斜線文が充填されている。14・15も押引き爪形文及び沈線文によってモチーフが描かれている。16は貝殼腹縁による波状文の胴部片、17は口唇部に斜位の短沈線で輪積み痕には押圧を施している。18は口唇上から口縁直下にかけてキザミを施し、胴部は無文である。19はやや張り出し気味の底部片で無文である。

第18号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器種		沒	Ė			石 質	備考	
凶权钳与	707	7里	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		備考	
第28図 20	石	匙	2.0	3.7	0.6	3.2	チャート	Q30, 2層中	PL66
22	敲	石	9.8	8.7	4.3	459.3	砂岩	Q31,礫器状である。2層中	PL69
21	石	匙	5.8	(2.0)	1.1	(13.3)	黒曜 石	Q173, 一部欠損, 2 層中	PL66

第9号住居跡(第29図)

位置 K12d₂区。

規模と平面形 長径4.20m・短径3.80mの不整円形。

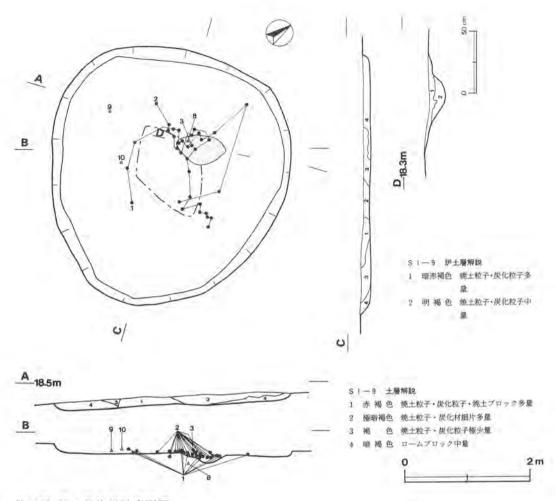
壁 壁高10~15cmで、緩く外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。炉の南側がよく踏み締められている。

ピット 確認されなかった。

炉 やや北寄りに付設されている。長径80cm・短径56cmの楕円形で、床を15cm程掘り込み地床炉としている。熱を受けての硬化部分は見られない。

覆土 4層に分層される。3・4層はソフトロームブロックをまだら状に含む土層で,覆土の大半を占める。その後,窪地に1・2層が流れ込んでいる。2層中には炭化材細片・焼土粒子が多く含まれる。1層中にはさらに焼土ブロックも含まれ,赤褐色をしている土層である。

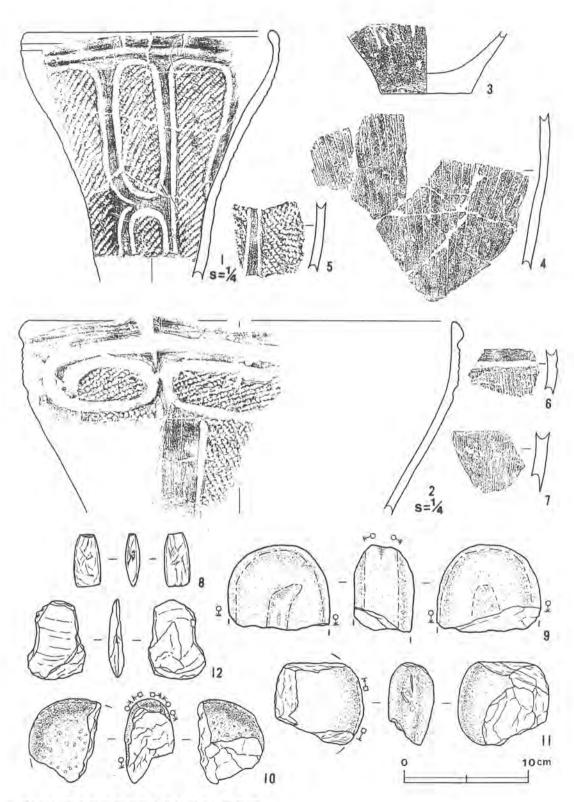


第29図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第30図	深 鉢 縄文式土器	A [36.4] B (26.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部には縄文(単節 R L 縦回転)地文に太めの沈線による区画文を施す。沈線 間は磨消し、広の磨消帯に上端が弧を描く懸垂文が垂下 する。平縁の口縁部との堤には浅く太い沈線が 1 条巡り、 幅の狭い口縁部は無文である。	白色細砂粒 橙色 普通	P48 30%
2	深 鉢 緬文式土器	A [45.8] B (25.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は2本の沈線によ る幅の直線的磨消帯が垂下する。磨消帯間には縄文(単 節LRの縦転)を施す。口縁部は平縁で、2種の太い沈 線による楕円形区画に縄文(単節LRの横回転)を施す。	白色細砂粒 橙色 普通	P 49 40%
3	深鉢	B (4.7) C 7.4	平底の底部片。胴部は底部から外傾して立ち上がり、2 本の沈線による直線的路消帯が垂下している。縄文の有 無は不明である。胴部下半には縦位のミガキを施している。	白色細砂粒 橙色 普通	P50 5 %

遺物 炉の直上とその周辺及び 4 層下の床上から縄文式土器片が集中して出土している。 $1\sim3$ の深鉢はいずれも集中地点からの出土である。 8 の磨製石斧も炉の縁の床上から, 9 と10の磨石



第30図 第 9 号住居跡出土遺物実測·拓影図

が炉の周りの3層中から出土している。11の敲石と12の打製石斧は覆土中からの出土である。

所見 完形になる土器はなく,住居廃絶後の一括投棄であろう。本跡の時期は,出土遺物から縄 文時代中期後半(加曽利 E Ⅲ 式期)と考えられる。

第30図 $4 \sim 7$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。 4 はほぼ等間隔で縦に沈線が施された胴部片であり,前期後半の時期であろう。 $5 \sim 7$ は $1 \sim 3$ とともに本跡に伴うものである。 5 は縄文(単節LR)地文上に懸垂文が施されている。 $6 \cdot 7$ は縦に条線文が施されており,いずれも胴部片である。

第9	号住	居跡出	土石	製品一	覧表
----	----	-----	----	-----	----

図版番号		器		-016	795	法量			社	石質	備考	
				種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 月)/H	
第30図	8	磨	製	石	斧	4.3	2.2	1.1	17.8	蛇紋岩	Q17,小型で定角式,床上	PL67
	9	磨			石	(7.0)	8.3	4.8	(369.7)	安山岩	Q18, 一部欠損, 3層中	PL68
	10	磨			石	(6.7)	(5.8)	3.9	(133.6)	安山岩	Q19, 一部欠損, 3 層中	PL67
	11	敲			石	(6.6)	(7.2)	3.6	(231.8)	安山岩	Q169, 一部欠損, 覆土中	
11 111	12	打	製	石	斧	6.3	4.6	1.2	31.5	ホルンフェルス	Q170, 分銅型, 覆土中	PL67

第16号住居跡 (第31図)

位置 J11i₇区。

重複関係 第32号土坑によって、北側部分を掘り込まれている。

規模と平面形 長径4.35m・短径4.30mのほぼ円形。

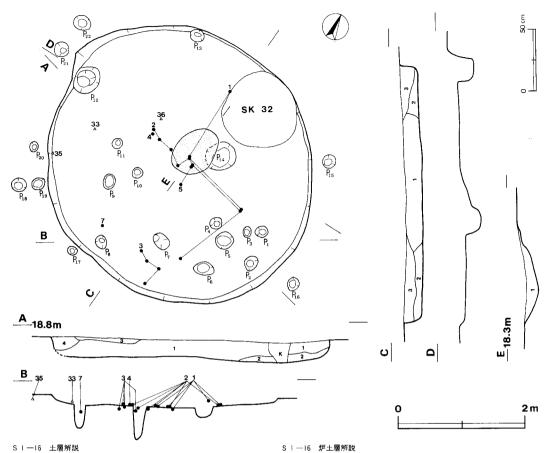
壁 壁高 $6\sim14$ cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦である。全体的に踏み締められている。

ピット 22か所。規模にばらつきがあるが,配列から判断して P_2 (径20cmの円形で深さ18cm)・ P_8 (長径22cmの楕円形で深さ40cm)・ P_{12} (径40cmの円形で深さ35cm)は主柱穴であろう。位置的に,第32号土坑によって主柱穴 1 か所が掘り抜かれていると考えられる。 P_{14} は炉に掘り抜かれており,住居構築以前のピットと考えられるが,性格は不明である。住居跡内の他のピット $(P_1 \cdot P_3 \sim P_7 \cdot P_9 \sim P_{11} \cdot P_{13})$ はほぼ同規模であるが,性格は不明である。壁外のピット $(P_{15} \sim P_{22})$ は壁からの距離と規模(径20~26cmのほぼ円形で深さ $7 \sim 36$ cm)から判断して,住居跡に伴うものと思われる。なお, $P_{15} \cdot P_{21}$, $P_{16} \cdot P_{18}$ は対になる位置関係である。

炉 ほぼ中央部に付設されている。長径80cm・短径64cmの楕円形の地床炉で,床を18cm掘りくぼめている。炉内覆土に焼土ブロック・焼土粒子を含むが,炉床は硬くない。

覆土 4層に分層される。壁際からの一般的な堆積状況は見られない。ローム小ブロックをまだら状に含む褐色の2層が堆積してのち,焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む暗褐色の1層が広く 覆っている。3・4層は褐色土で,大きな起伏のある1層上に堆積している。



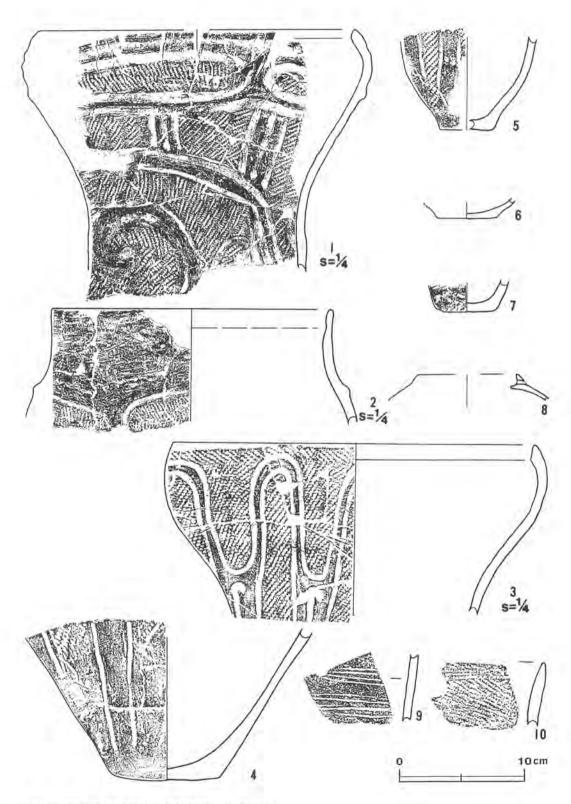
- 1 暗褐色 ローム粒子多量,焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量,ロームブロック少量
- 3 褐 色 焼土粒子微量,炭化粒子少量
- 4 褐色 褐色土ブロック中量,炭化粒子少量

第31図 第16号住居跡実測図

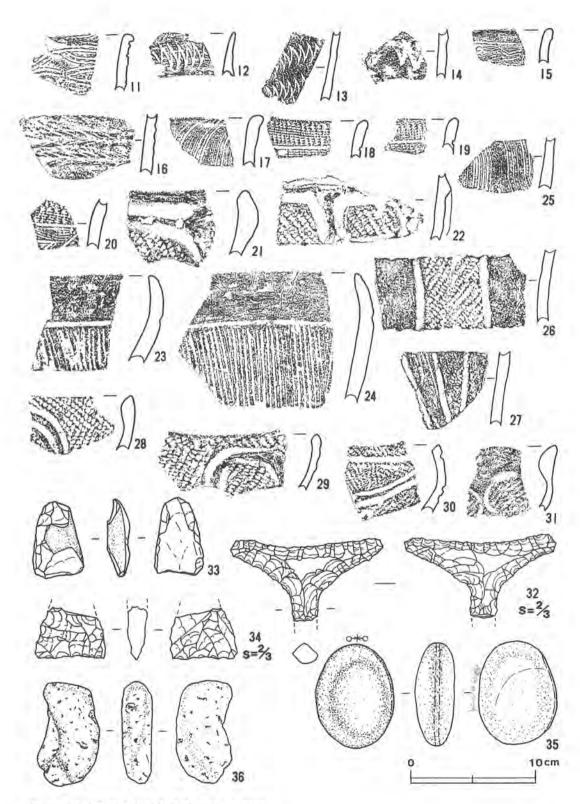
遺物 1・2層中から縄文式土器片が多く出土している。特に炉上の1層中からは、一括投棄を思わせる状況で出土している。3の深鉢は炉と南壁の間から、土器片が床上に散在して出土した。2の深鉢は床に近い1層中の出土である。4の深鉢は炉の西側、5の深鉢は炉上の1層中、6の深鉢は炉内覆土からの出土である。1の深鉢は土器片が炉及びその南東側に広く散在していたものである。7の深鉢は南壁際床上、8の壺は1層中からの出土である。また、32の石錐がP。上から、33の打製石斧・34の石鏃・35の磨石・36の軽石が覆土中から出土している。

1 暗赤褐色 焼土粒子中量,炭化粒子・焼土小ブロック少量

所見 住居廃絶後,1層中に縄文時代中期後半(加曽利EIII式期)の土器を一括投棄したものと考えられる。また, $1 \cdot 2 \cdot 3$ 層中には縄文時代早・前期の土器片も含まれており,それらは周辺からの流れ込みであろう。本跡の時期は,土器が一括投棄された中期後半(加曽利EIII式期)頃と考えられる。



第32図 第16号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)



第33図 第16号住居跡出土遺物実測。拓影図(2)

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第32図 1	深 鉢 縄文式土器	A 39.0 B (18.3)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は縄文(単節RL 縦回転)地文に3本の太めの沈線による直線及び2本の 曲線を組み合わせた意匠文を施しており,沈線間は磨消 している。口縁部は平縁で断面三角形の隆帯による楕円	細砂粒,スコリア 浅黄橙色 普通	P 59 40%	PL35
2	深鉢縄文式土器	A [45.8] B (25.4)	形区画文間に縄文(単節RLの横回転)を充填している。 胴上半部以下を欠損する。胴上半部は断面蒲鉾形の隆帯 による長楕円形の区画文で、縄文(RLの前々段多条の 横回転)を充塡している。口縁部は直立気味に立ち上が り、幅の広い無文帯である。	長石, チャート, スコリア 橙色 普通	P 58 40%	PL35
3	深 鉢 縄文式土器	A [33.8] B (25.9)	胴下半部を欠損する。口縁部から胴部にかけて2本の沈線によって[U]字状の意匠文を構成する。2本の沈線間は磨消帯で、逆[U]字状の沈線間に上端が弧を描く懸垂文が施されている。縄文は口縁部のみ単節RLの横回転で、以下は縦回転である。	白色細砂粒,スコリア 橙色 普通	P57 30%	PL35
4	深 鉢 縄文式土器	B (11.5) C 8.4	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底でミガキ が施されている。胴部は底部から外傾して立ち上がり, 2本の沈線による直線的磨消帯が垂下する。縄文は単節 LRの横回転である。	細砂粒,スコリア 橙色 普通	P60 20%	PL35
5	深 鉢 縄文式土器	B (7.4) C [4.4]	底部から胴下半部にかけての破片。平底で,底部から強く内鬱気味に外傾して立ち上がる。胴部には2本の沈線による直線的磨消帯が垂下する。縄文は単節RLの縦回転である。	細砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P 61 10%	
6	鉢 縄文式土器	B (1.2) C 4.8	底部から胴下半部にかけての破片。平底で,胴部は強く 外傾して立ち上がる。胴部の施文は不明。器壁は薄い。	砂粒多量,石英, 長石多量 褐色 普通	P 62 10%	
7	深 鉢 縄文式土器		底部から胴上半部にかけての破片。わずかに膨らみを持った平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴部には磨消帯が垂下し、磨消帯間には縄文(単節RLの縦回転)が施文されている。	細砂粒,スコリア 橙色 普通	P 63 10%	
8	壺 縄文式土器	A [10.8] B (3.4)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部から口縁部に 内傾して立ち上がる。胴部は無文。口縁部には有孔の鍔 がめぐる。鍔のまわりに赤彩痕が残る。	白色細砂粒, スコリア 褐色 普通	P64 10%	

第32・33図9~16は床上及び覆土中出土の縄文式土器片である。9は横位細沈線の施された胴部片で早期中葉(田戸下層式)の時期である。10は単節縄文地文に半截竹管による押引き爪形文が口縁部に巡っている。11は口縁部片で撚糸文地文に半截竹管による木葉文が施されている。12~14は貝殼腹縁による波状文の胴部片,15は無文地に半截竹管による沈線と円形竹管文の口縁部片である。16は胴部片で縄文地文に矢羽状のキザミが施された浮線が貼付されている。17は口唇部が外反し,弧状の条線が施されている。18~20は貝殼腹縁文を沈線によって区画している。10~20は前期後半(浮島・諸磯・興津式)の時期である。21~31が1~8とともに本跡に伴うものである。21・22は口縁部片で隆帯区画内に単節縄文RLが充塡されている。23・24は同一個体であろう。口縁部は沈線によって区画され無文で,沈線下に縦位条線が施されている。25も曲線化した条線が施されている。26・27は胴部片で沈線間を磨消した懸垂文が施されている。28~31は口縁部片で、28・29は単節縄文RL地文(口縁部横回転・胴部縦回転)に沈線によるモチーフが描かれ,沈線間は磨消されている。30は単節縄文RL地文で口縁直下に沈線が巡り,胴部は2本単位

の沈線による曲線文であろう。31は口縁内面が肥厚する。口縁直下は無文で,以下に沈線による 楕円区画文を描き、縄文を充塡している。

第16号住居跡出土石製品一覧表

図版番号		器	種	2 40	注	-	量		石質	/##. +F.	
		TATE:	但		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		備考	
第33図	32	石		錐	3.4	6.1	0.7	8.6	チャート	Q25, 錐部欠損, P ₉ 上	PL66
	33	打 製	石	斧	6.2	4.2	1.8	57.3	砂岩	Q26, 撥型, 1 層中	PL67
	34	石		鏃	(2.0)	2.8	0.8	(4.1)	チャート	Q27, 一部欠損, 覆土中	PL66
	35	磨		石	8.3	6.2	3.2	24.0	砂岩	Q28, 3層中	PL69
	36	不明。	石 製	밂	8.3	5.0	2.4	21.6	流紋岩	Q171, 軽石, 1層中	PL69

第19号住居跡 (第34図)

位置 K11a。区。

規模と平面形 長径[4.45m]・短径3.95mの楕円形で,出入り口施設をもつ。広義の柄鏡形住居跡である。柄部の掘り込み溝は住居跡内で,柄部の住居跡外にあたるところにやや大きめの土坑状のピット(径62cm・深さ13cmの不整円形)が位置する。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高17~30cmで、壁残存部は外傾して立ち上がっている。柄部側では壁の確認ができなかった。

床 平坦である。炉を中心に柱穴で囲まれた範囲はよく踏み締められている。

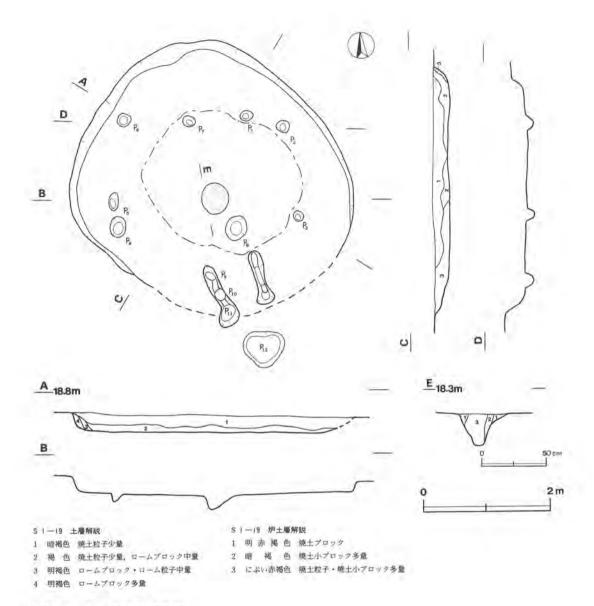
ピット 12か所。 $P_1 \sim P_7$ は径16~26cmのほぼ円形で深さが $10 \sim 16$ cmあり,規模及び配列から主柱穴と考えられる。 P_8 は径36cmのほぼ円形で深さが36cmあり,炉と溝の間に位置するが,性格は不明である。 $P_9 \sim P_{11}$ は柄部左側の溝にあるピットで,柄部の施設に伴うものであろう。柄部右側でははっきりとピットを確認することができなかった。

炉 中央部に付設されている。径46cmの円形で、床を逆台形状に50cm程掘りくぼめて地床炉としている。中心部は硬くなっていないが焼土が多量に詰まっており、周囲は硬くなっている。

覆土 4層に分層される。ソフトロームブロックを含む 3・4層が壁際に堆積してのち、わずかに焼土粒子を含む褐色の2層が床を広く覆う。さらに暗褐色の1層が2層を覆っている。

遺物 1・2層中から縄文式土器片がわずかに出土している。器形の分かるものはない。

所見 「八」字状の掘り込みのある柄部の壁の立ち上がりがはっきりしないため、柄部の壁外の伸び方も不明である。「八」字状の溝の南側の P_{12} は、位置関係から柄部に伴うものと考えられる。ピット内からの遺物の出土はない。覆土中からは縄文時代前期後半と中期後半の土器細片が出土しているが、多くはない。床上出土の土器もない。住居廃絶後、遺物の投棄もなく、土器片の流れ込みも少なく、自然堆積したものであろう。本跡の時期は、遺物の流れ込みから判断して縄文時代中期後半以降である。



第34図 第19号住居跡実測図

第15号住居跡 (第35図)

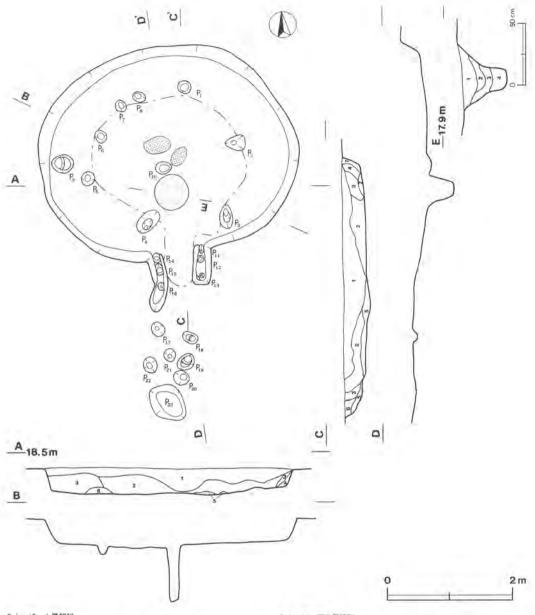
位置 K11fg区。

規模と平面形 長径4.16m・短径3.34m, 柄部長2.4m・幅0.5mの柄鏡形。

主軸方向 N-2°-E。

壁 壁高38cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。ローム質の壁でしっかりしている。

床 炉を中心に柱穴の内側と柄部がよく踏み締められている。柄部は16°の緩やかな傾斜を持つスロープで、床に続いている。床は平坦である。



S. (-15 土層解脱

- 1 にぶい褐色 ローム小ブロック多量、炭化粒子少量
- 2. 褐 色 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子中量
- 3 褐 色 ローム粒子多量,炭化粒子微量
- 4 明 褐 色 褐色土ブロック中量, 炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量,炭化粒子・炭化材細片中量
- 6 暗 褐 色 極暗褐色土ブロック・炭化粒子中量
- 7 明 褐 色 焼土粒子少量
- 8 極 勝 褐 色 ローム粒子少量

S 1 一15 炉土服解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック多量、焼土粒子・焼土小ブロック・炭 化粒子中量
- 2 暗 赤 褐 色 统土粒子、炭化材細片多量
- 3 橙 色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 4 極暗赤褐色 炭化材細片・炭化粒子多量、灰・焼土粒子少量

第35図 第15号住居跡実測図

ピット 23か所。 $P_1 \cdot P_5 \sim P_8$ は径約20cmで深さが $9 \sim 20$ cm, $P_2 \sim P_4$ は長径30~42cmの不整楕円形で深さが $11 \sim 20$ cmあり,規模及び配列から主柱穴と考えられる。 P_9 は補助柱穴と考えられる。 P_{10} は深さ84cmで住居跡の中心に位置する。柱穴とするには炉に近接しており,性格は不明である。 $P_{11} \sim P_{16}$ は柄部の両脇に 3 対で掘り込まれており,径約10cmの円形・深さも10cm程で,柄部(出入り口部)の施設に伴うピットである。 $P_{17} \sim P_{24}$ は柄部(溝を有する部分)を通る主軸から 20° 折れ曲がって, $P_{17} \triangleright P_{18} \cdot P_{20} \triangleright P_{22}$ が対に, P_{21} はその中間に掘り込まれている。径は約20cmのほぼ円形で深さは $11 \sim 16$ cmである。 P_{23} もやや離れた位置に掘り込まれた土坑状のピットであるが,位置関係から柄部の出入り口施設に伴うピットと考えられる。

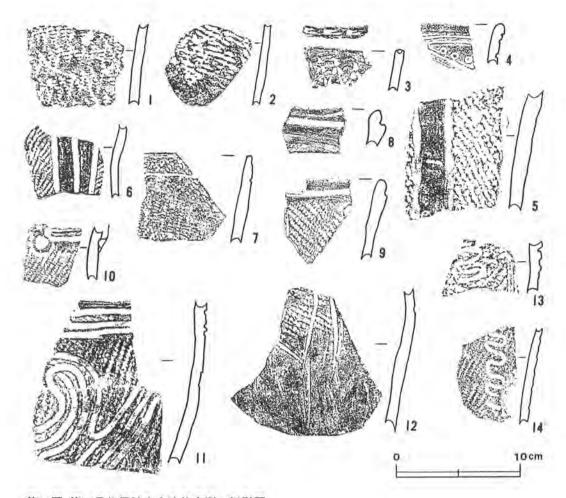
炉 中央部からやや南寄りに付設されている。径約52cmの円形で70cm程床を掘り込んでおり、あたかも土器埋設炉の掘り方のような地床炉である。4層に分層される炉内覆土の中・下層には、炭化材細片・やや大きめの焼土粒子・灰も多い。炭化した胡桃片もわずかに見られた。炉床は熱を受けて赤くなっている。

覆土 7層に分層される。焼土粒子や炭化粒子を含む $4 \cdot 5 \cdot 7$ 層が壁際に堆積し、さらにローム質の 8層が流れ込んでいる。 5 層は壁際から床中央まで広く覆っており、暗褐色の 6 層とともに起伏のある土層となっている。褐色の $3 \cdot 2$ 層は焼土粒子の有無で分層した。やや起伏のある 111 11

遺物 炉の周辺の床上から縄文式土器片が10数片出土しているが、いずれも小破片で器形の分かる土器はない。多くは $1 \cdot 2$ 層中から出土しているが、後期前半の土器片に混じって早・前期の土器片も見られる。

所見 柄鏡形住居跡の柄部は、ピットの配列から判断して途中で折れ曲がった逆T字型が考えられる。また、柄部の入り口に当たる部分に、長径65cm・短径50cmの楕円形をした浅い土坑状のピットが位置しており、住居に伴う施設と考えられる。本跡の時期は、住居の形態及び出土遺物から縄文時代後期前半(堀之内1式期)である。

第36図 $1\sim14$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。 $1\sim3$ はアナダラ属の貝殻腹縁文で、3 は口唇上にも半截竹管による刺突文が巡っている。 4 は無文地に沈線文と竹管文が施されている。いずれも前期後半(浮島 $I\sim II$ 式)の時期である。 $5\cdot 6$ は中期後半(加曽利 E $II\sim III$ 式)の胴部片で、懸垂文が施されている。 $7\sim14$ は本跡に伴うものである。7 は口縁部片で単節縄文 L R 地文に、口縁下に 1 条の沈線が巡る。 $8\sim10$ は肥厚した口縁直下に沈線が巡るグループである。10 は沈線上に 8 字状の貼付文がある。11 は胴部片で縄文地文に $3\sim4$ 本単位の沈線によるモチーフが描かれている。12 は胴部下半の破片で、やはり縄文地文に沈線が垂下する。 $13\cdot14$ も胴部片で縄文地文に蕨手文・蛇行沈線が垂下する。



第36図 第15号住居跡出土遺物実測·拓影図

第22号住居跡(第37図)

位置 L12c2区。

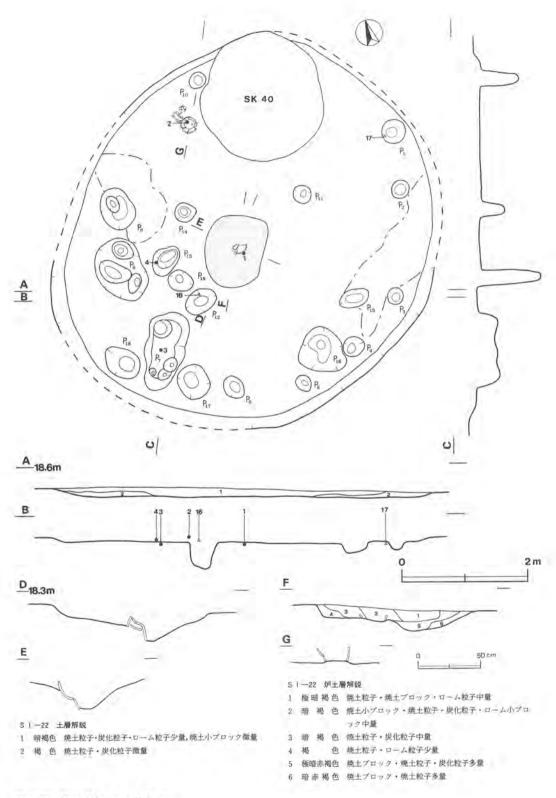
重複関係 第40号土坑によって北側部分が掘り込まれている。

規模と平面形 長径 [6.54cm]・短径 [5.90cm] の [楕円形]。

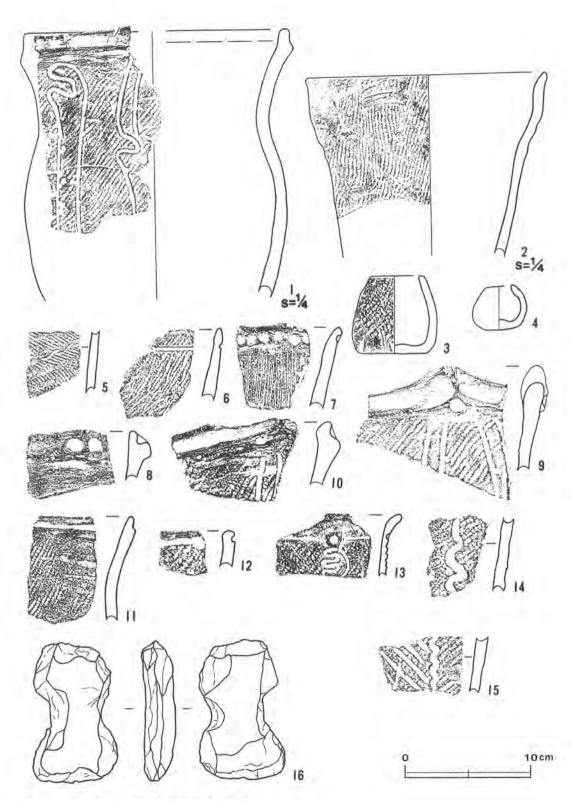
壁 南東部及び西部の一部を除いて、立ち上がりは確認できなかった。壁高は残存部で $10\sim18$ cm で、緩く外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。南東部と北西部の壁際に踏み締められた部分がある。

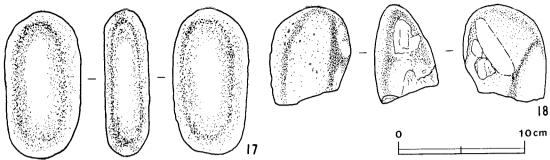
ピット 19か所。 $P_1 \sim P_6 \cdot P_8 \sim P_{10}$ は径23~40cmのほぼ円形・深さ11~60cmで、規模及び配列から主柱穴と考えられる。位置関係から第40号土坑によって掘りこまれた部分にも柱穴があった可能性がある。 $P_{11} \sim P_{14}$ は炉を囲むように掘られたピットで、長径28~52cm・短径26~38cmで深さが39~40 cmあり、柱穴と考えられる。 $P_{17} \cdot P_{18}$ は住居の南東部壁際で P_7 を挟んで対称の位置にある。長径52~60 cm・短径46~50cmの楕円形で深さ100~114cmである。 P_7 は長径130cm・短径66cmの楕円形で、中に



第37図 第22号住居跡実測図



第38図 第22号住居跡出土遺物実測。拓影図(1)



第39図 第22号住居跡出土遺物実測図(2)

小ピットが4か所あり、北側の1か所は位置から主柱穴とも考えられる。

炉 土器片囲い炉で、中央に付設されている。長径128cm・短径92cmの不整楕円形で、床を30cm程 皿状に掘りくぼめている。炉内の南東部に、土器片が炉を囲うように半周分埋め込まれている。 土器内面は二次焼成が甚だしい。炉床は焼けて赤くなっているが、硬くはない。

覆土 3層に分層される。 $2 \cdot 3$ 層の褐色土が壁際から床全体に薄く堆積してのち,1層の暗褐色土が堆積している。3層中にはロームブロックがまだら状に含まれており,2層との分層の判断基準にした。

遺物 炉に1の深鉢片が炉体土器として使用されていた。3のミニチュア土器は P_7 の覆土中から,また4のミニチュア土器は P_{13} の覆土中から出土している。2の深鉢は欠損品であるが,北壁寄りから正位の状態で出土した。炉の南西側床上からは16の打製石斧が,また,17と18の磨石が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は,炉の土器から判断して縄文時代後期前半(堀之内1式期)である。 P_7 を挟むようにピットが2か所あり,出入り口施設に伴うものとも考えられる。そうであるとすれば,壁が下端のみで,立ち上がり部分が不明であるが,柄鏡形になる可能性も考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第38図 l	深 鉢 縄文式土器	A [29.0] B (28.3)	胴部中位から口縁部にかけての破片。頸部からやや球胴形の胴部には,縄文(単節LRの横回転)地文に力強い 沈線によって蕨手文が描かれている。蕨手文はモチーフ の違う2種が交互に展開するものである。口縁部は無文 で,断面三角形の隆帯によって区画されている。口縁部 には小突起が付くと思われる。	白色細砂粒,スコリア, 繊維 橙色 普通	P70 PL35 20% 土器片囲い炉
2	深鉢縄文式土器	A [25.8] B (19.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部から外傾して立ち上がる。全面に縄文(単節LRの横回転)を雑に施文している。口縁部には雑なナデが施されている。内面は丁寧なミガキである。	長石, スコリア にぶい橙色 普通	P71 20%
3	ミニチュア土器	B 6.1	ぐい飲み型の完形ミニチュア土器。平底で底部外面が一部磨かれている。底部から内傾気味に立ち上がる。胴部 下半に最大径を持ち,全面に縄文(単節LRの横回転) が施されている。口唇部は面取りされている。	細砂粒少量,スコリア 明赤褐色 普通	P72 PL35 100% 内面黑色
4	ミニチュア 土器	В 3.6	3に比べ小型のミニチュア土器。底部と胴部の境ははっきりしない。底部から内傾気味に立ち上がり、胴部下半に最大径を持つ。施文はない。	白色細砂粒,スコリア にぶい黄橙色 普通	P73 PL35

第38図5~15は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。5は前期末(粟島台式)の時期で,縄文地文に結節文が施された胴部片である。6~15は1~4とともに本跡に伴うものである。6は口縁部片で縄文地文に沈線が口縁部に巡る。7~12も口縁部片である。7は口縁直下に円形押圧文が巡り,胴部は縦位の条線文である。8は小波状の口縁部に2個1対の円形刺突文が施されている。9も小波状で口縁直下に太めの凹線が巡り,波頂下の円形押圧文から単節縄文LR地文上に2本単位の沈線が弧状に垂下する。10も同様である。11・12は口縁直下に細い凹線が巡る。13は外反する口縁部片で,無文の口縁部は沈線によって区画されている。沈線上の円形刺突文下に蕨手文が垂下する。地文は単節縄文LRである。14・15は胴部片で,14は縄文地文に蛇行沈線、15も蛇行沈線と斜位の沈線が施されている。

第22号住居跡出土石製品一覧表

図版番号		器	利	afr	挝	ž		量		Pt	
四級借与	ńù		13	里	長さ(cm)	長さ(cm) 幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	- 石 質	備考	
第38図 16	打	製	石	斧	11.3	6.8	2.6	228.2	ホルンフェルス	Q32, 床上 PL67	
第39図 17	磨			石	11.9	6.1	3.7	391.4	安山岩	Q33, 東壁際 2 層中 PL69	
18	磨			石	(7.9)	6.5	5.1	(356.2)	安山岩	Q34, 一部欠損, 覆土中 PL69	

第23号住居跡 (第40図)

位置 K11j₇区。

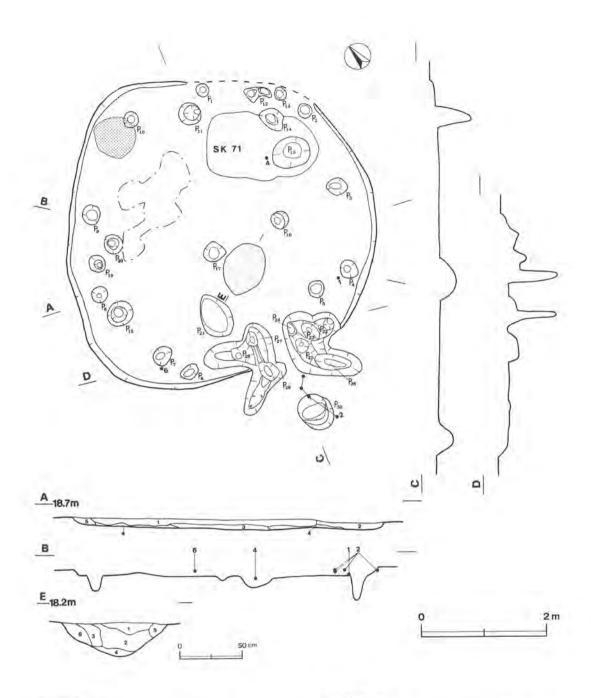
重複関係 第71号土坑 (炉穴) が床面に確認されている。

規模と平面形 長径5.28m・短径4.96m, 住居跡外に70cm程柄部が延びる柄鏡形。柄部は「八」字形の溝によって区画される。その先端中央にピットが位置する。

主軸方向 N−16°−E。

壁 壁高 $9 \sim 14$ cmで,外傾して立ち上がっている。北東壁の一部は立ち上がりが確認できなかった。 **床** 平坦である。炉の北西に,踏み締められた部分がある。その上を灰白色粘土が少し覆っていた。

ピット 30か所。 $P_1 \sim P_{10}$ は径20~30cmのほぼ円形で深さが10~41cmであり,規模及び配列から壁際に巡る主柱穴と考えられる。 $P_{11} \sim P_{14} \cdot P_{18} \sim P_{20}$ も径20~38cmの円形及び不整楕円形で,深さも $11 \sim 58$ cmと規模にばらつきがあるが,主柱穴の周囲の小ピットであり,補助柱穴と考えられる。 $P_{16} \cdot P_{17}$ は径30~38cmの不整円形で深さが $17 \sim 27$ cmあり,炉に近接した位置であるが性格は不明である。 P_{21} は左側柄部の溝と炉の間に位置し,長径78cm・短径52cmの楕円形で深さ12cmであるが,性格は不明である。柄部の「八」字形の溝底には, $P_{22} \sim P_{26} \cdot P_{27} \sim P_{29}$ の小ピットが掘られている。出入り口施設に伴う柱穴と考えられる。 P_{30} は径62cmのほぼ円形で深さが28cmあり,位置関係から柄部の出入り口施設に伴うものと考えられる。



- 51-23 土層解説
 - 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量, 焼土粒子少量
 - 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
 - 3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量、炭化粒子少量
 - 4 明 楊 色 焼土粒子・炭化粒子少量,ロームブロック微量
 - 5 暗 褐 色 炭化粒子・炭化材細片多量、焼土粒子・ローム粒子少量
- S 1 -23 炉土層解脱
- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子酸量
- 2 暗 赤 褐 色 焼土小ブロック少量、廃土粒子多量、炭化粒子微量
- 3 赤 褐 色 焼土ブロック・焼土粒子多量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・ロームブロック中量
- 5 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、焼土粒子多量
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子少量

第40図 第23号住居跡実測図

炉 中央からやや柄部寄りに付設されている。長径84cm・短径68cmの楕円形で,床を28cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっている。

覆土 5層に分層される。炭化材細片・炭化粒子を多く含む 5層が壁際に堆積し、さらにロームブロックを含む 4層が入っている。 3層は炉上の土層で、焼土粒子・焼土ブロックが多く含まれる。その上に 1・2層が流れ込んでいる。

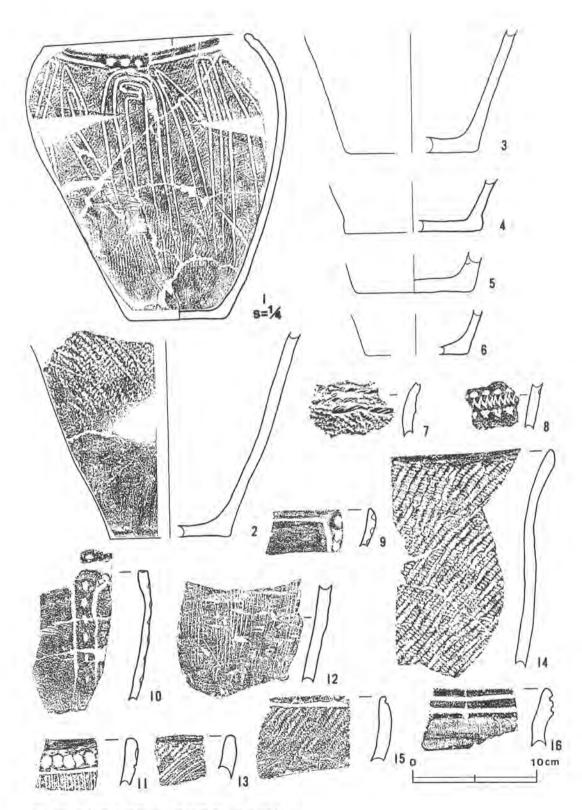
遺物 各層から多量の縄文式土器片が出土している。 1 層中からは縄文時代前期後半の土器片も出土しているが, 1 層から床上にかけての大半は縄文時代後期前半の土器である。 1 の深鉢は 2 層中・ $2\sim6$ の底部は 1 層中からの出土である。また,覆土中から31の石鏃, $32\sim35$ の磨石・37 の凹石,36の磨製石斧も出土している。

所見 「八」字形に開く柄部を持つ柄鏡形住居跡で、平面形は第15号住居跡に類似する。炉の位置 関係も同様である。しかし、柄部のピット列は本跡には見られない。本跡の時期は、住居の形態 及び出土遺物から縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられる。

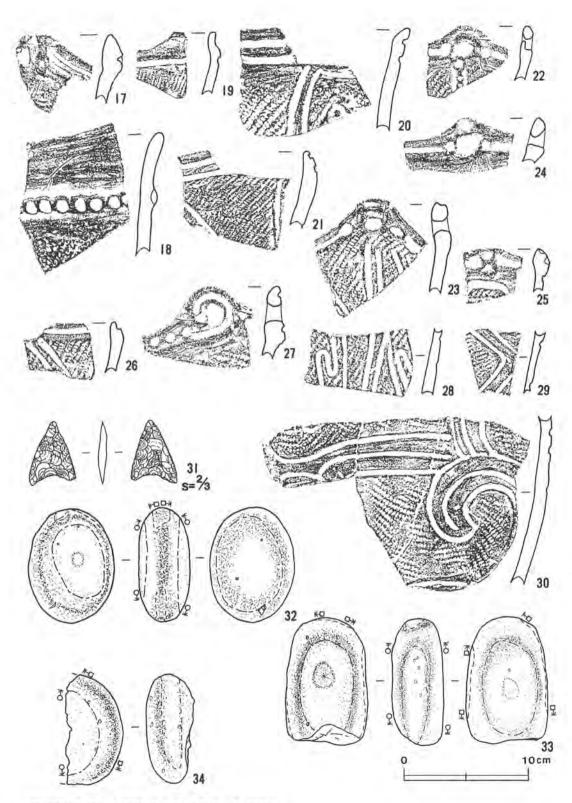
第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備者	ž
第41図	深鉢縄文式土器	A 21.6 B 30.6 C 10.3	底部から口縁部にかけて半分欠けている。底部は平底。 胴部は底部から外傾して立ち上がり,胴上半部から口縁 部にかけて内彎する。胴部には縄文(単節LRの横回転) 地文に、3本及び2本の沈線による5単位構成の蕨手文・ 矢印状文が施されている。胴下半部は無文。幅の狭い口 縁部は無文帯で,横に3個1単位の円形刺突文をつなぐ ように、直下に1条の沈線を巡らす。	長石,雲母 にぶい橙色 普通	P74 50%	PL36
2	深 鉢 縄文式土器	B (15.8) C 9.6	底部から胴下半部にかけての破片。平底。胴部は底部から外傾して立ち上がる。胴下半部は縄文施文後のナデで 無文,上半に縄文(単節RLの横回転)を施文している。	長石, スコリア 橙色 普通	P75 40%	PL35
3	深 鉢 縄文式土器		底部から胴上半部にかけての破片。平底で,胴部は底部 から外傾して立ち上がる。胴部は縦位のナデで施文は見 られない。	白色細砂粒,スコリア 明赤褐色 普通	P 76 20%	PL35
4	深 鉢 縄文式土器	B (4.0) C [11.0]	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。底部はやや張り出す平底で,胴部は外傾して立ち上がる。施文は見られない。	長石,石英,雲母 赤褐色 普通	P77 10% 砂粒は山砂か	
5	深 鉢 縄文式土器	B (2.5) C 9.3	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。底部は平底で, 胴部は外傾して立ち上がる。 施文は見られない。	細砂粒,スコリア 橙色 普通	P78 5%	
6	深 鉢 縄文式土器	B (3.3) C [8.0]	底部から胴の立ち上がりにかけての破片。底部は平底で、 胴部は外傾して立ち上がる。 施文は見られない。	白色細砂粒多量 橙色 普通	P79 5%	

第41・42図 7~30は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。 7 は縄文地文にキザミが施された浮線が貼付されており, 8 は無文地に貝殻波状文が施されている。いずれも胴部片で前期後半(諸磯 \mathbf{b} ・浮島 \mathbf{H} 式)の時期である。 $\mathbf{9}$ ~30が $\mathbf{1}$ ~ $\mathbf{6}$ とともに本跡に伴うものと考えられる。 $\mathbf{9}$ ・10は無文地に口縁部を巡る沈線が垂下し,沈線間には刺突列点文が施されている。 $\mathbf{10}$ は口唇上にも刺突文が見える。 $\mathbf{11}$ は沈線で区画された口縁部に円形押圧文が巡り,胴部は縦位の

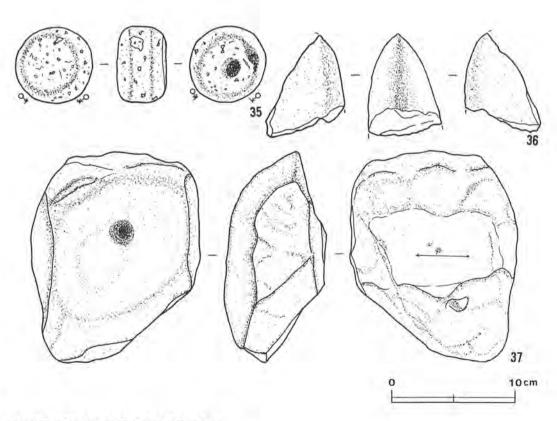


第41図 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第42図 第23号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)

条線文である。12も縦位の条線文が施された胴部片である。13は縄文地文に斜位に条線が施された口縁部片である。14は単節縄文LRのみの施文である。15は縄文(前々段多条)地文に、口縁直下に1本の沈線が巡る。16・17は口縁直下に2本の沈線が巡る。18は円形刺突が施された隆線によって幅広の口縁部が区画されている。隆線下は単節縄文LRである。19は沈線によって無文の口縁部が区画されており、胴部は単節縄文LRである。20は口縁部に2本の太沈線が巡る。胴部は縄文地文に沈線によるモチーフが描かれている。21も同様である。22~24は波頂部に円孔と、それを挟むように口縁直下に巡る沈線に円形刺突文が見られる。22にはキザミの付いた隆帯が垂下する。23は単節縄文RLに沈線によるモチーフが描かれている。25は口縁直下に沈線が巡り、その上に「8」字状貼付文があり、沈線区画内は縄文である。26も口縁直下に沈線が巡り、胴部は縄文地文に沈線によるモチーフが描かれている。27は小波状の口縁部に円孔があり、それを囲むように逆C字文が描かれている。口縁部には円形押圧文が巡り、胴部は単節縄文LRである。28・29は縄文地文に沈線によってモチーフが描かれている。30は3本単位の沈線によって蔓状のモチーフが描かれている。沈線内は無文であり、綱取式の影響がうかがえる。



第43図 第23号住居跡出土遺物実測図(3)

第23号住居跡出土石製品一覧表

EMILE ME E			BLD .	506		沒	Ę		量	石質	備考	
図版番号			器	種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		''' '' '' '' '' '' '' '' '' '' '' '' ''	
第42図	31	石			鏃	2.5	1.9	0.4	1.3	黒曜石	Q35, 1層中	PL66
	32	磨			石	9.3	7.0	4.2	370.1	安山岩	Q36, 1層中	PL69
	34	磨			石	8.8	(4.6)	3.8	(144.4)	安山岩	Q37, 一部欠損, 1層中	
	33	磨			石	(10.2)	6.6	4.1	(411.0)	安山岩	Q38, 凹石兼用, 一部欠損 覆土中	PL69
第43図	36	磨	製	石	斧	(8.1)	(6.5)	6.0	(280.9)	凝灰岩	Q39, 破片, 覆土中	
	37	凹			石	(22.5)	(18.2)	10.9	(5547.0)	安山岩	Q40, 石皿兼用, 一部欠損	PL68
	35	磨			石	6.2	6.2	4.1	214.3	安山岩	Q191, 1層中	

第37号住居跡 (第44図)

位置 K11i₅区。

重複関係 第8号住居跡によって南部を掘りこまれている。また**,**第58・59・60・62・68号土坑の掘り込みが住居跡内に認められる。

規模と平面形 長径 [6.38m]・短径 [5.66m] の [不整楕円形]。

壁 立ち上がりを確認することができなかった。当初、褐色の確認面は遺物包含層と理解し、土 坑調査後、包含層遺物の取り上げを目的に掘り下げた。ピット群・炉跡・小さな貝ブロックの存 在から住居跡と判断した。しかし、既に土層セクションは取れる状態ではなく、また、床も軟弱 で住居跡外の土との判別が難しかった。

床 平坦であるが、軟弱である。

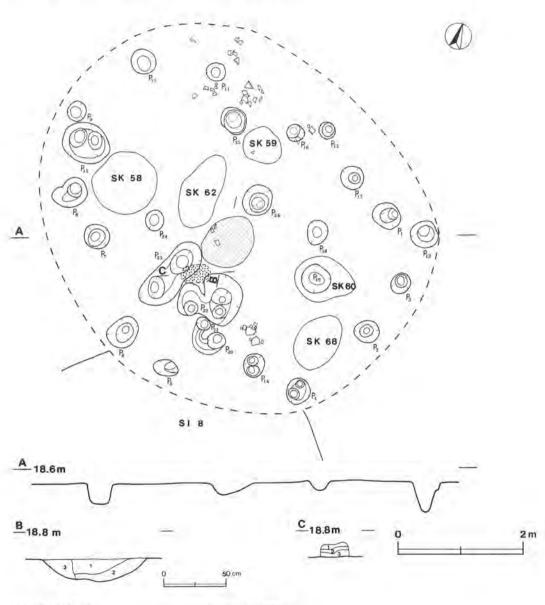
ピット 26か所。そのうち, P_{19} は第60号土坑によって途中まで掘り込まれている。 $P_{22} \cdot P_{23}$ は土坑状の不整形なピットで,さらに中に小ピットがある。 P_{15} の長径80cm・短径62cmのピット中にも小ピットがある。 $P_4 \cdot P_{14}$ も長径40cm・短径35cm程の楕円形ピットで,中に小ピットが見られる。規模及び配列から $P_1 \sim P_{12}$ が主柱穴と考えられる。径は26~43cmの不整円形で,深さは22~59cmである。 $P_{14} \sim P_{17}$ は位置関係から補助柱穴と考えられる。 $P_{18} \sim P_{26}$ は炉を囲むように位置しているが,性格は不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径94cm・短径72cmの楕円形で、床を15cm掘り込んで地床炉としている。炉床は火熱で硬くなっている。

遺物 炉の南西部にヤマトシジミを主体にハマグリ・サルボウ・アカニシなどをわずかに含む混土貝層の小ブロックが,床から15cm程浮いた状態で確認された。貝層中に縄文式土器細片(堀之内式)が2点含まれていた。土器片はそれほど多くはなく,炉の西側及び P_{12} ・ P_{13} の周辺を中心に床上から出土している。1の深鉢は一部欠損しているが, P_{5} の北東側からつぶれた状態で出土している。 $2\sim4$ の深鉢,13の石錐と14の磨石は覆土中の出土である。

所見 本跡は、覆土中及び床上から縄文時代後期前半の土器が早・前期の土器片と共に出土しているので、時期は後期前半頃であろう。本跡の南側に、ヤマトシジミを主体とする縄文時代後期

前半(堀之内1式期)の土坑内貝塚(第57号土坑)が位置することから、住居跡内の貝の小ブロックとの関連が考えられる。貝ブロックからは獣骨魚骨等は検出されなかった。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と組成比は表4に、また、ヤマトシジミについて100個を無作為に抽出して、 競長・ 殻高をグラフ(第45図)で示した。



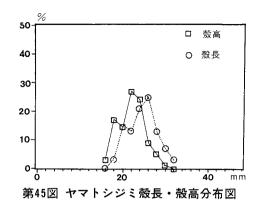
- S-1-37 炉土層解説
- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量
- 2 赤褐色 焼土プロック・焼土粒子多量
- 3 褐 色 焼土粒子微量,

- S 1-37 貝土層解説
- 1 混土貝屬 ヤマトシジミ主体でハマグリ・アカニシに炭化物少量
- 2 混貝土層 焼土粒子を含む暗褐色土でヤマトンジミ・サルボウツ量
- 3 混員土圏 ヤマトシジミ主体で優小巻貝にローム粒子多量, 焼土粒

第44図 第37号住居跡実測図

表 4 第37号住居跡内貝塚動植物遺存体組成表

貝種名	総重量(g)	組成比(%)
ヤマトシジミ	1307.5	97.57
ハマグリ	2.5	0.19
サルボウ	11.2	0.84
アカニシ	18.7	1.4
極小巻貝	1.4	0.2
炭化物	0	0
合計	1339.9	100



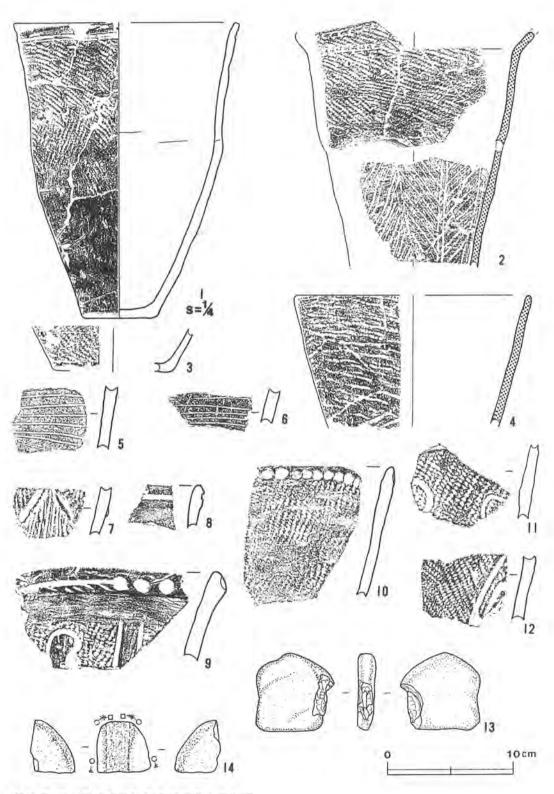
第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第46図	深 鉢 縄文式土器	A [24.0] B 31.8 C 8.1	胴上半部から口縁部にかけて一部欠損。平底で胴部は外傾して立ち上がり、頸部でわずかにくびれる。口縁部は外反して立ち上がる。胴下半部は緩ヘラミガキ、上半部から口縁部は縄文(単節LR縦回転で一部横回転)を施文し、口縁部に半載竹管状工具による横位の沈線が1条巡る。	長石, チャート, スコリア にぶい橙色 普通	P44 PL36 60%
2	深 鉢 縄文式土器	A [30.2] B (25.0)	胴上半部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部で更に強く外傾する。胴下半部は無文地に半截竹管状工具による肋骨文(縦沈線→右下がり沈線→左下がり沈線の順)、上半部から口縁部にかけては縄文(単節LRの縦回転)を施文している。口縁部は二列の半截竹管状工具による爪形文によって区画される。	白色細砂粒,繊維 明褐色 普通	P190 PL36 40% 内面繊維脱痕有り。
3	深 鉢 縄文式土器	B (3.5) C [9.7]	底部から胴下半部にかけての破片。底部は平底でヘラミガキ。胴部は緩く外傾して立ち上がり,縄文(単節RLの横回転)を施文している。内面は横位のナデ。	細砂粒多量 明赤褐色 普通	P192 PL36 5 %
4	深 鉢 縄文式土器	A [19.0] B (10.3)	胴部中位から口縁部にかけての破片。胴部から外傾して立ち上がる。施文は縄文(雑な単軸絡条体でLとRの縄)のみである。内面ナデ。	細砂粒,繊維少量 暗褐色 普通	P 191 PL36 10%

第46図5~12は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。5・6は横沈線が施された早期中葉(田戸下層式)の胴部片である。7は条痕地文上に微隆起線で区画し、区画内に沈線を充填しており、早期後半(野島式)の時期である。1・3・8~12は本跡に伴うものである。貝ブロックから出土した8は、肥厚する口縁直下に沈線を巡らしている。9は沈線上に円形押圧文を施している。胴部は縄文単節LR地文に沈線によってモチーフを描き、沈線間を磨消している。10は口縁部に円形押圧文を巡らし、胴部は単節縄文LRの横回転である。11・12は胴部片で、縄文地文に沈線によるモチーフを描いている。11は単節縄文LR、12は前々段多条の縄文である。2・4は前期前半(黒浜式)の時期である。

第37号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	ä	-		量	石質	備考	PI 69
区/灰街 与	70-0	浬	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	14 貝	VH 15	
第46図 14	磨	石	(4.1)	(3.8)	(4.3)	(65.9)	半花崗岩	Q103,破片,覆土中	
13	石	錘	6.3	6.3	1.4	75.1	ホルンフェルス	Q14,覆土中	PL69



第46図 第37号住居跡出土遺物実測。拓影図

(A地区) 弥生時代

第10号住居跡 (第47図)

位置 J11i。区。

重複関係 第11号住居跡の北西側を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.66m・短軸3.12mの隅丸長方形。

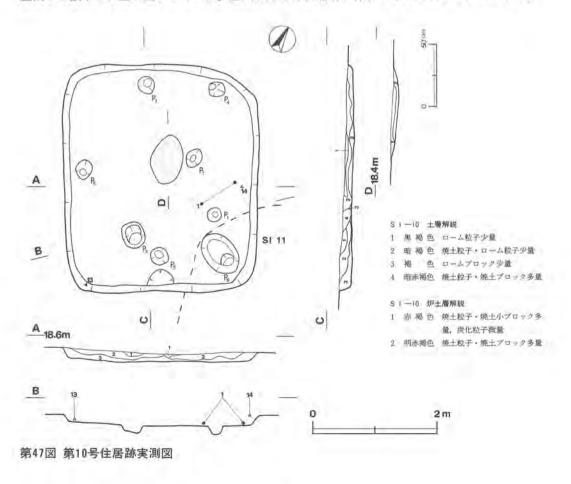
長軸方向 N-30°-W。

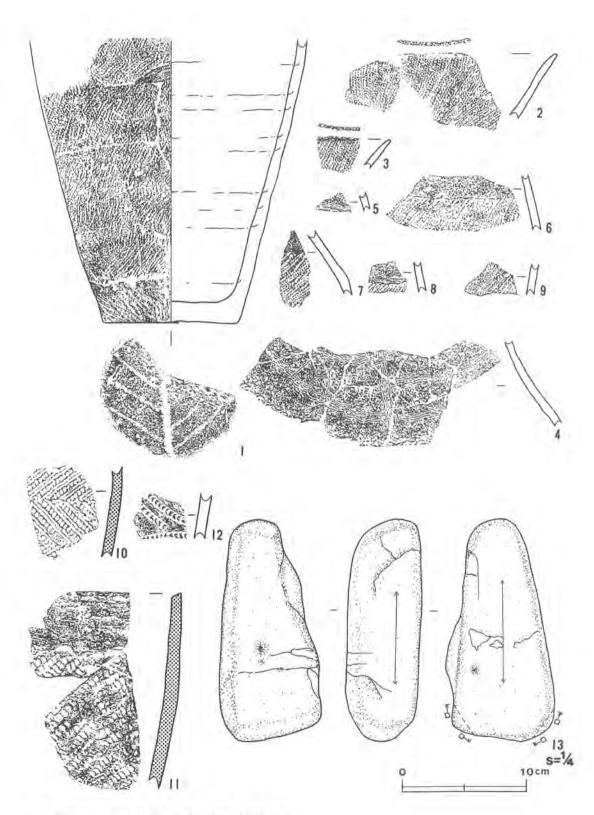
壁 壁高12~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 8 か所。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ は径22~30cmのほぼ円形で深さは16~47cm, P_2 は長径42cm \cdot 短径36 cmの楕円形で深さ21cmであり,規模 \cdot 配列から主柱穴と考えられる。 P_5 は径30cm程の円形で深さ31cmであり,位置から判断して出入り口施設に伴うピットであろう。 $P_6 \cdot P_7$ は径25cm程の円形で深さ深さ18~22cmであるが,性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径72cm・短径46cmの楕円形で、深さ10cmの平らな 底面から緩やかに立ち上がっている。底面に第11号住居跡に伴うと考えられるピットがある。





第48図 第10号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)

炉 中央部に付設されている。長径80cm・短径50cmの楕円形で,床を10cm程掘りくi3のた地床炉である。炉床は,焼けて硬くなっている。

覆土 4層に分層される。ロームブロックを含む 3層が壁際から薄く床全体に堆積してのち、凹 レンズ状の窪地に焼土粒子を含む暗褐色の 2層・黒褐色の 1層が堆積している。 4層は焼土ブロ ック・焼土粒子を含む柔らかい土であり、後世の掘り込みであろう。

遺物 炉の北側の壁際床上から、14の敲石といっしょに横位の状態で1の壺が出土している。13 の砥石は南東コーナー際床上からの出土である。弥生式土器片は3層中及び床上から多く出土している。縄文式土器片は1・2層中からの出土が多い。

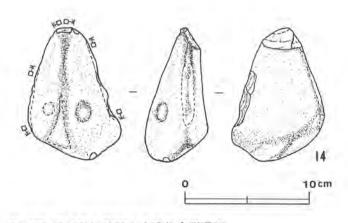
所見 本跡の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。遺物が少ないが、住居廃絶時に使用可能なものは運び出したのであろう。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特敵及び女様	胎土・色調・焼成	備考
			底部から胴部にかけての破片。底部は平底で木葉痕を有する。胴部は長胴形で、底部から外傾して立ち上がる。 胴部には付加条1種(付加1条)の縄文が横回転で施されているが、羽状横成はとらない。	浅黄橙色	P51 PL36 50% 内面に輪積み痕。

第48図2~9は床上及び覆土下層から出土した弥生式土器片で、1とともに本跡に伴うものである。2・3は素縁の口縁部片で、付加条一種付加2条の縄文が施文されており、同一個体である。4は頸部片で、5本櫛歯の沈線による縦区画間に同一工具による間隔の粗い波状文が充填されている。下端にわずかに縄文が見える。5は4と同一個体であろう。6~8は頸部から胴部にかけての破片で、付加条一種付加2条の縄文が施文されている。9は胴部片で、付加条一種付加2条の縄文である。10~12は覆土中出土の縄文式土器片である。10は2種類の直前段合撚の羽状

縄文である。11は口縁部無文で、胴部に単節縄文を施文しており、いずれも前期前半(関山・黒浜式)の時期であり、第7図9とは同一個体であるう。12は無文地に押引き爪形文が施された胴部片で、前期後半(浮島【式)の時期であるう。



第49図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	60	種	注			量		質	備 考 Q20,床上 PL68 Q21,床上 PL68		
凶成番亏	器	但	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	4	貝	VHI	75	
第48図 13	砥	石	23.9	10.9	8.0	2733.7	砂	岩	Q20,床上		PL68
第49図 14	敲	石	10.6	7.6	4.6	316.0	砂	岩	Q21,床上		PL68

第8号住居跡(第50図)

位置 K11j₅区。

重複関係 本跡は第37号住居跡の南東部分と第25号住居跡の北東部分を掘り込んでいる。両住居跡とも縄文時代であり、前後関係は、はっきりしている。

規模と平面形 長軸5.15m・短軸4.90mの方形。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高36~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

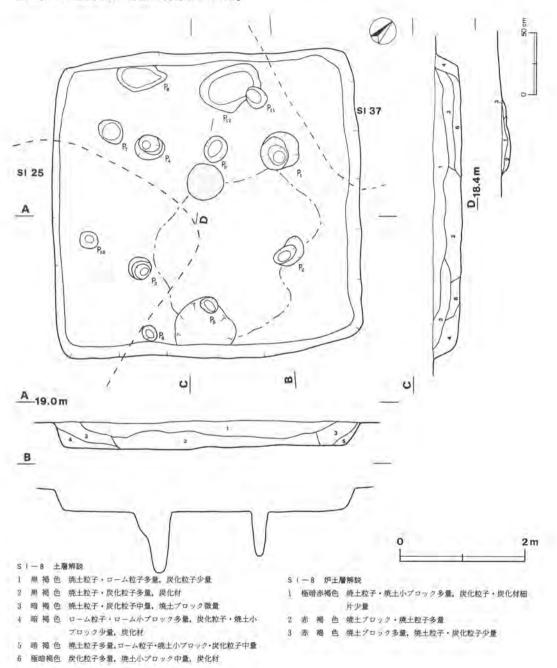
床 平坦である。炉と $P_1 \sim P_3 \cdot P_5$ に囲まれた範囲は、よく踏み締められている。

ピット 12か所。 P_1 は長径52cm・短径30cmの不整円形で深さ71cm, P_2 は径38cm程の円形で深さ66 cm, P_3 は長径50cm・短径40cmで深さ73cm, P_4 は径60cm程の不整円形で深さ99cmであり,配置・規模から主柱穴と考えられる。 P_5 は長径28cm・短径24cmの楕円形で深さが13cmあり,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 P_6 ~ P_9 は性格不明である。 P_{11} は長径37cm・短径30cmの楕円形で深さが11cmあり, P_{12} を掘り込んでいる。 P_{12} は長径104cm・短径64cmの不整楕円形でやはり深さ11cmである。性格は不明である。

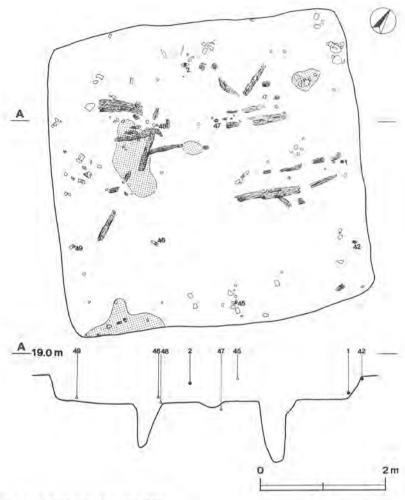
炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。径58cm程の円形で,床を16cm程掘りくぼめて地 床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっているが,硬化したところは見られない。

覆土 6層に分層される。 $5 \cdot 4$ 層が壁際に堆積してから,極暗褐色土の6層が堆積している。 $4 \cdot 5 \cdot 6$ 層には炭化材・炭化粒子・焼土ブロック・焼土粒子が多く含まれている。3層も暗褐色土で,ソフトロームブロック・炭化粒子・焼土粒子が含まれている。 $2 \cdot 1$ 層は黒褐色土である。2層中にも多量の焼土粒子・炭化粒子が含まれている。土器片も多い。1層は炭化粒子も少なく,しまりのない土である。

遺物 2・3・4・5層中に弥生式土器・土師器片が多く含まれている。また,縄文式土器片も 1層を中心に各層中から出土している。43の土製円板とともに流れ込みであろう。41と42の紡錘 車は北東壁際中央から東寄りにやや離れて,3層中から出土している。2の壺底部は西壁中央寄 り3層中から出土している。1の壺は南東側2層中からの出土である。46の磨製石斧は炉の南東 側2層中から,45の礫石斧・47の磨製石斧・48の磨石・49の敲石などが覆土中から出土している。 図示した弥生式土器片は,2層中及び床上から大半が出土している。 所見 床上から多量の炭化材が出土しており、焼失住居である。本跡の時期は、出土遺物から弥 生時代後期中葉である。器形の分かる土器が少ないのは、住居焼失前に使用可能なものを運び出 した結果であろうか。石器については縄文式土器片とともに流れ込みであろうが、44の石製品は 弥生時代に含められる可能性も残しておく。なお、炭化材(丸材)の一部については樹種同定を 行い、その結果及び考察を付章に示した。



第50図 第8号住居跡実測図

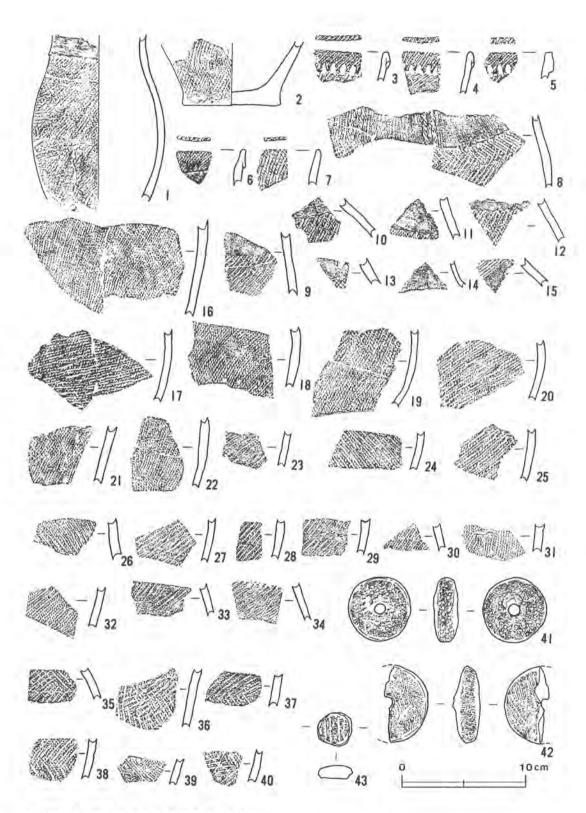


第51図 第8号住居跡遺物出土状況図

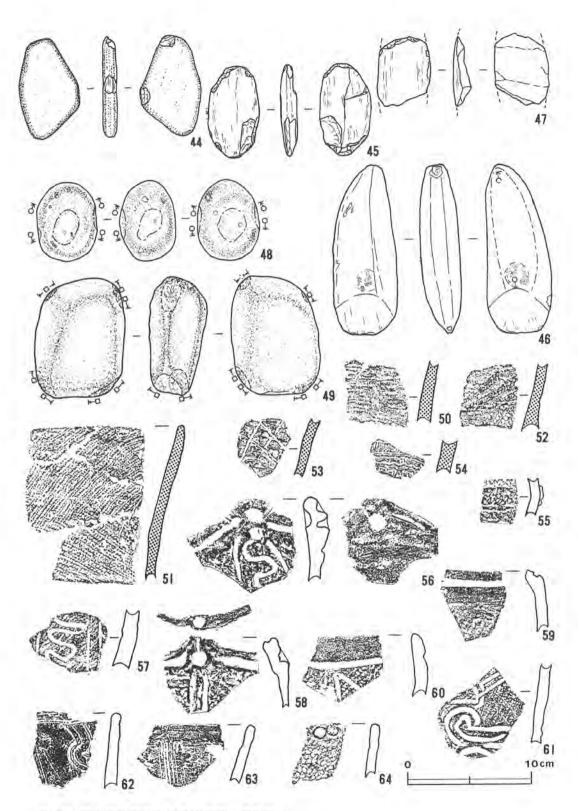
第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第52図	広 口 壺 弥生式土器	B (13.1)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は長胴形で、頸部にかけて内壊して立ち上がる。胴部には付加条1種(付加2条)の縄文が施されているが、羽状構成はとらない。 頸部は無文帯で横位のナデが施されている。熱縄と付加縄はほぼ同じ太さである。	雲母多い, 長石 褐色 普通	P46 PL36 50% 外面スス付着
2	壺 弥生式土器	B (5.0) C [8.0]	底部片。張り出した底部から胴部にかけては外傾して立 ち上がる。胴部には付加条1種(付加1条)の縄文が施 されている。底部木葉痕。	細砂粒 にぶい橙色 普通	P 47 10%

第52・53図3~40は床上及び覆土中出土の弥生式土器片で、1・2とともに本跡に伴うものである。3~5は複合口縁で、口唇上から口縁下まで付加条一種付加2条の縄文を施文し、口縁下端に丸棒状工具による押圧が施されている。6も複合口縁で口唇上から口縁部にかけて軸縄と付



第52図 第8号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)



第53図 第8号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

加縄の太さがあまり変わらない縄文が施文されている。破片では頸部は無文であり、口縁下の押 圧も見られない。7は素縁で口唇上から口縁部にかけて単節縄文LRが施文されている。8は頸 部から胴部上半にかけての破片である。頸部は縦に条痕を施してのち付加条の縄を縦に2条押圧 して区画を作っている。区画内に施文は見られない。胴部は付加条一種付加2条の羽状縄文であ る。9~13も頸部から胴部上半にかけての破片である。破片では頸部は無文で条痕も見られない。 胴部は付加条一種付加2条の縄文を施文しているが、13は単節縄文LRのように見える。14は無 文の頸部片である。15も頸部片であるが、 $6+\alpha$ 本の櫛歯による山形文が施されている。 $16\sim40$ は 胴部片である。16~32は付加条一種付加2条の縄文が施文されている。33・34は7とともに直前 段反撚の縄文である。35~40は付加条一種付加2条の羽状縄文である。50~64は覆土中から出土 した縄文式土器片である。50は早期末の時期で表裏条痕文の胴部片である。51は口縁部から胴部 にかけての破片で直前段合撚の羽状縄文が、52は胴部片で原体圧痕と単節縄文が施文されている。 53は無文地に格子目文,54は撚糸文上にループ文が施された胴部片である。いずれも前期前半(黒 浜式)の時期である。55は前期後半(諸磯b式)の時期で、縄文地文上に縄文を施文した浮線を 貼り付けている。56~63は後期前半(堀之内1式)の時期である。56・57は縄文地文上に蕨手文 が垂下する。58~60は口縁直下に沈線が巡る。61は縄文地文に沈線によるモチーフが描かれた胴 部片で,第42図30とは同系統か。62は流水状の条線文が施されている。63・64は口縁内面に凹線 が巡り,63は5本櫛歯の工具による間隔のあらい条線文,64は口縁直下に押圧を施した紐線が巡 り, 胴部に単節縄文を施文している。後期中葉(加曽利B式)の時期である。

第8号住居跡出土土製品一覧表 (PL65)

図版番号	器 種	法		量 (cm)	孔径	重量	現存率	<u>/</u> #= ≠ z
因从银石	63° (<u>191</u>	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	備考
第52図 41	紡 錘 車	5.0	5.2	2.0	0.9	50.7	100	DP52,北東壁際中央から東寄り
42	紡 錘 車	6.2	(3.6)	2.3	(0,7)	34.4	50	DP53,同上,一部欠担
43	円 板	2.7	2.7	1.0	_	7.6	100	DP54,覆土中

第8号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器程	e.	法		量		T 85	/# . */ /	
四瓜番勺	100 M	E	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備考	
第53図 46	磨製石	斧	13.7	5.2	3.3	377.8	緑泥片岩	Q11, 乳棒状, 2層中	PL67
45	礫石	斧	7.3	4.0	1.3	54.0	結晶片岩	Q12, 刃部以外は磨製, 上層中	PL67
47	磨製石	斧	(5.5)	(4.2)	(1,4)	(43.4)	頁 岩	Q13,破片,上層中	PL67
48	磨	石	6.4	5.0	4.5	162.8	安山岩	Q15, 上層中	PL69
49	敲	石	9.5	7.2	4.4	469.0	砂岩	Q16, 上層中	PL68
44	不明石事	有品	8.0	4.9	1.2	61.3	頁 岩	Q168,穂摘具の可能性あり。	PL69

(A地区) 古墳時代

第1号住居跡(第54·55図)

位置 I12h。区。

規模と平面形 長軸5.50m, 短軸4.62mの長方形。

長軸方向 N-42°-W。

壁 壁高は34~40cmで、外傾して立ち上がっている。壁はローム土でしっかりしている。

床 平坦で,炉の南西側が踏み固められている。壁から $20\sim30$ cm離れて,幅 $25\sim70$ cmの不整形の 溝状の掘り方が,途中切れながら巡っている。深さは $10\sim15$ cmで,凹凸はほとんどない。溝状掘 り方の覆土上面の固さは床と同じである。

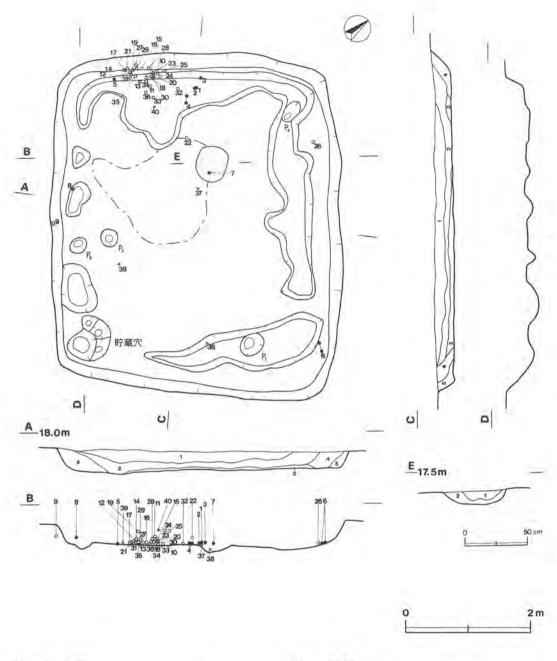
ピット 4 か所。 $P_1 \sim P_4$ は径20 \sim 30cmのほぼ円形で,深さは10 \sim 40cmである。 P_2 は位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ については配列に規則性がなく,性格は不明である。炉 中央部からやや北西壁寄りに付設されている。平面形は長径56cm・短径50cmの楕円形で,床を10cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で硬化している。

貯蔵穴 南壁のコーナー寄りに付設されている。平面形は長径76cm・短径56cmの楕円形で,深さは20cmである。底面は平坦で,外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層される。5層・4層が壁際に堆積してのち, 3層が床を広く覆うように流れ込んでいる。そのうえに2層と腐食土と思われる極暗褐色の1層が厚く堆積している。

遺物 西壁の中央やや南寄りの3・4層中から床上にかけて、土玉26個が流れ込むようにまとまって出土している。また、それらの土玉を囲むように、床上から1の台付甕・3と4の甕・5の小型台付甕が横位の状態で出土している。北壁・南壁寄りからも1個ずつ土玉が出土している。7の器台は炉の直上から横位の状態で出土している。8の器台は南壁際中央床上からつぶれた状態で出土している。北壁際のコーナー寄りからは、2の甕と6の小型台付甕が焼土に混じって壁側に寄り掛かるように出土している。床上から37と39の石鏃・2層中から38の石鏃、また1層中から40の礫石斧が出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の出土状況から焼失住居跡と考えられる。炭化材が少ないのは焼失後、片付けが行なわれたためであろうか。時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。西壁際から出土した26個の土玉の中には、炭化した木片が入っていた。土玉廃棄時に、土玉が細く削られた竹状のもので串刺しされていたことが考えられる(付章参照)。用途については土器との出土状況から、土玉も使って何らかの行為が行われたのち、廃棄されたとも考えられる。床上から出土した石鏃は、縄文式土器片とともに流れ込みと考えられる。溝状掘り方は住居使用時、床と同一レベルに埋土されていたと判断でき、土質の違いによる床の工夫が意図されていたものと考えられる。



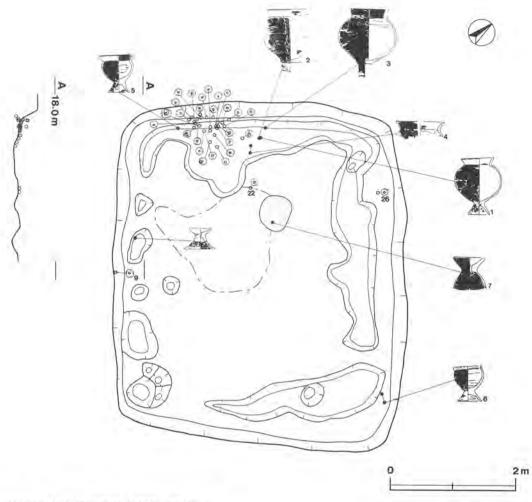
S 1-1 土陽解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子多量、炭化粒子・焼土小ブロック 心器
- 2 褐 色 株土粒子・ローム粒子多量、炭化粒子中量
- 3 明 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐 色 焼土粒子・ローム粒子多量、炭化粒子・焼土小ブロック少量
- 5 明 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量

S1-1 炉土層解脱

- 1 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロッツ多量、炭化粒子少量
- 2 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量

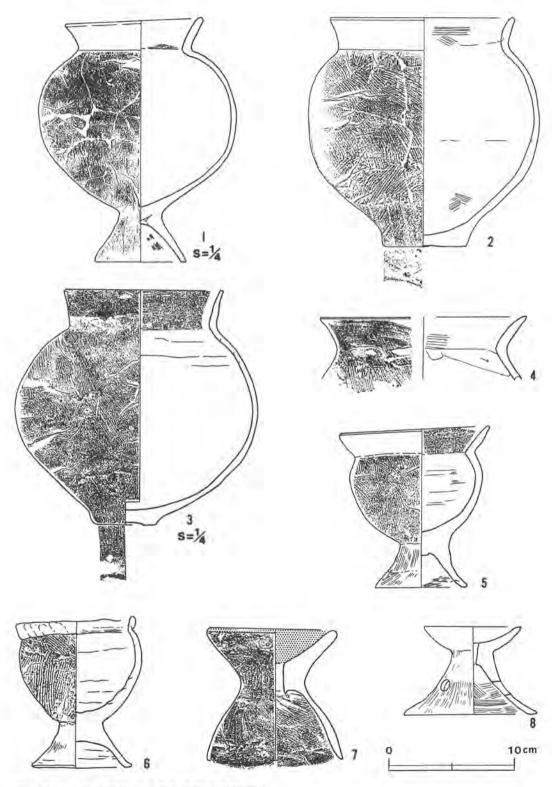
第54図 第1号住居跡実測図



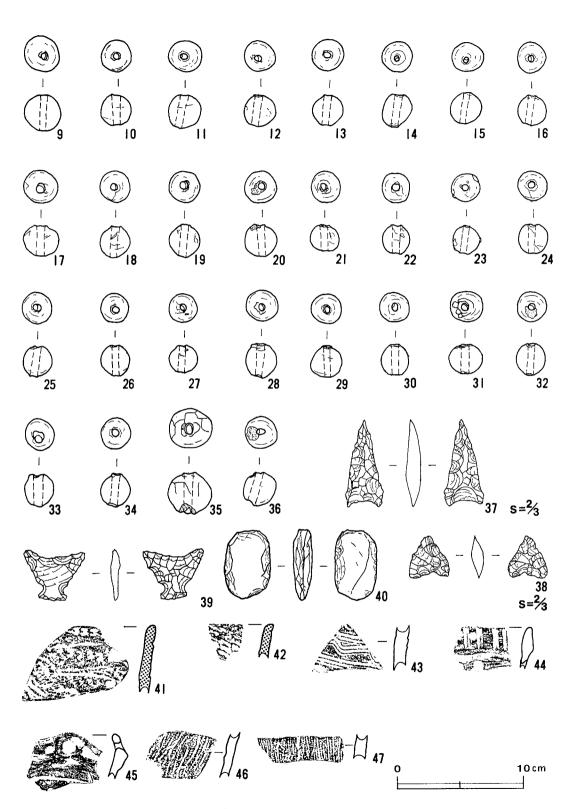
第55図 第1号住居跡遺物出土状況図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図	台付	甕	A 14.7	台部は「ハ」字状に開く。体	台部外面ハケ目整形、内面	長石, 石英	P 1 PL37
1	土師	器	B 25.9	部は球形で,中位に最大径	ハケ目・横ナデ。体部外面	明赤褐色	80%
-			D 9.7	を持つ。口縁部は「く」字状	ハケ目整形、内面ナデ。口	普通	体部外面火熱による剝
			E 5.2	に外傾して立ち上がる。	縁部外面ナデ、内面ハケ目		離。
					整形後ナデ。		
2	甕		A 14.8	やや突出気味の平底で、中	体部外面ハケ目整形で上	細砂粒	P 2 PL36
	土師	器	B 18.4	央がわずかにくぼむ。体部	位・中位・下位の順, 内面	にぶい橙色	80%
			C 6.6	は球形で中位に最大径を持	ハケ目整形とヘラケズリ。	普通	パケ工具幅2.1cm,輪
				つ。口縁部は緩く外反して	口縁部外面ハケ目整形後横		積み痕有り。体部外面
				立ち上がる。	ナデ、内面ハケ目整形。		スス付着。
3	规)	A 17.0	やや突出気味の平底で、中	体部外面ハケ目整形、内面	砂粒	P 3 PL37
7.1	土飾	器	B 25.2	央部がくぼむ。体部は球形	ナデで下半に炭化物付着。	橙色	100%
			C 6.5	で中位に最大径を持つ。口	口縁部外面ハケ目整形と横	普通	最大径部位で剝離痕甚
				縁部はわずかに外傾して立	ナデで上半に炭化物付着。		だし。底面に器ずれ痕。
				ち上がる。	内面ハケ目整形。		



第56図 第 1 号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)



第57図 第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図	甕	A 16.7	口縁部から体部上半の破	体部外面縦ハケ目整形、内	砂粒少量	P 4 PL37
4	土師器	B (5.1)	片。口縁部は「く」字状に	面ナデ。口縁部内外面ハケ	にぶい橙色	10%
			外傾して立ち上がる。	目整形後横ナデ。	普通	
5	小型台付	A 12.2	台部は「ハ」字状に開く。体	台部内外面ハケ目整形。体	砂粒	P 5 PL37
	甕	B 12.9	部は球形で上位に最大径を	部外面ハケ目整形で下位・	橙色	100%
	土師器	D 7.2	持つ。膨らみのある口縁部	上位の順,内面横ナデ。口	普通	体部内面に小円形状剝
		E 3.8	は「く」字状に外傾して立ち	縁部内外面ハケ目整形。		離痕多し。
			上がる。			
6	小型台付	A 9.2	台部は「ハ」字状に開く。体	台部外面ハケ目整形後横ナ	長石,スコリア	P 6 PL37
	甕	B 12.2	部は球形で上位に最大径を	デ,内面横ナデ。体部ハケ	橙色	100%
	土師器	D 8.0	持つ。幅の狭い口縁部は一	目整形で上位・下位の順,	普通	P5に比べ雑な作りで
		E 3.2	段の輪積み部を指でつまみ、	内面横ナデ。口縁部指つま		ある。
			外傾させている。	み痕明瞭。		
7	器台	A 10.5	脚部はやや膨らみを持って	脚部内外面ハケ目整形。器	砂粒多量	P 7 PL37
	土師器	B 10.7	「ハ」字状に開く。器受部は	受部外面ハケ目整形で上半	橙色	100%
		D 10.9	逆「ハ」字状に立ち上がる。	横ナデ,内面横ナデ。	普通	全面赤彩・二次焼成
		E 6.0	器受部中央に単孔。			器受部に器ずれ痕。
8	器台	A 7.7	脚部一部欠損。脚部はラッ	脚部外面ハケ目整形後ナ	長石,雲母	P 8 PL37
	土師器	B 7.7	パ状に開く。器受部は内彎	デ,内面ハケ目整形。器受	明褐色	90%
		D 10.4	気味に外傾して立ち上がる。	部内外面ヘラミガキ。	普通	脚部内面にスス付着。
		E 5.0	器受部中央に単孔。脚部に			
			3 孔。			

第1号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	器	種	法	法 量 (cm)		孔径	重量	現存率	/#± =#/.	
凶权备写	福	但	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	備考	
第57図 9	土	玉	3.0	2.9	-	0.5	20.5	100	DP1,南壁際中央	
10	土	丟	2.6	2.5	-	0.6	1 2.4	100	DP 2 , 西壁際中央寄	
11	土	玉	2.7	2.6		0.5	15.4	100	DP 3 ,同上	
12	土	玉	2.6	2.4		0.5	12.2	100	DP 4 ,同上	
13	土	王	2.5	2.6	_	0.5	13.3	100	DP 5 ,同上	
14	土	玉	2.7	2.4		0.5	12.2	100	DP 6 ,同上	
15	土	玉	2.5	2.4	_	0.5	11.9	100	DP 7 ,同上	
16	土	玉	2.5	2.3		0.5	11.6	100	DP8,同上	
17	土	王	2.5	2.8	-	0.6	16.7	100	DP 9 , 同上	
18	土	玉	2.5	2.4		0.5	12.4	100	DP10,同上	
19	土	玉	2.5	2.4	_	0.6	13.3	100	DP11,同上	
20	土	玉	2.6	2.6		0.6	14.I	100	DP12,同上	
21	土	玉	2.1	2.4		0.6	11.1	100	DP13,同上	
22	土	玉	2.3	2.3	_	0.6	10.2	100	DP14,同上	
23	土	乏	2.2	2.2	_	0.5	9.1	100	DP15,同上	
24	土	玉	2.4	2.4	_	0.6	11.9	100	DP16,同上	
25	土	玉	2.5	2.4	_	0.5	11.7	100	DP17,同上	
26	土	玉	2.5	2.3		0.5	10.4	100	DP18,北コーナー寄り	
27	土	玉	2.2	2.2	_	0.5	9.5	100	DP19,西壁際中央	
28	土	玉	2.7	2.6	_	06	14.5	100	DP20,同上	
29	土	玉	2.5	2.6	_	0.5	12.9	100	DP21,同上	
30	土	玉	2.3	2.5		0.5	11.4	100	DP22,同上	
31	土	玉	2.3	2.6	_	0.6	12.9	100	DP23,同上	
32	土	玉	2.4	2.5		0.5	11.7	100	DP24,同上	
33	土	玉	2.6	2.4		0.8	13.3	100	DP25,同上	
34	土	玉	2.7	2.6	_	0.6	11.9	100	DP26,同上	
35	土	玉	3.3	3.5	_	0.8	33.2	95	DP27,同上	
36	土	玉	2.7	2.6	_	0.6	15.5	95	DP28,同上	

第1号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	266	i	Ę		量	石質	備考	
凶似番芍	苗	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	jm ~5	
第57図 37	石	鏃	3.4	1.6	0.6	2.3	チャート	Q 1,床上 PL66	
38	石	鏃	1.7	1.6	0.4	1.0	チャート	Q 2, 南壁寄り 2層中 PL66	
39	石	鏃	2.1	2.5	0.4	1.3	チャート	Q3,直剪鏃,床上 PL66	
40	礫	石 斧	5.7	3.7	1.6	41.3	頁 岩	Q4,1層中 PL67	

第57図41~45は覆土中から出土した縄文式土器片である。41は口縁部片で縄文地文に半截竹管による爪形文・沈線文,42も口縁部片で縄文が施文されており,前期前半(黒浜式)の時期である。43は無文地に沈線文の施された胴部片で前期後半(浮島 I 式),44は口縁部片でキザミが施され前期後半(浮島式・興津式)に特徴的に見られる手法である。45は口縁直下に沈線と円形刺突文を持つ口縁部片で,後期前半(堀之内1式)の時期である。46・47は弥生時代後期の胴部片で,付加条一種付加2条の縄文が施文されている。

第2号住居跡 (第58図)

位置 J12h,区。

規模と平面形 長軸4.00m、短軸3.90mの方形。

長軸方向 N-41°-W。

壁 壁高は40~44cmで、外傾して立ち上がっている。壁はしっかりしている。

床 平坦である。壁から10~25cm離れて、幅50cm程の溝状の掘り方が巡っている。溝状掘り方の 覆土上面の堅さは、床と同じである。

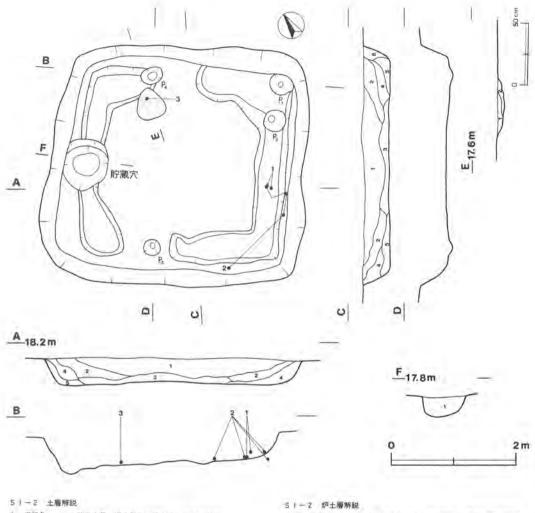
ピット 4 か所。 P_3 は径26cmの円形で深さは 8 cm,出入口施設に伴うピットと考えられる。 P_1 ・ P_2 ・ P_4 は径28~34cmのほぼ円形であるが,配列に規則性がなく性格は不明である。

炉 中央部からやや北寄りに付設されている。平面形は長軸50cm程の不整形で,床を5cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤く焼けている。

貯蔵穴 長軸線上で,西壁に接して付設されている。径30cm程の円形で深さは37cmである。底面は平坦で,外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。焼土や炭化物を含む6・5層の褐色土及び暗褐色土が壁際に堆積してのち,4・3・2層が流れ込むようにして皿状に堆積している。さらに,40cm程の厚さで黒褐色の腐食土と思われる1層がその上に堆積している。粘性のないさらさらした土である。溝状掘り方の覆土は褐色で,ローム小ブロック・焼土粒子を少量含んでいる。

遺物 完形になる遺物はない。3の器台は炉の直上から出土している。東壁際中央寄り床上からは1・2の小型甕・壺が出土している。土師器片は3・4・5層中から流れ込むような傾斜をもって多くが出土している。縄文式土器片は上層に多い。

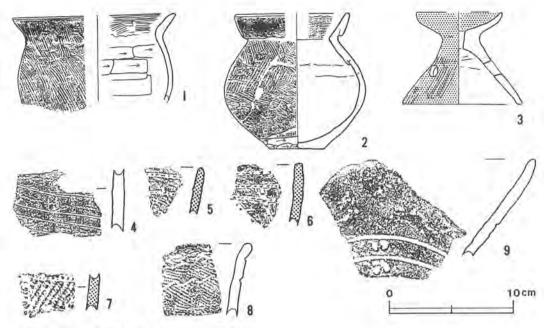


- 1 無褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土ブロック 微量
- 4 褐 色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・焼土プロック・ローム粒子多量
- 6 褐 色 焼土粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量

第58図 第2号住居跡実測図

- 1 極暗褐色 焼土粒子・廃土プロック・炭化粒子・炭化材細片中量
- 2 赤 褐 色 焼土粒子・焼土プロック・炭化粒子多量
- S 1-2 貯蔵穴土層解説
- 1 暗褐色 炭化粒子多量

所見 使用できる土器類は住居廃絶時,運び出したものと考えられる。遺物の少なさはそれに起因しよう。また,溝状掘り方は第1号住居跡と同様のあり方である。本跡の時期は,出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。



第59図 第2号住居跡出土遺物実測。拓影図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器植	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	小型豐土師器	A [13.1] B (6.9)	口縁部から体部上半にかけ ての破片。体部上位に最大 怪を持つ。口縁部は「〈」字 状に外傾して立ち上がる。	体部外面縦ハケ目整形,内 面横ヘラナデ。口縁部内外 面ハケ目整形後,端部は横 ナデ。	砂粒 灰黄褐色 普通	P9 20%ハケ工具幅1.3cm, ハケ目は粗い。
2	小型壺土飾器	A [9.3] B 10.9 C 4.5	口縁部・体部一部欠損。平 底。やや円みを持ったそろ ばん玉状の体部で中位に最 大径を持つ。複合口縁で 「く」字状に外傾。	State of the state	砂粒 におい橙色 普通	P10 PL37 40% ハケ工具幅2.1cm,輪積 み痕有り。
3	器 台土師器	A [6.9] B 7.4 D 9.6 E 5.5	器受部・脚部一部欠損。脚 部は「ハ」字状に開く。器受 部は内骨気味に外傾して立 ち上がる。器受部中央に単 孔。脚部に3孔。	脚部外面へラミガキ,内面 ナデ。器受部内外面へラミ ガキ。	長石,スコリア 赤褐色 普通	P11 PL37 60% 器受部内外面・脚部外 面赤彩。二次焼成。 くびれ部周辺スス付着。

第59図 4~9 は覆土中から出土した縄文式土器片である。4 は胴部片で斜位沈線間にアナダラ 属の貝殻腹縁文を施しており、早期中葉(田戸下層式)の時期である。5・6 は口縁部片で半截 竹管による押引き爪形文で、7 は縄文前々段多条地文の胴部片に押引き爪形文が施され、前期前 半(黒浜式)の時期である。8 は外反する口縁部片で、縄文地文に2条の結節文が施文されてお り前期末(粟島台式)の時期である。9 は外方に大きく開く波状口縁部片で、沈線間に対弧文が 縦位に施されており、後期中葉(加曽利B1式)の時期である。

第3号住居跡(第60図)

位置 J12j₅区。

規模と平面形 長軸5.37m, 短軸5.06mの方形。

長軸方向 N-53°-W。

壁 壁高は27~30cmで、外傾して立ち上がっている。ローム土でしっかりしている。

床 平坦である。壁から20~30cm離れて,幅50~55cmの溝状の掘り方が巡っている。南壁・東壁寄りでは一部途切れる。溝状掘り方の上面の堅さは床と同じである。

ピット 1か所。北東コーナー寄りの溝状掘り方内に位置し,長径40cm程の楕円形状で,深さは19cmである。性格は不明である。

炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。平面形は径50cmの円形で,床を10cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床はよく焼けて,硬くなっている。

覆土 6層に分層される。6層が壁際に堆積してのち,5層が6~8 cmの厚さで床を広く覆うように流れ込んでいる。その上に褐色土の3・4層が皿状に堆積し,土器片を多く含む2層が続いている。1層は撹乱層である。溝状掘り方の覆土は暗褐色で,焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを少量含んでいる。

遺物 覆土上層からは、縄文式土器片が多く出土している。土師器片は図示していないが、4・5・6層からの出土がほとんどで、細片が多い。東コーナー寄り4層中からは1の土玉が出土している。2層中からは縄文式土器片に混じって2の石鏃が出土している。

所見 本跡は炭化材の出土状況から,焼失住居と考えられる。炭化材が少ないのは焼失後,片付けが行なわれたためであろうか。使用可能な土器類は,その時に運び出したものと考えられる。 溝状掘り方のあり方は第1号住居跡と同様と考えられる。

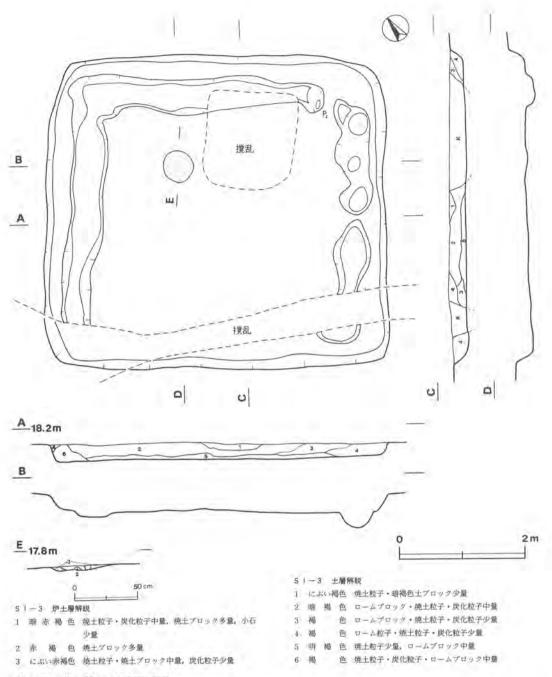
本跡の時期は、住居の形態及び出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。なお、炭化材 (丸材の半割材)の一部については樹種同定を行い、その結果及び考察を付章に示した。

第3号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔 径	重量	現存率	備考	*
四次银勺	100	生	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)		
第61図 1	土	玉	3.7	3.1	_	0.5	26.9	100	DP29,	東コーナー寄り

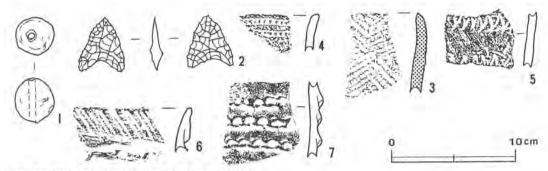
第3号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器種		法量			石質	備	本	
と		4年 7里	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	口 頂	1/HI 	ち
第61図 2	石	鏃	0.5	1.8	0.5	1.3	チャート	Q5,2層中	PL66



第60図 第3号住居跡実測図

第61図3~7は覆土中から出土した縄文式土器片である。3は羽状縄文が施文された前期前半 (黒浜式)の口縁部片である。4は縄文地文に半截竹管による押引き爪形文が施された口縁部片で,前期後半(諸磯a式)の時期である。5はハマグリなどの腹縁による波状文が施された胴部片,6は口縁部に斜位のキザミが施され、7は輪積み痕を文様化した凹凸文で,いずれも前期後半(浮島II式)の時期である。



第61図 第 3 号住居跡出土遺物実測·拓影図

第4号住居跡 (第62図)

位置 K12ds区。

規模と平面形 長軸5.10m, 短軸4.49mの長方形。

長軸方向 N-52°-W。

壁 壁高20~35cmで、緩く外反して立ち上がっている。ローム土の壁でしっかりしている。

床 平坦である。壁から $10\sim20$ cm離れて、幅 $50\sim70$ cmの溝状の掘り方が巡っているが、北壁寄りで一部途切れる。掘り方内は平坦である。

ピット 3 か所。 P_1 は径26cmのほぼ円形で,位置・規模から出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P_2 \sim P_3$ は径30 \sim 36cmのほぼ円形で,深さは12 \sim 27cmである。性格は不明である。

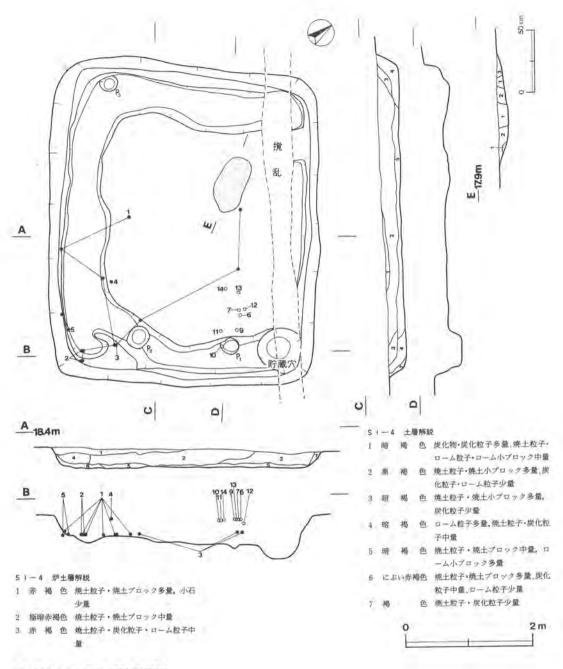
炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。長軸90cm・短軸44cmの楕円形で、床を20cm程掘りくぼめた地床炉である。

貯蔵穴 北東コーナーに付設されている。径70cm程の円形で、深さは45cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底は平坦である。

覆土 7層に分層される。6層は焼失による焼土・炭を含み、壁際に堆積した7・4層にも焼土・炭化粒子が含まれている。皿状に堆積した5層は床全体を広く覆い、焼土ブロック・焼土粒子などを含んでいる。さらに、そのうえに3・2・1層が堆積している。2層は腐食土であり、粘性のない土である。溝状掘り方の覆土は褐色で、ロームブロックを含んでいる。

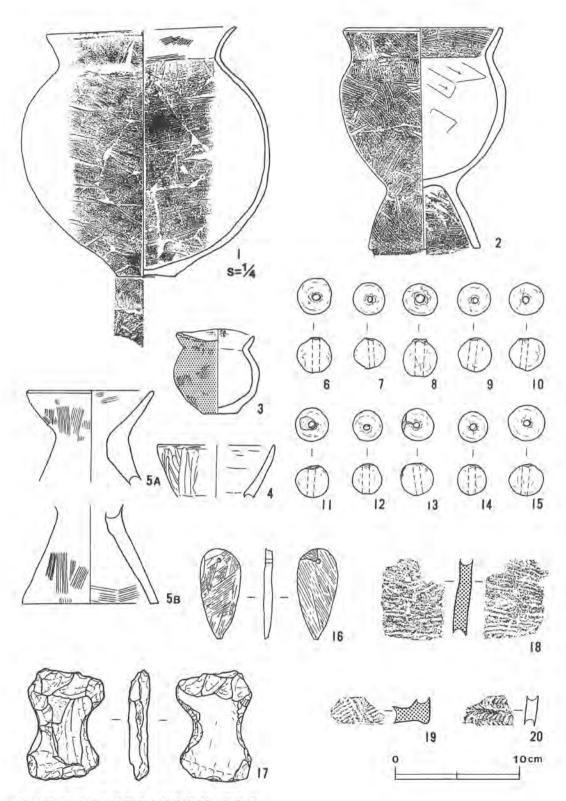
遺物 南西コーナー寄り2・5層中から、土玉8個が出土している。また、貯蔵穴からも土玉が2個出土している。1の甕・2の台付甕・3のミニチュア土器は西壁際やや北寄りの床上から、ばらばらになった状態で出土している。また、1・2からやや離れて5・4の器台・坩がばらばらの状態で出土しており、いずれも完形にはならない。覆土中層からは16の剣形石製模造品が出土している。17の打製石斧と縄文式土器片の多くは、覆土上層から出土している。

所見 焼土・炭化材が南東部壁寄りから検出されており、焼失住居と考えられる。住居焼失前に 使用可能な土器類は運び出したのであろう。出土した甕や器台等は破損品ばかりである。2か所



第62図 第 4 号住居跡実測図

から土玉がまとまって出土しているが、8 個まとまって出土しているところは焼土上であり、また、土玉が二次焼成を受けていないことから、焼失後の投棄と考えられる。土玉を用いての何らかの行為があったのであろうか。溝状掘り方のあり方は、第1号住居跡と同じである。本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。



第63図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法	量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図	甕	A	20.4	突出気味の底部は平底で中	底部からの立ち上がりはへ	石英, スコリア	P 13 PL38
1	土師器	В	26.8	央がわずかにくぼむ。体部	ラケズリ。体部内外面ハケ	にぶい黄橙色	85%
		С	6.1	は球形で中位に最大径を持	目整形。口縁部内外面ハケ	普通	体部外面全体にスス付
				つ。口縁部は「く」字状に外	目整形後横ナデ。		着。
				反する。			
2	台付甕	A	13.0	口縁部一部欠損。台部は	台部内外面ハケ目整形。体	砂粒	P14 PL38
	土師器	В	17.7	「ハ」字状に開く。体部は球	部外面ハケ目整形で,内面	橙色	70%
		D	9.0	形で上位に最大径を持つ。	ヘラナデ。口縁部内外面ハ	普通	ハケ工具幅2.1cm,体部
		Е	5.0	口縁部は「く」字状に外傾し	ケ目整形。		スス付着。
İ				て立ち上がる。			
3	ミニチュア	Α	6.4	平底。体部は不細工な球形	底部ナデ。体部外面ハケ目	砂粒	P15 PL38
	土 器	В	6.8	で中位に最大径を持つ。厚	整形,内面ナデ。口縁部内	明赤褐色	60%
	土師器	С	2.7	みのある口縁部は「く」字状	外面ハケ目整形後、外面横	普通	口縁部内面から外面全
				に外傾して立ち上がる。	ナデ。		体赤彩。
4	坩	Α	[9.5]	口縁部はやや内彎気味に外	口縁部外面横ナデ後縦へラ	細砂粒	P16
	土師器	В	(4.2)	傾して立ち上がる。	ミガキ,内面横ナデ。	浅黄橙色	5 %
						良好	
5 A	器台	Α	10.4	脚部は「ハ」字状に開く。器	脚部内外面ハケ目整形。器	長石,スコリア	P17 • 18PL
5 B	土師器	В	[12.9]	受部は逆「ハ」字状に開く。	受部内外面ハケ目整形後,	明褐色	80%
		С	[10.8]	器受部中央に単孔。器受	端部横ナデ。	普通	ハケ工具幅1.3cm
				部・脚部は接点はないが,			くびれ部内面, わず
				同一個体である。			かにすすけている。

第 4 号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔径	重 量	現存率	備考
凶似备亏	12E	煙	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	75 mų
第63図 6	土	玉	2.9	2.7	_	0.55	18.2	100	DP30,貯蔵穴覆土中
7	土	五	2.5	2.6	_	0.4	13.5	100	DP31,南西コーナー寄り
8	土	玉	3.1	2.9	_	0.8	18.7	100	DP32,同上
9	土	玉	2.8	2.7	_	0.6	14.4	100	DP33, 同上
10	土	玉	2.7	2.7	_	0.5	16.0	100	DP34,同上
11	土	丟	2.6	2.6	_	0.6	15.3	100	DP35,同上
12	土	涯	2.4	2.4	-	0.6	11.8	100	DP36,同上
13	土	王	2.6	2.6	_	0.5	16.6	100	DP37,同上
14	土	玉	2.5	2.4	_	0.5	11.8	100	DP38,同上
15	土	玉	2.6	2.8		0.6	17.3	100	DP39,貯蔵穴覆土中

第4号住居跡出土石製品一覧表

ISSUE #E	BO.	£16	法	ž	-	量		質	備考	
図版番号	器種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		具	NH -2	
第63図 16	剣形板	英 造 品	3.7	1.6	0.3	3.4	滑	石	Q6,覆土中	PL65
17	打 製	石 斧	8.9	6.2	1.9	120.3	砂	岩	Q 7, 分銅型, 覆土中	PL67

第63図18~20は覆土中から出土した縄文式土器片である。18は早期末(茅山式)の表裏条痕文 土器の胴部片である。19は上底気味の底部片で羽状縄文が施文されており,前期前半(黒浜式) の時期である。20は変形爪形文が施さた胴部片で,前期後半(浮島II式)の時期である。

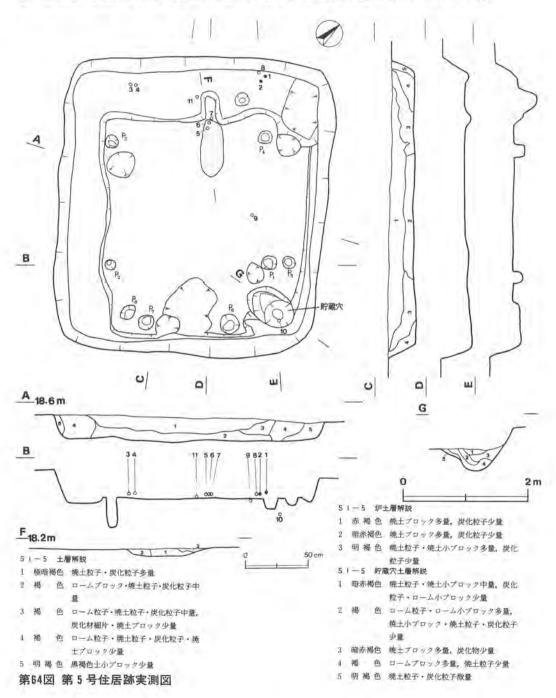
第5号住居跡 (第64図)

位置 K12c1区。

規模と平面形 長軸4.86m, 短軸4.25mの長方形。

長軸方向 N-49°-W。

壁 壁高40~44cmで、外傾して立ち上がっている。ローム質の壁でしっかりしている。



壁溝 壁下を全周している。西壁・南壁下は幅80cm程, 北壁・東壁下は幅10cm程で, 深さは10~18 cmである。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 9か所。 $P_1 \sim P_4$ は径18~20cmのほぼ円形で,深さは17~50cmで主柱穴と考えられる。 P_6 も $P_1 \sim P_4$ と同規模で, P_1 の補助柱穴と考えられる。 P_6 は径30cmの円形で深さ37cm, P_7 は径20cmの円形で深さ10cm程であり,出入り口施設に伴うピットと考えられる。また, $P_6 \cdot P_7$ 間のなだらかな落ち込みも出入り口施設に伴うものと考えられる。 $P_8 \cdot P_9$ は径20cm程の円形で,深さも20~26 cmであるが、性格は不明である。

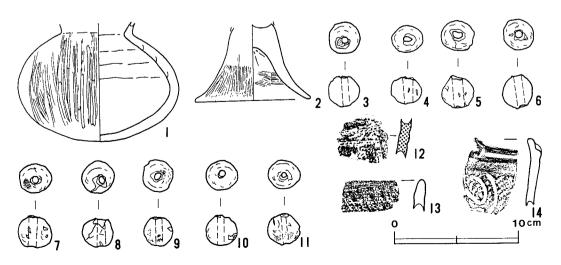
炉 中軸線上で、北西寄りに付設されている。長軸95cm・短軸40cm程の長楕円形で、床を6cm程 掘りくぼめた地床炉である。炉床は鈍く赤変しているが、あまり硬くはなっていない。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。径45 \sim 50cmのほぼ円形で、深さは41cmである。凹面 の底から、壁は緩く外反して立ち上がっている。

覆土 5層に分層される。 $5 \cdot 4$ 層が壁際に堆積してのち,皿状の窪地に $3 \cdot 2$ 層のしまりのない褐色土,腐食土である1層が堆積している。1層には炭化粒子を多く含んでいる。

遺物 炉から南西コーナー寄りにかけての3・4層及び床上から,土玉が9個出土している。1 の口縁部を欠く坩は,北コーナー近くから2の台付甕の台部と共に正位の状態で出土している。 覆土上・中層からは縄文式土器片も多く出土している。

所見 本跡は炭化材・焼土の広がりから焼失住居と思われる。炭化材が少ないのは、焼失後、片付けが行なわれたためであろうか。器形の分かる土器類はほとんどなく、その時に使用可能な土器類は運び出したものと考えられる。時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。



第65図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図	坩	B 9.4	口縁部欠損。平底。体部は	底部外面ナデ。体部外面縦	雲母, 長石, 石英	P 19 PL38
1	土師器	C 3.0	ややおしつぶされた球形で、	へラミガキ,内面横ナデ。	明赤褐色	80%
			中位に最大径を持つ。口縁	頸部にハケ目整形痕が見え	普通	内面に輪積み痕。
			部は「く」字状に外傾して	る。		
			立ち上がる。			
2	台付(甕)	B (6.1)	台部のみ。台部はラッパ状	台部外面縦ハケ目整形後,	長石,スコリア,雲母	P 20 PL38
	土師器	C 9.3	に開く。	上半指おさえ。内面ハケ目	橙色	30%
				整形後,下半横ナデ。	普通	

第5号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

ionu⊏ ant □		un	100	法		量 (cm)	孔 径	重 量	現存率	備考
図版番号		器	種	最大長 最大幅 最大厚 (cm) (g)	(g)	(%)	VFI T			
第65図	3	土	玉	2.4	2.5	_	0.5	12.1	100	DP40,南西コーナー寄り
	4	土	乏	2.2	2.5	_	0.6	10.2	100	DP41,同上
	5	土	玉	2.6	2.6		0.8	12.8	100	DP42,同上
	6	土	玉	2.7	2.4		0.6	11.5	100	DP43,同上
	7	土	玉	2,5	2.7	_	0.5	11.7	100	DP44,同上
	8	土	玉	2.5	2.6	_	0.5	12.1	100	DP45,同上
	9	土	丟	2.5	2.4		0.5	10.4	100	DP46,炉西側
	10	土	玉	2.5	2.6	_	0.6	11.5	100	DP47,同上
	11	土	玉	2,5	2.6		0.4	10.9	100	DP48,同上

第65図12~14は覆土中から出土した縄文式土器片である。12は半截竹管による押引き爪形文が施された胴部片で、前期前半(黒浜式)の時期である。13はアナダラ属の貝殻腹縁による波状文が施された前期後半(浮島II式)の口縁部片である。14は口縁直下に沈線文と円形刺突文を施し、胴部には縄文地文に沈線によるモチーフを描いている。後期前半(堀之内1式)の時期である。

第6号住居跡(第66図)

位置 K12i4区。

重複関係 33号土坑によって北西壁中央部が掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.25m, 短軸4.15mの方形。

長軸方向 N-46°-W。

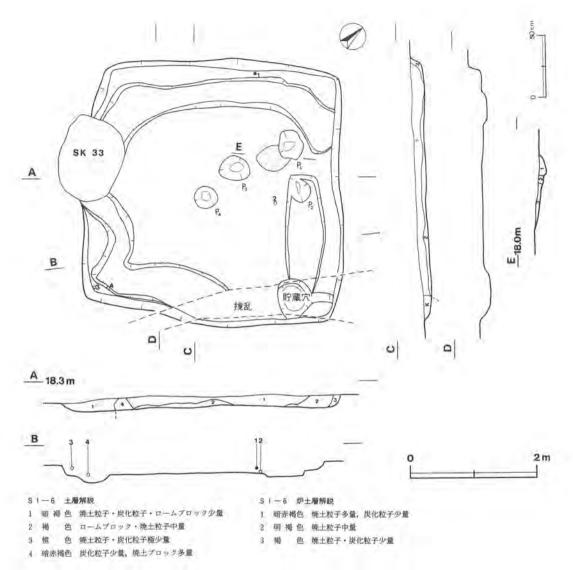
壁 壁高10~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。壁から $10\sim30$ cm離れて、幅 $40\sim50$ cmの溝状の掘り方が巡っている。深さは $6\sim10$ cmで、炉の脇で1か所途切れる。

ピット 4 か所。 P_1 は不整形で炉を一部掘り込んでおり,後世の掘り込みであろう。 $P_2 \sim P_4$ は径 $36 \sim 50$ cm のほぼ円形で深さ $12 \sim 37$ cm であるが,性格は不明である。

炉 中央部から北西寄りに付設されている。長径56cm・短径40cmの楕円形で,床を15cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱でやや赤くなっているが,あまり硬くはなっていない。

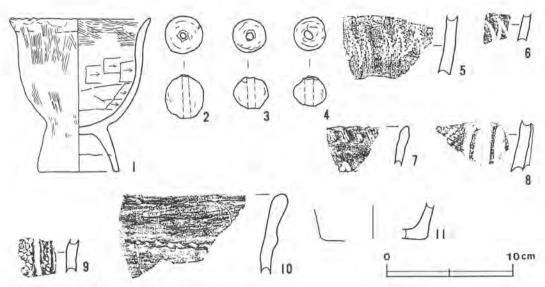
貯蔵穴 北東コーナー部で,溝状掘り方内に付設されている。長径60cm・短径50cmの楕円形で深さは29cm,底は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がっている。



第66図 第6号住居跡実測図

覆土 4層に分層される。3・4層が壁際に堆積してのち,2層が壁際から床全体を広く覆っている。その後,やや凹凸のある皿状の窪地に焼土粒子・炭化粒子を含む1層が堆積している。溝状掘り方の覆土は鈍い褐色で、焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックがわずかに含まれている。 遺物 床上出土遺物は少ない。南東コーナー部から2個、炉の東側から1個の土玉が出土している。また、西壁際中央の床上近くの1層中から、横位の状態で1の小型台付甕が出土している。縄文式土器片は、1層覆土中から多く出土している。

所見 土器類が非常に少なく、住居廃絶時に使用可能なものは運び出したものと思われる。土玉 3個が床上及び覆土下層から出土しているが、何らかの意図があったものかどうか不明である。 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。



第67図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	币	í	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備考
第67図	台	付多	8	A 11.4	口縁部から体部の一部欠	台部外面縦ハケ目整形後ナ	長石、スコリア、雲母、	P22 PL38
1	土	師是	2	B 12.3	捌。台部は「ハ」字状に開く。	テ,内面横ナデ。体部外面縦	チャート	80%
				D 6.5 E 3.6	体部は台部から緩やかに立 ち上がり、口縁部は外傾し て開く。	The second of th	橙色 普通	台部内面に輸積み痕。

第6号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	nri	oc.	法		量 (cm)	孔径	重 量	現存率	The Le
凶級番号	ari ari	種	最大長	最大幅 3.0	最大厚	(cm) 0.5	(g) 25.0	(%)	備考
第67図 2	+	玉	3.5						DP49, 炉の東側
3	土	五	2.6	2.7		0.6	16.5	100	DP50, 南東コーナー寄
4	土	王	2.3	2.6		0.7	14.9	100	DP51,同上

第67図5~11は覆土中から出土した縄文式土器片である。5・6は貝殼腹縁による波状文が施された胴部片、7は口縁直下に斜位のキザミが施されており、前期後半(浮島Ⅱ式)の時期である。8は縄文地文に隆起線によるモチーフの描かれた胴部片で、中期後半(加曽利EⅢ式)の時期である。9も縄文地文に沈線が描かれた胴部片、10は幅広の無文口縁下に刺突の施された隆帯が巡る。いずれも後期前半(堀之内1式)の時期である。11は底部片である。

第7号住居跡 (第68・69図)

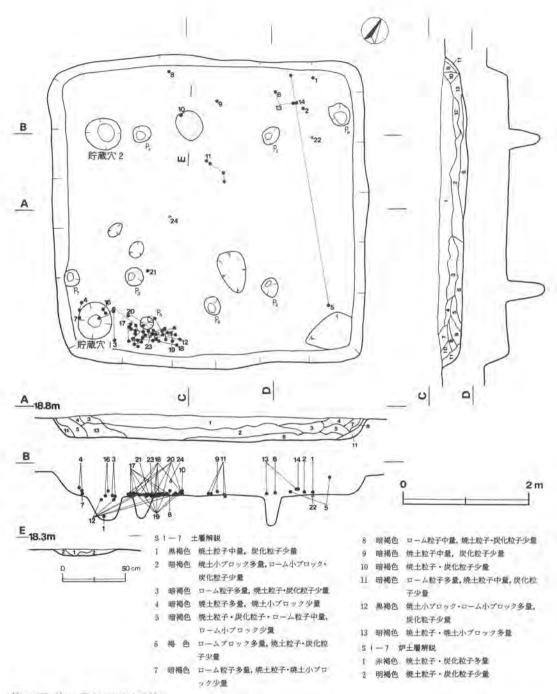
位置 K11g。区。

規模と平面形 長軸5.10m, 短軸5.00mの方形。

長軸方向 N-33°-W。

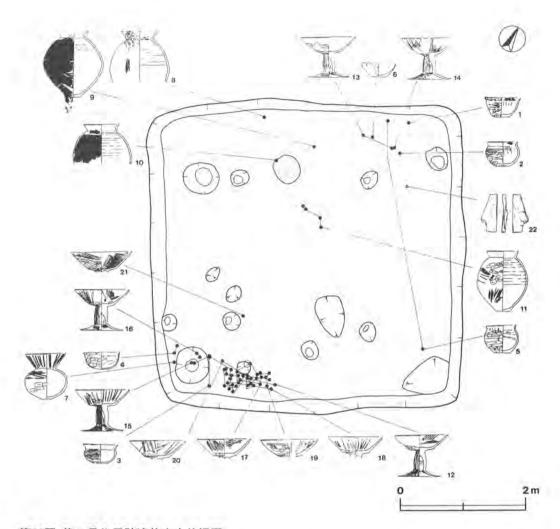
壁 壁高31~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。



第68図 第7号住居跡実測図

ピット 8 か所。 $P_1 \sim P_4$ は径30cm程の円形で深さは38~66cmであり、主柱穴である。 P_5 は径が20 cmの円形,深さ54cmで外傾して掘り込まれており、位置・規模から出入り口施設に伴うピットと考えられる。 P_6 は径26cmの円形で深さは26cmあり、主柱穴との位置関係から補助柱穴と考えられる。 P_7 は径26cmの円形で深さ51cm, P_8 は長径40cm・短径30cmの楕円形で深さ25cm,いずれも性格は不明である。

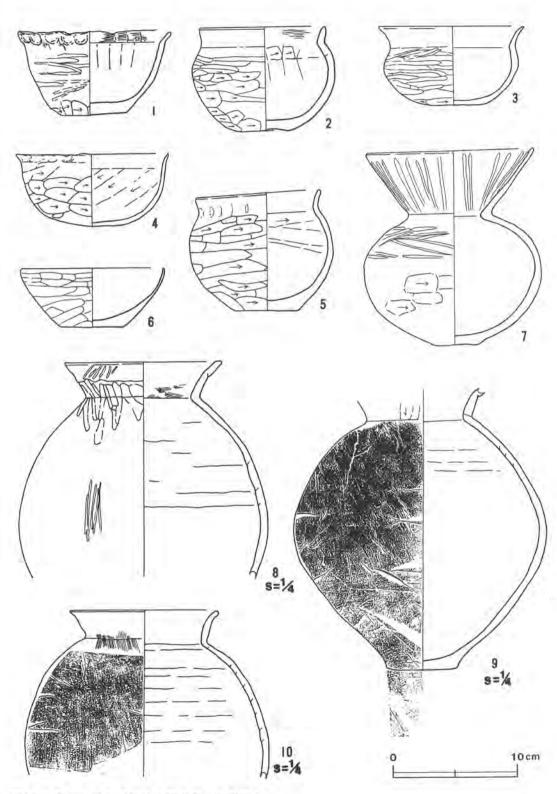


第69図 第7号住居跡遺物出土状況図

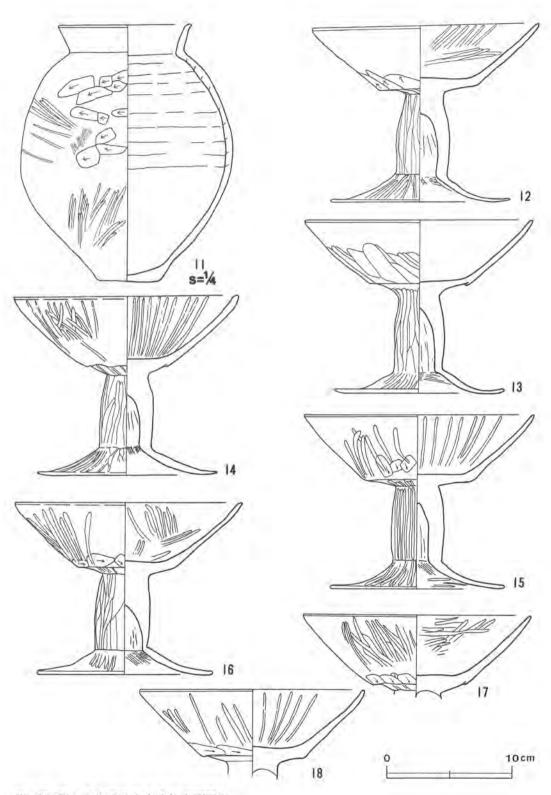
炉 北西側主柱穴間からやや壁寄りに付設されている。長径50cm・短径40cmの楕円形で、床を10 cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床は赤く焼け、硬くなっている。

貯蔵穴 2か所付設されている。貯蔵穴1は南西コーナー部に付設されており、径58cm程の円形で深さが40cmあり、平坦な底から外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は P_4 の西側に付設されている。径52cm程の円形で深さが44cmあり、平坦な底から外傾して立ち上がっている。

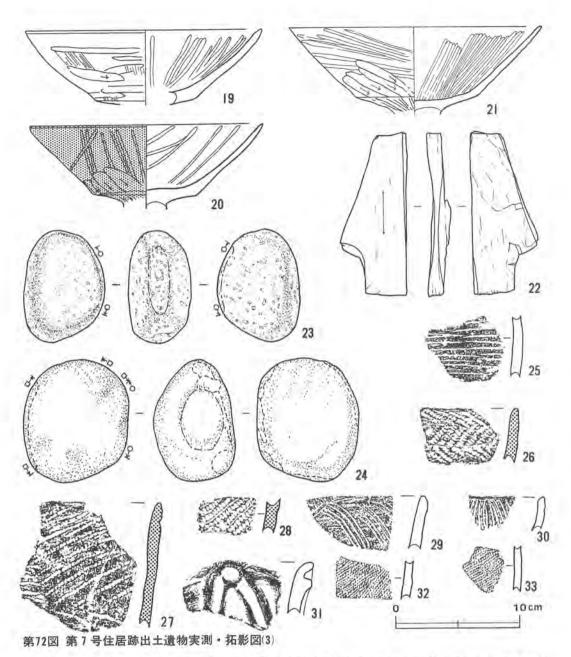
覆土 13層に分層される。11層が壁際に, $2\sim5\cdot7\sim10\cdot12\cdot13$ 層及びロームブロックを多く合む 6層が,不自然な堆積の仕方で凹レンズ状に堆積している。1層は腐食土である。12層は焼土小ブロックを多量に含み,また, $4\cdot5\cdot13$ 層にも焼土粒子・炭化粒子が多く含まれている。**遺物** 炉上から10の甕が出土している。また,8 の壺が北西壁際ほぼ中央から立て掛けられた状態で,9 の壺が炉の北側床上から横位の状態で,11の甕が炉の南東側床上からつぶれた状態で出土している。いずれも炉を中心に1 m以内の位置である。北コーナー寄りからはほぼ完形の $1\cdot6$



第70図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第71図 第 7 号住居跡出土遺物実測図(2)



の焼・2・5の鉢、13・14の高坏が、覆土下層から投げ込まれた状態で出土している。貯蔵穴1の下層からは、15のほぼ完形の高坏が横位で出土している。やや浮いた状態で7の大型坩・4のほぼ完形の埋・16の高坏がやはり投げ込まれた状態で出土している。また、出入り口施設用のピット上とその周囲からは、3の鉢・12・17~20の高坏が細かく破砕されて出土している。21も含めこれらの高坏の脚部は住居跡内から出土していない。炉と東壁の間の床上からは、よく使い込まれた22の砥石が出土している。そのほか、覆土中・下層の主柱穴と壁との間から、多量の縄文式土器片・23と24の磨石、土師器片とわずかな弥生土式器片が流れ込んだ状態で出土している。

第7号住居跡出土遺物観察表

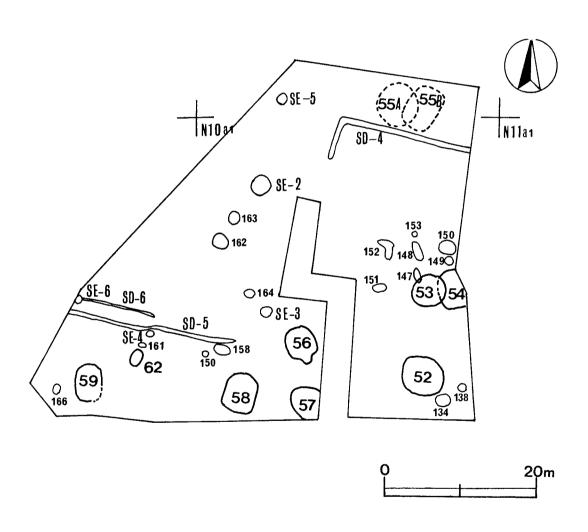
図版番号		租	-	法量(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図		埦	A	12.2	口縁部一部欠損。平底。体	底部外面ヘラナデ。体部外	細砂粒少量,スコリア	P23 PL38
1	±.	師者	E	6.7	部は内彎気味に外傾して立	面横へラミガキ,内面へラ	橙色	95%
				5.5	ち上がり,口縁部は指でつ	ナデ。口縁部外面指頭痕,	普通	体部内面に小剝離痕多
					まみ広げるようにして外傾	内面横ハケ目整形。		し。
					させている。			
2		鉢	I A	10.1	口縁部一部欠損。平底。体	底部外面ヘラナデ。体部外	長石,雲母,石英	P24
	土	師者	l E	8.4	部はやや偏平な球形状で,	面横へラミガキ,内面横へ	浅黄色	95%
				4.2	最大径を上位に持つ。口縁	ラナデ。口縁部外面横ナデ,	普通	体部内面に小剝離痕多
					部は外傾して立ち上がる。	内面横ハケ目整形後横ナデ。・		l.
3		鉢	A	11.6	口縁部•体部一部欠損。平	底部外面ヘラケズリ。体部	細砂粒少量	P25
	土	師 器	E	6.5	底。体部は偏平な球形状で	は内外面横へラミガキ。口	明赤褐色	90%
				4.8	最大径を上位に持つ。口縁	縁部外面横ナデ,内面横ナ	普通	体部は内面に小剝離痕
			İ		部は外反して立ち上がる。	デと一部横へラミガキ。		多し。
4		婉	A	12.2	丸底。口縁部一部欠損。体	体部外面横へラナデ, 内面	長石,スコリア	P26
	土	師 器	E	3.5	部は内彎気味に外傾して立	指ナデ。口縁部内外面指頭	にぶい黄橙色	90%
			C	5.8	ち上がり口縁部で緩く外反	痕,内面横ナデ。	普通	器壁が薄い。
					する。			
5		鉢	A	10.2	口縁部•体部一部欠損。平	底部外面ヘラケズリ。体部	雲母, 長石	P27
	土	師器	E	9.7	底。体部は球形状で中位に	は外面横へラケズリ,内面	橙色	90%
			C	4.9	最大径を持つ。口縁部はわ	ヘラナデ。口縁部内外面横	普通	
					ずかに外反して立ち上がる。	ナデ。		
6		椀	A	11.5	口縁部から体部にかけて一	底部外面ヘラナデ。体部外	長石,スコリア	P28
	土	師器	E	4.7	部欠損。平底。体部は外傾	面横へラケズリ,内面横ナ	橙色	60%
:			10	5.0	して立ち上がり、口縁部に	デ。口縁部外面横へラミガ	普通	体部は内面に小剝離痕
			'		至る。口縁部は直立気味に	キ,内面横ナデ。		多し。
			İ		立ち上がる。	1,		500
7		坩	A	13.5	口縁部一部欠損。平底。体	底部外面ヘラケズリ。体部	細砂粒, スコリア	P29 PL39
	土	師器	E	15.7	部はやや偏平な球形状で,	外面横へラケズリ後へラミ	橙色	98%
			l c	3.6	最大径を中位に持つ。口縁	ガキ。口縁部外面横ナデ,	普通	体部内面に小剝離痕多
			-	0.0	部は強く外傾して立ち上が	内面横ナデ後粗い縦へラミ		L.
					3.	ガキ。		0.
8		壺	+	16.7	口縁部一部,体部下半欠損。	体部外面へラミガキ, 内面	長石,石英	P 30 PL38
	+	師器	l E	(23.0)	体部は球形状で、最大径を	横ナデ。口縁部外面横ナデ	橙色	60%
				,,	中位に持つ。口縁部は外傾		普通	体部内面に小剝離痕多
					して立ち上がる。折り返し	目整形後横ナデ。体部内面		L.
					一口縁。	に輪積み痕。		0.
9		壺	E	(29.9)	口縁部欠損。薄い凸レンズ	底部外面へラミガキ。体部	雲母,長石	P31 PL38
-		師器			状の底。体部は中位が強く	外面ヘラナデ後ヘラミガキ	赤褐色	80%
		Halle III	`		張る球形状である。口縁部	内面ナデ。口縁部外面横ナ	普通	体部は内面に小剝離痕
					は外傾して立ち上がる。二	デ、内面ハケ目整形後へラ		多し。
			ı		重口縁。	ミガキ。		300
10		甕	A	. 15.8	本部下半欠損。体部は球形	体部外面縦ハケ後縦ヘラミ	細砂粒、スコリア	P32 PL39
10		血 師 器		(17.8)	状で最大径を中位に持つ。	ガキ、内面ナデ。口縁部内	にぶい黄橙色	40%
		cult tat	` `	(17.0)	口縁部は外反して立ち上が		普通	40/0
					1	71年11年7月。	百地	
第71図	-	甕	Α	14.4	る。 底部一部欠損。やや突出気	底部外面ヘラケズリ。体部	雲母,長石,スコリア	P33 PL39
# / I E		完 師 器	í		味の平底。体部は中位に最		芸母, 段石, ヘコリノ 浅黄橙色	90%体部内面小剝離
11		নাদ করি	C		大径を持つ。口縁部は頸部	ラミガキ,内面横ナデ。口		
			1	0.8			普通 	痕,輪積み痕。
					から「く」字状に外反して立	縁部内外面横ナデ。		
12	高	却	- A	18.3	ち上がる。 脚斑は由荷で膨たも縁骨で	裾部外面へラミガキ、内面	長石,石英,スコリア	P34 PL39
14			1		脚部は中位で膨らむ棒状で、		' ' '	i
	T	師器		14.3	裾部でほぼ水平に広がる。	ナデ。脚部外面へラミガキ。	にぶい黄橙色	95%
			D		「坏部は下位に稜を持ち,内	「坏部外面へラケズリ後ナデ,	普通	坏部一部欠損。
			E	8.7	彎気味に外傾して立ち上が	内面ナデ整形後へラミガキ。 		
10	- major		+-		5.	Industry with the second	J. M. Amerika	
13	高	坷		. 18.2	裾部一部欠損。脚部は中位	裾部外面へラミガキ,内面	白色細砂粒、スコリア	P35 PL39
	土	師器		14.0	で膨らむ棒状で、裾部はほ	ハケ目整形後ナデ。脚部外	にぶい黄橙色	95%
			D		ぼ水平に広がる。坏部は下	面ヘラミガキ。坏部外面ナ	普通	坏部内面に小剝離痕多
i			ΙE	9.0	位に稜を持ち, 内彎気味に	デ整形後ヘラミガキ, 内面		し。

図版番号	器 種	法	量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図	高 坏	Α	18.1	裾部一部欠損。脚部は中位	裾部外面ヘラミガキ, 内面	白色細砂粒, スコリア	P36 PL39
14	土 師 器	В	14.3	で膨らむ棒状で、裾部はほ	ハケ目整形後ナデ。脚部外	橙色	95%
		D	14.4	ぼ水平に広がる。坏部は下	面ヘラミガキ。坏部外面へ	普通	坏部内面暗黒色で小剝
		E	8.0	位に稜を持ち内彎気味に外	ラミガキ,内面横ナデ後へ		離痕多し。
				傾して立ち上がる。	ラミガキ。		
15	高 坏	Α	18.3	裾・坏部一部欠損。脚部は中	裾部外面ヘラミガキ, 内面	白色細砂粒,スコリア	P 37
	土 師 器	В	14.0	位で膨らむ棒状で裾部はほ	ハケ目整形後ナデ。脚部外	橙色	95%
		D	13.9	ぼ水平に広がる。坏部は下	面へラミガキ。坏部外面へ	普通	坏部内面暗褐色で小剝
		Е	8.4	位に稜を持ち内彎気味に外	ラミガキ,内面横ナデ後へ		離痕多し。
				傾して立ち上がる	ラミガキ。		
16	高 坏	Α	18.3	裾・坏部一部欠損。脚部は中	裾部外面へラミガキ, 内面	白色細砂粒,スコリア	P38 PL39
	土師器	В	13.9	位で膨らむ棒状で裾部はほ	ハケ目整形後ナデ。脚部外	橙色	95%
		D	14.0	ぼ水平に広がる。坏部は下	面へラミガキ。坏部外面へ	普通	坏部内面暗褐色で小剝
		Е	8.0	位に稜を持ち内彎気味に外	ラミガキ,内面横ナデ後へ		離痕あり。
				傾して立ちあがる。	ラミガキ。		
17	高 坏	Α	18.3	脚・裾部欠損。坏部は下位に	坏部外面ヘラミガキ, 内面	白色細砂粒, スコリア	P39 PL39
	土師器	В	(6.6)	稜を持ち,内彎気味に外傾	横ナデ後ヘラミガキ。	橙色	50%
		1		して立ち上がる。		普通	坏部内面小剝離痕あり。
18	高 坏	Α	18.0	脚・裾部欠損。坏部は下位に	坏部外面ヘラケズリ後ヘラ	白色細砂粒,スコリア	P 40 PL39
	土 師 器	В	(7.0)	稜を持ち,内彎気味に外傾	ミガキ,内面横ナデ後ヘラ	赤橙色	50%
				して立ち上がる。	ミガキ。	普通	
第72図	高坏	Α	19.0	脚・裾部欠損。坏部は下位に	坏部外面縦ハケ目整形後へ	白色細砂粒, スコリア	P41 PL40
19	土 師 器	В	(6.0)	稜を持ち,内彎気味に外傾	ラミガキ,内面横ナデ後へ	橙色	50%
				して立ち上がる。稜部にな	ラミガキ。	普通	
				で付けによる粘土の高まり			
				は見られない。			
20	高坏	Α	18.8	脚•裾部欠損。坏部一部欠	坏部外面ハケ目整形及びへ	白色細砂粒, スコリア	P42 PL40
	土師器	В	(6.6)	損。坏部は下位に稜を持ち,	ラケズリ後ヘラミガキ,内	明赤褐色	45%
				内彎気味に外傾して立ち上	面横ナデ後ヘラミガキ。	普通	坏部外面赤彩。
				がる。			
21	高坏	Α	20.4	脚•裾部欠損。坏部一部欠	坏部外面ヘラケズリ後ヘラ	白色細砂粒、スコリア	P43 PL40
	土師器	В	(7.4)	損。坏部は下位に稜を持ち,	ミガキ,内面ナデ後ヘラミ	橙色	40%
				内彎気味に外傾して立ち上	ガキ。	普通	
				がる。稜部の調整はP41に			
				同じ。			

第7号住居跡出土石製品一覧表

	90	245	沒	=		量	石 質	備考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	1 9	ин ^о б	
第72図 22	砥	石	13.1	(5.5)	2.0	(115.5)	雲母片岩	Q8,床上,一部欠損	PL68
23	磨	石	9.0	6.6	5.0	455.7	安山岩	Q 9	PL69
24	磨	石	9.7	8.4	6.6	754.0	安山岩	Q10	PL69

所見 北西コーナー・西壁際・南壁際に厚い焼土の堆積層が見られ、焼失住居跡と考えられる。 貯蔵穴及びその周囲・炉の周囲及び北西側からの遺物の出土状況は、破損品がそのまま遺棄され た状態と考えられるが、出入り口施設用ピット上及びその周囲の床上から出土した破砕高坏は、 脚部を別の場所に投棄したことが考えられ、住居廃絶にあたり何らかの行為があったものと思わ れる。炭化材が少ないのは、焼失後、片付けが行なわれたためであろうか。本跡の時期は、出土 遺物から古墳時代中期(和泉式期)である。 第72図25~31は覆土中から出土した縄文式土器片である。25は横位細沈線の施された胴部片で、早期中葉(田戸下層式)の時期である。26は前々段多条の羽状縄文,27は絡条体の縄文が施された口縁部片で、付加条縄文の施文された28の胴部片とともに前期前半(黒浜式)の時期である。29・30は無文地に沈線による弧線文の施された口縁部片で、前期後半(興津式)の時期である。31は後期前半(堀之内1式)の口縁部片で、円形刺突文と凹線文が見える。32・33は弥生時代後期の胴部片で、付加条縄文が施されている。



第73図 B地区遺構配置図

(B地区)縄文時代

第54号住居跡 (第74図)

位置 N10h。区。

重複関係 第53号住居跡によって掘り込まれている。東側は調査区域外である。

規模と平面形 長軸不明・短軸4.20mの不整長方形。

壁 壁高 $7 \sim 12$ cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られず,軟弱である。

ピット 7か所。炉と西壁の間に集中している。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ は長径63~80cm・短径52cmの楕円形で深さ28~38cm, $P_3 \cdot P_5 \cdot P_6$ は径26~41cmの不整円形で深さ18~26cmである。 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_6$ は規模及び配列から主柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_5$ は性格不明である。

炉 3か所。炉1は北壁寄りに付設されている。長径52cm・短径36cmの楕円形で,3cm程皿状に床を掘り窪めている。覆土には焼土小ブロック・焼土粒子などを含み,炉床も硬い。炉2は炉1と炉3の間に位置する。長径124cm・短径66cmの楕円形で,床を4cm程皿状に掘り窪めている。炉3は長径72cm・短径54cmの楕円形で,床を2cm程掘り窪めている。覆土は炉2・3とも炉1と同じである。いずれも掘り込みの浅い炉であり,同時使用か時期差があるのかは不明である。

覆土 5層に分層される(層番号は第53号住居跡から通しである)。 5層の褐色土, $6 \cdot 7$ 層の明褐色土が壁際に堆積し, さらにロームブロックを含む褐色土の 3 層が床を広く覆うように入っている。 1 層も褐色土であるがロームの含まれ方が 3 層に比べ少ない。

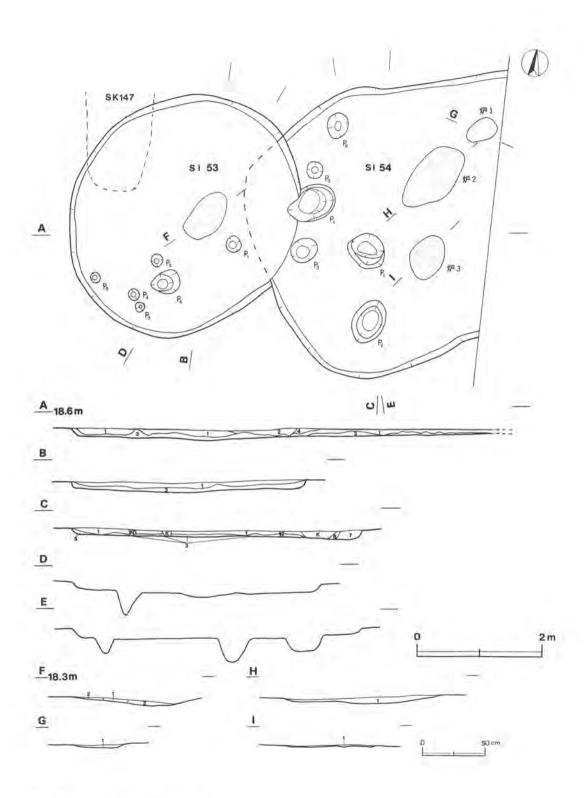
遺物 炉の周辺の床上から10数点の縄文式土器片が出土している。また、北壁際床上から14の凹石が出土している。

所見 複数の炉をもつ住居跡であるが、長期間使用された炉という状態ではない。本跡の時期は 出土遺物から、縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。

第54号住居跡出土石製品一覧表

	40	546	泔	 			石質	備考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 8	ун 3	
第75図 14	凹	石	9.3	8.2	4.6	343.3	安山岩	Q125,北壁際床上	PL68

第75図 $1 \sim 13$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。 1 は早期末の尖底土器の破片で,アナダラ属の貝殻腹縁による波状文が施されている。 $2 \sim 13$ は本跡に伴うものである。 $2 \cdot 3$ は口縁部片で, 2 が単節縄文, 3 が無節縄文である。 $6 \sim 8$ は胴部片で, 8 は絡条体による縄文である。 9 は口縁部片で,半載竹管による平行線文とコンパス文が描かれている。 10はくずれたコンパス文, $11 \cdot 12$ は沈線文が描かれた胴部片である。 13も胴部片で条線文と縄文が施されている。



第74図 第53 • 54号住居跡実測図

S 1 -53・54 土層解説

- 1 褐 色 炭化粒子中量、熊土粒子・ローム粒子・ローム小ブロ ック少量、廃土小ブロック微量
- 2 掲 色 ローム粒子多量,ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子 少量
- 3 におい褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒 子が最
- 4 複 色 ローム粒子多量。焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 巻 包 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、焼土粒子・ 増化粒子中量
- 6 明 褐 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子酸

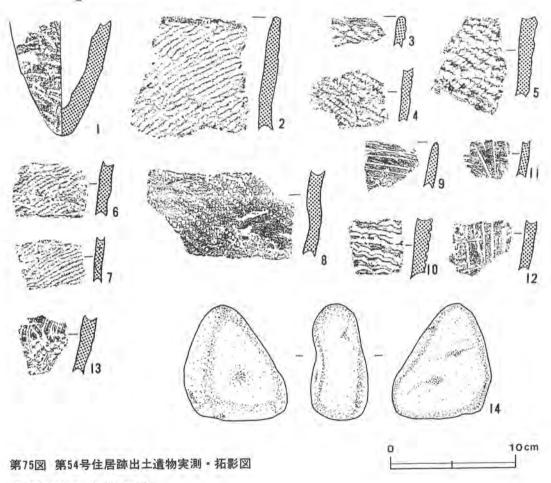
7 明 福 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・ 焼土小ブロック・炭化粒子微量

S 1-53 炉土層解脱

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子・焼土小ブロック中量, 炭化粒子を敷養
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量。ローム粒子中量

S 1-54 停士服解股

1 暗赤褐色 柴土粒子・柴土小ブロック中量,炭化粒子少量



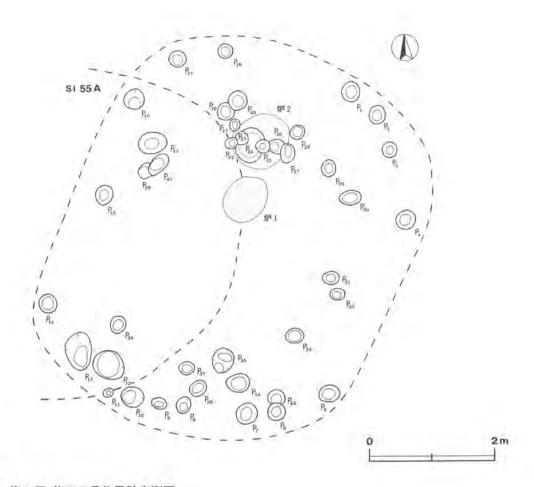
第55B号住居跡 (第76図)

位置 N10ag区。

重複関係 第55A号住居跡と切り合っている。遺物から本跡が先行する住居跡と判断した。 規模と平面形 長軸 [6.54m]・短軸 [5.40m] の [不整長方形]。

壁 表土除去の際。削り取られてしまった。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。第76図の破線は住居跡の推定ラインで、ピット の配列によって判断した。



第76図 第55B号住居跡実測図

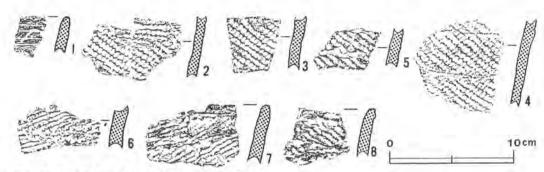
ピット 42か所。住居推定ラインに沿って巡るピット群 $(P_1 \sim P_{18})$ と,炉 1 をやや遠巻きに巡るピット群 $(P_{19} \sim P_{41})$ が認められる。炉 2 が $P_{21} \sim P_{27}$ 上に付設されていることから,炉 1 をやや遠巻きに巡るピット群が炉 2 より先行していると考えられ,拡張住居跡であろう。 $P_1 \sim P_7 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{16} \sim P_{18}$ は規模及び配列から拡張時の主柱穴と思われる。 P_{13} のみ長径60cm・短径40cm の不整楕円形で深さ22cm,他は径 $18 \sim 35$ cmのほぼ円形で,深さ $38 \sim 87$ cmである。これらを主柱穴とする住居跡に伴う炉は炉 2 と考えられる。 $P_{15} \cdot P_{19} \cdot P_{28} \sim P_{31} \cdot P_{33} \cdot P_{34} \cdot P_{37} \sim P_{39}$ が規模及び配列から拡張前の住居の主柱穴であろう。炉 1 はこの主柱穴列に伴うものと考えられる。 $P_{15} \cdot P_{19} \cdot P_{28} \cdot P_{29} \cdot P_{31} \cdot P_{33} \cdot P_{37} \sim P_{39}$ は径 $22 \sim 28$ cmのほぼ円形で深さ $21 \sim 92$ cm, P_{30} は長径36cm・短径24cm の楕円形で深さ70cm, P_{34} は長径38cm・短径30cmの卵形で深さ67cmである。他のピットも規模にややばらつきがあるが,配列から補助柱穴と考えられる。

炉 2 か所。いずれも炉床は火熱によって赤くなっている。炉 1 は長径80cm・短径64cmの楕円形であり、炉 2 は径94cmほどの円形である。

覆土 表土除去の際、削り取られてしまった。

遺物 表土除去の際、縄文時代前期前半(黒浜式)の土器片が多く出土している。

所見 土器片及び住居跡プランから、時期は縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。



第77図 第55B号住居跡出土遺物実測。拓影図

第77図 $1\sim8$ は表土除去の際出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものと考えられる。1 は半截竹管による平行線文とコンパス文の施された口縁部片、 $2\sim6$ は縄文のみの胴部片で、 $2\sim4$ は単節縄文、 $5\cdot6$ は無節縄文が施されている。 $7\cdot8$ は口縁部片で、やはり無節縄文が施されている。

第52号住居跡 (第78図)

位置 N10is区。

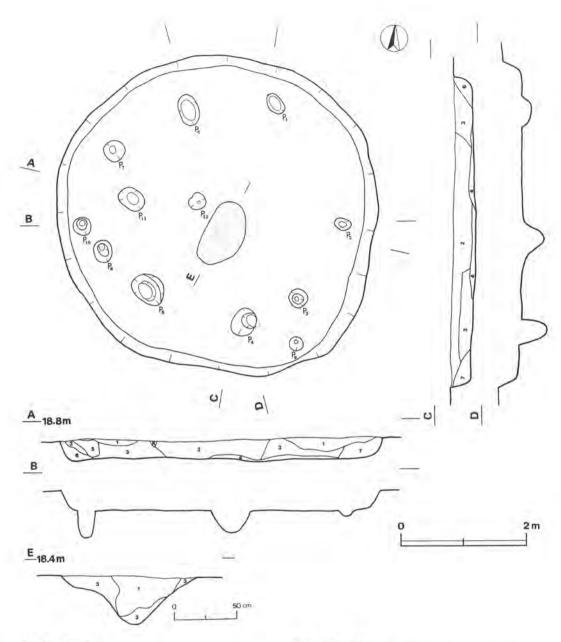
規模と平面形 長径5.10m・短径5.00mの不整円形。

壁 壁高28~34cmで、外傾して立ち上がっている。壁質はしっかりしている。

床緩やかな凹凸がある。踏み締まり部分は見られない。

ピット 12か所。炉を中心に,住居跡の壁に沿って巡る。規模及び配列から $P_1 \sim P_8$ が主柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_2$ は長径28~37cm・短径19~24cmの楕円形で深さ14~15cm, $P_3 \cdot P_6 \cdot P_7$ は径31~35 cmのほぼ円形で,深さ40~52cmである。 P_4 は長径46cm・短径36cmの楕円形で,深さが46cmあり,やや斜位に掘り込まれている。 P_5 は長径58cm・短径44cmの楕円形で深さ30cm, P_8 は長径51cm・短径32cmの楕円形で深さ14cmである。 $P_9 \cdot P_{10}$ は径23~29cmのほぼ円形で,深さが37~44cmあり,位置関係から補助柱穴と考えられる。 P_{11} は長径43cm・短径32cmの楕円形で深さが13cmであるが,性格は不明である。 P_{12} は炉のすぐ西側に位置し,中に焼土粒子・炭化粒子・木炭小片が入っていたことから,炉に伴うピットと考えられる。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径109cm・短径64cmの楕円形で、床を38cm程掘り窪めて地床炉 としている。炉内覆土は赤褐色で焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。

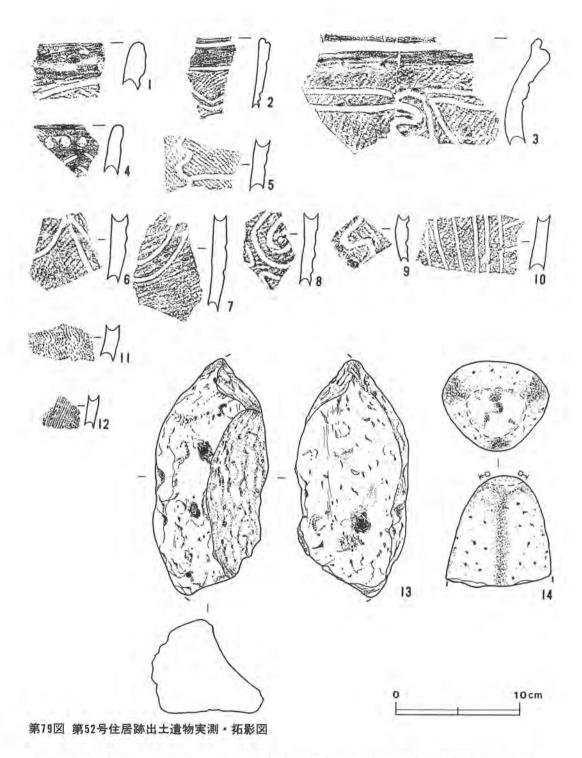


- 5 1 52 土層解説
- 1 掲 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム 粒子中量、焼土小ブロック微量
- 2. 暗 褐 色 焼土粒子・ローム粒子中量,炭化粒子・ローム小ブロック 少量
- 3 褐 色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 褐 色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量, 炭化粒子・ローム小ブロック中量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量, 桃土粒子微量, 炭化粒子少量
- 6 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 におい褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第78図 第52号住居跡実測図

S 1-52 炉土層解説

- 1 にぷい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロッタ中量、ローム粒子・炭化粒子 少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 褐 色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック少量、ロ ーム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 4 赤 褐 色 廃土粒子・廃土小ブロック多量



覆土 7層に分層される。炉上を中心に木炭小片・焼土粒子などを含む褐色土の4層が堆積している。6・7層は壁際に堆積した褐色土及び鈍い褐色土で、3・5・2・1層がその上に窪地を埋めるように入っている。2・3層は暗褐色及び褐色の厚い土層である。1~6層中には焼土粒

子・炭化粒子が含まれている。

遺物 各層中から縄文式土器片が出土しているが、中・下層に特に多い。13の石皿・14の敲石が 東壁側 4層中から出土している

所見 本跡の時期は覆土下層出土の遺物から、縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられる。

第79図 $1 \sim 12$ は覆土から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものと考えられる。 $1 \sim 4$ は口縁部片で、1 は無文の口縁下には縄文地文に沈線によるモチーフが描かれている。 $2 \cdot 3$ は口縁直下に沈線が巡っており、縄文地文に沈線による蕨手文・山形文などが描かれている。 4 は口縁直下に円形押圧文が巡っており、胴部には沈線によるモチーフが描かれている。 $5 \sim 10$ は縄文地文に沈線による蕨手文などの曲線文、 $11 \cdot 12$ は条線文の施された胴部片である。

第52号住居跡出土石製品一覧表

	器	種	法	ŧ	1	īt .	石 質	備考
図版番号	- Tab	但	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 具	DEI C
第79図 13	石	Ш	(18.9)	(9.3)	7.1	(1327.6)	安 山 岩	Q123,破片,東壁際 4 層中 PL68
14	敲	石	(9.1)	(8.7)	7.2	(641.5)	安山岩	Q124, 欠損品, 東壁際 4 層中 PL68

第56号住居跡 (第80図)

位置 N10h4区。

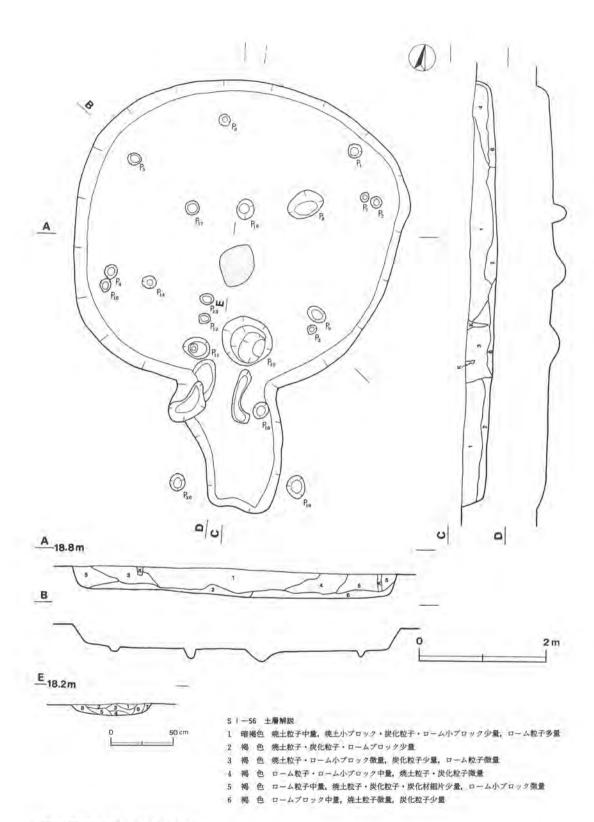
規模と平面形 長径5.20m・短径5.15mで柄部長およそ2mの柄鏡形。

主軸方向 N-14°-W。

壁 壁高28~34cmで、外傾して立ち上がっている。壁質はしっかりしている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 20か所。規模及び配列から $P_1 \sim P_6$ が主柱穴と考えられる。径が $16 \sim 21$ cmのほぼ円形で深さは $10 \sim 24$ cmである。 $P_7 \cdot P_9 \cdot P_{15}$ は位置関係から補助柱穴であろう。 $P_{12} \sim P_{14} \cdot P_{17} \cdot P_{16}$ は炉を囲むように位置しているが,性格は不明である。規模は径 $18 \sim 27$ cmのほぼ円形で深さ $16 \sim 22$ cmである。 P_8 は長径60cm・短径41cmの楕円形で深さ12cmであるが,やはり性格不明である。柄部の前に位置する $P_{10} \cdot P_{11}$ は柄部に伴うピットと考えられる。 P_{10} は径80cm程の円形で深さ32cm, P_{11} は長径42cm・短径34cmの楕円形で中の小ピットの深さは52cmである。 $P_{10} \cdot P_{11}$ には南側に「八」字状に開く溝状の掘り込みが接しており,柄部を区画している。 P_{16} は径28cmの円形で深さが36cmあり,柄部の出入り口施設に伴うピットであろう。柄部先端の対になる位置に $P_{19} \cdot P_{20}$ がある。径24cmと36cmの不整円形で,深さ13cmと20cmである。柄部外の出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第80図 第56号住居跡実測図

S 1-56 炉土層解脱

1 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量、廃土小ブロック・炭化粒子少量、ローム 小ブロック微量

2 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量。廃土小ブロック・炭化粒子微量、ローム 小ブロック 少量

3 頭 赤 褐 色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量

4 略 赤 褐 色 焼土粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック酸量、焼 土小ブロック少量 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・ローム粒子少量

6 暗赤 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量

7 におい赤褐色 様土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロッタ少量

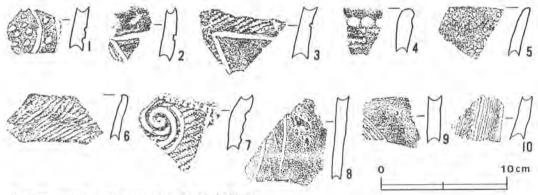
8 昭 梅 色 徳士粒子・成化粒子・ローム小ブロック微量・ローム粒 子中骨

炉 中央に付設されている。長径71cm・短径54cmの不整楕円形で、床を10cm程掘りくぼめて地床 炉としている。炉の覆土は焼土小ブロック・焼土粒子などを含む赤褐色土で、炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 6層に分層される。焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土の2・6層が壁際から床上に広く堆積している。さらに3・4・5層の褐色土が壁際を中心に堆積し、深い凹レンズ状の窪地に1層の暗褐色土が入っている。5・6層中には量は多くはないが、炭化材・木炭細片が含まれている。また、各層には焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物 出入り口に当たる部分の覆土下層及び床に接して、縄文式土器片がまとまって出土している。 覆土上層からも土器片が多く出土しているが、時期にばらつきがあり、周辺からの流れ込み であろう。

所見 縄文式土器片は前期・中期・後期の各時期にわたるが、後期前半(称名寺式期〜堀之内式期)のものがやや多い。床上出土の土器及び住居跡の形態から、本跡の時期は縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられる。



第81図 第56号住居跡出土遺物実測・拓影図

第81図1~10は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。1~3は沈線区画内に列点文・縄文が施され、後期初頭(称名寺式)の時期である。4~10は本跡に伴うものであろう。4は口縁直下に円形押圧文が巡っている。5・6は縄文施文の口縁部片である。7・8は沈線によってモチーフの描かれた胴部片で、7は地文に縄文(前々段多条)が施されている。9・10は斜位に条線文の施された胴部片である。

第57号住居跡 (第82図)

位置 N10j4区。

規模と平面形 長径不明・短径4.40mの [不整楕円形]。東側は調査区域外である。

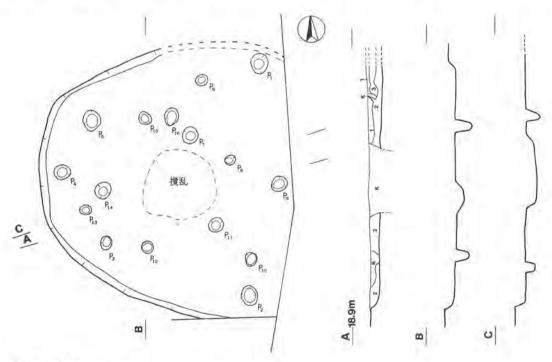
壁 壁高10~16cmで、緩く外傾して立ち上がっている。壁質は柔らかい。北壁の一部は推定である。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 16か所。規模及び配列から $P_1 \sim P_5$ が主柱穴と考えられる。径22 \sim 36cmのほぼ円形で深さ $20\sim$ 26cmである。床中央部に後世の撹乱土坑があり,それを囲むように径20 \sim 27cmのほぼ円形で 深さ $18\sim$ 30cmほどの $P_6 \sim P_{14}$ の小ピットが巡っている。撹乱土坑内に焼土ブロックが含まれている ことから,炉のあった位置とも考えられる。その推測が正しければ,炉を囲むように掘り込まれたピット群であったことも考えられる。

炉 認められない。撹乱土坑の位置に炉があったと考えられる。

覆土 3層に分層される。2・3層の焼土粒子・炭化粒子を含む褐色土が壁際から床上に広く堆



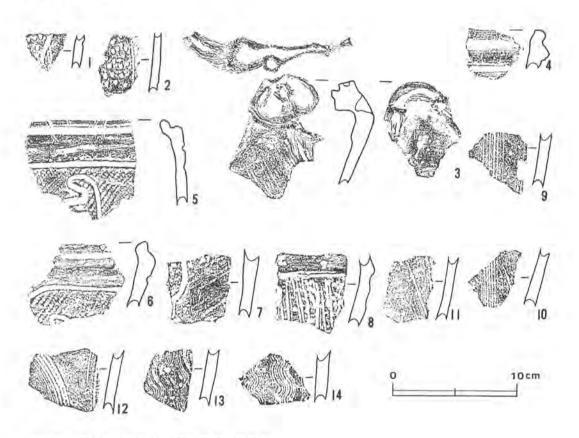
- S 1-57 土層解説
- 1 暗褐色 焼土粒子中量,炭化粒子・ローム小ブロック微量,ローム 粒子中量
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 福 色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム小ブロック少量



第82図 第57号住居跡実測図

積している。1層は暗褐色土である。2・3層はロームブロックの有無で分層している。

所見 出土土器の大半は縄文時代後期前半のもので、わずかに前期・中期のものが混じる。床上から後期前半の土器が出土していることから、本跡の時期も縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられる。



第83図 第57号住居跡出土遺物実測・拓影図

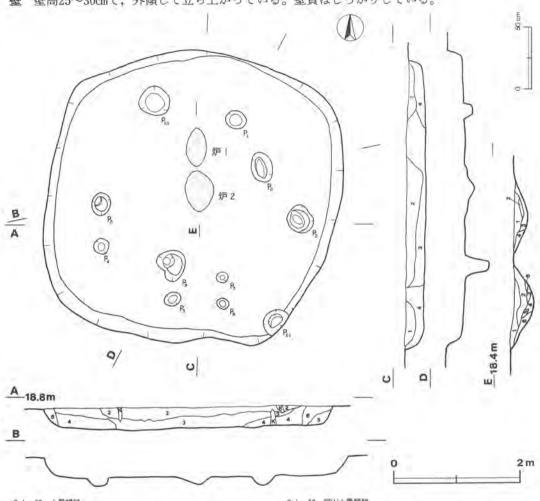
第83図1~14は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。1・2は沈線区画内に列点文が施された胴部片で、後期初頭(称名寺式)の時期である。3は口縁突起部で、沈線と円形刺突文で特異な造形である。やはり称名寺式で新しい段階であろう。4~6は口縁直下に沈線が巡り、5・6の胴部には縄文単節LR地文に蕨手文などの沈線文が施されている。8~14は条線文の施された胴部片で、4~6とともに本跡に伴うものであろう。13・14は流水状の条線文である。

第58号住居跡 (第84図)

位置 N10j2区。

規模と平面形 長径4.70m・短径4.65mの不整円形。

壁 壁高25~30cmで、外傾して立ち上がっている。壁質はしっかりしている。



- S 1 -58 土層解説
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量, ローム粒子
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量、ローム粒子少量
- 3 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量, ローム小ブロック
- 4 掲 色 ローム小ブロック・炭化粒子・炭化材細片少量、焼土粒子・ ローム小ブロック微量
- 5 掲 色 焼土粒子微量, 炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

S 1-58 炉(1)土層解脱

- 1 によい赤褐色 焼土小ブロック多量, ローム小ブロック微量
- 2 によい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック 微量、炭化粒子少量
- 8 によい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、ロ ーム小ブロック中盤
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
 - 5 赤 褐 色 焼土プロッタ
- 6 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量

5 1 - 58 炉(2)土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック多量
- 2 赤 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子中量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック多量

第84図 第58号住居跡実測図

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

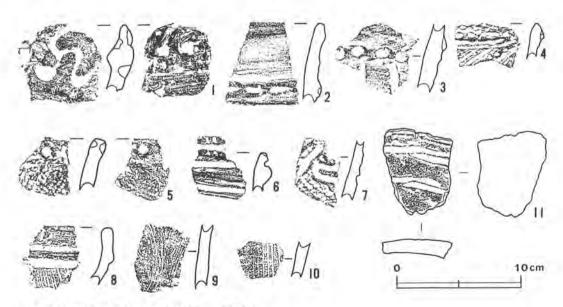
ピット 11か所。規模及び配列から炉を中心に巡っている $P_1 \sim P_3 \cdot P_5$ が主柱穴と考えられる。 $P_1 \sim P_3 \cdot P_5$ は長径28~46cm・短径21~39cmの楕円形で深さ13~26cmである。 $P_4 \cdot P_6 \sim P_9$ は規模にややばらつきがあるが,主柱穴の周辺に位置し補助柱穴と考えられる。 P_{10} は炉の西側に位置し,径50cm程の不整円形で深さ14cmである。 P_{11} は南東壁に接しており,長径45mの円形で深さ57cmである。いずれも性格不明である。

炉 中央に2か所。炉1は長径61cm・短径32cmの楕円形で,床を10cm程皿状に掘り窪めて地床炉としている。炉内覆土は焼土粒子・炭化粒子を含む鈍い赤褐色土で,炉床は火熱で硬くなっている。炉2は長径65cm・短径45cmの楕円形で,床を15cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉の覆土は炉1と同様である。

覆土 6層に分層される。 $5 \cdot 6$ 層の褐色土及び暗褐色土が壁際に堆積してのち、褐色土の $3 \cdot 4$ 層が入り、さらに起伏のあるその上に $1 \cdot 2$ 層が堆積している。各層中には焼土粒子・炭化粒子がわずかに含まれている。

遺物 3・4層中に縄文式土器片が多く含まれている。器形のうかがえるものはほとんどない。 11の土器片錘は覆土中の出土である。

所見 炉1・2については、時期差があるのかどうか不明である。覆土中の土器片の大半は縄文 時代後期前半(堀之内式期)であり、前期・中期の土器片はわずかである。また、後期前半以降 の土器が含まれていないことから、本跡の時期は縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられ る。



第85図 第58号住居跡出土遺物実測・拓影図

第58号住居跡出土土製品一覧表 (PL65)

FOTHER CO.	IJA	266		法		量 (cm)	孔 径	重 量	現存率	備	老
図版番号	器	器種		最大長	最大幅 最大厚 (cm) (g)	(g)	(%)	V/FB			
第85図 11	土 器	片	錘	6.9	5.6	1.2		46.2	100	DP69,覆土中,胴部片利用	

第85図1~10は覆土中から出土した縄文式土器片である。1は隆帯C字文が組み合わされた口縁部片で,後期初頭(称名寺式)の時期であろう。2~10は本跡に伴うものと考えられる。2は無文の口縁部が刺突の施された隆帯によって区画されている。3は隆帯下に沈線が垂下している。4は刺突の施された隆帯が口縁部から胴部に巡らされている。5は口縁直下に沈線が巡り,沈線上には刺突の施された円形浮文が配される。胴部は縄文である。6も口縁部片で,肥厚する口縁部に2本の沈線が巡る。7は縄文(単節LR)地文に蕨手文が描かれている。8は隆帯により無文の口縁部が区画され、隆帯下は条線文である。9・10も条線文の施された胴部片である。

第59号住居跡 (第86図)

位置 N 9 i₇区。

規模と平面形 長径4.70m・短径4.40mの不整円形。

壁 壁高16~18cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。壁質は柔らかい。また、南東部は立 ち上がりがはっきりしていない。

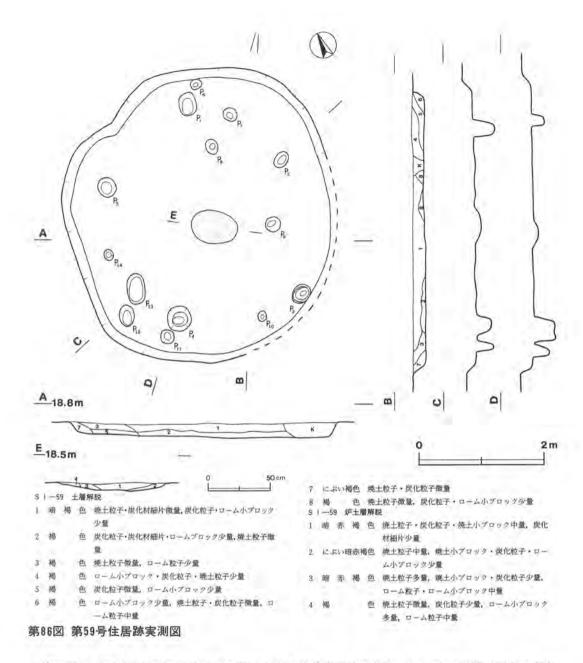
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 14か所。規模及び配列から $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_{10} \cdot P_{13}$ が主柱穴と考えられる。長径27~42cm・短径21~39cmの楕円形及び円形で,深さ21~35cmである。他のピットも主柱穴に沿って位置しており、補助柱穴的なものと考えられるが,規模にはばらつきが見られる。

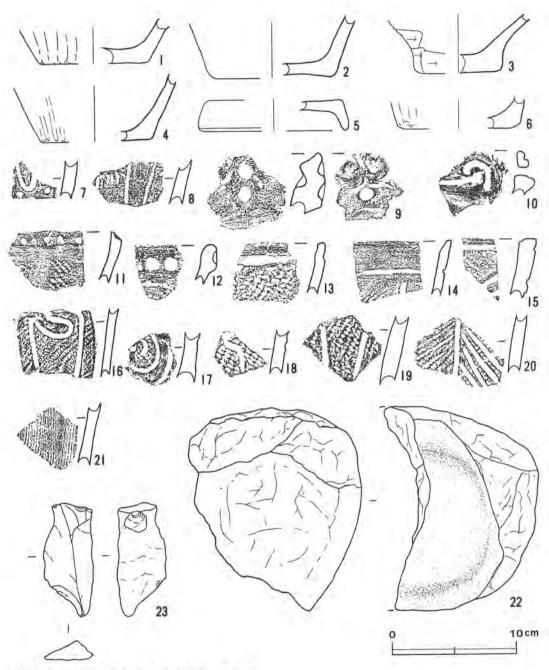
炉 中央に付設されている。長径76cm・短径55cmの楕円形で、床を7cm程掘りくぼめて地床炉としている。炉内覆土は焼土粒子・焼土ブロックをやや多く、炭化粒子をわずかに含む赤褐色土である。 **覆土** 8層に分層される。8層の褐色土がブロック状に床上に、6・7層の褐色及び鈍い褐色土が壁際に堆積している。そのうえに2・5層の褐色土が床上を広く覆うように入っている。3・4層はその後壁際に入った褐色土である。各層には焼土粒子・炭化粒子が含まれている。1・2層中には木炭片が含まれている。

遺物 炉の周囲の覆土中から縄文式土器片が多く出土している。壁際には少ない。床上出土遺物 も少なく,わずかに浮いた状態で土器片が覆土下層から少量出土している。 $1\sim6$ の底部片,22 の石皿片・23の剝片も覆土中の出土である。

所見 各層中から出土している土器の大半は縄文時代後期前半(堀之内1式期)のものであり、 本跡の時期も該期と考えられる。



第87図7~21は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。7・8は沈線区画内に列点 文の施された胴部片、9は小突起のある口縁部片で、表裏に円形刺突文があり、後期初頭(称名 寺式)の時期であろう。10~21は本跡に伴うものと考えられる。10は波状口縁部片で、口縁直下 を巡る沈線がC字状沈線と組み合わさっている。11・12は口縁直下に円形刺突文が巡っている。 13~15は無文の口縁部が沈線によって区画され、さらに14・15は縄文地文に沈線によるモチーフ が描かれている。16~20も縄文地文に沈線によるモチーフの描かれた胴部片で、17は沈線内を磨 消している。21は条線文の施された胴部片である。



第87図 第59号住居跡出土遺物実測·拓影図

第59号住居跡出土遺物観察表

図版素具	版番号 器 種 法量(cm)		器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備 考
第87図	深鉢	B (2.8)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外領 して立ち上がる。施文は見られず、外面縦ヘラミガキで 内面横位のナデ。	白色細砂粒 にぶい橙色 普通	P 230 5 %
2	深 鉢 御文式土器	B (4.5) C [10.0]	底部から胴部下端にかけての破片。やや上げ底気味の底	細砂粒, スコリア	P231 5 %

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考		
第87図	深鉢	B (4.7)	底部から胴部下端にかけての破片。やや突出気味の底部	砂粒、スコリア	P 232		
3	縄文式土器	C [7.1]	から外反して立ち上がる。施文は見られず下端は横へラ	にぶい橙色	5 %		
			ケズリ,内面ナデ。底面ヘラミガキ。	普通			
4	深 鉢	B (4.5)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外傾	白色細砂粒多量	P 233		
	縄文式土器 C [9.0]		して立ち上がる。施文は見られず外面縦へラミガキ,内	橙色	5 %		
			面ナデ。	普通			
5	台付(鉢)	B (2.5)	台部片。低い台部で「ハ」字状に開く。円孔を有すると思	白色細砂粒多量	P 234		
	縄文式土器	C [11.8]	われる。施文は見られず,外面横へラミガキ。	にぶい黄橙色 普通	5 %		
6	深鉢	B (2.2)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外傾	白色細砂粒多量	P 235		
	縄文式土器	C [10.0]	して立ち上がる。施文はなく縦位のナデ。	橙色 普通	5%		

第59号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	法量				T 5%	/ ***	-tr	
四,灰田 ラ		独	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備	考	
第87図 22	石	Ш	(16.3)	(14.1)	12.5	(2386.5)	安山岩	Q126, 欠損品		PL69
23	剝	片	4.6	2.0	0.8	6.0	頁 岩	Q128, 覆土中		PL65

第53号住居跡(第74図)

位置 N10hs区。

重複関係 第54号住居跡を掘り込み、また、北壁側を第147号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径4.05m・短径3.60mの楕円形。

壁 壁高12~14cmで、外傾して立ち上がっている。壁質はしっかりしている。

床緩い起伏がある。踏み締まり部分は見られない。

ピット 6 か所。 $P_1 \sim P_5$ は径 $14 \sim 25$ cmのほぼ円形で深さ $16 \sim 30$ cm, P_6 は長径46cm・短径38cmの不整楕円形で深さ38cm,配列に規則性がなく性格不明である。

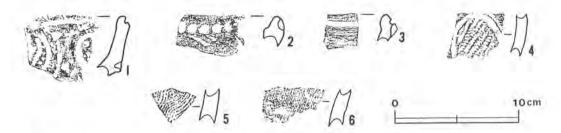
炉 中央に付設されている。長径86cm・短径50cmの楕円形で,床を4cm程掘りくぼめて地床炉としている。炉内覆土には焼土粒子や炭化粒子を含むが多い量ではない。火熱によって硬くなった部分も認められない。

覆土 2層に分層される。1・2層とも焼土粒子・炭化粒子を少量含む褐色土である。焼土ブロックの有無で分層している。土層から本跡が第54号住居跡を掘り込んでいるのが判る。

遺物 覆土中及び床上から縄文式土器が10数片出土している。

所見 遺物は縄文時代中期後半・後期前半の土器片で、混在している。本跡の時期は中期後半~後期前半の間で考えておきたい。

第88図 $1\sim 6$ は縄文時代後期前半(堀之内 1 式)の土器片である。 1 は山形突起の口縁部片で,円形刺突文と沈線によってモチーフが描かれている。 2 は口縁直下に円形刺突文, 3 は沈線文が巡っている。 $4\sim 6$ は胴部片で, 4 の沈線による区画内は単節縄文 R L である。 $5\cdot 6$ は条線文が施されている。



第88図 第53号住居跡出土遺物実測。拓影図

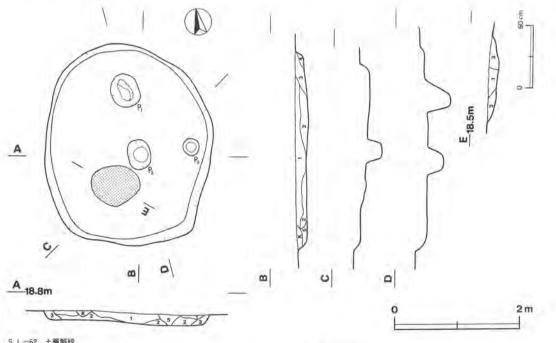
第62号住居跡 (第89図)

位置 N9hs区。

規模と平面形 長径3.30m・短径2.80mの不整楕円形。

壁 壁高10~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 緩い起伏がある。踏み締まり部分は見られない。



- 51-62 土層解説
- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量、ローム小ブ ロック少量、焼土小ブロック微量
- にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム子
- 色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム小ブロッタ少量
- (に よい 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子製量、炭化粒子少量
- 色 焼土粒子・炭化粒子酸量。ローム粒子・ローム小ブロ ック少量

- 1 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量、廃土小ブロック・炭化粒子少量、ロ ームプロック融量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック 少量、炭化粒子中量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック 少量,炭化粒子微量

第89図 第62号住居跡実測図

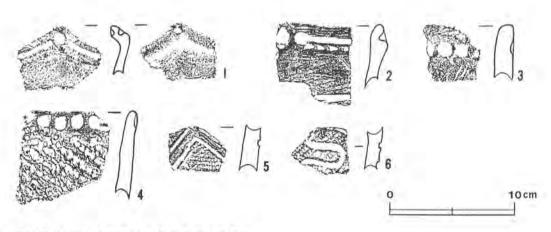
ピット 3か所。 $P_1 \cdot P_2$ は長径48~54cm・短径36~43cmの楕円形で深さ29~36cmである。 P_3 は径 26cmのほぼ円形で深さが16cmあるが、いずれも配列に規則性がなく性格不明である。

炉 中央からやや南西寄りに付設されている。長径76cm・短径65cmの楕円形で、床を8cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉の覆土は焼土粒子を多量に含む赤褐色土で、炉床は硬くなっている。

覆土 5層に分層される。壁際に $3 \cdot 4$ 層の褐色土が堆積してのち、2層の鈍い赤褐色土が広く上を覆い、さらに同色の 1層が堆積している。 $1 \cdot 2$ 層は焼土ブロックの有無で分層している。 5層は後世の掘り込みであろう。各層にはいずれも焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物 覆土上層から縄文式土器片がやや多く出土している。床上出土は数点である。

所見 極めて規模が小さいが、炉があることから住居とした。出土土器の大半は縄文時代後期前 半(堀之内1式期)のものであり、本跡の時期は該期と考えられる。



第90回 第62号住居跡出土遺物実測·拓影図

第90図 $1\sim 6$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものである。 $1\cdot 2$ は口縁直下に沈線が巡り、円形刺突文が配される。 1 は口縁部が鋭く内傾し、内面にも円形刺突文がある。 $3\cdot 4$ は口縁直下に円形押圧文が巡っている。 $5\cdot 6$ は縄文地文に沈線による山形文・蕨手文が描かれた胴部片である。

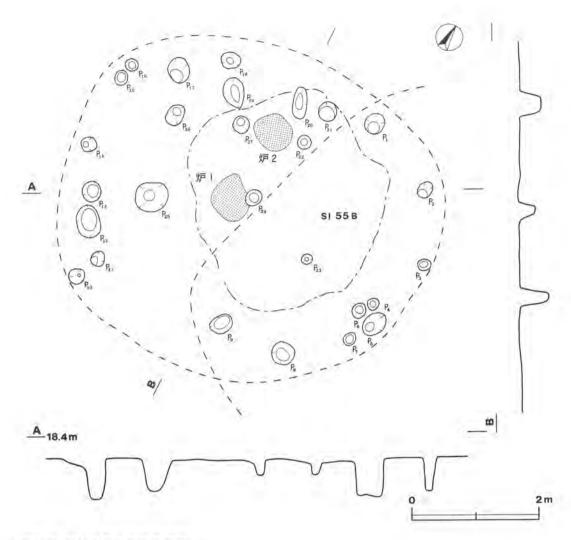
第55 A号住居跡 (第91図)

位置 N10a7区。

重複関係 第55B号住居跡と切り合っている。

規模と平面形 長径 [6.11m]・短径 [5.39m] の [楕円形]。

壁 覆土が浅く表土を除去した段階で、壁は削り取られてしまった。



第91図 第55A号住居跡実測図

床 炉を含め、その東側部分にかけて径約3mの範囲で、床の踏み締まりが認められる。他の部分は軟弱である。第91図の破線は住居跡の推定ラインで、ピットの配列で判断した。

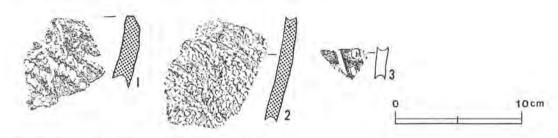
ピット 27か所。第55B号住居跡と重なる部分を加えるとさらに 6 か所増えるが、配列からそれらは第55B号住居跡に伴うものと判断した。 P_{18} 内から北宋銭(政和通寶)が 1 枚出土しており、また、 P_{19} とともに覆土が柔らかく、両ピットとも本跡に伴うものではないと考えられる。多くのピットは推定住居跡プランに沿って巡っている。規模にややばらつきがあるが、 $P_{1} \sim P_{3} \cdot P_{5} \cdot P_{8} \cdot P_{11} \cdot P_{13} \sim P_{15} \cdot P_{17}$ が配列から主柱穴と考えられる。 $P_{1} \cdot P_{5} \cdot P_{8} \cdot P_{15} \cdot P_{17}$ は径31~43cmの不整円形で深さ12~70cm, $P_{2} \cdot P_{3} \cdot P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{15}$ は径21~25cmの不整円形で深さ10~61cmである。 $P_{4} \cdot P_{7} \cdot P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{16}$ は補助柱穴と考えられるが、他については性格不明である。 P_{24} は炉1を掘り込んでおり、後世のものと思われる。

炉 中央に 2 か所。炉 1 は長径24cm・短径55cmの不整楕円形で、炉床は火熱によって硬くなっている。炉 2 は長径62cm・短径53cmの楕円形である。

覆土 表土除去の段階で、削り取られてしまった。

遺物 表土除去の際、縄文時代前期・後期、中・近世の土器片が出土している。

所見 内耳土器の小片やカワラケ片の出土から、中世の遺構も重複していた可能性がある。北宋 銭もそのためであろう。本跡は縄文時代の住居跡と考えられるが、遺物から時期の特定は難しい。 住居の形態及び土器から、後期の可能性があることを指摘しておく。



第92回 第55 A 号住居跡出土遺物実測·拓影図

第92図1~3は表土除去の際出土した縄文式土器片である。1は絡条体による縄文の口縁部片で,2とともに前期前半(黒浜式)の時期,2は単節縄文のみの施文で,胴部片である。3は沈線区画内に列点文が施された胴部片であり,後期初頭(称名寺式)の時期である。

(C地区) 縄文時代

第29号住居跡 (第94図)

位置 L15ia区。

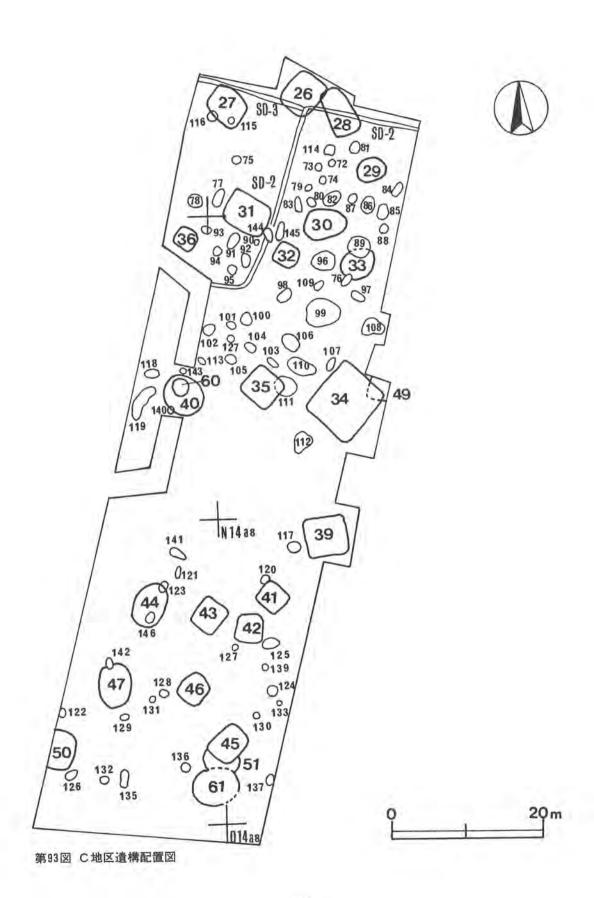
規模と平面形 長径3.96m・短径3.90mの不整方形。

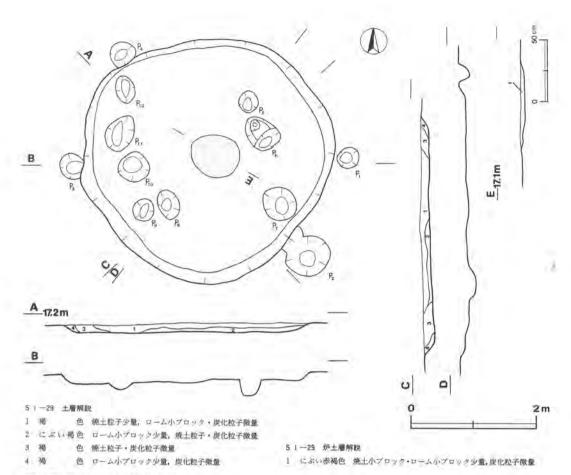
壁 壁高8~15cmで、なだらかに立ち上がっている。壁質は柔らかい。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 住居跡内に8か所・住居跡外に4か所。壁に接して住居跡外にある $P_1 \sim P_4$ は配置に規則性が認められ、住居跡に伴うピットと考えられる。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ は径34~40cmのほぼ円形で深さ10~20 cmである。 P_2 は径50cmの円形で、深さは45cmである。住居跡内のピットは、炉を挟んで東西に向き合う位置である。規模及び配置から $P_5 \cdot P_7 \cdot P_9 \cdot P_{12}$ が主柱穴になろう。 $P_5 \cdot P_9 \cdot P_{12}$ は径34cm程のほぼ円形で深さ10~28cm、 P_7 は径60cm程の円形で深さ19cmである。 $P_6 \cdot P_8 \cdot P_{10} \cdot P_{11}$ も主柱穴列に位置している。

炉 中央部に1か所付設されている。長径80cm・短径70cmの楕円形で、床を5cm程掘りくぼめた





第94図 第29号住居跡実測図

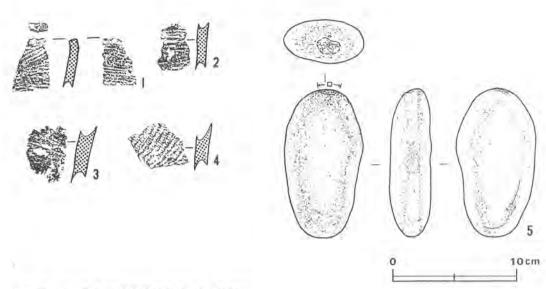
地床炉である。あまり焼けておらず、炉内覆土中に含まれる焼土粒子・炭化粒子も少ない。

覆土 4層に分層される。 $3 \cdot 4$ 層の褐色土が壁際に堆積してのち、焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む $1 \cdot 2$ 層が入っている。

遺物 1・2層中から、わずかに土器片・円礫が出土している。器形の分かるものはなく、いずれも小破片である。5の敲石が北壁寄り1層中から出土している。

所見 炉は長期間使用されたという状況ではない。覆土中からの出土遺物も少ないが、住居跡の 形態とも考え合わせ、本跡の時期は縄文時代早期末(茅山式期)と考えられる。

第95図 $1\sim 4$ は覆土中から出土した縄文式土器片である。 1 は表裏条痕文土器で,口唇上にアナダラ属の貝殻背圧痕がある。 $2\cdot 3$ は裏面の条痕ははっきりしない。 $1\sim 3$ は本跡に伴うものであろう。 4 は前々段多条の縄文で,繊維脱痕も甚だしく前期初頭の時期であろうか。



第95図 第29号住居跡出土遺物実測。拓影図

第29号住居跡出土石製品一覧表

FORTIES and FOL	99	86	祖	2		肚	7 /01	Atti de		
図版番号	110	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	CI DI	1個 多		
第95図 5	酸	石	12.0	6.3	3.4	366.3	安山岩	Q58, 北壁寄り1層中		

第30号住居跡 (第96図)

位置 M15ai区。

規模と平面形 長径6.08m・短径4.27mの不整楕円形。

長径方向 N-78°-W。

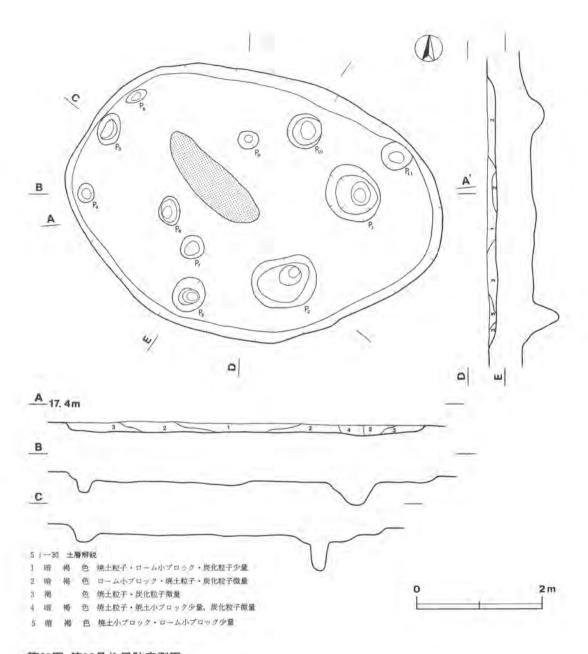
壁 壁高10~13cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 11か所。西壁際に3か所,炉を囲むように8か所認められる。 $P_4 \sim P_6 \cdot P_9 \sim P_{11}$ は長径30~53 cm,短径21~34cmの円形及び楕円形で深さ7~20cmである。炉の南東側の $P_1 \sim P_3 \cdot P_7 \cdot P_8$ は規模に差がある。 $P_1 \cdot P_2$ は長径94~100cm,短径80~82cmの楕円形で二段掘り込み状をしており,深さ18~55cmである。 $P_3 \cdot P_7 \cdot P_8$ は径42~56cmのほぼ円形で,深さ14~43cmである。炉を囲んでおり,いずれも柱穴と考えられるが,主柱穴は特定できない。

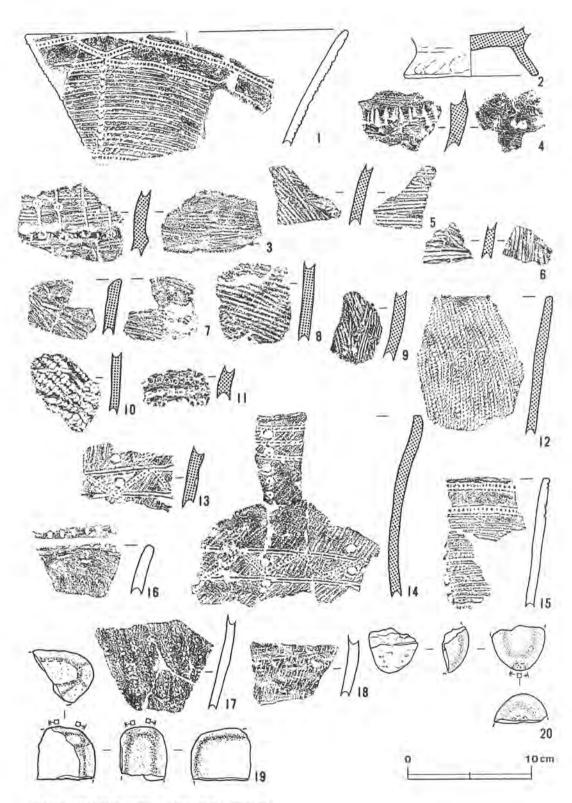
炉 中央部に付設されている。長径190cm・短径63cmの細長い楕円形で、1 cmの厚さで被熱土層が 見られる。北西部分のほうにやや焼土粒子が多い。

覆土 5層に分層される。3層が壁際に堆積してのち、皿状の窪地にローム小ブロックを含む5・ 4・2・1層が流れ込んでいる。いずれも焼土粒子・炭化粒子をわずかに含んでいる。



第96図 第30号住居跡実測図

遺物 各層中から縄文式土器片が出土しているが、器形の分かるものはない。2の底部片は1層中、1の深鉢は焼土上からの出土である。また19と20の敲石は炉の南側1層中からの出土である。所見 炉の焼土は少なく、長期間使用したという状況ではない。覆土上層からは縄文時代前期の土器片も出土しているが、床上出土の土器片のほとんどが縄文時代早期末(茅山式期)であることから、該期と考えられる。



第97回 第30号住居跡出土遺物実測·拓影図

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第97図	深 鉢 縄文式土器	A [26.0] B (9.1)	頸部から口縁部にかけての破片。胴部は外反気味に立ち上がる。無文地に、口縁部に平行して半截竹管状工具による有節線文を3段施し、幅の狭い口縁部の1・2段間は無文帯で、中に1・2段をつなぐようにV字状の有節線文を配す。その下に竹管の背を利用して、1条の押し引き文が3段目の有節線文まで垂下する。2・3段間は横位の沈線文が充填されている。以上の施文は同一工具による。口縁部の形状から、V字状文の上には山形の造形があるかもしれない。	砂粒多量, 長石,石英,雲母 にぷい褐色 普通	P112 PL40 10%
2	台 付 鉢 縄文式土器	1	台部から底部にかけての破片。台部は「ハ」字状に開く。 施文はない。底部は平坦である。繊維脱痕が見られる。	白色細砂粒,スコリア, 繊維多量 明赤褐色 普通	P113 20%

第97図3~18は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。3~9は条痕文系土器で本跡に伴うものと考えられる。3はキザミのある隆帯によって区画される口縁部片で,円形刺突文と縦沈線が組み合わされた文様が描かれている。4はくずれた隆帯上にキザミが施された頸部片である。5~7は表裏条痕文土器の胴部片で,8・9は表面に条痕が見られない胴部片である。10~11は前期初頭の時期か。10は単節縄文RLで,11は円形竹管文が3段施されており、いずれも胴部片である。12は付加条一種付加2条の縄文が施された口縁部片で前期前半(関山式)である。13・14は同一個体であろう。縄文地文に竹管による施文で、口縁部は押引き爪形文、胴部には平行沈線間に押引き山形文で、それぞれに円形竹管文を施している。いずれも前期前半(黒浜式)である。15~18は前期後半(浮島式)の時期である。15は半截竹管による押引き爪形文と横線文の口縁部片であり、1とは同一個体になるものと思われる(断面の傾きは1に訂正)。16~18はアナダラ属による貝殼腹縁文が施されており、16は口唇部にキザミがある。17・18は胴部片である。

第30号住居跡出土石製品一覧表

	ngo.	種	过	÷		量		質	備考
図版番号	器	悝	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	111	Ą)HH ''3
第97図 19	敲	石	(4.9)	(4.5)	(3.8)	(94.3)	礫	岩	Q59,破損品,炉の南側1層中
20	敲	石	(4.5)	4.3	2.3	(37.0)	礫	岩	Q60,同上

第32号住居跡 (第98図)

位置 M14b。区。

規模と平面形 長径4.25m・短径3.65mの楕円形。

長径方向 N-55°-W。

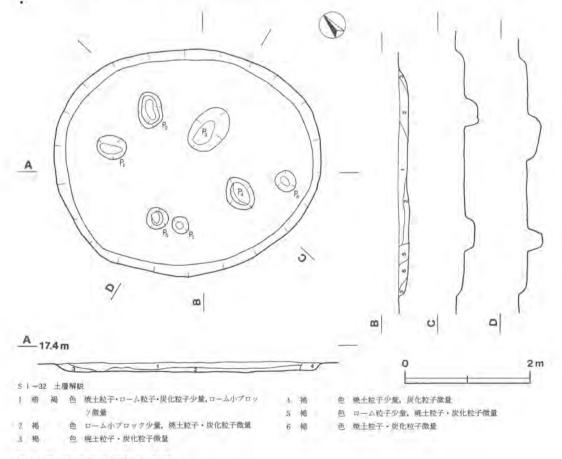
壁 壁高8~15cmで、なだらかに立ち上がっている。壁質は柔らかい。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 7か所。 P_6 を除き、壁からやや離れて五角形状に巡る。規模にややばらつきがあるが、 $P_7 \sim P_5$ が主柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4$ は長径48~60cm、短径36~42cmの楕円形で、深さ16~22 cmである。 P_8 は長径80cm・短径53cmの楕円形で深さ18cm、 P_5 は径34cmの円形で深さ15cmである。 P_7 は径27cmの円形で深さが15cmあり、補助柱穴と考えられる。 P_6 は径35cmの円形で深さ16cmであるが、性格は不明である。

炉確認できなかった。

覆土 6層に分層される。3・5・6層が壁際に堆積し、その上に1・2層が流れ込んでいる。

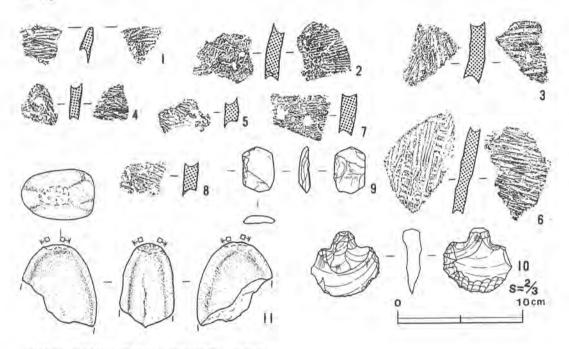


第98図 第32号住居跡実測図

いずれの層中にも焼土粒子・炭化粒子が少量ずつ含まれる。

遺物 各層中から土器片が出土しているが、量は少ない。9の礫石斧・10の石匙・11の敲石は覆 土中の出土である。

所見 炉をもたない小型の住居跡で、時期は出土遺物から縄文時代早期末 (茅山式期) と考えられる。



第99図 第32号住居跡出土遺物実測・拓影図

第99図 $1 \sim 8$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片であり、本跡に伴うものと考えられる。 1 は口縁部片、他は胴部片である。 $1 \sim 6$ は表裏条痕文土器で、 6 は横位後縦位に施されている。 $7 \cdot 8$ は裏面にはほとんど条痕は見られない。 7 は棒状工具による刺突列が施されている。

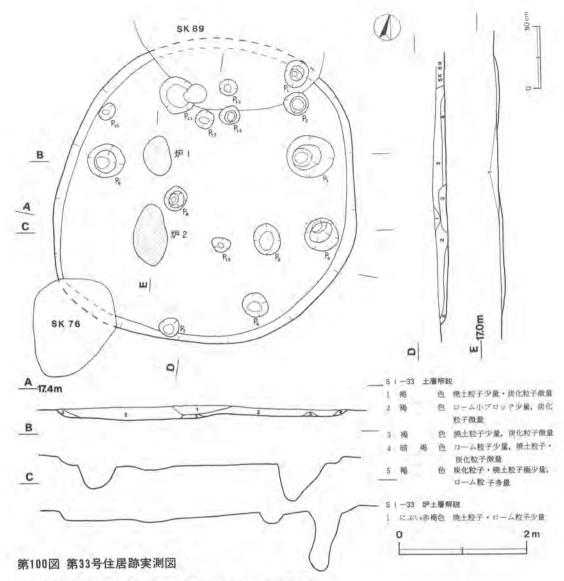
第32号住居跡出土石製品一覧表

備考	質	7	R	3	-	进	pini.	器	図版番号	
佣	M	石	重量(g)	厚さ(cm)	幅 (cm)	長さ(cm)	租	500	MALEY T	
Q64, 欠損品, 覆土中	1 岩	安山	(155, 3)	4.4	(5.9)	(6.7)	石	敲	第99図 11	
Q65, 一端が片刃状, 覆土中PL6	岩	泥	7.5	1.0	2.5	3.7	并	礫 7	9	
Q65, 覆土中 PL6	五石	展報	2.7	0.8	2.8	2.2	匙	石	10	

第33号住居跡 (第100図)

位置 M15b2区。

重複関係 北側部分を第89号土坑に、南西側部分を第76号土坑に掘り込まれている。



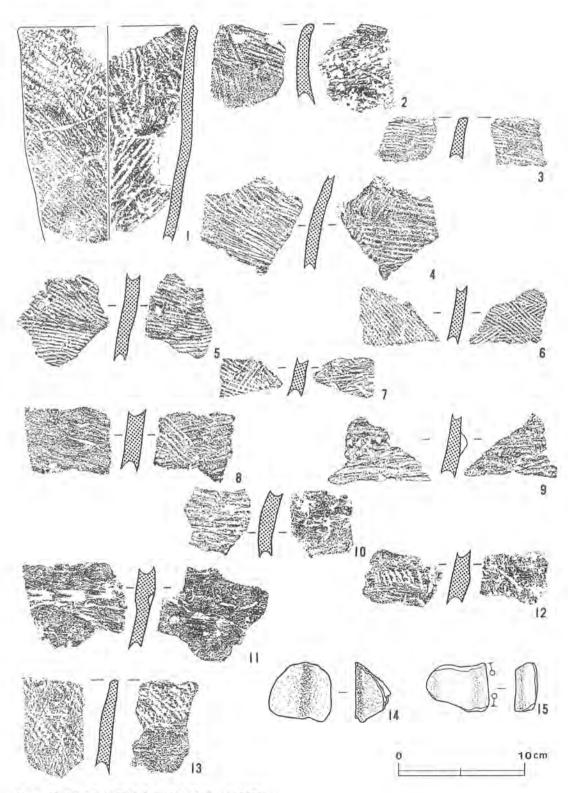
規模と平面形 長径[5.15]m・短径[4.80]mの不整円形。

壁 壁高10~12cmで、外傾して立ち上がっている。

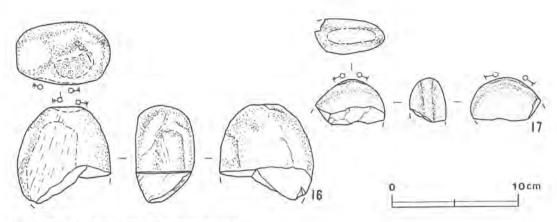
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 15か所。 $P_7 \cdot P_{10} \cdot P_{12} \sim P_{15}$ は径28~32cmの円形及び不整円形で,深さは9~33cmである。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_5 \cdot P_5 \cdot P_8$ は径34~42cmの不整円形で深さ16~94cmである。 $P_3 \cdot P_4 \cdot P_9 \cdot P_{11}$ はやや規模が大きく,径56~76cmの不整円形で深さ16~94cmである。 P_4 は外傾する深いピットである。配列・規模から $P_2 \cdot P_6 \cdot P_7 \cdot P_{10} \cdot P_{12}$ が主柱穴と考えられるが,第76号土坑によって壁際のビット1か所が掘り込まれている可能性もある。

炉 焼土の薄い広がりである。中央から西側寄りの $P_8 \cdot P_9$ 間に2か所(炉 $1 \cdot 2$)。炉1は長径63 cm \cdot 短径43cmの楕円形で,焼土層の厚さは3 cm である。炉2は長径100cm \cdot 短径56cmの楕円形で,焼土層の厚さは5 cm である。いずれも浅い皿状の掘り込みであるが,火熱を受けて赤く硬くなっ



第101図 第33号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)



第102図 第33号住居跡出土遺物実測図(2)

た部分は見られない。

覆土 5層に分層される。4層が壁際から床の一部を覆って、さらに3・5層がブロック状に入り、その上に焼土粒子をやや多く含む2層が流れ込んでいる。3・4層はロームブロックの多少で分層している。1層は後世の焼土の堆積層であるが、遺物を含まず、時期の特定はできない。 **遺物** 覆土中層から縄文式土器片がやや多く出土している。すべて小破片である。1の深鉢及び15と17の磨石・14と16の敲石は2層中の出土である。

所見 焼土の薄い広がりは、炉というより一時的に火を使った場所と考えられる。本跡の時期は 床上出土の土器から判断して、縄文時代早期末(茅山式期)と考えられる。

Arca TIL	Contract Land	遺物観察表
	EE-200 HH	
クロンン クロエ	/白郎山山	ルヨーケリ世元ファイス

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第101図 1	1000	鉢 式土器	A [14.5] B (17.2)	胴下半部から口縁部にかけての破片。胴下半部から外傾 して立ち上がり、中位から口縁部にかけては直立気味で ある。胴部外面は下半部が条痕文(アナダラ属の貝によ る)で、中位から上半部にかけて縄文(太めの単節R L で横回転)を施文している。中位では条痕文と重なる。 胴部内面は条痕文(斜位・横位で、条間が粗く外面とは別 の貝)である。口唇部は外そぎ状で、上面に半截竹管状 工具による押し引き文が巡る。	量 橙色	P119 60%	PL40

第101図 $2\sim13$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片で、1とともに本跡に伴うものと考えられる。 $2 \cdot 3 \cdot 13$ は口縁部片、他は胴部片である。 $2\sim7$ は表裏条痕文土器で、 $6 \cdot 7$ の裏面には交差するように重ねて条痕を施している。 8 は擦痕状の整形で、裏面にわずかに条痕が見られる。 $9\sim13$ も擦痕による整形である。 9 は口縁部に段を持ち、半載竹管による爪形文が施されている。 10 は条痕文地文で、アナダラ属の貝殻背圧痕が巡らされている。 11 はゆるい段上に半載竹管による横に長い「コ」字状の刺突、12 はキザミが施されている。 13 は擦痕地文に表裏に縄

文(撚りのゆるい単節 R L か)が施文されている。裏面の縄文は口縁部のみである。13は前期初頭まで下がる可能性もある。

第33号住居跡出土石製品一覧表

EVALUE AND DE	ion i	26	过	-		凝	- m	備考		
図版番号	器	榧	長き(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	1/H -5		
第101図 14	遊	石	(4.9)	(5.0)	(2.8)	(63.0)	砂岩	Q67, 破片, 2層中		
15	磨	石	(4.9)	(5.0)	1.8	(43.6)	砂岩	Q68, 破片, 2層中		
16	敝	石	(7.7)	7.5	4.7	(341.6)	チャート	Q69, 磨石兼用, 欠損品, 2層中		
17	商	石	(3.5)	5.5	2.9	(59.9)	安山岩	Q70, 破片, 2層中		

第36号住居跡 (第103図)

位置 M14a7区。

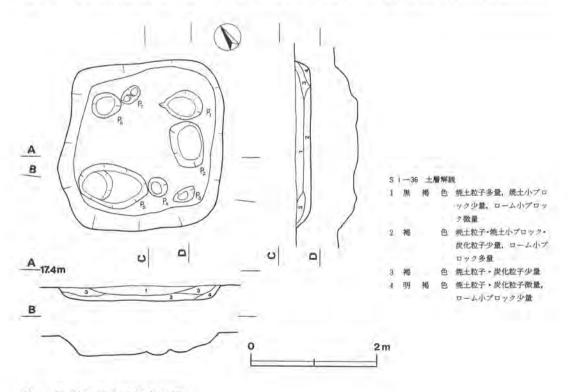
規模と平面形 長軸2.70m・短軸2.45mの不整方形。

長軸方向 N-32°-E。

壁 壁高15~23cmで、緩やかな傾斜をもって立ち上がっている。

床 凹凸があり、軟弱である。

ピット 7か所。規模がばらばらであるが、壁に沿って巡っている。規模の小さいP4は径30cmの



第103図 第36号住居跡実測図

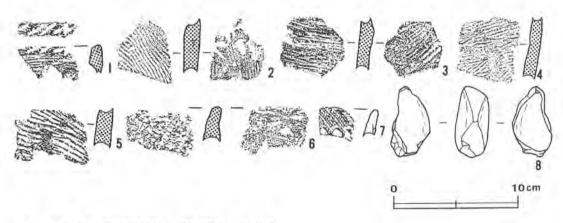
円形で深さ8 cm, 大きい P_s は長径113cm を短径70cmの楕円形で深さ8 cm である。他のピットも深さは8~11cm と浅い。規模の違いはあるが、配列から $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5$ (堀り込みの西側部分) $\cdot P_6$ が主柱穴と考えられる。他は性格不明である。

炉確認できなかった。

覆土 4層に分層される。ローム小ブロックを含む層が壁際に堆積してのち、2層が床全体を広く覆うように入っている。その後、壁際に3層が入って、皿状の窪地に1層が堆積している。 遺物 数は多くはないが、縄文式土器片を中心に土器片が各層から出土している。器形の分かる

遺物 数は多くはないが、縄文式土器片を中心に土器片が各層から出土している。器形の分かる ものは1点もない。8の磨製石斧は覆土中の出土である。

所見 住居跡というには、約6.6㎡の床面積は小さすぎる感じである。床上も含め住居跡から出土 している大半の土器は、縄文時代早期末の条痕文系土器である。本跡の時期は、出土遺物から縄 文時代早期末(茅山式期)と考えられる。



第104図 第36号住居跡出土遺物実測。拓影図

第104図1~6は床上及び覆土中から出土した縄文時代早期末(茅山式)の土器片で、本跡に伴うと考えられる。1~3は表裏条痕文土器で、1の口唇上には斜位のキザミが施されている。4・5の裏面には条痕は認められない。6は縄文条痕文土器の口縁部片である。単節縄文LRが横回転で施文さらている。7は弥生時代後期の口縁部片である。複合口縁の下端には幅広の棒状工具による押圧が施されている。縄文は付加条一種付加2条である。

第36号住居跡出土遺物石製品一覧表

初時季息		nn	種	π	进		0	版	75 97	海			
図版番号	1 11	88		100 T			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	C M	VM 15	
第104図 8	蘑	휈	石	斧	(5.6)	(3.1)	2.7	(53.2)	流 紋 岩	Q78,破片,覆土中	PL67		

第60号住居跡 (第105図)

位置 M14f6区。

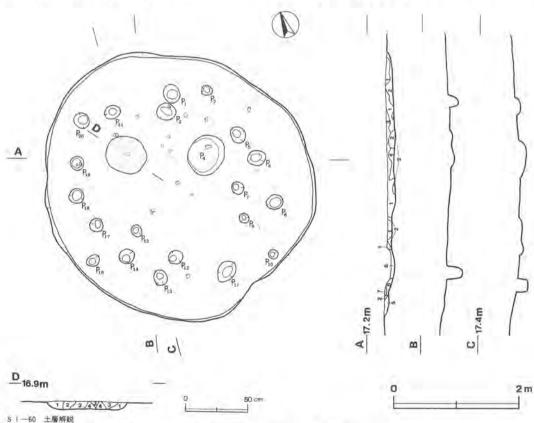
重複関係 第40号住居跡と重なっており、掘り込まれている。

規模と平面形 長径4.50m・短径4.27mの不整円形。

壁 第40号住居跡の掘り込みで、壁は良好には残ってなく、壁高6~9 cmである。壁際の床から なだらかに立ち上がっている。

床 緩やかな起伏がある。踏み締まり部分はなく、軟弱である。

ピット 21か所。壁に沿って巡っており、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_8 \cdot P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{17} \sim P_{01}$ は壁柱 穴と考えられる。P₁₁のみ長径38cm・短径27cmの楕円形で深さが16cmあり、他は径18~26cmの不整



- 色 焼土粒子蔵量、ローム小ブロック少量、ローム粒子
- 色 ロームブロッグ中量、廃土粒子・ローム粒子少量 2
- 色 焼土粒子微量
- 赤 楊 色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、焼土粒子中量、 焼土小ブロック微量
- 色 ローム小プロック少量
- 極暗赤褐色 焼土粒子少量
- 色 燒土粒子少量, ローム粒子中量
- 極暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子微量、焼土小ブロック・炭化粒

第105図 第60号住居跡実測図

色 焼土粒子微量、ローム粒子・ローム小ブロック少量

2 掲 色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子少量

色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック 少量

4 赤 褐 色 廃土プロック各量

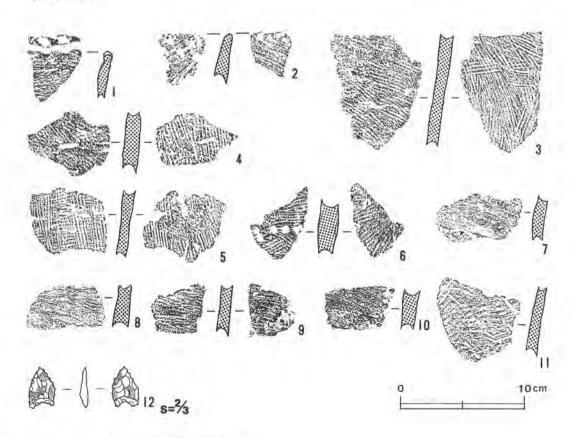
円形で深さ $7 \sim 30$ cmである。 $P_2 \cdot P_7 \cdot P_9 \cdot P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{15} \cdot P_{16}$ は規模及び位置関係から補助柱穴と考えられる。 P_4 は覆土中に焼土ブロック・焼土粒子を含む長径66cm・短径58cmの楕円形で,深さ10cmの皿状に掘り込まれたピットであるが,性格は不明である。

炉 中央からやや北西寄りに付設されている。径64cmのほぼ円形で、床を9cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床中央に火熱によって硬くなったロームブロックがあったが、その周りはさらさらした感じの焼土粒子で、硬くない。

覆土 8層に分層される。 $2 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 8$ 層の褐色土及び暗赤褐色土がやや起伏のある堆積の仕方で床を覆っている。その上に1層が入り、さらに $3 \cdot 7$ 層が堆積している。

遺物 覆土中の土器片は多くはないが、炉の周辺から縄文時代早期末の条痕文系土器がまとまって出土している。1層中からは第40号住居跡に伴う遺物も出土している。12の石鏃は覆土中から出土している。

所見 本跡は第40号住居跡の床精査時に、そのほぼ中央から確認された。出土遺物も縄文時代早期と中期に限られ、遺物の出土状況及び住居跡プランから、本跡の時期は早期末(茅山式期)と考えられる。



第106図 第60号住居跡出土遺物実測·拓影図

第106図 $1\sim11$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものである。 $1\cdot2$ は口縁部片で、1の口唇上には棒状工具による押圧が、2の口縁直下及び口唇内面には棒状工具による刺突文が巡らされている。 $3\sim6$ は表裏条痕文の胴部片で、6には棒状工具による刺突文が巡らされている。 $7\sim11$ は胴部片で、 $7\sim10$ は $1\cdot2$ とともに擦痕文が施されている。 11は表面は条痕文、裏面は擦痕文が施されている。

第60号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	注	ž.	-	ii.	F 5	質	備	#	
凶权钳与	100		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11)			ح.	
第106図 12	石	鏃	1.5	1.1	0.3	0.4		石	Q129覆土中		PL66

第28号住居跡 (第107図)

位置 L15g2区。

重複関係 北西コーナー部を第26号住居跡によって掘り込まれている。さらに第2号溝が本跡の中央部分を横断している。

規模と平面形 長軸 [6.10m]・短軸 [4.03m] の [不整長方形]。

長軸方向 N-12°-W。

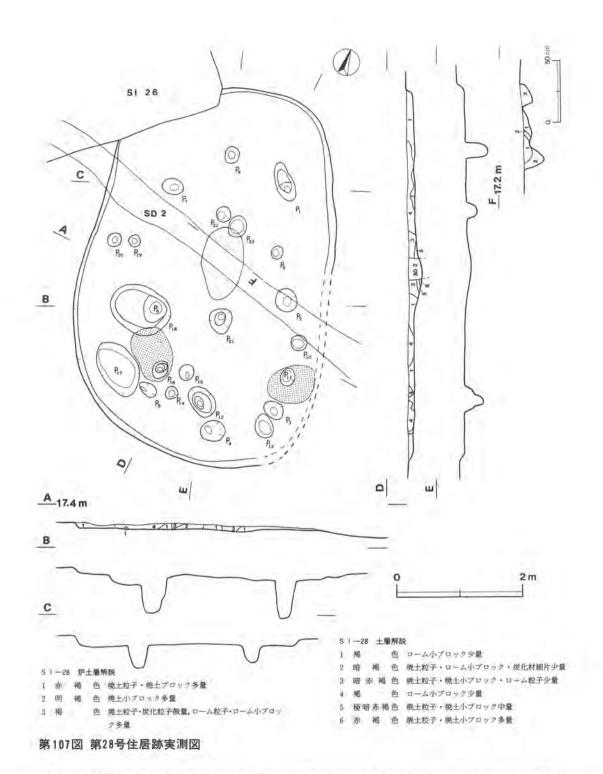
壁 壁高11~16cmで、外傾して立ち上がっている。壁質は柔らかい。南東部壁は立ち上がりがつかめなかった。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

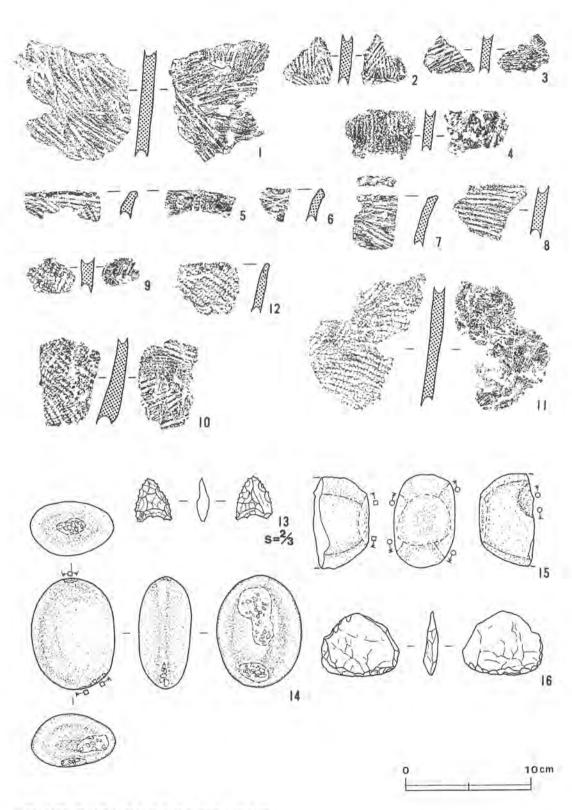
ピット 23か所。 $P_{21} \sim P_{23}$ を除いて,中央の炉を中心に壁際に巡っている。規模及び配列から $P_1 \sim P_8$ が主柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_7$ は長径32~66cmの不整楕円形で深さ28~46cm, $P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_8$ は径23~38cmの不整円形で深さ30~66cmである。 $P_9 \sim P_{16} \cdot P_{19} \cdot P_{20}$ は規模にばらつきがあるが,主柱穴に沿って巡っており補助柱穴と考えられる。 $P_{17} \cdot P_{18}$ は長径100cm・短径60~74cm・深さ16~18cmであるが,性格は不明である。 $P_6 \triangleright P_{18} \triangleright D$ 関係は, P_6 が P_{18} を掘り込んでいるのが土層から観察できた。 P_{11} は薄い焼土の広がりを掘り込んでいる。また, P_{16} を薄い焼土が覆っていた。 $P_{21} \sim P_{23}$ は中央の炉を挟んで対の位置にあり, P_{23} の中には焼土が入っていた。

炉 中央部に付設されている。長径1.18m・短径0.66mの楕円形で,床を15cm程掘り込んで地床炉としている。炉床は一部、火熱で硬くなっている。

覆土 6層に分層される。5・6層は炉内焼土層である。1層が壁際から床全体に,起伏のある 堆積をしている。焼土粒子・炭化材細片を含む2層,それらを含まない4層がその上に入ってい る。3層は炉上の土層である。



遺物 各層中から縄文式土器片が出土している。器形の分かるものはない。床上出土の土器片も 少ない。東壁際床上から13の石鏃、覆土中で北壁側から16の掻器・西壁寄りから14と15の敲石が 出土している。また、南東壁際床上から偏平な楕円礫が、5個まとまって出土している。



第108図 第28号住居跡出土遺物実測。拓影図

所見 床上出土の土器は縄文時代早期末~前期初頭の繊維を含む条痕文・縄文・縄文条痕文系土器であり、時期もその中で考えておきたい。焼土の広がりは炉というよりは、一時的な火の使用の場所と考えられる。礫だまりの石は意図して持ち込んだものであろうが、火熱は受けてなく、性格は不明である。

第108図 $1 \sim 12$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片であり、本跡に伴うものと考えられる。 $1 \sim 5$ は表裏条痕文土器片である。 $6 \sim 8$ は裏面の条痕はほとんど見られない。 7 は口唇上に押圧痕がある。 $9 \sim 11$ は縄文条痕文土器の胴部片で、 9 は縄文が羽状に施文されている。 12は繊維脱痕の甚だしい口縁部片で、 裏面に条痕は見られない。

第28号住居跡出土石製品一覧表

	an an	:0:E	注	ž.	:	量	石質	備考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 具	JA G	
第108図 13	石	鏃	2.1	1.5	0.3	1.0	チャート	Q54,床上	PL66
14	敲	石	9.0	6.8	4.2	358.9	砂岩	Q55, 西壁際覆土中	PL68
15	敲	石	(7.5)	(4.9)	4.9	(224.6)	花崗岩	Q56,磨石兼用,破損品,同	上PL67
16	掻	器	5.1	6.3	1.2	39.1	ホルンフェルス	Q57, 北壁際覆土中	PL67

第40号住居跡 (第109・110図)

位置 M14f6区。

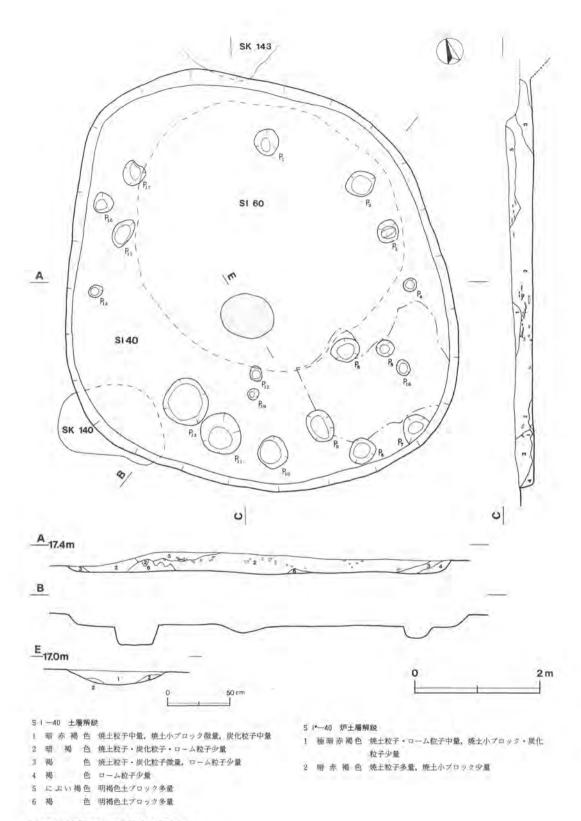
重複関係 第60号住居跡と完全に重なっており、本跡が掘り込んでいる。また、北壁・西壁の一部がそれぞれ第143号土坑(炉穴)・第140号土坑(炉穴)を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径7.40m・短径6.50mの不整楕円形。

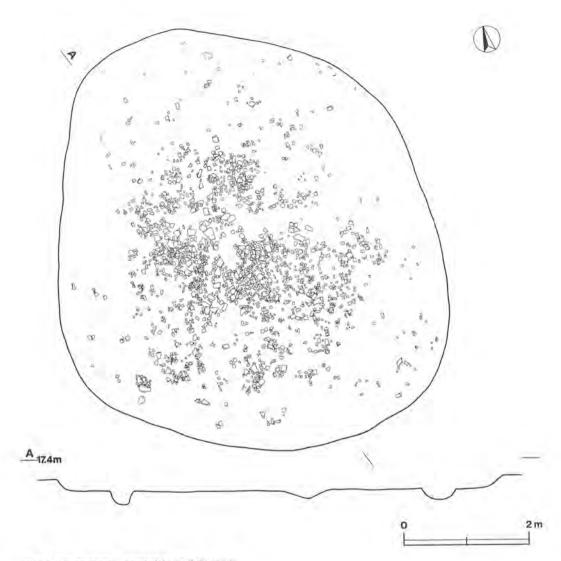
壁 壁高は16~20cmで、緩く外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。中央部分は第60号住居跡の覆土で,土器細片まじりの暗褐色土である。住居跡 南東部の $\mathbf{P}_5 \sim \mathbf{P}_9 \cdot \mathbf{P}_{18}$ に囲まれた部分を中心に,踏み締まりが認められる。

ピット 19か所。 $P_1 \sim P_3$ は第60号住居跡の覆土を掘り込んでいる。炉を中心に,壁際にピットが巡っているが,規模にばらつきがある。 $P_1 \sim P_3 \cdot P_6 \cdot P_8 \cdot P_9 \cdot P_{15} \sim P_{17}$ は径30~44cmの不整円形で深さが14~21cm, $P_4 \cdot P_5 \cdot P_{14} \cdot P_{18} \cdot P_{19}$ は径18~28cmのほぼ円形で,深さ 7~20cmである。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_{15} \cdot P_{17} \cdot P_{19}$ は位置から,主柱穴と考えられる。 $P_3 \cdot P_{12} \cdot P_{14} \cdot P_{16}$ は位置から補助柱穴と考えられる。 P_7 は壁に接しており,深さ16cmで $P_5 \sim P_9$ に囲まれた部分が踏み締められていることから,出入り口施設が南東部に位置していたことも考えられる。 $P_5 \cdot P_7 \sim P_9 \cdot P_{18}$ はそれにともなうピットであろうか。 P_{11} は径48cmのほぼ円形で深さが66cmあり,底面から縄文時代中期の土器片が出土している。 P_{10} は径66cmのほぼ円形で深さ43cm, P_{19} は径72cmの不整円形で深さ30cmで



第109図 第40号住居跡実測図



第110図 第40号住居跡遺物出土状況図

ある。これらは壁に沿って位置しているが、性格は不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径86cm・短径70cmの楕円形で、床を14cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤いが、硬くなっていない。

覆土 6層に分層される。3・4層の褐色土が壁際に堆積してのち、6層がブロック状に入り、 その上に縄文式土器片を多量に含む暗褐色土の2層が厚く堆積している。1・5層も土器片を多く含む土層である。1層には焼土粒子・炭化粒子などを含む火熱を受けた土が入っていた。

遺物 多量の縄文時代中期の土器片に混じって、1・2・5層中から縄文時代早・前期の土器片も多く出土している。早期の遺物については該期の遺構が掘り込まているので、それらとの関連が考えられる。中期の土器片は完形になるものはなく、また、土器片の量に比べて底部片は少な

すぎる。 2 層以降の土層堆積時に多量の土器片をあまり期間をおかずに,一気に投棄したものであろう。第111・112・113図 $1 \sim 17$ の土器はいずれも $1 \cdot 2 \cdot 5$ 層からの出土である。 4 の深鉢は 2 層下の炉上出土である。また,85~87の石鏃・88の石錐が床上から出土している。さらに,多量の土器片に混じって,89の石匙・82~84の土製円板・93と96の磨石・90・91・92の打製石斧・97の軽石・94と95の凹石が覆土中から出土している。

所見 本跡は第60号住居跡に完全に重なるかたちで構築されている。そのため、床面精査時には本跡に伴う土器片とともに、炉の周りの暗褐色土の上面から早期の土器片も多く出土している。本跡の時期は床上出土の土器片から、縄文時代中期後半(加曽利EIII式期)と考えられる。

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量	社(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第111図 1	深 鉢 縄文式土器	A B	33.6 (23.7)	胴部中位から口縁部にかけての破片。内彎気味に立ち上がる胴部は縄文(単節RL縦回転)を施文している。平 縁の口縁部は幅の狭い無文帯である。内面はナデ。	長石,石英 浅黄橙色 普通	P150 20%	PL40
2	深 鉢 縄文式土器		[36.2] (15.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。内鬢気味に立ち上がる胴部は櫛歯状工具による縦位の密な条線文。平縁の口縁部とは太めの凹線によって区画される。口縁部は横位に磨かれた無文帯である。内面黒色で磨かれている。	細砂粒,スコリア 浅黄橙色 普通	P 151 15%	PL40
3	深 鉢 縄文式土器		[38.0] (11.7)	胴部上半から口縁にかけての破片。強く内彎して口縁部 に至る。平縁の口縁部は幅の狭い無文帯でよく磨かれて いる。胴部は縄文 (単節RLの縦回転) を施文している。	砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P 152 10%	PL41
4	深 鉢 縄文式土器	1	[38.4] (19.6)	胴部上半から口縁部にかけての破片。平縁の深鉢で内彎 気味に立ち上がる。胴部には曲線的な条線文(条数は9) を施文する。口縁部は浅い凹線によって区画され磨きの 施された無文帯である。	細砂粒,スコリア 明黄褐色 普通	P153 30%	PL42
第112図 5	深鉢縄文式土器	1	[22.0] (17.8)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は緩い波状である。口縁部無文帯を竹管状工具による円形刺突列で 区画する。刺突列下は縄文(幅の狭い単節LRの横回転、 以下は縦回転)地文に、一条の沈線によって逆U字状の 区画文を構成する。区画内は丁寧に磨消している。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 154 15%	PL40
6	深 鉢 縄文式土器		[19.8] (13.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は3本1単位 の沈線を垂下し,その間を磨消している。磨消し帯間に は縄文(単節RLの縦回転)を施文している。口縁部は 隆帯と太い沈線によって楕円形区画文と横長に崩れた[の] 字形区画文で,区画内に縄文(単節RLの横回転)を充 塡している。	砂粒, スコリア 赤褐色 普通	P155 30%	PL40
7	深 鉢 縄文式土器	A B	[37.0] (6.4)	平縁の口縁部片。口縁部と胴部は断面三角形の隆帯によって区画される。胴部には同様の曲線的隆帯が垂下する。 口縁部は無文帯,胴部は縄文(単節RL縦回転)を施文 している。	長石,石英,スコリア 橙色 普通	P 156 5%	PL41
8	深 鉢 縄文式土器	A B	[19.3] (7.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。平縁で施文は縄文 (単節LRの横回転)のみである。原体の長さは1.8~2.0 cmである。内面は横位のナデ。	砂粒,スコリア にぶい橙色 普通	P157 20%	PL41
9	深 鉢 縄文式土器	1	[23.8] (15.6)	胴部下半から口縁部にかけての破片で、緩い波状口縁である。胴部は2本の太い凹線が直線的に垂下し、幅広の磨消し帯を作る。磨消し帯間は縄文(単節LRの縦回転)を充塡。口縁部は太い凹線によって楕円形の区画文を構成し、区画内に縄文(単節LR)を充塡している。	細砂粒 橙色 普通	P158 60%	PL41

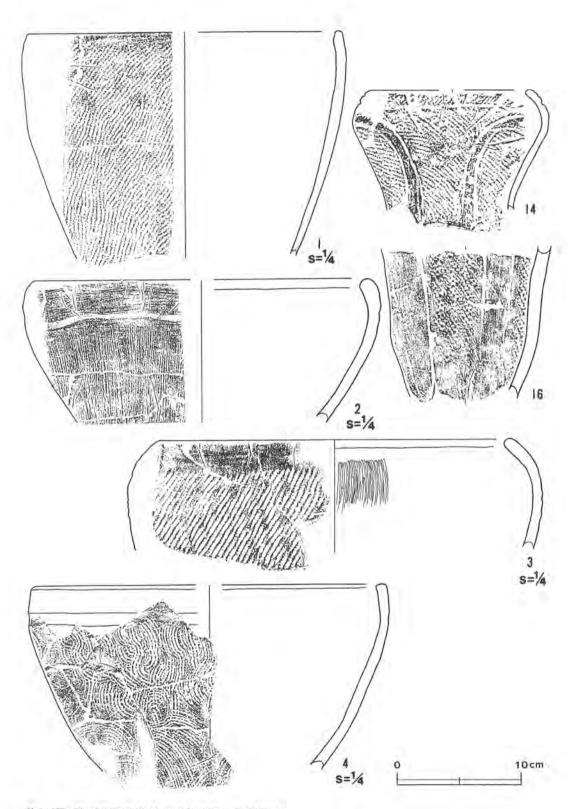
図版番号	器 種	法	量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第112図	深鉢	A	[29.0]	平縁の口縁部片。幅の狭い口縁部は断面三角形の微隆線	細砂粒多量	P 159	PL41
10	縄文式土器	В	(7.7)	によって区画され,無文帯である。胴部も同じ微隆線に	にぶい橙色	10%	
				よって曲線的区画文を構成している。区画文内外に縄文	普通		
				(単節RL)を充塡している。			
11	深 鉢	A	[38.4]	平縁の口縁部片。肥厚する口縁部は一条の凹線によって	白色細砂粒、スコリア	P160	PL41
	縄文式土器	В	(19.6)	区画され,よく磨かれた無文帯である。胴部は縄文(単	にぶい橙色	10%	
				節RLの横回転)を施文している。内面は横位のヘラミ	普通		
				ガキ。			
12	深鉢	A	[18.8]	胴部上半から平縁の口縁部にかけての破片。幅の狭い口	白色細砂粒	P 161	PL41
	縄文式土器	В	(10.8)	縁部は一条の沈線によって区画され,無文帯である。胴	明褐色	15%	
				部は二条の沈線によって区画された直線的磨消し帯が垂	普通		
'				下する。磨消し帯間は縄文(単節LRの斜位回転)を充			
				塡している。内面縦位のナデ。			
13	深 鉢	A	[15.6]	胴部上半から口縁部にかけての破片。4単位の波状口縁。	白色細砂粒	P162	PL41
	縄文式土器	В	(8.5)	口縁部は一条の太めの凹線によって区画され,幅の狭い	にぶい褐色	20%	
				無文帯である。凹線下は縄文(幅の狭い単節LR横回転,	普通		
				その下に単節RL縦回転)地文に,沈線によって逆U字			
				文を描いている。U字文内は磨消している。内面横位の			
				ナデ。			
第111図	深 鉢	A	[13.0]	胴部上半から口縁部にかけての破片。平縁。縄文(口縁	白色細砂粒	P 163	PL41
14	縄文式土器	В	(9.5)		にぶい褐色	25%	
				部は一条の沈線によって区画される。胴部は二条の沈線	普通		
		!		によって逆U字を構成し,沈線間は磨消している。口縁			
				内外面にスス多量付着。			
第113図	深鉢	A	[14.6]		白色細砂粒	P164	
15	縄文式土器	В	(2.3)	部には一条の突帯が巡り,突帯上には粘土貼付痕が認め	にぶい黄橙色	10%	
				られる。施文は見られない。内外面横位のヘラミガキ。	普通	頸部に赤彩	
第111図	深鉢	В	(11.9)	胴部片。縄文(複節LRLの縦回転)地文に,二条の沈	細砂粒多量	P 165	PL41
16	縄文式土器			線による直線的磨消し帯が垂下する。	にぶい橙色 普通		
第113図	深鉢	В	(14.7)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で,胴部は突出	白色細砂粒	P166	PL41
17	縄文式土器	C	7.8	気味の底部から内彎気味に外傾して立ち上がる。施文な	浅黄橙色	30%	
				し。外面は丁寧に磨かれている。内面はナデ。	普通		

第40号住居跡出土土製品一覧表 (PL65)

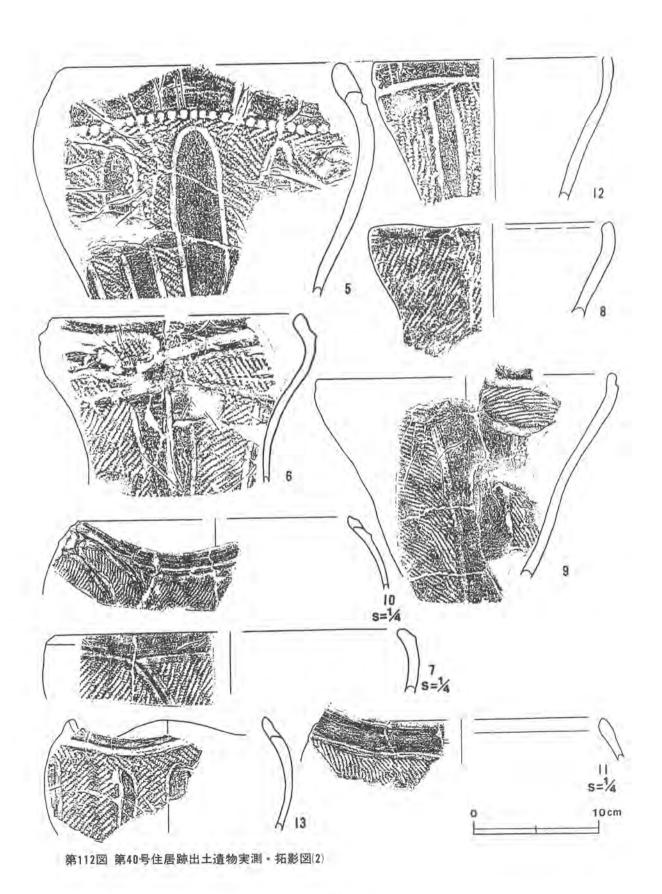
図版番号	器	種	法 最大長	最大幅	量(cm) 最大厚	孔 径 (cm)	重 量 (g)	現存率 (%)	備考	†
第116図 82	円	板	4.3	4.8	1.4		30.2	100	DP63,覆土中,胴	部片利用
83	円	板	5.4	5.7	1.3		35.4	100	DP64,覆土中,底	部片利用
84	円	板	4.8	4.9	1.6	-	35.1	100	DP65,覆土中,胴	部片利用

第40号住居跡出土石製品一覧表

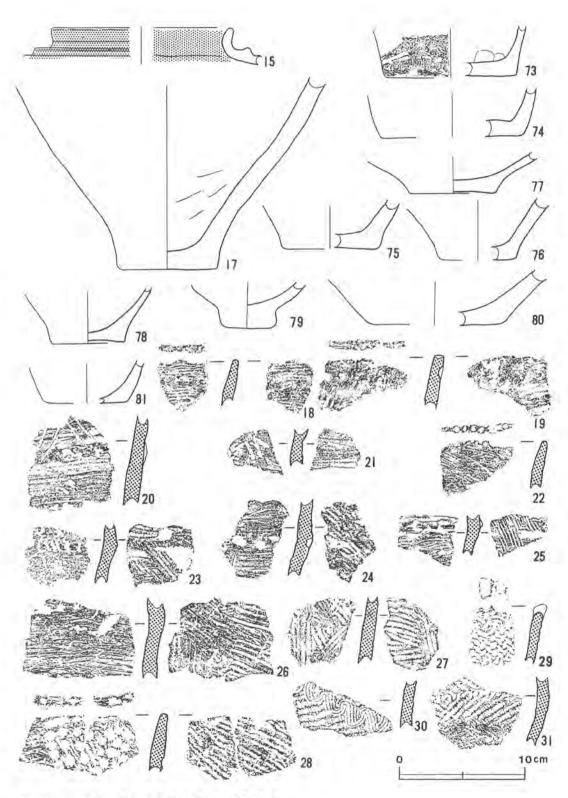
図版番号			ae	444		法		:	量	石質	備考
	ĺ	器 和		種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 具	рн:
第116図	85	石			鏃	1.6	1.3	0.5	0.8	チャート	Q83, 北東壁寄り床上 PL66
	88	石			錐	3.3	1.7	1.1	5.3	チャート	Q84, 南西壁寄り床上 PL66
	86	石			鏃	1.1	1.0	0.2	0.3	チャート	Q85, 中央やや北寄り床上 PL66
	87	石			鏃	2.8	1.7	0.6	1.7	チャート	Q86, 炉北側床上 PL66
	89	石			匙	4.2	5.7	1.3	25.4	チャート	Q87, 2層中 PL66
第117図	93	磨			石	(7.8)	(7.4)	3.7	(278.9)	安山岩	Q88, 敲石兼用, 欠損品, 2層中 PL67
第116図	96	磨			石	(9.0)	(6.6)	(2.3).	(98.1)	安山岩	Q89, 凹石兼用, 欠損品, 2層中
第117図	91	打	製	石	斧	7.6	6.4	2.6	147.8	安山岩	Q90, 礫石斧か, 2層中 PL67
第116図	90	打	製	石	斧	7.3	(5.0)	1.7	(64.4)	砂岩	Q91, 欠損品, 2層中 PL67
第117図	92	打	製	石	斧	8.9	4.7	3.1	130.0	ホルンフェルス	Q92, 片刃石斧か, 2層中 PL67
	95	凹			石	12.1	9.9	4.7	529.1	安山岩	Q93, 覆土下層 P68
	94	Ш			石	(7.3)	(5.1)	(3.9)	(171.8)	安山岩	Q94, 破片, 2層中
	97	不	明 7	石 製	品	3.2	3.3		(5.6)	流紋岩	Q95, 軽石, 欠損品, 2層中 PL69



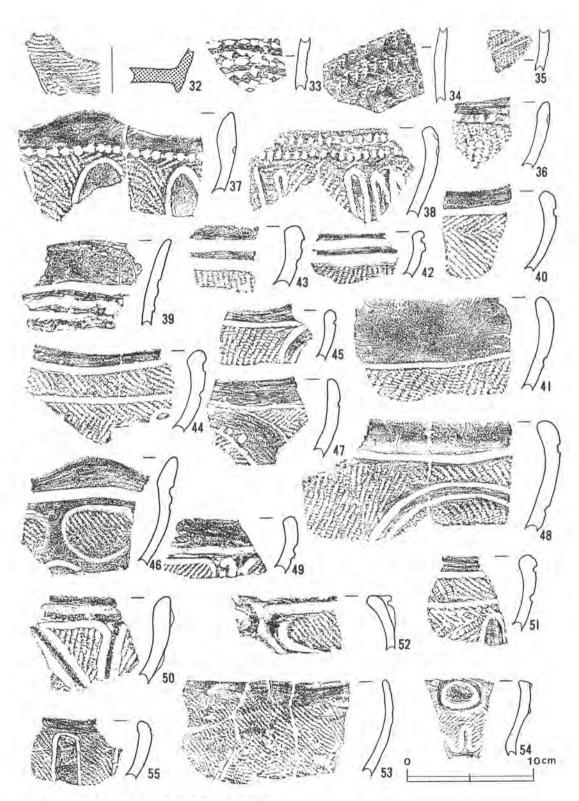
第111図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



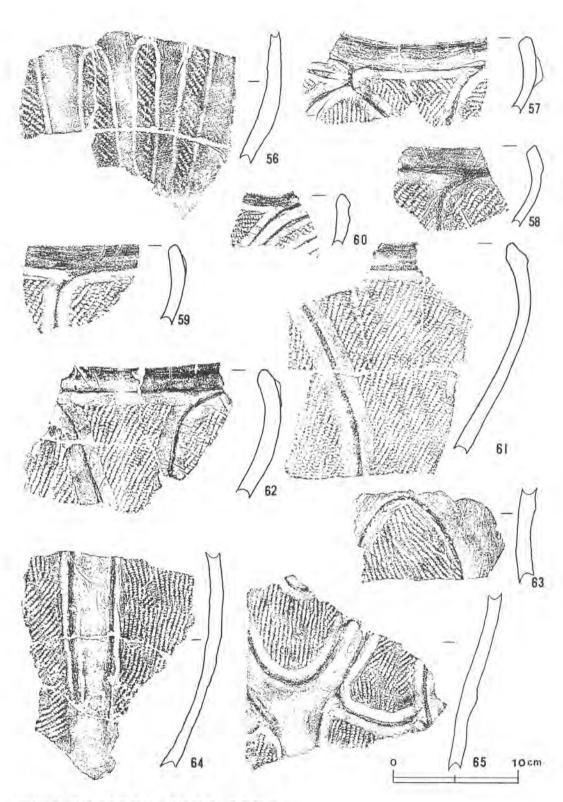
-155-



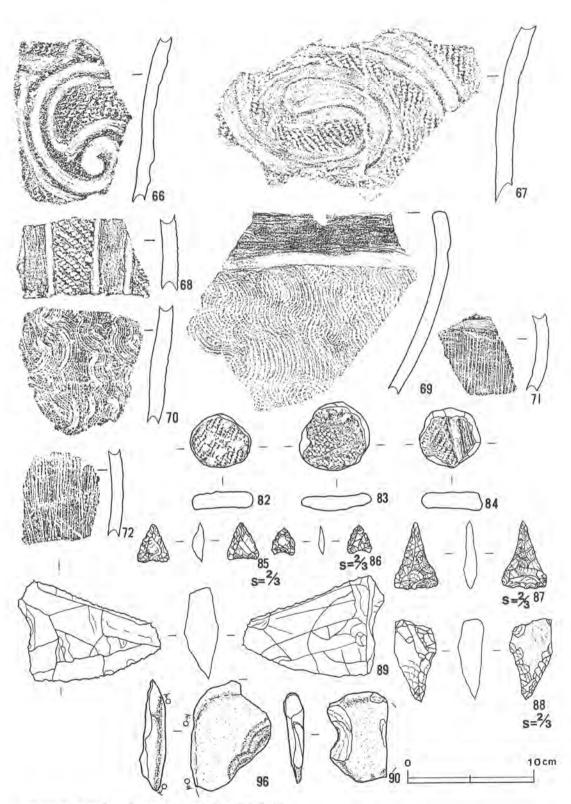
第113回 第40号住居跡出土遺物実測·拓影図(3)



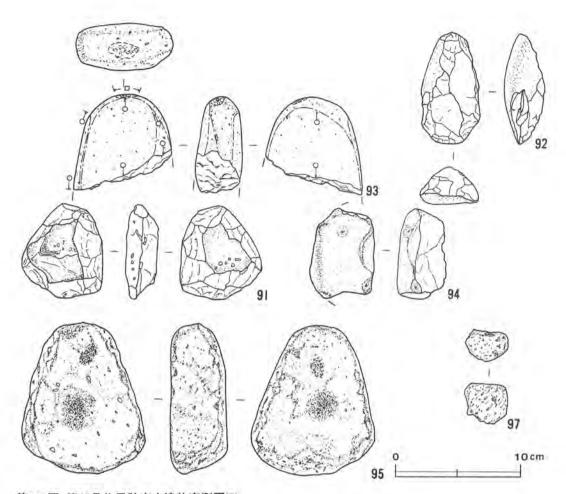
第114図 第40号住居跡出土遺物実測。拓影図(4)



第115図 第40号住居跡出土遺物実測。拓影図(5)



第116図 第40号住居跡出土遺物実測・拓影図(6)



第117図 第40号住居跡出土遺物実測図(7)

第113~116図18~81は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。18~28は早期末(茅山式)の時期で、条痕文系土器群である。18は口唇上、19は口唇上及び口縁上部に、20はゆるい段上に、21は沈線による交点上に貝殻背圧痕が施されている。20・21の沈線は半載竹管による。22は口唇上に円形の押圧が施され、裏面に条痕は見られない。23~27は表裏条痕文の胴部片で、23~25にはゆるい段上にキザミ及び竹管による刺突が施されている。28も表裏条痕文の旧部片で、25にはゆるい段上にキザミ及び竹管による刺突が施されている。28も表裏条痕文の口縁部片であるが、表面に棒状工具による3列の刺突でV字状のモチーフを描いている。29~32は前期前半(関山式)の時期で、29は組紐文地文にコンパス文、30は縄文地文にコンパス文、31は末端がループ状になった縄で羽状縄文を施している。32は上げ底の底部片で、底面はよく磨かれている。30~39は前々段多条の縄文であるう。33~35は前期後半(浮島Ⅲ・興津式)の時期の胴部片で、33・34は三角刺突文・貝殻腹縁文が、35は沈線によって区画された磨消し貝殻文である。36~81は1~17とともに本跡に伴うものである。36~38は口縁直下に円形刺突文を巡らしており、38は2列である。37・38は縄文地文に沈線による区画を施し、区画内を磨消している。39は外反する

幅広の口縁部片で,無文地に 3本の太沈線が巡っている。 $40\sim52$ は沈線区画により口縁部を無文帯としている。 $42\cdot43$ は 2本の太沈線が巡り,沈線下に単節縄文 R L が施文されている。41は幅広の無文帯で,沈線下は単節縄文 L R である。 $44\sim52$ は胴部にも沈線により文様帯が構成されている。 $46\cdot52$ は楕円区画文である。53は縄文のみで口縁部は横位のナデである。54は無文の口縁部に隆帯による円形区画文を施し,胴部には縄文地文に曲線文を描いている。55は単節縄文 R L 地文に沈線による逆 U字形の区画を施し,中を磨消している。56は逆に区画外を磨消している。 $57\sim67$ は隆線によってモチーフを描いている。 $57\cdot65\sim67$ は縄文を充塡し,他は縄文地文である。68は沈線で区画された懸垂帯のある胴部片で,区画内に複節縄文 R L R が縦回転で充塡されている。 $69\sim72$ は曲線及び直線の条線文が施されたグループである。69の幅広の口縁部は凹線によって区画され,横位のナデである。 $73\sim81$ は底部片であるが,施文はない。79は突出している。

第47号住居跡 (第118図)

位置 N14f4区。

重複関係 北壁部分が、第142号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形 長径6.12m・短径5.45mの楕円形。

壁 壁高10~18cmで,外傾して立ち上がっている。

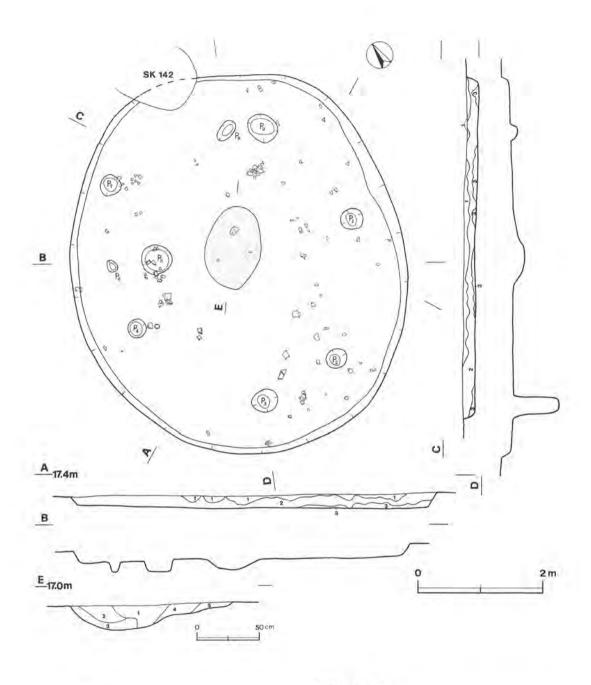
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 9か所。炉を中心に壁に沿って巡っている。規模及び配列から $P_1 \sim P_4 \cdot P_7 \cdot P_9$ が主柱穴と考えられる。径30~48cmの不整円形で深さ58~114cmである。 P_6 は径18cmの不整円形で深さ18cm, P_8 は長径38cm・短径22cmの楕円形で深さが12cmあり,主柱穴間に位置していることから補助柱穴と考えられる。 P_5 は炉の西側に位置し,径50cmのほぼ円形で深さ19cmであるが,性格は不明である。炉 ほぼ中央に付設されている。長径134cm・短径83cmの楕円形で,床を16cm程皿状に掘り込んで地床炉としている。炉床は火熱で赤くなっているが,硬くはない。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む3層が壁際から床上に一部ブロック状に堆積してから、2層がその上を覆うように堆積している。起伏のある2層上に1層が入っている。各層とも焼土粒子・炭化粒子を少量含んでいる。

遺物 炉と主柱穴の間の覆土下層から縄文式土器片が多く出土している。1 は深鉢の胴下半部,2 は底部で覆土下層からの出土である。出土した土器片の大半は縄文時代中期後半のもので,早・前期のものはごくわずかである。 P_1 と東壁の間の床上から19の石錐,南壁側床上から22Aの凹石が出土している。20の掻器は P_1 内 2 層中,22Bの凹石と21の石刃は覆土中層からの出土である。

所見 炉を中央に持つ6本柱の規格性のある住居である。出土遺物から,本跡の時期は縄文時代中期後半(加曽利EⅢ式期)と考えられる。



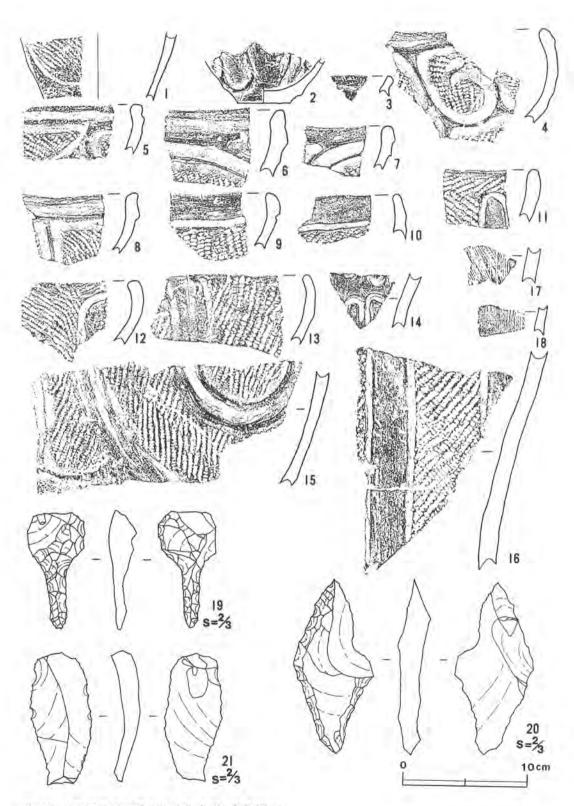
S1-47 土層解説

- 1 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブ ロック微量
- 2 褐 色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 橋 色 焼土粒子・炭化粒子微量,ローム粒子・ローム小ブロック少量

51-47 炉土層解説

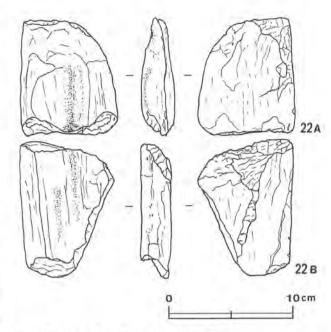
- 1 昭 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック少量,炭化粒子凝量。ローム 粒子多量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 明 赤 褐 色 焼土粒子少量,焼土小ブロック多量
- 5 明 褐 色 焼土粒子微量、ローム粒子少量

第118図 第47号住居跡実測図



第119図 第47号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

第119図 3~18は覆土下層から出土した縄文式土器片である。3 は早期前葉 (井草式)の口縁部片で、肥厚外反する口唇上に縄文が施文されている。1・2・4~18は本跡に伴うものである。4~8 は隆起線によって渦巻文や楕円文などのモチーフが描かれた口縁部片で、隆起線内には単節縄文R Lが施されている。9・10は無文の口縁部が沈線によって区画されている。沈線下は単節縄文R Lである。11~13も内彎する口縁部で、縄文施文後、沈線で逆U字形の



モチーフを描き、沈線内を磨消して 第120図 第47号住居跡出土遺物実測図(2)

いる。11は口縁上部のみ縄文(単節LR)の横回転で、胴部にかけては縦回転である。14は胴部片で、 無文地に曲線を描いている。15・16も胴部片で、15は微隆線による渦巻状のモチーフを描き、単 節RL縄文を充塡している。16は懸垂文で、沈線間を磨消しており、縄文は単節RLの縦回転であ る。17・18は縦位及び斜位条線文の胴部片である。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法	量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第119図	深 鉢 瀬文式土器		(5.0)	胴部下半の破片。上・下端は粘土紐接合面で割れている。 胴部に隆起線によってU字状文を描く。隆起線間には縄 文 (単節LR縦回転)を充塡している。下端は無文であ る。	Control of the Contro	P213 30%	PL42
2		B C	(3.5) 4.2	底部から胴部下半かけての破片。底部は平底で磨かれている。断面三角形の隆起線によって曲線的な文様を構成する。隆起線間は無文で磨かれている。 小型の壺になると思われる。	細砂粒 灰褐色 普通	P 214 20%	PL42

第47号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	m	esit	法			账	T 100	an at	
	器	和庄	長き(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	
第120図 22A	[ri]	石	(9.4)	7.8	2.7	(230.6)	緑泥片岩	Q117A, 欠損品, 覆土中層 PL68	
22B	լոյ	石	(10.89)	7.8	2.8	(277.7)	緑泥片岩	Q117B, 欠損品, Q117Aと同一固体 PL68	
第119図 19	石	錐	4.7	2.4	1.1	7.3	チャート	Q113, 床上 PL66	
20	攝	117	7.0	3.3	1.4	15.4	110	Q114, P ₁ 内 PL65	
21	石	刃	5.8	2.0	1.2	8.5	チャート	Q115, 覆土中 PL68	

第50号住居跡 (第121図)

位置 N14g2区。

規模と平面形 南北径5.20m・東西径不明の[円形]。西側は調査区外であるため、平面形は推定である。

壁 壁高 $4 \sim 10$ cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

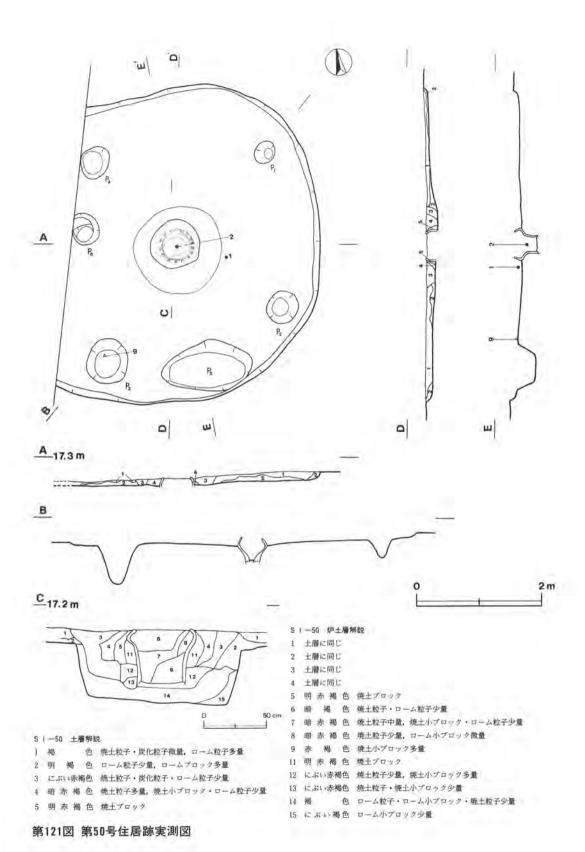
ピット 6 か所。 $P_1 \sim P_4$ は炉を中心にほぼ等間隔で壁寄りに位置しており,主柱穴と考えられる。 P_1 は長径39cm・短径32cmの楕円形で深さ32cm, P_2 は径48cmの円形で深さ80cm, P_3 は径66cmの円形で深さ60cm, P_4 は長径55cm・短径43cmの楕円形で,深さが30cmである。また, P_5 は長径146cm・短径84cmの楕円形で深さが31cmあり,壁際に位置する土坑状のピットであるが,性格は不明である。 P_6 は径45cmの不整円形で深さ18cm, $P_3 \cdot P_4$ の間に位置しており,補助柱穴となろうか。

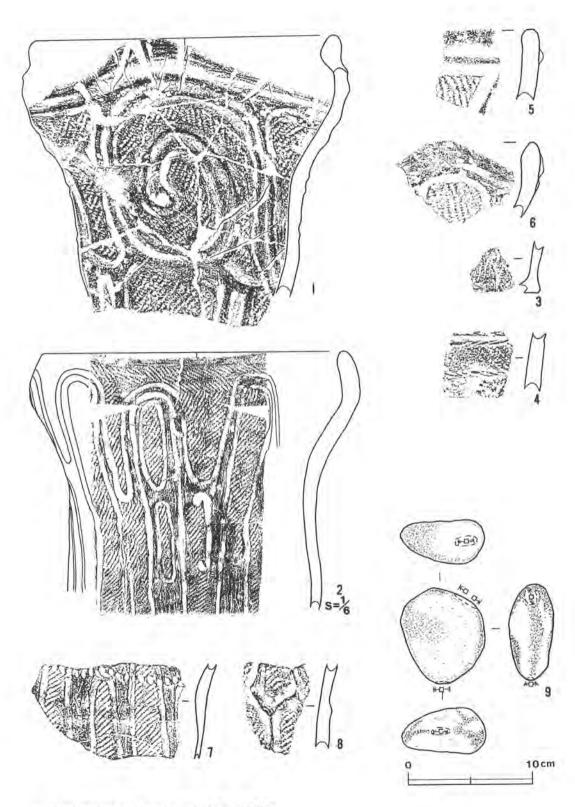
炉 埋甕炉(口絵カラー写真)で,ほぼ中央に付設されている。胴下半部を欠失する大型深鉢形土器(加曽利EIII式期)を径140cm・深さ95cmの円筒形の掘り方内の北西寄りに据えて,炉体土器としている。掘り方の土層は9層に分層される(土層は覆土層からの通し番号・土器内も同じ)。14・15層の褐色土を入れてよく締めてのち,12・13層の土を入れ層中に炉体土器を据えている。12・13層は火熱で鈍い赤褐色に変色している。いずれも締まりのある土で,14層中には炉体土器と同時期の土器片1点が含まれていた。炉体土器は口縁部が床上に10cm程出ているが,その口縁部分は2~4・11層によって外側を押さえられるように覆われていたことが,火熱によって土層が赤褐色に変色していることから判断できる。炉体土器に接して西側床上レベル(11層中)で,4cm大の角礫(火熱によって赤く変色)が出土している。炉体土器口縁部を支えるために置かれたものと考えられる(PL22)。炉体土器内の土層は4層に分層される。9層は焼土層で,火熱によって硬くなっている。7・8層は焼土粒子・焼土ブロックを含む赤褐色土で,住居廃絶時までの土層である。6層は土器片を含む暗褐色土で,廃絶後の埋土であろう。

覆土 5層に分層される。 2層はロームブロックを多量に含む明褐色土で,起伏のある堆積をしている。 1層は焼土粒子・炭化粒子をわずかに含む褐色土である。 $3\sim 5$ 層は炉体土器の埋土である。

遺物 各層中から縄文式土器片が出土しているが、多い量ではない。南壁際の床上からの出土が 比較的多い。1 は炉体土器に転用された大型の深鉢である。2 は炉の南側覆土中から出土した深 鉢であり、胴下半部を欠失している。9 の敲石は P_3 上から出土している。

所見 住居跡の一部が調査区外であるため完掘できなかったが、平面形は円形になるものと思われる。埋甕炉の周りは、住居使用時に床から盛り上がった状態であったことが、炉の土層図から判断できる。本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曽利 E Ⅲ 式期)と考えられる。





第122図 第50号住居跡出土遺物実測・拓影図

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法	量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第122図	深	鉢	A	24.5	胴部下半を欠損。4単位の波状口縁深鉢。狭い口縁部は	白色細砂粒多量	P 224	PL42
1	縄文:	式土器	В	(20.6)	無文帯で,口縁下から胴部に2本組の断面蒲鉾型の隆起	にぶい褐色	50%	
					線による渦巻文などの曲線的モチーフを描いている。モ	普通		
	l				チーフの内外には縄文(単節RLの縦・横回転)を充塡			
					している。			
2	深	鉢	A	49.9	胴部下半を欠損。口縁部が算盤玉状に屈曲する。縄文(複	砂粒,スコリア	P 225	PL42
	縄文:	式土器	В	(41.7)	節RLRで□縁部横回転・胴部縦回転)地文に、□縁部	淡黄色	60%	
					には大きな波状凹線が一条巡り,その下に直線的に垂下	普通	炉体土器	
					する凹線、細長い逆C字状凹線を配する。凹線は指によ			
					ると思われる。			

第50号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	挝	3		量	万 曆	備	*	
四八田 勺	100	1286	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)				75
第122図 9	敲	石	7.7	6.9	3.7	221.7	安山岩	Q118, P ₃ 上		

第42号住居跡 (第123図)

位置 N14ds区。

規模と平面形 長軸3.95m・短軸3.75mの不整方形。

壁 壁高 $4 \sim 14$ cmで,外傾して立ち上がっている。西壁・南壁側は覆土と遺構外の土との識別がはなはだ難しく,土器包含の有無を判断材料とした。

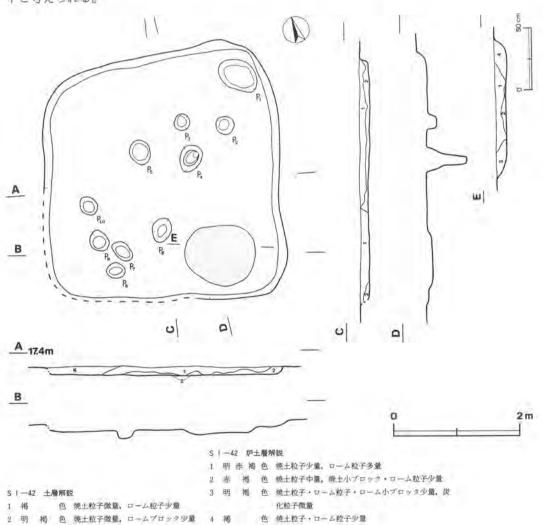
床 平坦である。炉の周辺のみやや踏み締まりが認められるが、他は軟弱である。

ピット 10か所。 P_1 は北東コーナー部に位置し,長径68cm・短径28cmの楕円形で,深さ21cmである。 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_5 \sim P_{10}$ は径24~42cmのほぼ円形で深さ $9 \sim 21$ cm, P_4 は長径44cm・短径34cmの楕円形で深さ66cmの斜位の掘り込みである。 $P_1 \sim P_{10}$ は北東コーナーから南西コーナーにかけて掘られているが,配列上から主柱穴の特定は難しく,性格不明としておく。

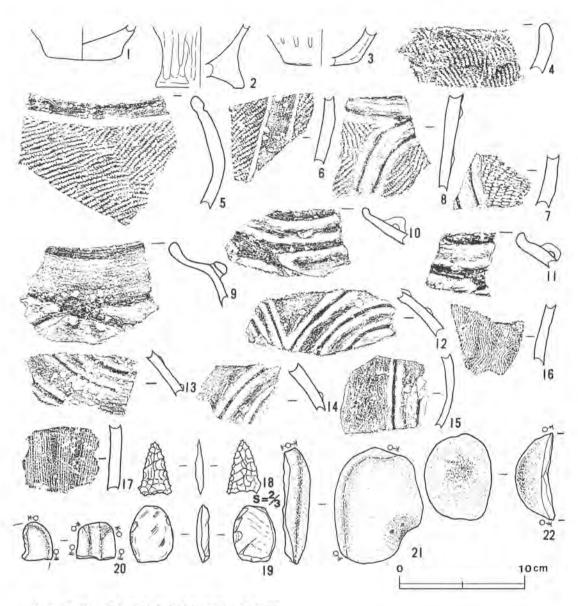
炉 南東コーナー部寄りに付設されている。長径114cm・短径100cmの不整楕円形で、床を10cm程

掘りくぼめて地床炉としている。炉内覆土には焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子を含む。炉床 には火勢によって硬くなった部分がない。

覆土 2層に分層される。2層がやや起伏のある堆積をした上に、褐色土の1層が入っている。 遺物 炉上の覆土から縄文式土器片が多く出土している。一括投棄であろうが、接合できた土器 はほとんどない。1~3は深鉢の底部であり、20の磨石とともに炉上出土である。南壁際1層中 からは18の石鏃が出土している。また、覆土中から19の磨製石斧・21と22の磨石が出土している。 所見 土器片は縄文時代中期後半(加曽利EⅢ式期)のものが大半である。ピットの配列、炉の 位置、やや不確かな壁から住居跡の平面形にも不安があるが、本跡の時期は出土遺物から中期後 半と考えられる。



第123図 第42号住居跡実測図



第124図 第42号住居跡出土遺物実測。拓影図

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法	量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土·色調·焼成	備考
第124図	深細文式	鉢 土器	В	(2.6) 6.0	やや突出気味の底部片。胴部下半は強く外傾して立ち上 がる。施文は見られない。斜位のヘラミガキである。底 面ナデ。	白色細砂粒 にぶい橙色 普通	P 187 15%
2	深 縄文式	鉢 土器	B	(4.9) [7.0]	底部から胴部下半にかけての破片。底部は上げ底状で、 やや張り出す。胴部は下端でくびれてから、外傾して立 ち上がる。施文はなく縦ヘラミガキで、内面ナデ。	細砂粒、スコリア にぶい橙色 普通	P 188 5 %
3	深縄文式	鉢 土器	B	(2.4) [6.0]	底部から側部の立ち上がりにかけての破片。平底の底部 から緩く外傾して立ち上がる。無文地の胴部に3本の太 い沈線が垂下する。底面ヘラナデ。内面は黒色で磨かれ ている。	白色細砂粒 によい機色 普通	P 189 5 %

第124図 $4 \sim 17$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片で、 $1 \sim 3$ とともに本跡に伴うものと考えられる。 4 は口縁部片で単節縄文 R L を横回転している。 5 は太めの沈線によって無文の口縁部が区画されており、胴部は単節縄文 L R である。 6 は沈線間を磨消した懸垂文の胴部片で、縄文は単節 R L の縦回転である。 7 は前々段多条, 8 は単節縄文 R L 地文に微隆線によってモチーフの描かれた胴部片で、微隆線間は磨消されている。 $9 \sim 15$ は無文地に微隆線によってモチーフの描かれた短頸壺の破片で、よく磨かれている。 9 は交差する微隆線上に上下に貫通する 2 対の孔がある。 $10 \cdot 11$ は 9 とは逆に横に 1 孔が穿たれている。 $16 \cdot 17$ は曲線及び直線の条線文が施された胴部片である。

第42号住居跡出土石製品一覧表

			50	505		注			量	石 質	備	考	
図版番号	İ		器	種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	11 月	VHI		
第124図	18	石			鏃	2.2	1.4	0.3	0.7	チャート	Q98		PL66
	21	磨			石	(9.5)	(7.2)	(2.1)	(167.8)	安山岩	Q99, 欠損品		
	22	磨			石	(7.0)	(5.3)	(3.3)	(109.1)	安山岩	Q100, 欠損品		
	20	磨			石	(3.0)	(2.4)	(3.2)	(26.7)	砂岩	Q101, 欠損品,	覆土中	
	19	磨	製	石	斧	4.6	3.5	1.1	23.9	蛇紋岩	Q102, 刃部は片	7状,覆土中	PL67

第44号住居跡 (第125図)

位置 N14c₅区。

重複関係 北東部で第123号土坑を、南東コーナー寄りで第146号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径5.88m・短径4.67mの楕円形。

壁 壁高12~18cmで、外傾して立ち上がっている。

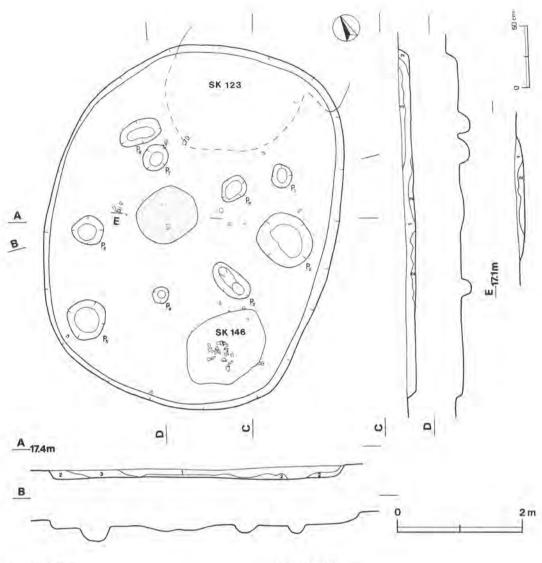
床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

ピット 9か所。炉を中心に壁に沿って巡っている。規模にややばらつきが見られるが, $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_8$ が主柱穴と考えられる。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_6$ は径27~52cmの不整円形で深さ13~22cm, $P_3 \cdot P_6$ は長径68~72cm・短径37cmの楕円形で深さ18~22cmである。 $P_7 \cdot P_9$ は径44cm程の不整円形で深さ13~18cmであり,位置関係から補助柱穴と考えられる。 P_2 は径90cmの不整円形で深さ76cm, P_5 は径62cmのほぼ円形で深さが66cmあるが,いずれも性格不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径96cm・短径83cmの楕円形で、床を16cm程皿状に掘り込んで 地床炉としている。炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックを含む明褐色土の2層がやや起伏のある堆積で床を覆っている。3層は炭化粒子を含む締まりのない土層である。1層は焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを含む暗褐色の土層である。

遺物 1層中の南東部で縄文式土器片が多く出土している。炉の西側の床上から軽石片が出土している。また、覆土中から23と24の磨石が出土している。床上出土の土器片は20数点と少ない。



51-44 土層解説

1 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子・ローム小フ

2 明 褐 色 焼土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量

3 褐 色 炭化粒子・ローム粒子微量

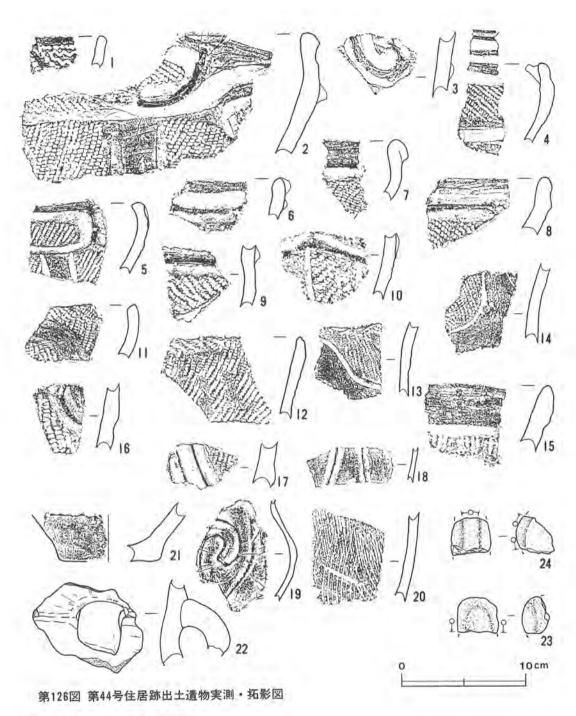
S I -44 炉土層解説

1 暗 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量

2 赤 褐 色 焼土粒子・焼土ブロック多量

第125図 第44号住居跡実測図

所見 土器は縄文時代中期後半のものが大半を占め、中に早~中期前半のものが少量混在している。床上の土器も3時期にまたがっている。本跡の時期は、出土遺物から中期後半(加曽利EIII 式期)と考えられる。第123号土坑(炉穴)は縄文時代早期の遺構で、時期的前後関係は明らかである。第146号土坑については、覆土上面の土の硬さが床面とほぼ同じである。また、覆土上層出土の土器も中期後半の時期であるが、住居使用時は土坑は機能していなかったものと考えられる。



第44号住居跡出土石製品一覧表

備考	石質	ĬĬ,	1		进	516	ga	alle et es
MH. G	位 頁	重量(g)	厚き(cm)	個 (cm)	長さ(cm)	種	00	以版番号
Q108,破片、覆土中	安山岩	(31.1)	(3.3)	(3.1)	(3.0)	石	磨	第126図 23
Q109,破片,覆土中	安山岩	(20.2)	(2.1)	(3.3)	(2.9)	石	磨	24

第126図 1~22は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。 1 は中期中葉(阿玉台式)の口縁部で、隆帯に沿って刺突文が巡り、さらに鋸歯状沈線が囲んでいる。 2~22は本跡に伴うものと考えられる。 2・3 は口縁部片で、やや退化した渦巻きの隆帯で、 2の懸垂帯は幅が広くなっている。 4~10は隆帯によって口縁部にモチーフの描かれたグループである。10には懸垂帯が見え、縄文は単節RLの縦回転である。11は縄文地文の口縁部で、ナデでモチーフを描いている。12は縄文のみの口縁部片で、単節縄文RLの縦回転である。13・14は曲線によってモチーフの描かれた胴部片で、曲線間は磨消されている。縄文は単節RLである。15の凹線によって区画された口縁部は無文で、凹線下に縦に単節縄文LRが施文されている。16・17は縄文地文に微隆線によってモチーフの描かれたグループである。いずれも単節縄文RLであるが、16の原体は太い。18・19は無文地に微隆線によって渦巻き状のモチーフが描かれている。器壁が薄く、同一個体であろう。20は条線文の施された胴部片である。21はやや突出気味の底部で、施文はない。22は無文の把手の付いた胴部片である。

第51号住居跡 (第127図)

位置 N14h₇区。

重複関係 第45号住居跡によって北半部分が掘り込まれている。また,南壁側が第61号住居跡と切り合っているが,新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径5.73m・短径不明の [不整楕円形]。

壁 壁高18~20cmで、外傾して立ち上がっている。壁質は柔らかい。

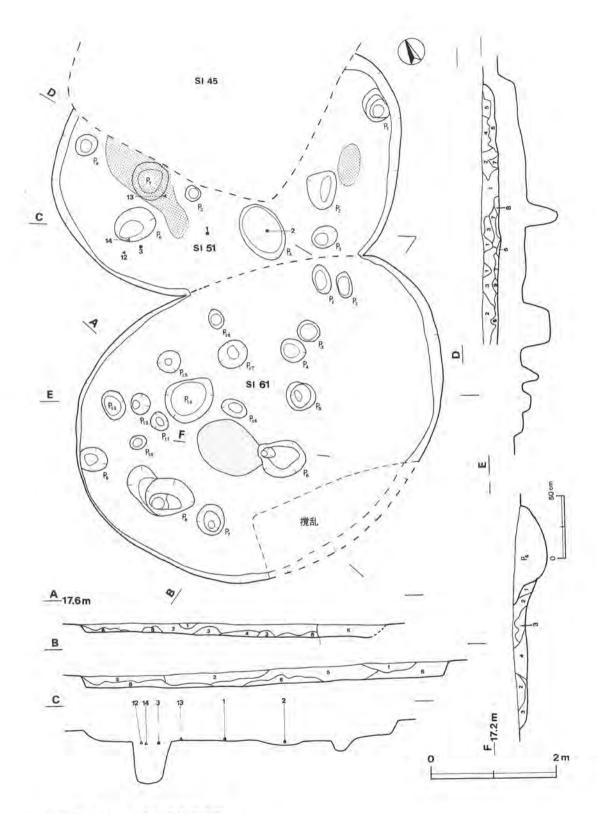
床 やや凹凸がある。踏み締まり部分は見られない。

ピット 8か所。 P_1 は径50cm程の不整円形で深さ37cm, $P_3 \cdot P_5 \cdot P_8$ は径 $28 \sim 40$ cmの不整円形で深さ $17 \sim 24$ cmである。 P_2 は長径62cm・短径42cmの不整楕円形で深さ7cm, P_4 は長径100cm・短径64cmの楕円形で深さ10cm, P_6 は長径66cm・短径52cmの楕円形で深さ68cm, P_7 は径60cmの円形で深さ9cmである。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_8$ は規模及び配列から主柱穴と考えられる。他のピットについては性格不明である。

炉 確認できなかった。第45号住居跡によって、掘り込まれてしまったと考えられる。

覆土 9層に分層される。起伏のあるブロック状の堆積を示している。土層図は第45号住居跡の 南壁で確認できたものである。1・3・9層には炭化材細片が含まれている。また、5層を除い て焼土粒子・炭化粒子が含まれるが、特に1・2・3・8層は多い。

遺物 縄文式土器片は南西部の覆土中から多く出土している。1は P_4 上と P_4 ・ P_6 間の覆土下層の2か所から出土したものが接合した,対の橋状把手付鉢(双耳土器)である。2は深鉢の胴下半部で,1の東側覆土中出土である。3は底部片で南壁側から出土している。 P_5 ・ P_6 間の焼土上か



第127回 第51·61号住居跡実測図

S | -5| 土層解説

1 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・炭化材細片中量,ローム粒子 多量

2 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量,ローム粒子・炭化粒子中量

3 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量,炭化材細片

4 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量,ローム粒子中量

5 褐 色 ローム粒子中量

6 明 褐 色 焼土粒子少量

7 にぶい褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

8 にぶい 褐色 焼土粒子・炭化粒子中量,焼土小ブロック・ロームブロック微量

9 極 暗 褐 色 焼土粒子ローム粒子少量,炭化材細片微量

S | --6| 土層解説

1 明 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量,ローム粒子少量

2 暗 褐 色 焼土粒子・ローム粒子少量,炭化粒子微量

3 赤 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック中量

4 暗 赤 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック中量,炭化粒子微量, ローム粒子少量。

5 暗 褐 色 ローム粒子中量,焼土粒子・炭化粒子微量

6 褐 色 焼土粒子微量、ローム粒子中量

S I -- 61 炉土層解説

1 暗 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子微量, 炭化 粒子少量

2 赤 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック・炭化粒子少量

3 赤 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック少量,炭化粒子微量

4 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量

らは14の磨製石斧、南西壁際覆土中層から12の石鏃と13の砥石が出土している。

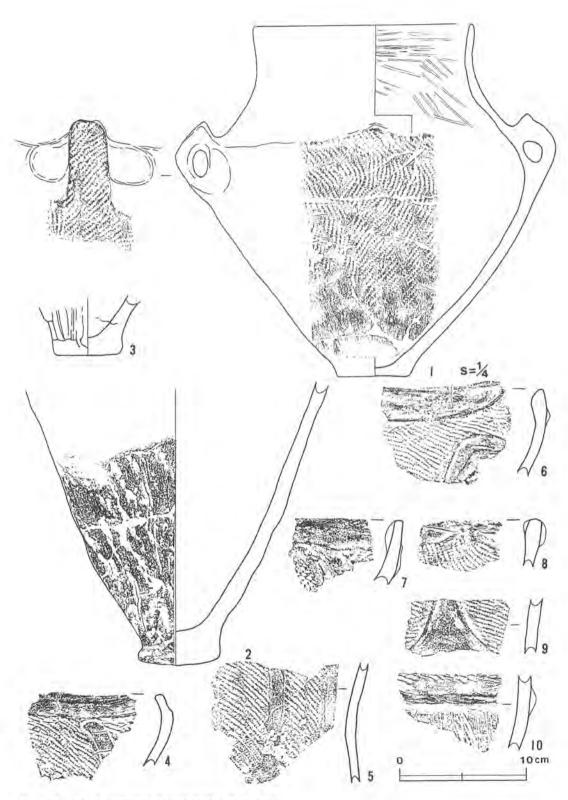
所見 $P_1 \cdot P_2$ 間及び P_7 に重なる状態で,床直上に焼土粒子・炭化粒子の広がりが認められたが,掘り込みもなく炉とは考えられない。一時的に火が使用された場所なのであろう。本跡の時期は出土遺物から縄文時代中期後半(加曽利EIV式期)と考えられる。

第51号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第128図 1	深鉢縄文式土器	A 23.4 B 37.8 C 7.7	口縁部一部欠損。平底で底部から大きく外傾して立ち上がり,胴部中位で強く内傾し,頸部から直立気味に立ち上がる。平縁で口縁部無文,ヘラミガキ。頸部下に断面三角形の微隆線が一条巡り,胴部縄文帯と区画している。 微隆線上に対になる耳が付く。また,それと直交する微隆線上に対になる舌状突起が付く。胴部上半から中位に縄文(単節RLの縦回転)を施文し,下半は無文でヘラミガキ。内面は雑なナデ。	砂粒 明褐色 普通	P226 90% 双耳土器	PL42
2	深 鉢 縄文式土器	B (21.8) C 6.5	胴部中位から口縁部欠損。突出気味の底部で、凸面状の底面は不安定。胴部は底部から内彎気味に外傾して立ち上がる。胴部は無文で整形は極めて雑。粘土の凹凸が著しい。内面は丁寧な横位のナデである。	白色細砂粒多量 橙色 普通	P 227 40%	PL42
3	深 鉢 縄文式土器	B (4.0) C 5.6	底部から胴部下端にかけての破片。やや突出気味の底部 から外傾して立ち上がる。外面は無文で縦ヘラミガキ。	白色細砂粒多量 にぶい赤褐色 普通	P 228 5 %	

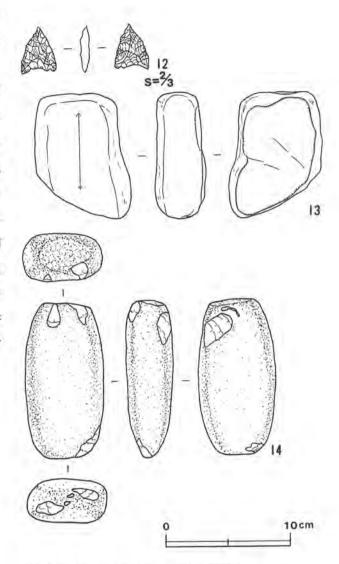
第51号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	D)	2	種		挝		1	a	7:	質	#± ±4	
因成田与	器		1里		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	1 1	備考		
第129図 12	石			鏃	1.8	1.5	0.4	0.6	黒	曜石	Q120, 覆土中層	PL66
13	砥			石	10.1	7.6	4.2	467.4	砂	岩	Q121,同上	PL68
14	磨	製	石	斧	12.6	6.2	3.6	(461.1)	砂	岩	Q122,一部欠損,同上	PL67



第128図 第51号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)

第128図 4~11は床上及び覆土中 出土の縄文式土器片で、1~3とと もに本跡に伴うものと考えられる。 4の内傾する口縁部は無文で、単節 縄文LR地文の胴部には沈線区画の 弧状磨消帯が垂下する。5もやはり 磨消帯の垂下する胴部片であり、縄 文は単節RLの縦回転である。6~9 は微隆線によってモチーフが描かれ ており、6~8は口縁部片、9が胴 部片である。6の微隆線によって区 画された口縁部は小波状をなすとお もわれる。10は隆帯によって文様帯 が区画されており、上段が縄文で下 段は条線文である。



第129図 第51号住居跡出土遺物実測図(2)

第43号住居跡 (第130図)

位置 N14d7区。

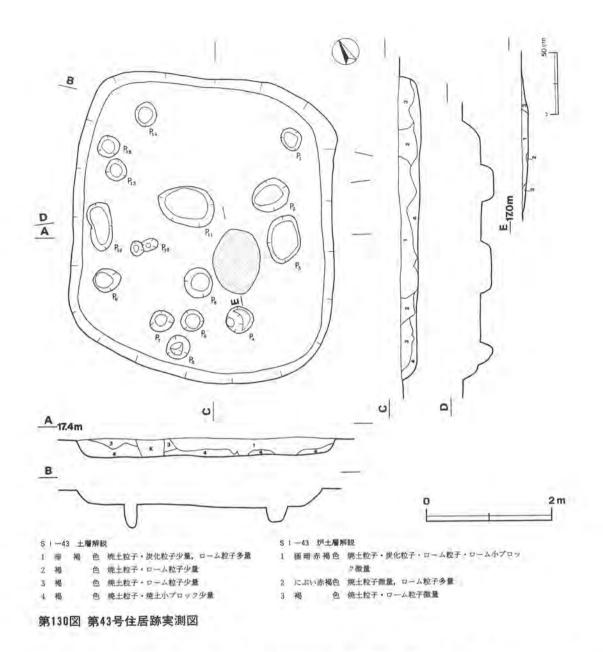
規模と平面形 長軸4.86m・短軸4.20mの不整長方形。

長軸方向 N-18°-E。

壁 壁高22~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 緩い起伏が見られる。床の踏み締まりは見られず,軟弱である。

ピット 15か所。東西の壁際・南壁際に沿ってピットが巡っている。配列及び規模から $P_1 \cdot P_4 \cdot P_9 \cdot P_{14}$ が主柱穴と考えられる。径39~46cmの不整円形で深さ15~68cmである。出入り口側と考えられる南壁側の $P_4 \cdot P_9$ は、52cmと68cmでそれぞれ深い掘り込みである。 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_{12} \cdot P_{13} \cdot P_{15}$ も

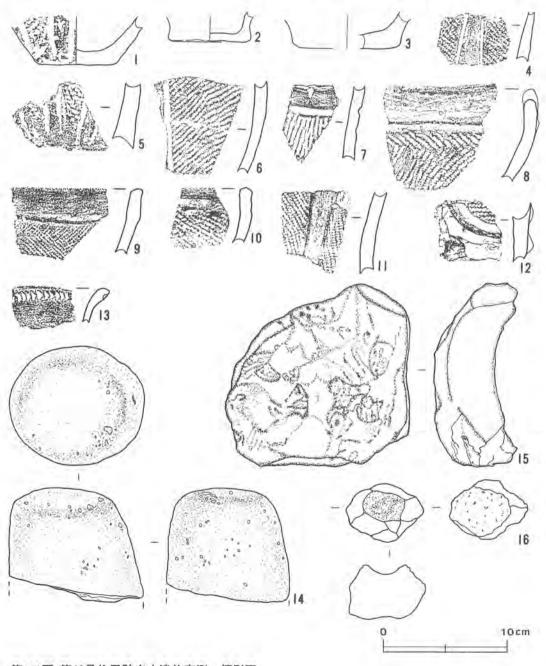


東西の主柱穴列に並び、対応する位置にあることから、補助柱穴と考えられる。 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_{12}$ は長径50~76cm \cdot 短径32~53cmの不整楕円形で深さ18~22cm, $P_{13} \cdot P_{15}$ は径32cmのほぼ円形で深さ19~20 cmである。 P_5 は南壁際に位置し、径38cmの円形で、外傾して深さが44cmに掘り込まれている。出入り口施設に伴うピットと考えられる。そのすぐ北側に径40cm程の円形で深さも20cmの $P_6 \cdot P_7$ が並んで位置している。 P_5 と関係のあるピットと考えられる。炉の西側に位置する P_8 は径48cmの円形で深さ35cm, P_{16} は径20cm程の円形のピットが2つつながっており,深さは15~16cmである。 P_{11} は住居跡のほぼ中央に位置し、長径94cm \cdot 短径62cmの楕円形で、深さ19cmの皿状に掘り込まれて

いる。いずれも性格不明である。

炉 中央からやや南寄りに $P_2 \sim P_4 \cdot P_8 \cdot P_{11}$ に囲まれて付設されている。長径105cm \cdot 短径76cmの 楕円形で、床を8 cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床はあまり赤くなっていないが、火熱によって硬くなっている。

覆土 4層に分層される。焼土ブロックを少量含む4層は起伏のある堆積の仕方をしている。2・



第131図 第43号住居跡出土遺物実測 + 拓影図

3層は褐色の土層である。1層は東側から流れ込み、堆積している。各層中に焼土粒子が少量ず つ含まれている。

遺物 $1 \cdot 2$ 層中から縄文式土器片が多く出土している。 $P_1 \cdot P_{11} \cdot P_{14}$ に囲まれた床上から14の石棒や16の石皿が出土している。15の石皿は覆土中の出土である。1 の底部は炉の南辺床上,2と3の深鉢は覆土上層からの出土である。床上出土のものはいずれも破片である。

所見 遺物の少ない住居跡である。廃絶時に使用可能なものは持ち去ったものと考えられる。本 跡の時期は、床上出土遺物の大半が縄文時代中期後半(加曽利 E Ⅲ 式期)に含まれることから、 該期と考えられる。

<i>γγ</i> 4 2 □	住居跡出	, I , 'BE 4 W	.#P der ==
尹八子	11 11 11 11 11	. T 18 47	1#122-70

図版番号	器和	ī	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第131図	深金	*	B (3.9)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外傾	砂粒	P 193
1	縄文式土	묾		して立ち上がる。胴部には太めの沈線による磨消帯が垂	にぶい褐色	5 %
		1		下する。縄文は単節RLの縦回転である。内面横位のナデ。	普通	
2	深翁	本	B (2.0)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から直立	長石, 石英	P 194
ļ	縄文式土	器	C [5.6]	気味に立ち上がってから外反する。外面横へラナデ、内	にぶい橙色	5 %
				面横位のナデ。	普通	
3	深 釒	本	B (2.2)	底部から胴部下端にかけての破片。胴部は平底の底部か	白色細砂粒	P 195
	縄文式土	뫎	C [8.5]	ら外反気味に立ち上がる。底部・胴部下端とも内外面へ	赤褐色	5 %
				ラミガキ。	普通	

第131図 $4 \sim 13$ は覆土中から出土した縄文式土器片である。 $4 \sim 12$ は $1 \sim 3$ とともに本跡に伴うものと考えられる。 $4 \sim 6$ は縄文地文に沈線区画の懸垂文で,沈線間は磨消されている。 $4 \cdot 5$ は単節LR縄文,6 は前々段多条の縦回転である。7 は口縁部から胴部にかけての破片で,沈線で区画された胴部は絡条体による縄文である。 $8 \sim 10$ は無文の口縁部が微隆線によって区画されている。 $8 \cdot 9$ は微隆線下のみ羽状縄文(8 は単節RL,9 は単節LR),10は単節縄文LRである。 $11 \cdot 12$ も微隆線によるモチーフが描かれており,縄文は単節LRである。13は後期後半(安行 I式)の口縁部片で,やや肥厚した口縁上部にキザミが施されている。

第43号住居跡出土石製品一覧表

	ш	26	挝	Ę		il .	石 質	備	- 考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)] 1	VHI		
第131図 15	石	m	(14.8)	(6.8)	(5.0)	(1267.4)	閃 緑 岩	Q104, 欠損品		PL68
16	石	III	(6.3)	(4.7)	4.3	(99.5)	安山岩	Q105,破片		
14	石	棒	(9.2)	10.7	10.0	(1122.4)	安山岩	Q106, 欠損品		PL67

第61号住居跡(第127図)

位置 N14i7区。

重複関係 北側部分で第51号住居跡と切り合っているが、新旧は不明である。また、南側は重機による撹乱を受けている。

規模と平面形 長径4.80m・短径[4.26]mの [楕円形]。

壁 壁高 $10\sim30$ cmで、外傾して立ち上がっている。東壁・北西壁の壁質が柔らかく、覆土との識別も難しかった。

床 緩やかな起伏があり、軟弱である。

ピット 18か所。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_9 \cdot P_{13} \cdot P_{16}$ は長径41~48cm・短径24~38cmの楕円形で,深さが10~31 cm, $P_3 \cdot P_4 \cdot P_{10} \sim P_{12} \cdot P_{15} \cdot P_{18}$ は径22~40cmのほぼ円形で深さ 8~21cmである。 $P_5 \cdot P_7 \cdot P_{17}$ は径42~46cmのほぼ円形で深さ33~54cm, P_6 は径60cm程の不整円形で深さ20cm, P_{14} は径72cmの不整円形で深さ44cm, P_8 は長径116cm・短径48cmの不整楕円形で深さ60cmである。 P_6 は炉の一部を掘り込んでおり、住居跡には伴わないピットと思われる。主柱穴は特定できない。

炉 中央やや北西寄りに付設されている。長径104cm・短径82cmの楕円形で,床を16cm程掘りくぼめて地床炉としている。炉の覆土には焼土ブロックや焼土粒子が混じり,炉床も火熱で硬くなっている。

覆土 6層に分層される。6層は褐色土でやや起伏のある堆積をしている。3・4層は焼土を多く含む層である。その上に2・5層の暗褐色土、1層の明褐色土が堆積している。

遺物 縄文式土器片は各層中から出土しているが、破片がほとんどである。炉のすぐ東側床上からは、まとまって出土している。1 は P_4 上から出土した口縁部から胴上半部にかけての深鉢、2 は住居跡南側覆土中出土の深鉢口縁部片で覆土中の出土である。また、13の土器片錘・14と15の 敲石・16の打製石斧が覆土中から出土している。

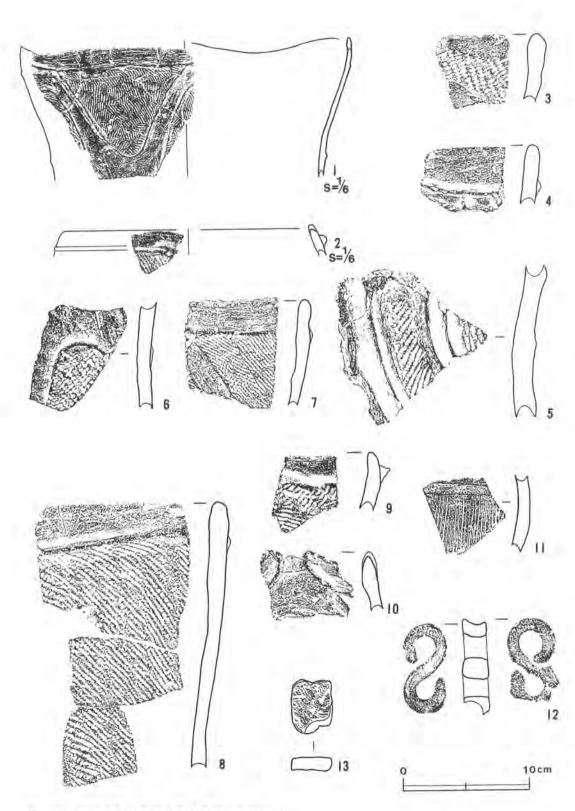
所見 覆土上層からは縄文時代後期初頭の土器片も出土しているが、中・下層の土器は中期後半であり、本跡の時期も該期と考えられる。住居跡形態は覆土と壁の判断が難しい所があったので、推定である。

44 C 1 E	₽仕 字跡:	山山上, 海州	与 医甲基二

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第132図	深 鉢	A (53.0)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部に波状の突	白色細砂粒、スコリア	P 236	
1	縄文式土器	B (23.0)	起を有する。波頂部は無文帯が「八」字状に向かい合う。	にぶい黄橙色	10%	
			口縁部下に断面三角形の微隆線を巡らし、胴部と区画す	普通		
			る。口縁部は無文で,横位のナデ。胴部は2本の微隆線			
			によってV字状の無文帯を構成し無文帯外に縄文(単節			
			RL)を充塡している。内面横位のミガキ。			
2	深 鉢	A [39.8]	口縁部片。口縁部下に断面三角形の微隆線が一条巡り、	白色細砂粒多量	P 237	PL42
	縄文式土器	B (4.0)	胴部縄文帯と区画している。微隆線上に舌状突起が付き,	にぶい黄橙色	5 %	
			その部分の口縁部が緩く山形になる。口縁部は無文で横	普通		
			ナデ。胴部は縄文(単節RLの横回転)を施文する。内			
			面横位のナデ。			

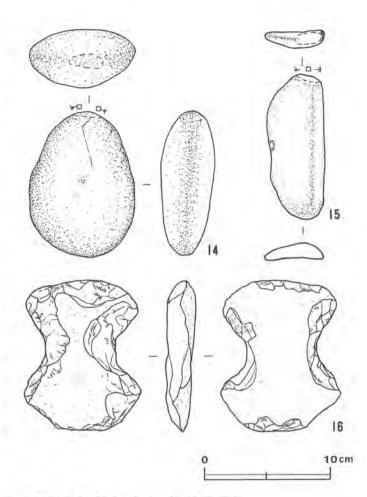
第61号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔径	重量	現存率	備考
四八田 与	107	1里	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	畑 与
第132図 13	土 器	片 錘	4.4	3.4	1.1	_	17.7	100	DP85,覆土中 胴部片利用



第132図 第61号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)

第132図 3~12は床上及び 覆土中から出土した縄文式土 器片である。3~11は1・2 とともに本跡に伴うものであ ろう。3は縄文地文になぞり によるモチーフを描いた口縁 部片、4~7は微隆線によっ てモチーフを描いており、微 隆線間は磨消している。8・ 9 は無文の口縁部を微隆線に よって区画し、胴部は縄文を 施文している。10は向い合っ た微隆線によって、口縁部が 山形になっている。11は口縁 部無文で, 胴部は縦位直線の 条線文が施されている。12は 口縁部の8字状突起で,後期 初頭の時期であろう。



第133図 第61号住居跡出土遺物実測図(2)

第61号住居跡出土石製品一覧表

	36	Zata .	M	7	Dt.			法		500	an-		6.1	free page age, co.	
	備考		石質		(cm) 厚さ(cm) 重量(g)		幅 (cm)	器 種 長さ(cm) 幅 (c		図版番号					
PL		Q130	凝灰岩	緑色	574.3	4.3	8.4	11.7	石			蔽	14	第133図	
		Q131	岩	砂	105.4	1.5	4.8	11.1	石			敲	15		
PL		Q132,分銅型	山岩	安日	310.1	2.3	9.4	12.0	斧	Ti	製	打	16		

第46号住居跡 (第134図)

位置 N14f6区。

規模と平面形 長径4.55m・短径4.25mの不整円形。

壁 壁高10~16cmで、外傾して立ち上がる。壁質は柔らかい。

床 平坦である。踏み締まり部分は見られない。

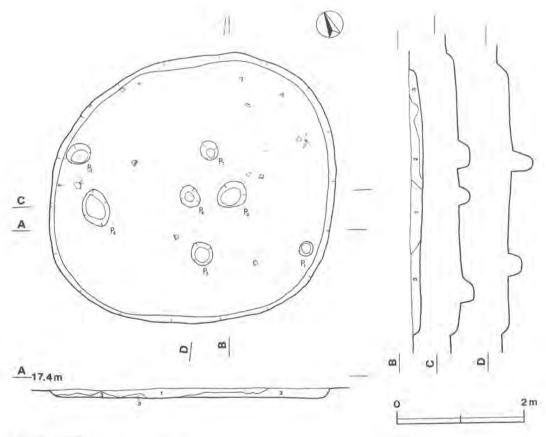
ピット 7か所。P₁は径21cmの円形で深さ22cm, P₂・P₄は長径50~60cm・短径41~44cmの不整楕

円形で深さ19~22cm, $P_3 \cdot P_5 \sim P_7$ は径30~36cmの不整円形で深さ17~35cmである。 P_6 が住居跡の中心に位置するが,他のピットの配列には規則性が認められず,性格不明としておく。 炉 確認されなかった。

覆土 3層に分層される。3層の明褐色土が壁際から床上に堆積してのち、褐色土の2層・1層がその上を覆っている。1層には焼土粒子を少量含む。

遺物 覆土中から出土している縄文時代早・後期の土器片はわずかで、大半は中期後半の時期である。1は深鉢(安行1式)の破片である。また、7の土器片錘が床上から出土している。

所見 炉もなく、柱穴もはっきりしない。覆土下層出土の土器が中期後半から後期後半にわたっていることから、住居廃絶の時期は縄文時代後期後半頃と考えておきたい。



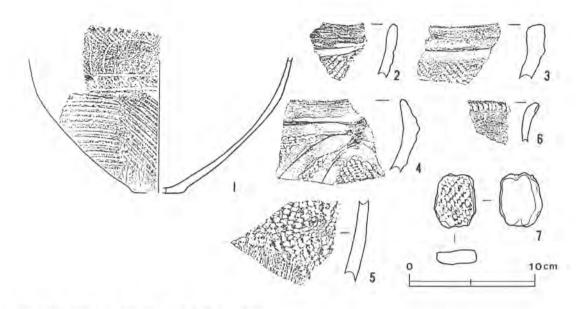
S 1-46 土層解説

1 视 色 擁土粒子微量, ローム粒子少量

2 视 色 ローム粒子少量

3 明 福 色 ローム粒子微量・褐色土小ブロック少量

第134図 第46号住居跡実測図



第135回 第46号住居跡出土遺物実測·拓影図

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第135図 1	深 鉢 縄文式土器	B (10.8) C [4.2]	底部から胴部中位にかけての破片。底部は平底でナデ。 胴部は底部から内鬢気味に外傾して立ち上がる。胴部文 様帯は沈線で区両された帯縄文(単節RL横回転)で分 けられ、下半は斜位の条線文、中位は沈線とキザミ目に よる区画文である。区画内に沈線による楕円形の無文部 をつくる。縦・横の帯縄文の交差するところに粘土の隆 起が見られる。	普通	P212 20%	PL43

第46号住居跡出土土製品一覧表

DOTHER RESERVE	58	100		法		置 (cm)	孔隆	重 量	現存率	Jen	4
図版番号	-500	種		最大長	最大幅	最大厚		(g)	(%)	510	卷
第135図7	土 器	片	錐	4.4	2.3	1.1		18.8	100	DP68,床上	, 胴部片利用

第135図 $2 \sim 6$ は覆土中から出土した縄文式土器片で, $2 \sim 5$ は中期後半の時期である。2 は無文の口縁部が沈線によって区画され,胴部は単節縄文LRが施文されている。 $3 \cdot 4$ は微隆線によって口縁部が区画されており,4 はさらに胴部にも微隆線によってモチーフが描かれている。縄文はいずれも単節LRで,3 は縦回転である。5 は縄文施文後,条線の施された胴部片である。6 は後期後半(安行 1 式)の口縁部片で,口縁直下にキザミが施されている。第43号住居跡の第131図13は同一個体であるう。

弥 生 時 代

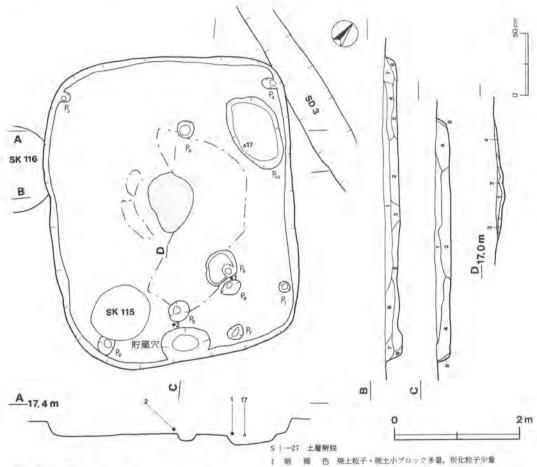
第27号住居跡 (第136図)

位置 L14g8区。

重複関係 第115号・116号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.90m・短軸3.95mの隅丸長方形。

長軸方向 N-46°-W。



暗 赤 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・炭化材細片中量

褐 色 焼土小ブロック多量、炭化粒子少量

3 明 褐 色 廃土粒子・焼土小ブロック少量

4 褐 色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック少量

褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量、炭化粒子少量

8 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子・ロ

ーム小ブロック微量

色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、ローム小ブロッ

色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量

色 炭化粒子・焼土小ブロック少量

色 ローム小ブロック中量・廃土小ブロック、炭化粒子 微量

第136図 第27号住居跡実測図

壁 壁高17~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。炉の周りが踏み締められている。特に、北東部分の踏み締まり部分は広い。

ピット 10か所。壁に接し小ピットが 4 か所ある。 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ は径 $18 \sim 23$ cmのほぼ円形で深さ $13 \sim 18$ cm, P_2 は径26cmの不整円形で深さ19cmであり主柱穴と考えられる。 P_6 は径32cmの円形で深さが30 cmあり,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 P_6 は径27cmの円形で深さが11cmあり, P_5 と対になる位置である。 $P_6 \cdot P_6$ 間が床の踏み締まり部分であり, P_6 も上屋構造にかかわるピットとみられる。 $P_7 \cdot P_8$ は径24cm程の不整形, P_9 は長径60cm・短径50cmの不整楕円形で深さが38cmであるが,いずれも性格不明である。 P_{10} は土坑状の掘り込みで,長径122cm・短径80cmの楕円形で,深さは18cmである。壁際に位置しているが,性格は不明である。

炉 中央部に付設されている。長径98cm・短径70cmの不整楕円形で,床を13cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床はよく焼けて,硬くなっている。

貯蔵穴 東壁際の中央に付設されている。長径80cm・短径54cmの楕円形で,深さは19cmである。 平坦な底面から外傾して立ち上がっている。

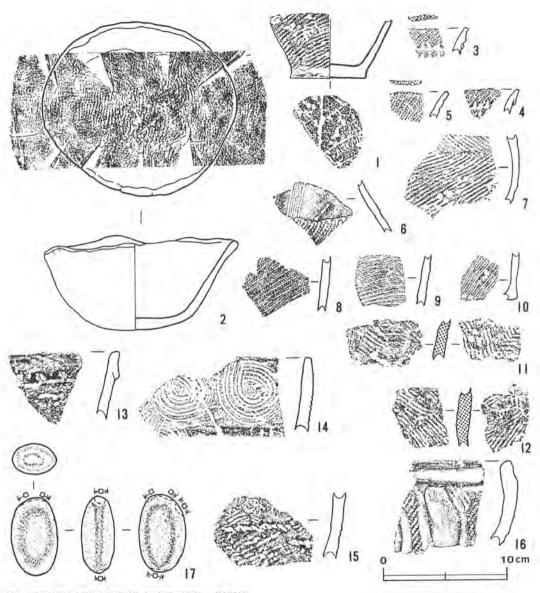
覆土 8層に分層される。8層が壁際に堆積してのち、2・3・4・5層が広く床を覆う。2層は焼土の堆積層であり、柔らかく赤褐色をしている。3層も同様であるが、焼土ブロックが2層より少ない。4・5層の暗褐色土にも焼土がかなり含まれている。炭化材も5層中に多い。1・6・7層はその上に流れ込んだ土層である。わずかに焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物 覆土下層から多量の土器片が出土している。弥生式土器片は床上からの出土が多く,上・中層からは縄文時代早~中期の土器片が出土している。1の壺底部は炉の東寄り床上からの出土である。2の浅鉢は,正位の状態で炉と北壁の間からの出土である。また,17の敲石が炉の北側床上から出土している。

所見 焼土及び炭化材の出土状態から、焼失住居跡と考えられる。出土遺物は、製作方法の珍しい2の浅鉢以外はすべて破片である。炭化材が少なく、焼土が中央に多いのは片付けが行なわれたためと考えられ、その時に使用可能なものは持ち去ったのであろう。床上出土の遺物から、本跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

第27号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	注			量	7	質		備	- 	
		128.	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	1 4	員		刊	75	
第137図 17	敲	石	6.3	3.7	2.7	83.5	砂	岩	Q53			



第137図 第27号住居跡出土遺物実測・拓影図

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器画	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土·色調·焼成	備	考
斯137図 I	查 弥生式土器	B (4.7) C 6.1	底部から胴下半部にかけての破片。底部は張り出し気味 の平底で、木葉痕を有する。舸部は底部から外傾して立 ち上がり、縄文(付加条一種付加2条、輔縄が不鮮明で 絡条体のように見える)を施文している。	長石,石英,スコリア 明褐色 普通	P110 20%	PL43
2	浅 鉢 弥生式土器	A 15.6 B 7.5 C 3.4	粗製の鉢で、偏平に延ばした粘土板を足の膝に押付け、 形作った土器である。外面には押付けによる粘土割れが 見られ、施文は一切ない。内面にはひざ小僧の形に、皮 膚の皺・膝毛の痕跡が見られる。成形後の調整も見られ ない。	細砂粒,スコリア 繊維多量 にぶい黄橙色 管通	P111 100%	PL43

第137図 3~10は床上及び覆土中から出土した弥生式土器片で、1・2 とともに本跡に伴うものである。3~5 は口縁部片である。3・4 は 2 段の複合口縁で、下端にキザミが施されている。5 は素縁であり、いずれも付加条一種付加 2 条の縄文を施文している。6 は頸部片で、6 本櫛歯のスリット手法による縦区画線があり、区画内は破片では無文である。胴部は付加条一種付加 2 条の縄文が施文されている。7~9 は付加条一種付加 2 条の縄文が施文された胴部片で、7 は羽状構成をとる。8・9 は撚りがあまい。10は底部にかけての破片であり、わずかに残る底部は無文で、胴部は付加条一種付加 2 条の縄文である。11~16は覆土中から出土した縄文式土器片である。11・12は早期末(茅山式)の表裏条痕文系土器の胴部片、13~15は前期後半から末にかけての時期である。13は輪積み痕に押圧が施された浮島II式の口縁部片、14は口縁部に条線により渦文が施された興津式、15は縄文地文に縄紐の圧痕がある粟島台式土器の胴部片である。16は中期後半(加曽利EIII式)の口縁部片で、隆起線によってモチーフが描かれ、縄文は単節RLの縦回転である。

第31号住居跡 (第138図)

位置 L14ig区。

重複関係 南東コーナー部で、第144号土坑の一部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.33m・短軸4.80mの隅丸長方形。

主軸方向 N-60°-W。

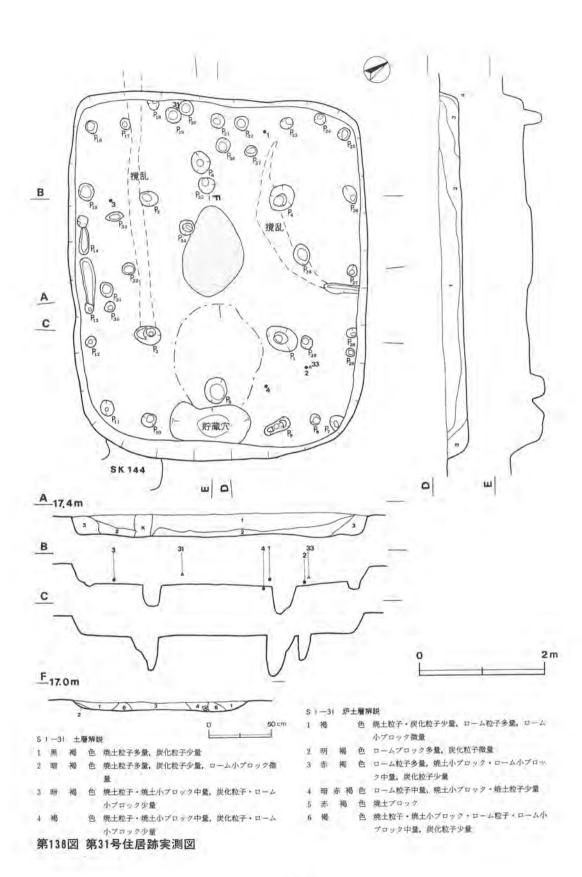
壁 壁高30~32cmで、外傾して立ち上がっている。壁質はしっかりしている。

床 平坦である。炉と東壁の間の部分がよく踏み締められている。

ピット 39か所。炉を囲むように位置する $P_1 \sim P_4$ が,規模・配列から主柱穴と考えられ,長径30~53 cm・短径23~40cmの楕円形で深さ35~68cmである。 P_5 は位置及びその周りがよく踏み締められていること,ピットと東壁との間に貯蔵穴と考えられる掘り込みがあることから,出入り口施設に伴うピットと考えられる。径42cmのほぼ円形で,深さは25cmである。 $P_7 \sim P_{29}$ は壁に沿って巡るピット群で,配列・規模から壁柱穴と考えられる。径14~30cmのほぼ円形で深さ 7~33cmで,規模にはややばらつきが見られる。 P_6 は径38cmのほぼ円形で深さが35cmあり,規模・配列から柱穴と考えられる。 $P_{35} \cdot P_{39}$ は規模・位置から $P_1 \cdot P_6$ の補助柱穴と考えられる。他については,性格不明である。

溝 3条。北壁寄り中央に間仕切りとみられる長さ55cmで幅14cmの溝 1条,南壁に沿って $P_{13} \cdot P_{14}$ 間に長さ44cmと86cmの溝 2条が確認された。断面は「U」字形をしている。規模の小さい溝であるが,性格は不明である。

炉 長軸線上ほぼ中央に付設されている。長径146cm・短径98cmの不整楕円形で、床を10cm程掘り



くぼめて地床炉としている。炉床は熱を受けて赤くなっているが、硬くはない。

貯蔵穴 東壁際に付設されている。長径126cm・短径56cm程の不整楕円形で、深さ20cmの深い皿状の掘り込みである。

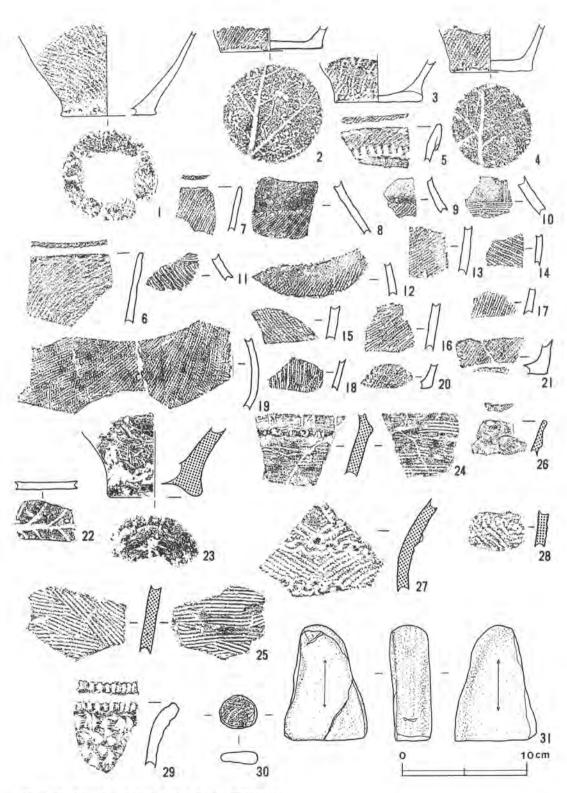
覆土 4層に分層される。壁際にローム小ブロックを含む3・4層が堆積してのち、焼土粒子を 多量に含む暗褐色の2層が床全体を広く覆う。さらに、皿状の窪地に焼土粒子を多量に含む腐植 土と思われる黒褐色の1層が堆積している。

遺物 覆土下層及び床上から弥生式土器片が,覆土上層からは30の土製円板及び多量の縄文時代早・前期の土器片が出土している。器形の分かるものは少ない。1の壺は西壁寄り3層中から,2の壺底部は東コーナー寄りで覆土下層,4の壺は床上からの出土である。3の壺底部は南壁寄りの2層中からの出土である。また,覆土上層から32と33の磨石・31の砥石が出土している。 所見 本跡の時期は出土遺物から,弥生時代後期中葉である。器形の分かる土器が少ないのは,住居廃絶時に使用可能なものを運び出したからであろう。

第31号住居跡出土遺物観察表

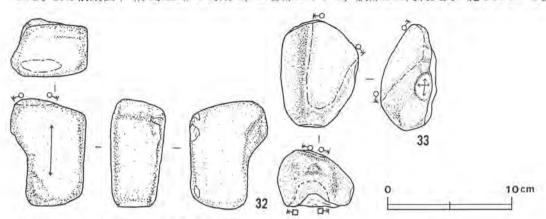
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第139図	壼	B (6.5)	底部から胴下半部にかけての破片。底部は張り出し気味	長石,石英	P115	PL43
1	弥生式土器	C 7.0	の平底で木葉痕を有する。また,底部は内側からぬかれ	にぶい橙色	30%	
			│ ているようである。胴部は底部から内彎気味に外傾して	普通	砂は中粒	
			立ち上がり、付加条一種(付加2条)の縄文が施文され			
			ている。羽状にはならない。			
2	壺	B (1.7)	底部から胴部の立ち上がりにかけての破片。平底で,木	長石,石英,雲母	P116	
	弥生式土器	C 8.0	葉痕を有する。胴部はやや張り出し気味の底部から外傾	にぶい橙色	10%	
			して立ち上がり、付加条一種(付加2条)の縄文が施文	普通	砂は中粒	
			されている。			
3	壺	B (3.2)	底部から胴部の立ち上がりにかけての破片。底部はやや	白色砂粒	P117	
	弥生式土器	C [7.0]	張り出す平底で無文。胴部は直立気味に立ち上がってか	にぶい赤褐色	10%	
			ら外反する。胴部には付加条一種(付加2条)の縄文を	普通		
			雑に施文している。			
4	壺	B (3.5)	底部から胴上半部にかけての破片。底部は平底で木葉痕	長石, 細砂粒	P118	PL43
	弥生式土器	C 6.6	を有する。胴部は底部から外傾して立ち上がる。付加条	にぶい橙色	15%	
			一種(付加2条)の縄文を施文している。	普通		

第139図 $5 \sim 22$ は床上及び覆土中から出土した弥生式土器片で、 $1 \sim 4$ とともに本跡に伴うものである。 $5 \sim 7$ は口縁部片である。5 は複合口縁で下端にキザミが施され, $6 \cdot 7$ は素縁である。 $5 \cdot 7$ は付加条一種付加 2 条,6 は直前段反撚の縄文である。 $8 \sim 11$ は頸部片で, $8 \cdot 9$ は同一個体である。8 は櫛歯による縦区画線が施され,区画内は無文である。 $10 \cdot 11$ も同一個体であろう。10は櫛歯による縦区画後,胴部との境に横走文を施している。 $12 \sim 19$ は胴部片である。いずれも付加条一種付加 2 条の縄文である。 $20 \cdot 21$ は底部にかけての破片である。20は直前段反撚,21は付加条一種付加 2 条の縄文である。22は底部に木葉痕がある。 $23 \sim 29$ は覆土中出土の縄文式土器片である。 $23 \sim 26$ は早期末(茅山式)の時期で,23は上げ底の底部片で,表裏条痕文土器である。24は第97図 3と同一個体であろうか。25は表裏条痕文土器である。26はアナダラ属の貝殼



第139図 第31号住居跡出土遺物実測·拓影図(1)

背圧痕が密に施された口縁部片である。27・28は胴部片で、前期前半(関山式)の時期である。 27は羽状縄文にいぼ状突起が付き、竹管によるコンパス文が施されている。28はループ文が見られる。29は前期後半(浮島Ⅲ式)の時期で、口唇部にキザミ、胴部は三角刺突文が施されている。



第140図 第31号住居跡出土遺物実測図(2)

第31号住居跡出土土製品·石製品一覧表

STREET ASS. CO.	nn	86	法		氚 (cm)	孔 径	重量	現存率	備考	
図版番号	器	種	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	VIII 2	
第139図 30	円	板	2.7	3.0	1.0	-	7.7	100	DP55,1層中	PL65
CTR CC: 47. CI	at c1 00 000		法量			量石質		備考		
図版番号	器	和	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質		備考	
第139図 31	砥	石	9.3	6.6	3.3	255.3	砂岩	Q61		PL68
第140図 33	磨	石	(8.6)	(6.1)	(4.4)	(243.8)	砂岩	Q62, 蔽き	兼用,欠損品	PL69
32	磨	石	8.6	6.1	4.8	350.4	安山岩	Q63		PL68

古墳時代

第35号住居跡 (第141図)

位置 M14h。区。

重複関係 北東コーナー部で第111号土坑 (炉穴) を掘り込んでいる。

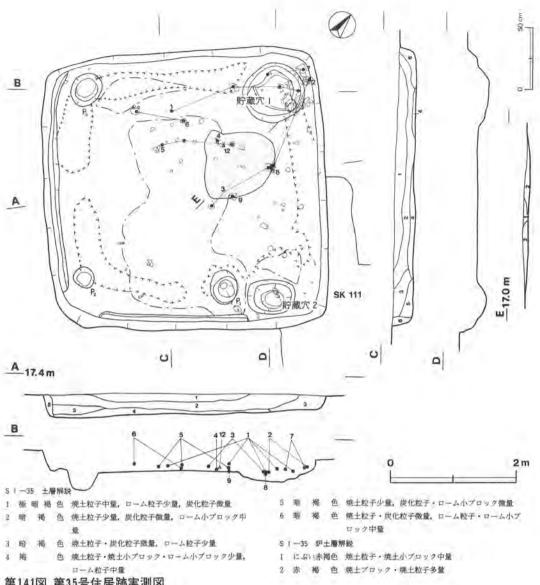
規模と平面形 長軸4.50m・短軸4.49mの方形。

長軸方向 N-43°-W。

壁 壁高14~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。西壁・南壁の一部に壁溝が巡る。上幅10~14 cm・深さ 4~6 cmで断面形はU字形をしている。

床 平坦である。出入り口施設用ピットから炉にかけての中央部分がよく踏み締められている。 また,壁から5~20cm離れて幅24~52cmの黒色土の帯状の広がり(ユエで表示)が全周する。溝状の 掘り方と考えられるが、床の踏み締まり部分にも及んでおり、住居使用時には溝は埋めもどされ ている。

ピット 3か所。Piは長径55cm・短径41cmの楕円形で、深さ30cmの外傾した掘り込みである。位

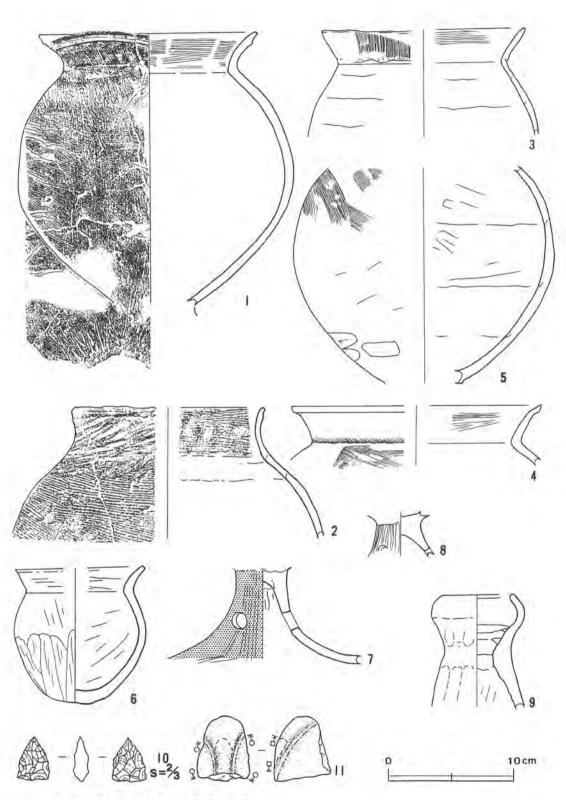


第141図 第35号住居跡実測図

置から判断して出入り口施設用のピットである。 P_2 は径32cmのほぼ円形で深さ28cm, P_3 は長径56cm・短径46cmの楕円形で深さ32cm, それぞれコーナー部に位置するが, 規模に違いがあり性格は 不明である。

炉 中央からやや北寄りに付設されている。長径134cm・短径100cmの不整円形で、床を7cm程掘 りくぼめて地床炉としている。炉床は火熱で硬くなっている。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北コーナー部に付設され、径92cmのほぼ円形で深さ18cmである。皿 状の底面から緩く外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は東コーナー部に付設され、長軸55cm・ 短軸26cmの隅丸長方形で深さ17cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がっている。

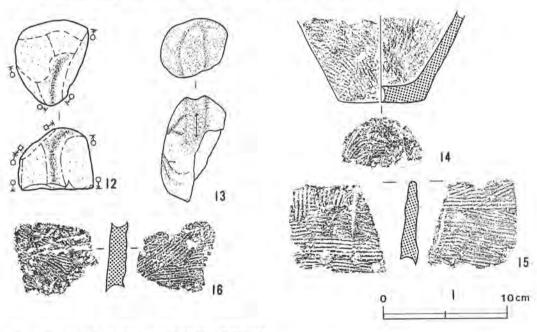


第142回 第35号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

覆土 6層に分層される。3・5・6層の暗褐色土が壁際に堆積し、4層が床全体を広く覆ってのち、皿状の窪地に1・2層が入っている。

遺物 覆土上層から縄文式土器片が出土している。北コーナーの3層下から1の台付甕・2の壺・7の高坏がばらばらになって出土している。完形になるものはなく、埋没途中での投棄であろう。炉の南側覆土中層からは9の粗製器台形土器が、横位で出土している。8の高坏・6の小形甕・3~5の甕は炉上の覆土中層からの出土であるが、いずれも破片である。10の石鏃が出入り口施設用ピットの西側の床上から、また11と12の磨石・13の砥石が覆土中から出土している。

所見 本跡は主柱穴のない住居跡で、第 $1\sim6$ 号住居跡に類似する。溝状掘り方も同様であるが、 完堀はしていない。遺物が少ないのは、住居廃絶時に使用可能なものを運び出したからであろう か。時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)と考えられる。



第143図 第35号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)

第143図14~16は覆土中から出土した縄文時代早期末 (茅山式) の表裏条痕文土器片である。15は口縁部片で、横位の条痕後、口縁上端には縦・斜位の条痕を施している。16は胴部片でアナダラ属の貝殻背圧痕文列が見られる。14は底部片で、底面にも条痕が施されている。

第35号住居跡出土石製品一覧表

	380	確	石 質		重			祛	ec.	-		STREAM IN	
	- 3	466		t (g)	厚さ(cm) 重		幅 (cm)	要 長さ(cm)		器種		図版番号	
PL6		Q74, 床上	F+	1.1		0:7	1.3	1.8	鏃	石	10	第142図	
	敬石兼用	Q75, 欠損品,	少 岩	1.2)		6.1	6.0	(5.0)	石	磨	12	第143図	
	敲石兼用	Q76, 欠損品,	安山岩	0.8)		4.1	(4.5)	(5.2)	石	磨	11	第142図	
	覆土中	Q77, 欠損品,	少 岩	6.3)		4.7	5.4	(8.4)	石	低	13	第143図	

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	鍾	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図	台付	甕	A 17.6	台部欠損。体部は球形状で、	体部外面ハケ目整形後粗い	細砂粒, スコリア	P130 PL43
1	土師	器	B (22.7)	最大径を中位に持つ。口縁	へラミガキ,内面横ナデ。	にぶい橙色	30%
				部は強く外反して立ち上が	口縁部内外面ハケ目整形	普通	体部スス付着。
				り,端部でつまみあげられ	で、外面上半横ナデ。		
				稜をつくる。			
2	壺		A [15.5]	体部上半から口縁部にかけ	体部外面斜位ハケ目整形,	長石、スコリア	P131 PL43
	土師:	器	B (10.6)	ての破片。体部は球形状と	内面横ナデ。口縁部外面斜	橙色	20%
				思われる。口縁部は直立気	位へラナデ,内面横ハケ目	普通	
				味に立ち上がり, 上半で外	整形。		
				反する。			
3	甕		A [16.2]	体部上半から口縁部にかけ	体部内外面ナデ。口縁部内	細砂粒, スコリア	P 132
	土師:	器	B (8.5)	ての破片。体部は緩やかに	外面ハケ目整形後,外面ナ	灰白色	10%
				立ち上がり, 口縁部で外傾	デ。	普通	輪積み痕。
				する。			
4	甕		A [18.9]	頸部から口縁部にかけての	頸部外面ハケ目整形, 内面	細砂粒	P 133
	土 師	器	B (4.2)	破片。口縁部は頸部で「く」	ナデ。口縁部内外面横ナデ。	橙色	5 %
				字状に外反して立ち上がり、		普通	
				端部でつまみあげられ稜を			
				つくる。			
5	甕		B (17.5)	底部から体部上半にかけて	体部外面ハケ目整形後ナデ	砂粒,スコリア	P134 PL43
	土 師	器	C [6.2]	の破片。底部は平底。体部	で下半ヘラケズリ,内面へ	橙色	30%
				は球形状で中位に最大径を	ラナデ。	普通	内面下半・体部外面スス付着。
				持つ。			体部下半二次焼成。
6	小型	建	A [10.4]	体部上半から口縁部にかけ	底部外面はヘラミガキ。体	長石、チャート、	P135 PL44
	土師	器	B 10.6	て一部欠損。平底で,体部	部は内外面ヘラナデで外面	スコリア	60%
			C 3.1	は上半に最大径を持つ。口	下半ヘラケズリ。口縁部内	にぶい赤褐色	
				縁部は外反して立ち上がる。	外面ナデ。	普通	
7	高	坏	B (7.8)	脚部のみ。坏接合部からラ	脚部外面赤彩後ヘラミガキ、	白色細砂粒、スコリア	P136 PL44
	土 師:	쁆		ッパ状に開き,裾端部は欠	内面ヘラナデ。体部外面へ	明赤褐色	40%
				損している。脚部に3孔。	ラケズリ後ナデ,内面ナデ。	普通	外面小剝離痕多し。
							穿孔は外→内。
8	高	坏	B 9.4	脚部上半から坏部の立ち上	脚部外面縦ヘラミガキ,内	細砂粒	P 137
	土 師:	器		がりのみ。接合部からラッ	面ナデ。坏部内面ヘラミガ	にぶい橙色	20%
				パ状に開いている。脚部に	丰。	普通	
				3孔を有する。			
9	粗製器		A 5.8	脚部下半欠損。脚部は「ハ」		細砂粒, スコリア	P138 PL44
	土師	器	B (9.0)	字状に開く。器受部は算盤	デ。脚部内面雑な指押え。	橙色	70%
				玉状で, 口唇部は垂直に面	器受部内面指ナデ。	普通	器受部二次焼成。
				取りされている。中央に貫			くびれ部内面スス付着。
				通孔あり。			

第39号住居跡 (第144図)

位置 M15a₁区。

規模と平面形 長軸6.58m・短軸5.80mの隅丸方形。

主軸方向 N-8°-E。

壁 壁高50cmで,ほぼ垂直に立ち上がっている。ローム質の壁でしっかりしている。壁溝が北壁から西壁下を巡っている。上幅13cm・深さ4cmで断面「U」字形をしている。

床 平坦である。主柱穴に囲まれた中央部分と主柱穴の $P_2 \cdot P_3$ 間がよく踏み締められている。

ピット 8 か所。 $P_1 \sim P_4$ は径 $30 \sim 42$ cmの不整円形で,深さは $37 \sim 46$ cmである。配列及び規模から

主柱穴と考えられる。 $P_7 \cdot P_8$ は径32~38cmの不整円形で,深さは28~38cmである。位置関係からそれぞれ P_3 と P_4 の補助柱穴と考えられる。 P_5 は径38cmのほぼ円形で深さ22cmで $P_1 \cdot P_2$ の中間に位置し,柱穴と考えられる。 P_6 は長径48cm・短径40cmの不整楕円形で深さ37cm,貯蔵穴の脇にあることから判断して,出入り口施設に伴うピットと考えられる。

炉 中央からやや東寄りで、 $P_1 \cdot P_2$ の主柱穴の内側に付設されている。径は78cm程の不整円形で、床を6 cm程皿状に掘りくぼめて地床炉としている。炉床はよく焼けて硬くなっている。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴 1 は南東コーナー部寄りで, $P_2 \cdot P_6$ に挟まれた位置にある。長径74cm・短径63cmの楕円形で深さが34cm,皿状の底面から外傾して立ち上がっている。貯蔵穴 2 は南西コーナー部で,長径110cm・短径83cmの不整楕円形,深さが28cmである。

覆土 7層に分層される。7層は多量の焼土に混じって炭化材などを含んだ層で,焼失時に堆積した層と考えられる。このような土層が北壁・南壁際に見られる。その後, $5 \cdot 6$ 層が堆積している。皿状の窪地に堆積した $2 \cdot 3 \cdot 4$ 層中に土師器片が多く見られる。1層は黒褐色のさらさらした感じの土で,腐食土である。

遺物 壁寄りから多くの土器片が出土している。特に東西の壁寄りに多い。9の鉢・8の小型甕,3・5の壺がまとまって,南東コーナー寄りの焼土層下から出土している。完形にはならず,また破片がまわりに散っていることから,住居廃絶後の投棄であろう。1の台付甕はそれらのすぐ北側の床上から,ばらばらになって出土している。南西コーナー寄りの床上からは6の壺と10の台付甕台部がつぶれた状態で出土している。2の甕は炉の周囲,4の壺は南壁中央寄り,7の壺は北西コーナー部の覆土下層からの出土である。やはり投棄と考えられる。また,覆土中から土玉が6点出土している。18の土製円板,縄文式土器片は覆土上層から出土している。他に21の敲石が南西コーナー部床上から,19の砥石・20の敲石・22の石皿片が覆土中から出土している。

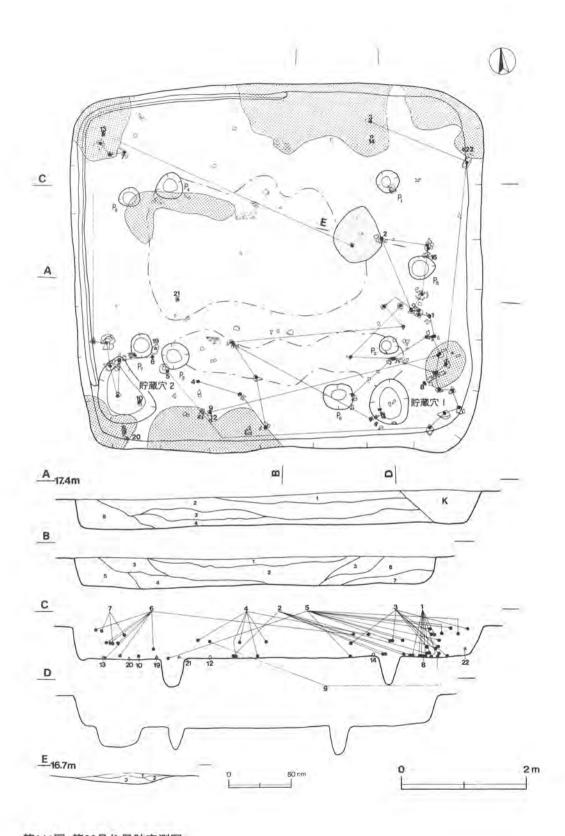
所見 焼土及び炭化材の出土状況から、本跡は焼失住居跡と考えられるが、炭化材が少ないのは 片付けが行なわれたためであろう。その時、使用可能な土器類は持ち去ったものと考えられる。 本跡の時期は床上出土の土器から、古墳時代前期(五領式期)と考えられる。

S 1 - 39 土層解説

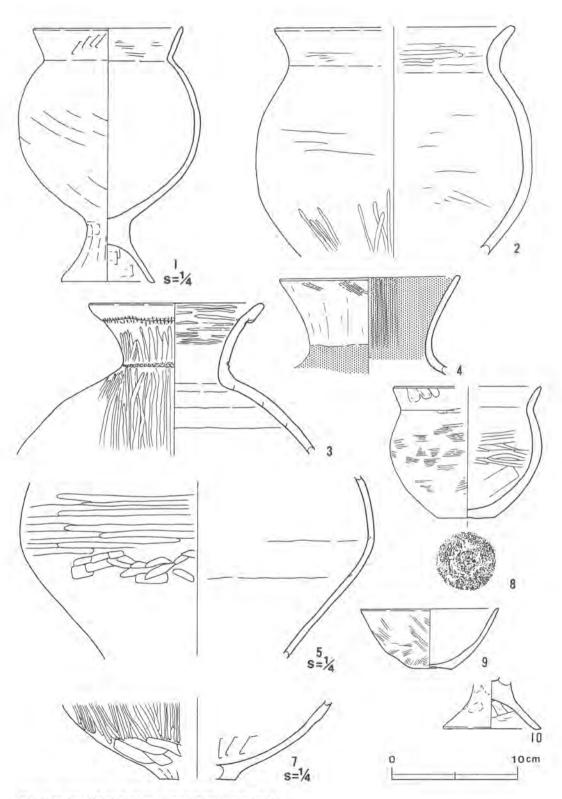
- 1 黒 褐 色 焼土粒子中量,炭化粒子少量,焼土小ブロック微量
- 2 極 暗 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック・炭化粒子少量,ローム 粒子中量
- 3 黒 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック・ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土小ブロック多量,焼土粒子中量,炭化粒子・ロ ーム小ブロック少量
- 5 極 暗 褐 色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
- 6 暗 褐 色 焼土粒子・ローム粒子中量,焼土小ブロック・炭化 粒子微量,ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 7 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量,焼土小ブロック・ローム小ブロック少量,炭化粒子微量

S ! -- 39 炉土層解説

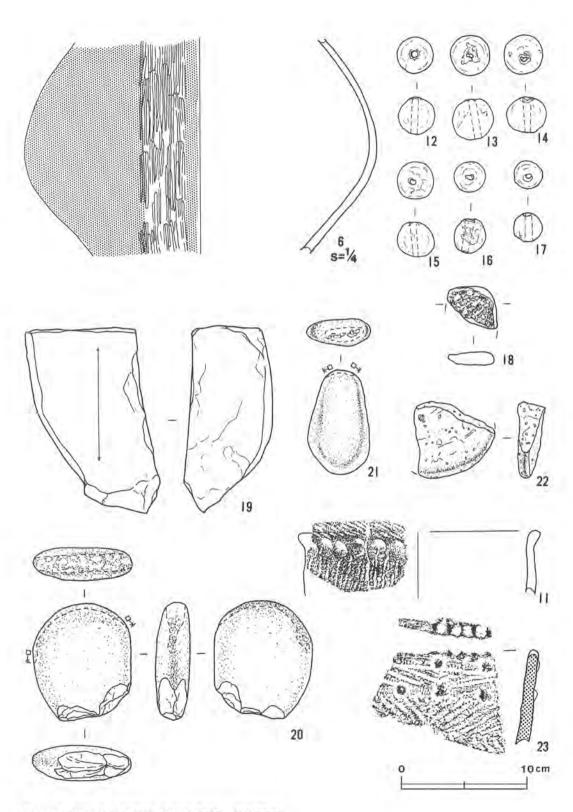
- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子多量,焼土小ブロック中量,炭化粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子中量,焼土小ブロック・炭化粒子少量
 - 3 赤 褐 色 焼土粒子・ローム小ブロック多量,焼土小ブロック 中量,炭化粒子少量,木炭片・小石少量



第144図 第39号住居跡実測図



第145図 第39号住居跡出土遺物実測,拓影図(1)



第146図 第39号住居跡出土遺物実測·拓影図(2)

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	台 付 甕 土 師 器		体部中位から口縁部にかけて一部欠損。台部は「ハ」字状に開く。体部は球形状で,最大径を中位に持つ。口縁部は外傾して立ち上がる。	台部外面ヘラナデ,内面横 ナデ。体部内外面ナデ。口 縁部内外面ナデ。	細砂粒 橙色 普通	P139 PL44 65% 体部内面小剝離痕。
2	甕土 師 器	A [19.2] B (18.4)	体部上半から口縁部にかけ ての破片。体部は球形状と 思われる。口縁部は外反し て立ち上がる。	体部外面ナデで一部へラミガキ,内面ナデ。口縁部外面横ナデ,内面横ナデ後へラミガキ。	長石,スコリア 明赤褐色 普通	P140 PL44 20% 体部内面に小剝離痕。
3	壶 土 師 器	A 14.0 B (11.7)	体部中位以下欠損。体部は 球形状である。頸部で「く」 字状に外反する口縁部は複 合口縁。	体部外面縦へラミガキ,内面ナデ。幅広で縦へラミガキ,中の頭部下に刺突列が巡る。複合口縁下端にもへラによるキザミが巡る。口縁部外面横ナデ,内面へラミガキ。	長石,スコリア 赤褐色 普通	P141 PL44 40% 輪積み痕。
4	壺 土 師 器	A 14.5 B (7.9)	幅広の口縁部は頸部から 「く」字状に外反して立ち上 がる。	頸部外面赤彩,内面ナデ。 口縁部外面ナデ,内面赤彩。	細砂粒 にぶい橙色 普通	P142 PL44 30%
5	壶土 師器	B (19.3)	下膨れの体部片である。中 位から内彎して立ち上がる。	体部外面へラナデで一部へ ラケズリ,内面ナデ。	砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P 143 PL45 20%
第146図 6	壺 土 師 器	B (23.0)	下膨れの体部片。中位から 内彎して立ち上がる。	体部外面赤彩後縦ヘラミガ キ,内面横ナデ。	砂粒,スコリア 暗赤褐色 普通	P144 PL45 30%
第145図 7	壺土師器	B (8.1) C [8.2]	底部から体部下半にかけて の破片。突出気味の平底で, 内劈気味に外傾して立ち上 がる。体部は球形状と思われる。	底部外面ナデ。体部外面立 ち上がり部ナデ,下半縦へ ラミガキ。内面ナデ。	砂粒,スコリア にぷい橙色 普通	P145 PL44 15%
8	小型甕土 師器	A [11.8] B 10.5 C 4.7	口縁部一部欠損。体部は球 形状で,最大径を中位に持 つ。口縁部は外傾して立ち 上がる。	底部外面ナデ。体部外面ハケ状のヘラによる横位のナデ, 内面ナデ。口縁部内外面横ナデ。	白色細砂粒,スコリア 浅黄橙色 普通	P146 PL44 80% 体部外面スス付着。
9	鉢 土 師 器	A 11.0 B 4.9 C 3.0	体部一部欠損。上げ底気味 の底部。底部から内費気味 に外傾して立ち上がり口縁 部に至る。	底部外面ヘラナデ。体部から口縁部外面ヘラナデ,内面ナデ。	砂粒多量,スコリア 赤褐色 普通	P147 PL44 95%
10	台付(甕) 土 師 器	D [7.8] E (4.0)	「ハ」字状に開く台部のみ。	手捏ね的な雑な作りで,台 部外面指押え痕とナデ,内 面ナデ。	白色細砂粒,スコリア 橙色 普通	P148 PL44 10%
第146図 11	深 鉢 縄文式土器	A [19.4] B (5.1)	胴上半部から口縁部にかけて びれ、肥厚する口縁部は外長 文、口唇部及び口縁部にも縄 位のナデ。	でする。胴部撚糸文で頸部無	白色細砂粒 にぶい黄橙色 普通	P149 5 %

第39号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔 径	重 量	現存率	備考
凶拟笛写	765	悝	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	1/m +5
第146図 12	土	玉	3.1	2.9	_	0.5	21.4	100	DP56, 西壁寄り
13	土	玉	3.2	3.2	_	0.5	32.1	100	DP57,北西コーナー寄り
14	土	玉	3.0	3.2		0.6	26.3	100	DP58, 北壁寄り
15	土	玉	2.8	3.0	_	0.5	22.2	100	DP59,覆土中
16	土	玉	2.8	2.5		0.7	14.8	100	DP60, P 2上
17	土	玉	2.5	2.4	-	0.5	11.8	100	DP61, 2 層中
18	円	板	(3.4)	(3.9)	1.1	_	(13.6)	30	DP62,覆土中 PL65

第39号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	20	種	沒	ž		量	_	質	備	考	
凶似番写	器	但	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		具	V#I	15	
第146図 19	砥	石	(14.9)	(10.7)	(7.2)	(1421.8)	砂	岩	Q79,欠損品		PL68
22	石	Ш	(6.0)	(6.3)	2.1	(55.7)	安↓	山岩	Q80,破片		
20	敲	石	(9.5)	7.9	2.8	(293.0)	砂	岩	Q81,磨石兼用		PL69
21	敲	石	8.4	5.1	2.3	127.7	砂	岩	Q82		

第146図11・23は覆土中から出土した縄文式土器片である。11は早期前葉(井草式)の時期である。23は口縁部片で、前期前半(関山式)の時期である。縄文地文に沈線区画を施し、沈線に沿って細かく爪形文を施している。さらに沈線上にいぼ状突起を配している。

第41号住居跡 (第147図)

位置 N14c。区。

重複関係 北コーナー部が第120号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.75m・短軸3.70mの方形。

主軸方向 N-41°-W。

壁 壁高14~22cmで、外傾して立ち上がっている。ローム質の壁でしっかりしている。

床 平坦で、全体的に踏み締まりが認められる。また、南西壁際中央で途切れるが、上幅40~90 cmの溝状掘り方の黒い落ち込みが巡っている。深さは、掘り方(上上で表示)を完掘していないので不明である。掘り方上面は踏み締まりが認められ、住居使用時は埋土されていたことがわかる。

ピット 2 か所。 P_1 は長径44cm・短径34cmの楕円形で深さ33cmであり,炉を通る主軸線上に位置し,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 P_2 は南コーナー部に位置し,径27cmの円形で深さ16cmである。性格は不明である。

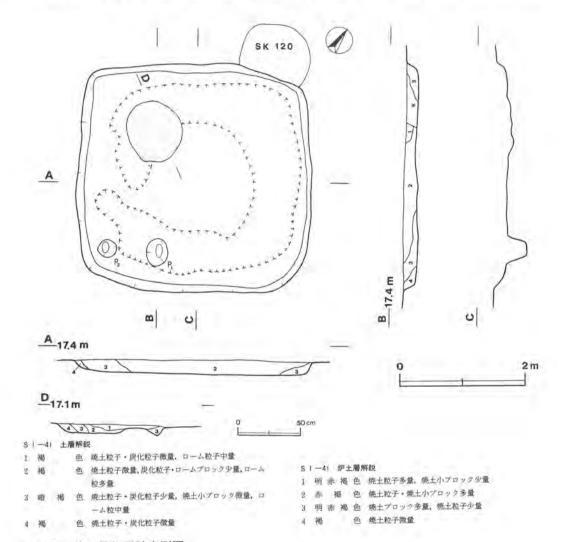
炉 中央から西コーナー寄りに付設されている。溝状掘り方に半分ほどかかっており、床を10cm 程掘り込んで地床炉としている。中間に高まりがあるが、炉床は火熱で赤く硬くなっている。

覆土 4層に分層される。壁際に暗褐色及び褐色の3・4層が堆積してのち、ローム小ブロックを含む褐色土の2層が厚く入っている。さらに、2層上のわずかな窪地に1層の褐色土が入っている。いずれの層中にも焼土粒子・炭化粒子がわずかずつ含まれる。

遺物 覆土上・中層からは13の石皿片及び縄文式土器片が出土している。土師器は床上及び覆土下層から大半が出土している。1の甕は炉の東辺から正位の状態で出土している。また,2の甕は炉上・3の甕は炉の南側からの出土である。9は壺で,口縁部と胴下部を粘土接合部で欠失しており,炉の北西縁部に逆位におかれた状態で出土している。炉の北東辺から北コーナーにかけて,5と6の甕・8の壺の破片が散らばって出土している。また,南西壁際中央から東壁側にかけての広範囲に,4の甕の破片が散らばって出土している。南東壁際中央からは,11の高坏が横位の

状態で出土している。10の坩は南コーナー部床上,12の土玉と14の台石は東コーナー脇床上からの出土である。

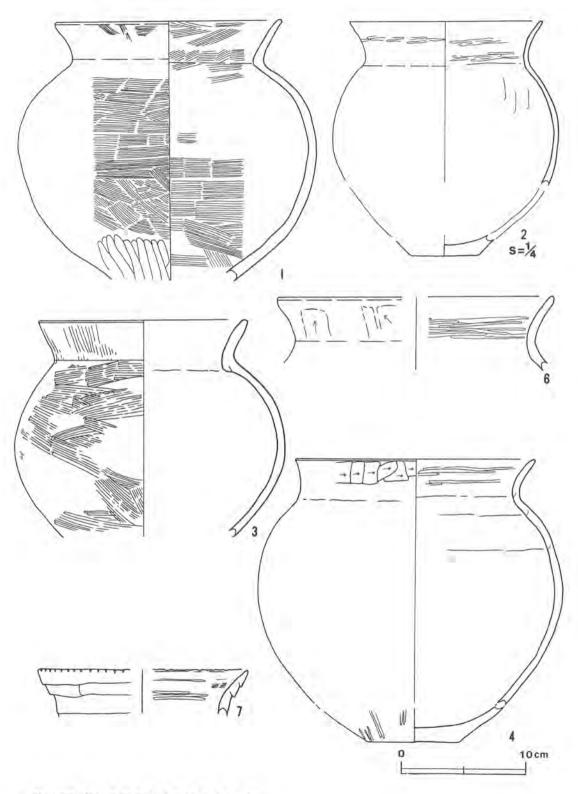
所見 主柱穴をもたない住居跡である。溝状掘り方については、1号住居のあり方に類似する。 遺物は炉の周辺に集中するが、出土状況は一括投棄をうかがわせる。9の壺破損品は置台への二 次転用と考えられる。本跡の時期は遺物から判断して古墳時代前期(五領式期)と考えられる。



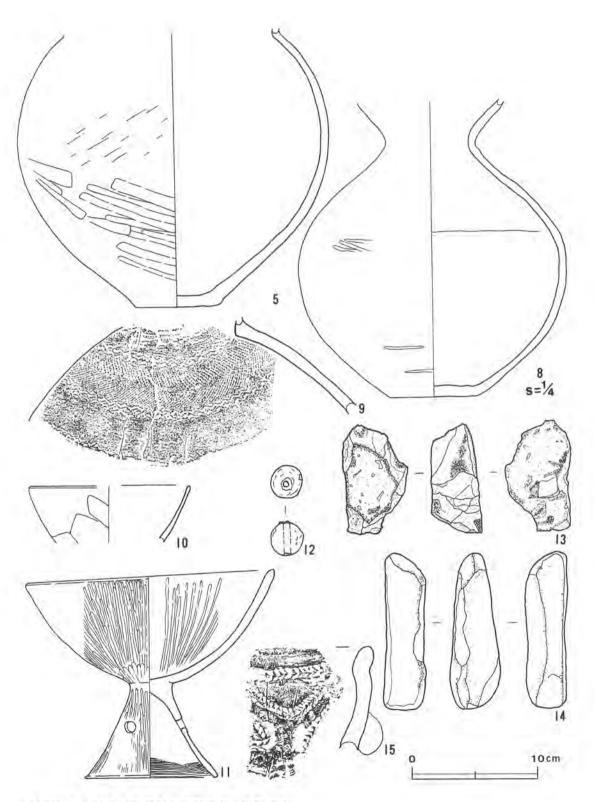
第147図 第41号住居跡実測図

第41号住居跡出土石製品一覧表

S3	100	100	沒	4		盤	-	mr.	備者		
図版番号	器	種	長さ(cm)	長き(cm) 幅 (cm)		重量(g)	1 4	34	VHI '5		
第149図 14	台	石	12.6	4.2	3.4	230.0	礫	岩	Q96,火熱により変色		
13	石	III.	(8.8)	(5.3)	4.0	(158.4)	安し	山岩	Q97,破片	PL68	

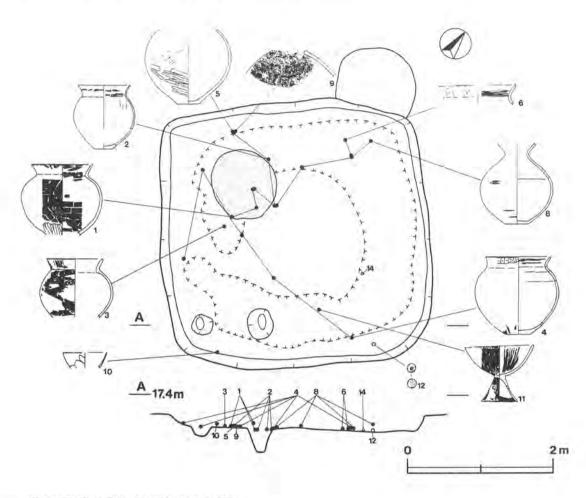


第148図 第41号住居跡出土遺物実測図(1)



第149図 第41号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第149図15は覆土中から出土した縄文時代中期中葉 (勝坂式) の口縁部片である。隆帯で区画された中に、「ハ」字状の角押文が隆帯に沿って施されている。



第150図 第41号住居跡遺物出土状況図

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特敵	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1	整 出 能 器	A 18.0 B (21.9)	体部はややつぶれた球形状 で、最大径を体部上半に持 つ。口縁部は強く外傾して 立ち上がる。		白色細砂粒, スコリア にぶい橙色 普通	P176 PL45 80% 内面に小剝離痕。
2	差 折器	A 20,7 B (17.9) C 7.5	体部下半欠損。底部との接 点はないが同一個体。体部 は球形状で中位に最大径を 持つ。口縁部は緩く外反し て立ち上がる。	体部外面機ナデ, 内面横へ ラナデ。口縁部内外面横へ ラミガキ。	白色細砂粒,スコリア 暗赤褐色 普通	P177 PL45 80% 外面に小剝離痕多し、

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図	甕	A 16.7	体部下半欠損。体部はやや	体部外面上半横ハケ目整形	砂粒、スコリア	P178 PL45
3	土 師 器	B (17.3)	つぶれた球形状で,最大径	で下半斜位ハケ目整形後へ	にぶい橙色	70%
			を体部上半に持つ。厚みの	ラナデ,内面横ナデ。口縁	普通	
İ			ある口縁部は外傾して立ち	部外面縦ハケ目整形後横ナ		
			上がる。台付甕の可能性も	デ,内面横へラナデ。		
			ある。			
4	甕	A 19.1	体部下半欠損。底部との接	体部外面横ナデ,内面横ナ	細砂粒多量	P179 PL45
	土 師 器	B (19.5)	点はないが同一個体。体部	デ後一部ヘラミガキ。口縁	暗赤褐色	75%
		C 7.4	は球形状で最大径を中位に	部外面横ナデ,内面横ナデ	普通	内面に輪積み痕
			持つ。口縁部は緩く外反し	後一部ヘラミガキ。		
			て立ち上がる。			
第149図	獲	B (22.0)	平底の底部から体部上半に	底部外面ナデ。体部内外面	長石,石英,雲母,	P180 PL46
5	土師器	C 6.9	かけての破片。体部は球形	ヘラナデ。	スコリア	40%
			状で中位に最大径を持つ。		橙色 普通	
第148図	甕	A [22.0]	口縁部片で,外反して立ち	口縁部内外面ヘラケズリ後	白色細砂粒	P181 PL45
6	土師器	B (5.2)	上がる。	横ナデ。	赤褐色 普通	10%
7	甕	A [15.8]	口縁部片で,外反して立ち	口縁部外面は3段の輪積み	白色細砂粒	P182 PL45
	土 師 器	B (3.6)	上がる。	痕を残している。内面は横	明赤褐色	5 %
				ハケ目整形後ナデ。口唇上	普通	
				にはキザミを施す。		
第149図	壺	B (31.5)	体部中位・口縁部欠損。底	底部ナデ。体部外面ナデで	細砂粒多量,スコリア	P183 PL46
8	土師器	C 8.8	部は平底。体部は球形状で,	一部ヘラミガキ,内面は荒	にぶい橙色	50%
			最大径を中位に持つ。頸部	れがひどく不明。口縁部内	普通	内面に小剝離痕多し。
			で「く」字状に外反して立ち	外面ナデ。		
			上がる。			
9	壺	B (7.7)	体部上半のみで, 球形状を	体部外面上半は結節縄文間	砂粒、スコリア	P184 PL45
	土師器		している。頸部・体部とも	に撚りの細い縄文(単節L	にぶい橙色	40%
			粘土紐接合部で欠損。体部	R・RL)を羽状に施文し	普通	台に転用。
			欠損部内面は擦痕があり,	ている。さらにヘラミガキ		
			また火熱による赤変が見ら	の無文帯を挟んで中位にも		
			れる。	同様の縄文帯が施文されて		
				いる思われる。		
10	坩	A [13.0]	口縁部のみ。口縁部は内彎	口縁部外面ヘラナデ、内面	砂粒多量, スコリア	P 185
	土師器	B (4.6)	気味に外傾して立ち上がる。	横ナデ。	赤褐色	10%
					普通	
11	高坏	A 21.2	脚部・口縁部一部欠損。脚	脚部外面縦ヘラミガキで端	白色細砂粒	P186 PL46
	土師器	B 16.6	部は「ハ」字状に開く。脚部	部は横ナデ,内面ナデで下	橙色	95%
		D 10.6	に3孔有り。坏部は半球形	半ハケ目整形。坏部内外面	普通	
		E 7.6	状である。	縦ヘラミガキで端部横ナデ。		

第41号住居跡出土土製品一覧表

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔 径	重量	現存率	備考
凶版番写	46°	悝	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%))HI -9
第149図 12	土	玉	2.8	2.2	_	0.5	16.1	100	DP66,東コーナー脇床 上 PL64

第45号住居跡 (第151図)

位置 N14h₈区。

重複関係 南半部で第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.16m・短軸4.00mの長方形。

主軸方向 N-48°-E。

壁 壁高57~70cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁質は硬くしっかりしている。壁下には溝が全周している。上幅 $6\sim14$ cm・深さ $4\sim6$ cmで、「U」字状に掘り込まれている。

床 平坦である。中央部分から貯蔵穴にかけての範囲が踏み締められている。また、踏み締まりの認められる範囲を囲むように3か所、径12cmの円形の特に硬い部分が認められた。床の踏み締まりよりも硬く、幾分光沢を帯びている。主柱を立てた痕跡と考えられる。

ピット 3か所。 P_1 は径40cmの円形で深さが9cmあり,東壁際で貯蔵穴の脇に位置しており,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 P_2 は径32cmの円形で深さが20cmあり,主柱痕列の中間に位置し,柱穴と考えられる。 P_3 は径26cmの円形で深さが7cmあり,主柱痕の脇に位置していることから補助柱穴と考えられる。

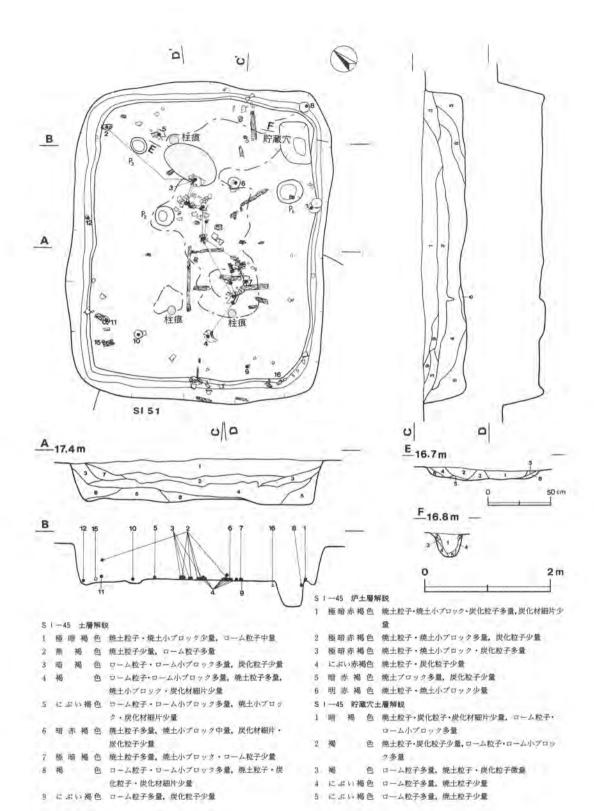
貯蔵穴 東コーナー部に付設されている。長軸70cm・短軸44cmの長方形で深さ42cm,底は平坦で 外傾して立ち上がっている。

炉 主軸線上北寄りに付設されている。長径93cm・短径56cmの楕円形で,床を10cm程皿状に掘り くぼめて地床炉としている。炉床は火熱によって赤く,また硬くなっている。炉の南西部分の床 中央が焼けて硬くなっているが,焼失によるものである。

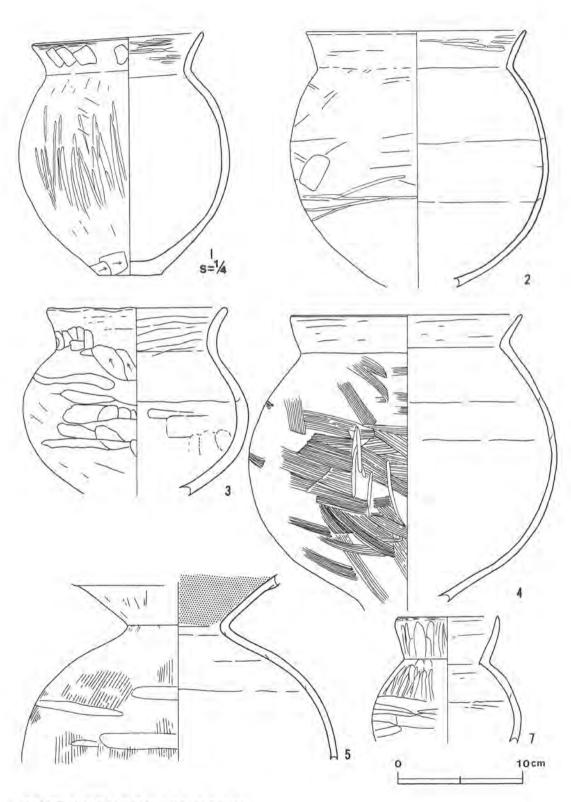
覆土 9層に分層される。壁際から床にかけてローム小ブロックを多量に含む5層と,焼土ブロックを多く含む6層が堆積している。また,いずれにも炭化材細片・焼土粒子が含まれている。4・8層は褐色土でローム小ブロックを多量に含み,焼土粒子・炭化材細片もわずかに含んでいる。土層の締まり具合で分層した。3層は暗褐色土でやはりローム小ブロックを多量に含んでいる。7層は極暗褐色土で焼土粒子を多く含んでいる。凹レンズ状の窪地にさらに2・9・1層が堆積している。9層は鈍い褐色土,2層は黒褐色土でいずれもローム粒子を多量に含む。1層は極暗褐色土で腐食土であり,締まりがない。

遺物 覆土上層からは縄文式土器片が多く出土している。土師器は覆土下層から床上に多い。西コーナー寄りの床上から $10 \cdot 11$ の粗製器台(炉器台)が2 個横位の状態で,また北西壁中央寄り床上から12のミニチュア土器が出土している。 P_1 の脇の東壁に立て掛けられるように,1 の甕が正位で出土している。北東コーナーの壁溝上からは8 の脚部を欠く高坏が出土している。 $2 \cdot 3$ の甕は炉上から,ばらばらになって出土している。6 の甕は炉の東辺床上から,4 の台付甕・7 の壺は中央で炭化材・焼土におしつぶされたような状態で,ばらばらになって出土している。5 の壺は炉の北辺から,9 の高坏は南コーナ寄りの覆土下層から出土している。そのほか,粗製器台の脇からやや浮いた状態で15の土玉,南壁側床上から16の磨石,覆土中から17の石匙が出土している。

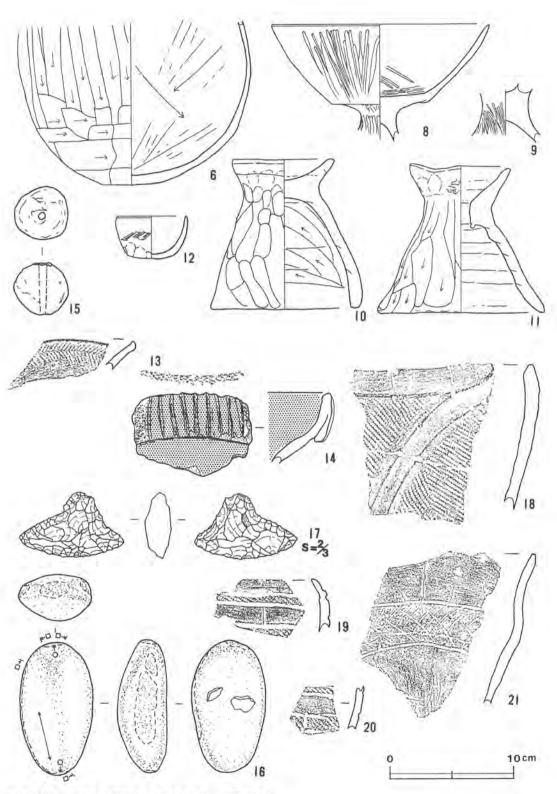
所見 本跡の主柱は、穴を掘らないで立てた痕跡が明瞭に残されていた。配列からもう1か所の 痕跡を探したが、これは確認できなかった。時期は出土遺物から古墳時代前期(五領式期)で、



第151図 第45号住居跡実測図



第152図 第45号住居跡出土遺物実測図(1)



第153図 第45号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

炭化材・焼土の広がりから判断して焼失住居跡である。1の甕など,遺物の出土状況からみると, 突然の火災を思わせる。

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法	量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備	考
第152図	魏		Α	18.4	口縁部一部欠損。平底。体	体部外面横ナデ後一部縦へ	砂粒,スコリア	P 196	PL46
1	土 師	器	В	25.8	部は球形状で,最大径を中	ラミガキで下端ヘラケズリ,	にぶい橙色	98%	
			С	6.5	位に持つ。口縁部は緩く外	内面横ナデ。口縁部横ナデ	普通	体部下端二	欠焼成。
					反して立ち上がる。体部中・	後外面ヘラケズリ,内面へ		体部にススイ	寸着。
					上半スス付着。	ラミガキ。			
2	碧	!	A	17.6	底部欠損, 台付甕の可能性	体部外面横ナデ後一部ヘラ	細砂粒	P 197	PL46
	土 前	器	В	(20.7)	もある。体部は球形状で中	ケズリ,内面横ナデで下半	橙色	80%	
					位に最大径を持つ。口縁部	に炭化物付着。口縁部内外	普通		
					は外傾して立ち上がる。	面横ナデ。			
3	3	ţ	A	14.4	底部から体部下半及び口縁	体部外面横へラナデ,内面	砂粒	P 198	PL46
	土 飢	器	В	(18.0)	部の一部欠損。体部はやや	横ナデ。口縁部外面ナデで	にぶい橙色	70%	
					つぶれた球形状で, 中位に	一部ヘラケズリ,内面ヘラ	普通	内面輪積み	
					最大径を持つ。口縁部は緩	ナデ。		体部・頸部	スス付着。
					やかに外反して立ち上がる。				
4	台布			18.6	台部欠損。体部は球形状で	体部外面横・斜位ハケ目整	細砂粒	P199	PL46
	土前	器	В	(23.6)	中位に最大径を持つ。口縁	形後一部ヘラミガキ,内面	にぶい黄橙色	90%	
					部は外傾して立ち上がる。	横ナデ。口縁部内外面横ナ	普通	口縁部体部	
						デ。	t to count to	体部下半二	
5	壺		В	(16.3)	体部下半及び口縁の複合部	体部外面縦ハケ目整形後横	白色細砂粒	P 200	PL47
	土的	5 器			欠損。体部は球形状で中位	ナデ,内面横ナデ。口縁部	褐色	40%	
					に最大径を持つと思われる。	外面縦ハケ目整形後縦ナ	普通	口縁部内面	赤彩。
					口縁部は強く外傾して立ち	デ,内面ナデ。			
	L		<u> </u>		上がる。	Utaki Takika za wa		Door	DI 47
第153図	翌	_	1	(13.0)	体部上半から口縁部欠損。	体部外面中位縦ヘラケズリ	長石,石英,雲母,	P 201	PL47
6	土師	市器	С	4.5	平底。体部は下膨れ形で下	で下半横へラケズリ,内面	チャート	40% 体部中位ス	っ 仕美
AYC + F O DO	are to	-e° titr	1		半に最大径を持つ。	ヘラナデ。 体部外面上半縦ヘラミガキ	にぶい褐色 普通砂粒,スコリア	平部中位へ P 202	クリリイ目。 PL47
第152図			A	8.0	体部下半欠損。体部は下膨	で中位横へラミガキ,内面	砂心,ヘコッ/	50%	1 1.47
7	土的	」結	В	(10.2)	れになると思われる。口縁	横ナデ。口縁部外面縦へラ	普通	30/0	
			İ		部は内彎気味に外傾して立	1度 / / 。 口 ASK ロ カント 国 和 (日旭		
第153図	高	坏	Δ	17.5	ち上がる。 脚部下半欠損。脚部はラッ	脚部外面縦ヘラミガキ。坏	砂粒、スコリア	P 207	PL47
#133E	土部			(9.3)	パ状に開くと思われる。坏	部外面縦へラミガキ、内面	赤褐色	60%	
o	1 - 1	րաբ	В	(3.3)	部は下位に稜を持ち、内彎	ヘラミガキ。口縁部内外面	普通	0070	
					気味に外傾して立ち上がる。	ナデ。			
9	高	坏	В	(3.4)	脚部中位のみ。脚部はラッ	脚部外面縦へラミガキ。	細砂粒	P 208	
Ü	土的		-	(0.1)	パ状に開くと思われる。		にぶい黄橙色 普通	10%	
10	粗製		A	8.2	脚部は「ハ」字状に開く。器	脚部外面縦ナデ、内面斜位	白色細砂粒	P 209	PL47
	土自		В		受部は輪積み二段分の高さ	指ナデ。器受部外面横ナデ	にぶい橙色	100%	
			D	12.0	で,外傾して立ち上がる。	で一部指おさえ,内面横ナ	普通	器受部内面	擦痕•剝離
			E	8.7	器受部は二次焼成を受けて	デ。		痕有り。	
	•				いる。			二次焼成。	
11	粗製	器台	A	8.2	脚部は「ハ」字状に開く。器	脚部外面縦ナデ,内面横ナ	白色細砂粒	P210	PL47
	土自	万 器	В	12.0	受部は外傾して立ち上がる。	デで輪積み痕有り。器受部	にぶい黄橙色	100%	
			D	11.7	中央に貫通孔を有す。孔は	外面ナデ・指おさえ痕,内	普通	器受部内面	擦痕・剝離
			Е	8.5	上から下にあけられている。	面横ナデ。		痕有り。	
					器受部は二次焼成を受けて			二次焼成。	
					いる。				
12	ミニラ	ニュア	A	5.7	口縁部一部欠損。底部はす	底部外面ナデ。体部外面ハ	白色細砂粒	P211	PL47
		土器	В	3.5	わりのよくない平底。体部	ケ目整形後横ナデ,内面横	にぶい黄橙色	95%	
	1, 4	丁器	l c	3.7	は内彎気味に外傾して立ち	ナデ。	普通		
	T 8		_						

第45号住居跡出土土製品一覧表 (PL64)

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔径	重量	現存率	備考
凶似钳 勺		但	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%)	m ~5
第153図 15	土	玉	4.2	4.4		0.6	67.1	100	DP67,西コーナー寄り床上

第45号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器	種	法	=	<u> </u>	量	~	質	備考	
凶似曲写	100	悝	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	口	Ą	/н ⁷⁵	
第153図 16	磨	石	11.6	6.0	4.2	333.4	砂	胩	Q111,敲石兼用,床上	PL69
17	石	匙	2.6	4.2	1.0	7.9	チャ	ا ۲	Q112, 覆土中	PL66

第153図13は覆土中層から出土した土師器壺の口縁部片で,第34号住居跡出土の9とは同一個体であろう。14も覆土中出土で,壺の複合口縁部片である。表裏面赤彩されており,口縁部に細い棒状貼付文を9本,その両脇と口唇上に網目状撚糸文を施文している。18~21は覆土中から出土した縄文式土器片である。18は中期後半(加曽利EIV式)の口縁部片で,縄文地文に微隆線によってモチーフを描いている。19~21は後期中葉(加曽利B1式)の時期で,浅鉢形か。横位の縄文帯間は磨消されている。19の内傾する口縁内面はわずかに稜を持つ。20の縄文帯には縦線文がある。21は大きく開く波状口縁の深鉢で,沈線で区画された中に格子目文を施している。後期中葉(加曽利B2式)の時期である。

第49号住居跡 (第154図)

位置 M15f₃区。

重複関係 第34号住居跡によって、南西コーナー部が掘り込まれている。

規模と平面形 住居跡の大半が調査区外であるため規模は不明,平面形は方形と考えられる。 主軸方向 不明。

壁 壁高32cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁質はしっかりしている。

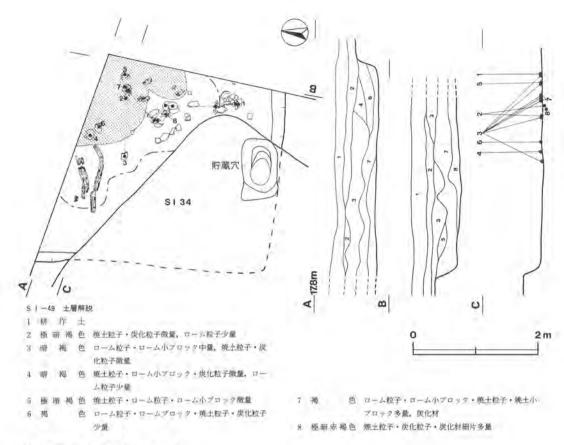
床 中央部寄りはよく踏み締められている。

ピット確認できなかった。

貯蔵穴 南西コーナー部の右側,南壁に接して付設されている。長軸98cm・短軸56cmの隅丸長方形で,深さ44cmである。平坦な底面から外傾して立ち上がっている。

炉 確認できなかった。

覆土 8層に分層される。8層は焼土層で,炭化材も含まれている。7層は壁際から床上に広く 堆積している。やはり炭化材・焼土粒子等を多く含む。5・6層中には焼土粒子は少ない。さら に皿状の窪地に3・4層が入っている。3層にはローム小ブロックがやや多く含まれている。1 層は耕作土で,2層は極暗褐色土の腐食土である。住居跡は2層下から掘り込まれている。



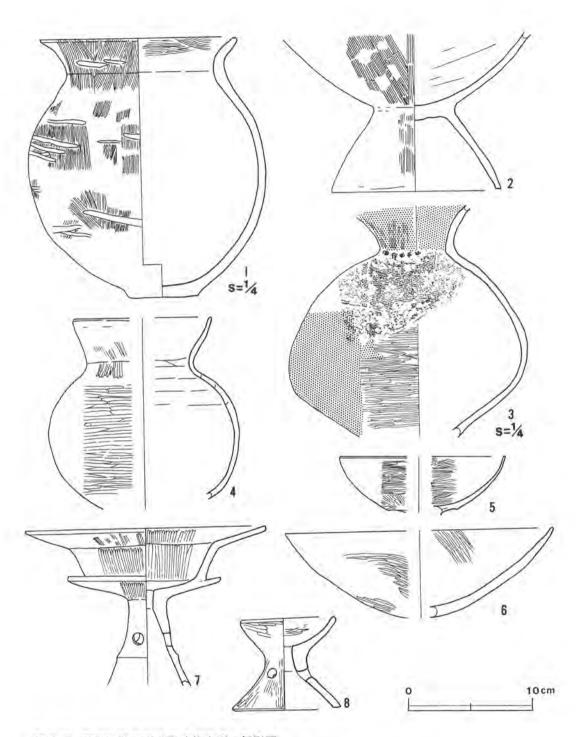
第154図 第49号住居跡実測図

遺物 調査できた住居跡の面積に比べて、土師器の出土は多い。1の甕は南壁寄りの床上から出土している。2の台付甕・3の壺・8の器台は中央寄り床上からの出土である。4の小型壺、5・6の脚部を欠く高坏・7の脚部を欠く装飾器台も焼土下の床上から出土している。

所見 本跡は、炭化材や焼土が床一面に確認されており、焼失住居跡である。土器の個体数は多いが、完形は器台1点と少ない。装飾器台は胎土・焼成・整形が他の土器とは全く異質で、搬入品と考えられる。本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期(五領式期)である。

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	额	往	量(cm)	50 70	形	0	特	徵	手	法	03	特	徵	胎土	• 色調 • 焼成	備	考
第155図		99. 節器	1000	21.1 27.5 7.4	は球形	状で	緑部	大径	を中位	からに形後板	コ緑部 黄ナテ 体部	が で、 内面	縦ハヤー部・ナデ、	テ目整 ヘラミ 口縁	にぶい 普通	スコリア 3橙色	P216 65% 体部外面	PL47 こスス付着。



第155図 第49号住居跡出土遺物実測。拓影図

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図	台 付 甕	B (12.3)	台部から体部下半にかけて	台部外面弱い縦ハケ目整形	細砂粒,スコリア	P217 PL48
2	土師器	C 13.6	の破片。台部は「ハ」字状に	で下端は横ナデ,内面ナデ。	褐色	40%
		E 5.6	開く。体部は内彎気味に立	体部外面縦・斜位のハケ目	普通	体部外面スス付着,内
			ち上がり球形状になると思	整形で,内面横へラナデ。		面小剝離痕。
			われる。台部・体部下半二			
			次焼成。			
3	壺	B (24.5)	底部・口縁部欠損。体部は	撫で肩の体部上半に網目状	砂粒、スコリア	P218 PL47
	土師器		撫で肩で下膨れである。頸	撚糸文を施文する。外面は	暗赤褐色	70%
			部にはボタン状貼付文が巡	撚糸文の部分を除き全面赤	普通	内面器壁の剝離著し。
			る。口縁は強く外反して立	彩。赤彩後口縁部は縦へラ		
			ち上がる。	ミガキ,体部は横へラミガ		
				+。		
4	壺	A [11.2]	底部及び口縁部の一部欠	体部外面横へラミガキ,内	砂粒	P219 PL48
	土師器	B (15.2)	損。体部はややつぶれた球	面ナデ。口縁部外面縦ハケ	にぶい橙色	80%
			形状で中位に最大径を持	目整形後横ナデ,内面横へ	普通	体部外面下半スス付
			つ。口縁部は内彎気味に外	ラナデ。		着。
			傾して立ち上がる。			
5	高坏	A [13.4]	坏部の一部及び脚部欠損。	坏部内外面丁寧なヘラミガ	細砂粒	P220 PL48
	土師器	B (4.5)	坏部は下位に稜を持ち,内	+。	橙色	50%,内外面小剝離痕。
			彎気味に外傾して立ち上が		良好	
	rater Live	1 [01 0]	3.	17-47-4-61-7" - C 10 1	75 M / F T T M /	Dood Dr.
6	高坏		「	坏部内外面ヘラミガキ。	砂粒(長石・石英・チ	P 221 PL48
	土師器	B (6.9)	味に外傾して立ち上がる。		ャート)多量	20%
7	装飾器台	A 19.5	脚部下半·器受部一部欠損。	脚部外面丁寧なナデ。器受	橙色 普通 精選された細砂粒	P222 PL48
'	土師器	B (12.5)	脚部は緩く「ハ」字状に開く	部内外面丁寧な縦へラミガ	にぶい橙色	75%
	그 메 쇼	D (12.5)	と思われる。脚部中位には	キ。器受部端部・張り出し	普通	
			突帯が巡り、上部に3孔を	千。裔文部編部・扱り出し 部は面取りされている。	百地	整形手法・胎土から搬 入品の可能性有り。
			有す。器受部は二段作りで	一切は囲水りでれている。		人間の可能性有り。
			下段に張り出しがあり、上			
			段は立ち上がってからほぼ			
			水平に広がる。中央に貫通			
			水平に広かる。中央に負週 孔有り。			
8	器台	A 7.7	脚部は「ハ 字状に開き、上	脚部外面縦へラミガキ、内	砂粒	P223 PL48
~	土師器	B 7.4	半に3孔を有す。器受部は	面ナデ。器受部内外面横へ	にぶい橙色	100%
		D 8.7	内彎気味に外傾して立ち上	ラミガキ。	普通	脚部内面に小剝離痕。
		E 4.5	がる。中央に貫通孔有り。	10		器ずれ痕。二次焼成。

第26号住居跡 (第156・157図)

位置 L15g1区。

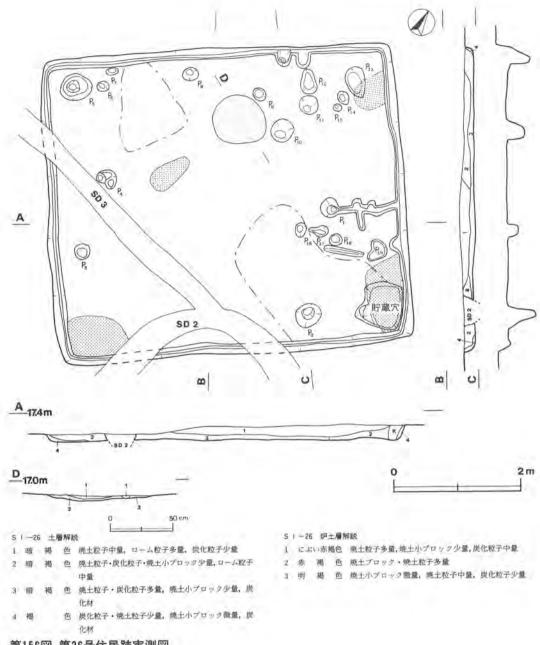
重複関係 第28号住居跡の北西部を掘り込み、また、第2・3号溝によって掘り込まれている。 規模と平面形 長軸5.68m・短軸4.96mの長方形。

主軸方向 N-33°-W。

壁 壁高11~26cmで、外傾して立ち上がっている。壁はしっかりしている。

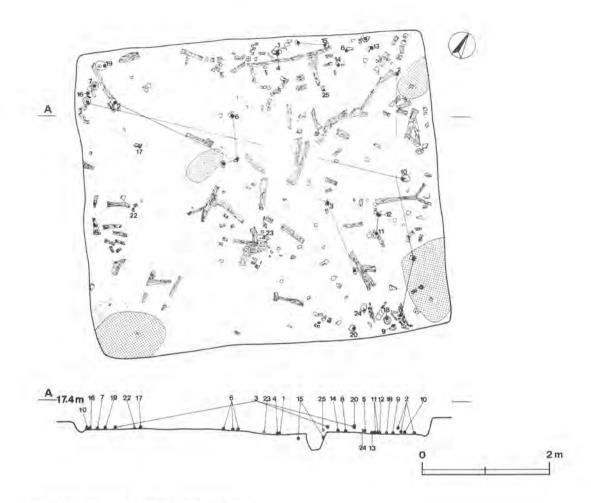
壁溝 壁下を全周している。上幅 $8\sim12$ cm・深さ $4\sim6$ cmで,断面形は「U」字状をしている。 床 平坦である。出入り口部分と炉の西側に踏み締まり部分が見られる。間仕切りと思われる溝が東壁のほぼ中央に 1 条あり, P_1 まで延びている。長さ100cm・上幅10cmである。

ピット 19か所。 P_1 は径30cmの円形で深さ30cm,間仕切り施設に伴うピットであろう。 P_2 は長径



第156図 第26号住居跡実測図

42cm・短径36cmの楕円形で深さ46cmで外傾して掘り込まれており、出入り口施設に伴うビットと 考えられる。P₃は径42cmの円形で深さ16cm, P₅は径50cmの不整円形で深さ22cm, P₁₂は長径40cm・ 短径26cmの楕円形で深さ18cm, P17は長径32cm・短径20cmの不整楕円形で深さ16cmである。規模に ややばらつきがあるが、配列から判断して主柱穴と考えられる。Pe・Pin・Pieは位置関係から補助 柱穴と考えられる。 $P_4 \cdot P_7 \sim P_{10} \cdot P_{13} \sim P_{15}$ は主柱穴の近くに位置しているが、規模にばらつきが



第157図 第26号住居跡遺物出土状況図

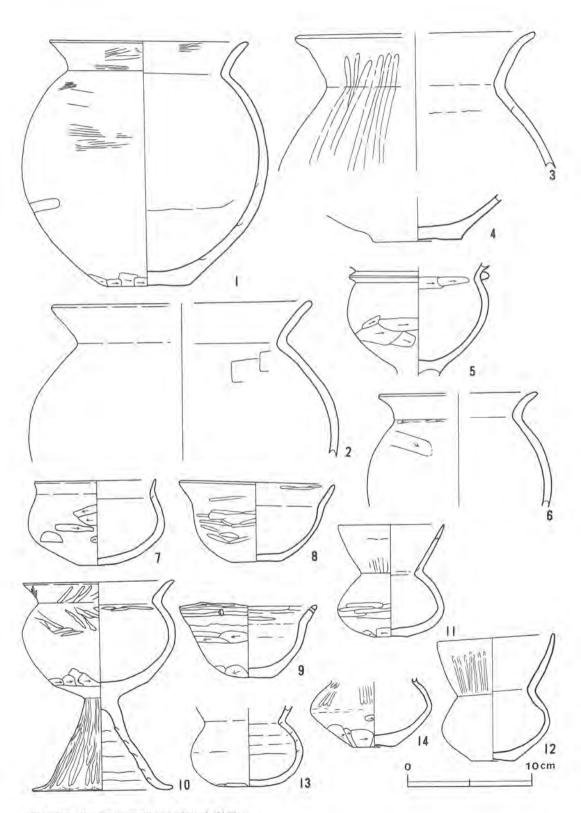
あり,性格は不明である。

炉 主軸線上で、中央部からやや北寄りに付設されている。径85cm程のほぼ円形で、床を10cm程 皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床はよく焼けて硬くなっている。

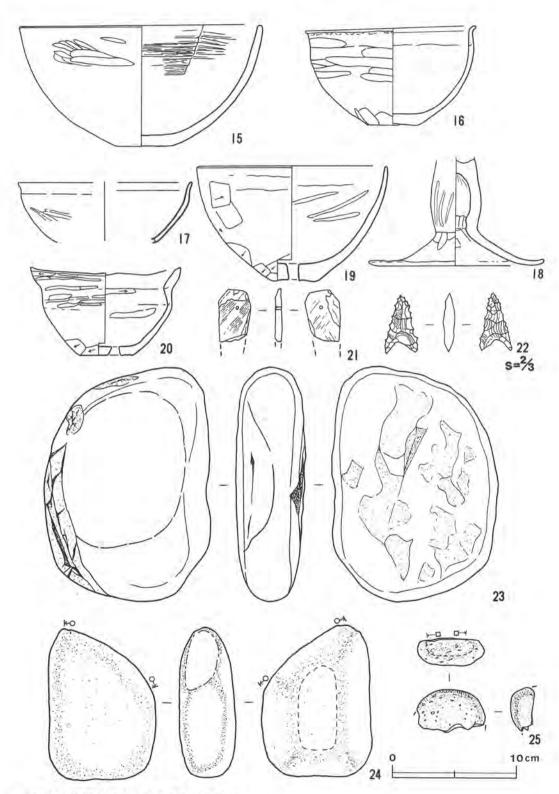
貯蔵穴 南東コーナーに付設されている。長軸74cm・短軸58cmの不整長方形で、深さ19cmである。 平坦な底面から緩く外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。 $2 \cdot 3 \cdot 4$ 層中には多量の炭化材が含まれる。褐色土の4層が壁際に 堆積してのち, $2 \cdot 3$ 層の焼土粒子などを多く含む褐色土が床全体を広く覆う。1層は皿状にく ぽんだところに堆積した暗褐色土でさらさらした手触りであり,腐食土と思われる。

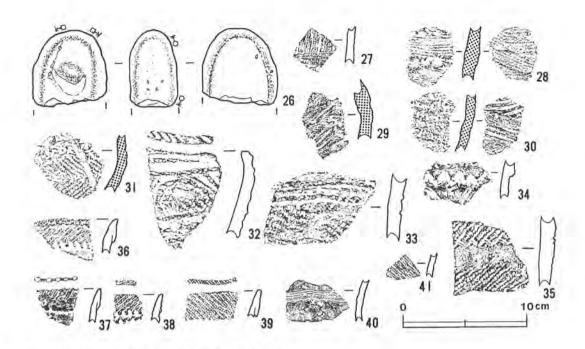
遺物 2・3層中及び床上から遺物が多く出土している。土師器片は覆土下層に多く、縄文式土器・弥生式土器片は上・中層に多い。1の甕・15の鉢は西壁際中央部床上からつぶれてばらばら



第158図 第26号住居跡出土遺物実測図(1)



第159図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)



第160図 第26号住居跡出土遺物実測 • 拓影図(3)

になって出土している。2・3は甕の口縁部から体部にかけての破片であり、東西コーナーの床上からそれぞれ出土している。4の甕底部片は、やはり西壁際中央床上から出土している。6の小型甕は炉の南西側床上からばらばらになって出土している。西コーナー床上からは逆位で19の有孔鉢、正位で7の焼と16の鉢、脚部のとれた10の脚付焼が逆位で、並んだ状態で出土している。10の脚付焼の脚部は炉を挟んで反対側の北東壁寄り中央部から出土している。北西壁の北コーナー寄り床上からは5の小型台付甕の甕部が出土している。また、一緒に8の鉢・13と14の坩がばらばらになって出土している。東コーナー寄りの覆土下層から18の高坏脚部・9の鉢が正位で、20の有孔鉢が横位で出土している。11と12の坩は近接して、横位のつぶれた状態で床上から出土している。17の环は炉と南西壁間の床上からの出土である。石器では22の石鏃が西壁側中央床上から、24の磨石と25の敲石が床上、26の磨石が覆土中から出土している。また、床上中央やや南寄りからは、火熱で割れて、粉々になった状態で光沢のある23の台石が出土している。21の剣形石製模造品は覆土中の出土である。

所見 本跡は炭化材が良好に残った焼失住居跡である。コーナー部には、焼土の堆積が認められる。また、出土した土師器の器種はバラエティに富んでいた。しかも、壁・コーナー寄りからの出土が多い。土器類は失火で持ち出せなかったことも考えられる。本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期(和泉式期)と考えられる。

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図		A 15.9	口縁部一部欠損。平底。体		白色細砂粒	P 90 PL48
1	土飾器	B 19.8	部は球形状で、最大径を中		橙色	90%
		C 6.8	位に持つ。口縁部は強く外	上がり部はヘラケズリ、内	普通	体部外面にスス付着。
			反して立ち上がる。	面へラナデ。口縁部内外面 横ナデ。		
2	甕	A [20.8]	体部上半から口縁部にかけ	体部外面ナデ,内面横へラ	長石,石英	P91 PL48
	土師器	B (12.5)	ての破片。体部はやや偏平		にぶい黄橙色	30%
		_ (====,	な球形状か。口縁部は外傾		普通	体部内面に小剝離痕。
			して立ち上がる。			THE SELECT STREET
3	甕	A [19.0]	体部上半から口縁部にかけ	体部外面縦へラミガキ, 内	砂粒、スコリア	P92 PL48
	土師器	B (11.0)	ての破片。口縁部は幅広で	面横へラナデ。口縁部外面	にぶい橙色	20%
			強く外傾して立ち上がり,	横ナデ後ヘラミガキ, 内面	普通	内面籾痕あり(PL77)
			端部で外反する。	横ナデ。		
4	甕	B (3.6)	底部から体部下半にかけて	底部外面ヘラケズリ。体部	長石,石英	P93 PL48
	土師器	C 7.2	の破片。平底。体部は外傾	外面ヘラケズリ,内面ナデ。	灰黄褐色	10%
			して立ち上がる。		普通	内面スス付着。
5	小型台付甕	B (8.5)	台部はなく、口縁部欠損。	体部外面ヘラケズリ、内面	長石,石英,スコリア	P 94 PL49
	土師器		体部は外傾して立ち上がり、	ヘラナデ。頸部は鍔ととも	にぶい橙色	50%
			中位に最大径を持つ。頸部には鍔が巡り、口縁部は強	に丁寧に撫でている。	普通	体部内面小剝離痕多
			には野が巡り、口縁部は強 く外反するか。			L.
6	小型甕	A [12.7]	体部上半から口縁部にかけ	体部外面ナデ、内面ヘラナ	見て よ、 し 万茶	DOS DI 10
U	土師器	B (9.1)	ての破片。口縁部は外反し	デ。口縁部外面横ナデ,内	長石,チャート,石英 暗褐色	P95 PL49 20%
		B (3.1)	て立ち上がる。	外面ナデ。	普通	2076
7	埦	A 9.5	底部は平底。体部は内彎気		長石、石英	P96 PL49
	土師器	B 6.8	味に外傾して立ち上がり,	面へラケズリ後横ナデ,内	にぶい浅黄色	100%
		C 3.0	中位に最大径を持つ。口縁		普通	10070
			部は頸部から直立気味に立	デ。		
			ち上がる。			
8	鉢	A 12.5	口縁部一部欠損。平底。体	底部外面ヘラケズリ。体部	長石,雲母,石英	P 97 PL49
	土 師 器	B 6.7	部は底部から外傾して立ち	外面横ナデで一部ヘラミガ	にぶい浅黄色	90%
		C 4.1	上がり、頸部でさらに外傾	キ,内面横ナデ。口縁部内	普通	体部内面に小剝離痕。
			して口縁部となる。	外面横ナデ。		
9	鉢	A 11.0	口緣部・体部一部欠損。平底	ヘラナデ。体部外面ヘラケ	長石,石英	P98 PL49
	土師器	B 5.8	底部外面。体部は底部から	ズリ後ヘラミガキ,内面へ	にぶい橙色	90%
		C 3.8	外傾して立ち上がり,頸部 でさらに外傾して口縁部と	ラナデ。口縁部内外面ヘラ	普通	口縁部に焼成後穿孔。
			なる。	ミガキ。		
10	脚付埦	A 12.2	脚部はラッパ状に開く。体	脚部外面縦へラミガキ,内	細砂粒,スコリア	P99 PL49
10	土師器	B 16.9	部は下半に稜を持ち、上半		神砂粒,スコリア にぶい黄橙色	P 99 PL49 100%
	— ин	D 11.2	に最大径を有する。口縁部	キ,内面横ナデ。口縁部外	普通	20070
		E 7.5	は頸部から強く外反して立	面へラミガキ,内面横ナデ。	· ··· <u>-</u>	
			ち上がる。			
11	坩	A 8.5	体部一部欠損。平底。体部	底部外面ヘラナデ。体部下	細砂粒,スコリア	P100 PL49
	土師器	B 9.0	は算盤玉状で中位下に最大	半は横ヘラケズリ,内面ナ	にぶい橙色	90%
		C 2.6	径を持つ。口縁部は内彎気	デ。口縁部内外面横ナデ。	普通	
			味に外傾して立ち上がる。			
12	坩	A 9.5	口縁部から体部にかけて一	底部外面ヘラナデ。体部内	細砂粒	P101 PL49
	土師器	B 10.2	部欠損。平底。体部は算盤	外面ナデ。口縁部外面横ナ	赤褐色	60%
		C 3.8	玉状で中位に最大径を持	デ後縦ヘラミガキ, 内面横	普通	二次焼成を受けている。
			つ。口縁部は内彎気味に外	ナデ。		
10	11.1	D (2 2)	傾して立ち上がる。			
13	坩土碗幣	B (6.6)	底部は平底であるが、体部	底部外面ヘラナデ。体部外	長石,石英	P102 PL49
	土 師 器	C 5.0	との境は不明瞭。体部は丸	面横ナデで下半はヘラミガ	にぶい橙色	70%
İ			みを持った算盤玉状で、中 位に最大径を持つ 口線部	キ。口縁部はナデ。	普通	
			位に最大径を持つ。口縁部			
			は外傾する。			

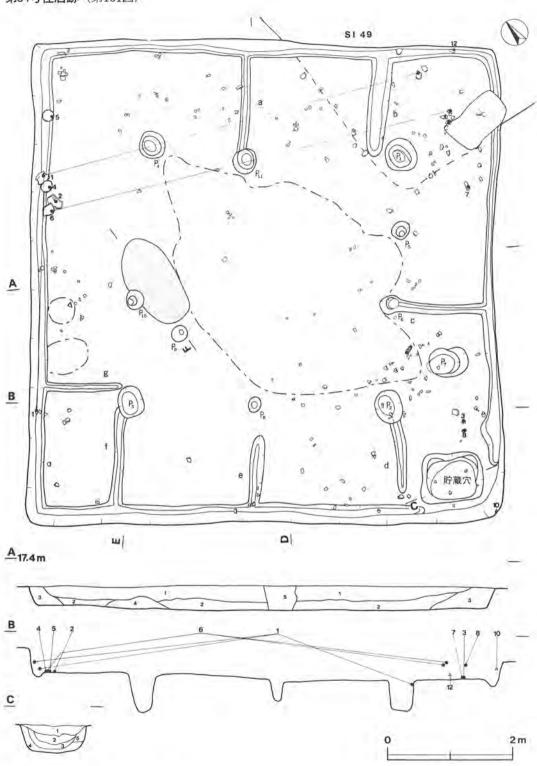
図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	. 備	考
第158図	坩	A 12.5	口縁部欠損。上げ底状の平	底部外面ナデ。体部外面下	長石, 石英	P 103	PL50
14	土師器	В 6.7	底。体部は算盤玉状で,中	半ヘラケズリで上半ナデ後	にぶい橙色	60%	
İ		C 4.1	位に最大径を持つ。	ヘラミガキ,内面ナデ。	普通		
第159図	鉢	A 19.5	口縁部•体部一部欠損。平	底部外面ヘラナデ。体部外	長石,石英,スコリア	P104	PL49
15	土師器	B 9.8	底。体部は半球状である。	面ナデ後ヘラミガキ,内面	橙色	95%	
		C 4.4	口唇部は面取りされている。	ヘラナデ。	普通		
16	鉢	A 13.5	口縁部一部欠損。底部は平	底部外面ヘラナデ。体部外	細砂粒	P105	PL49
	土 師 器	B 7.0	底。体部は半球状で,口縁	面下半ヘラケズリ, 上半横	にぶい黄橙色	95%	
		C 4.2	部上半をつまむように外反	ナデ後ヘラミガキ。体部内	普通		
			させている。	面ナデ。口縁部外面指頭痕,			
				内面横ナデ。			
17	坏	A [13.8]	体部から口縁部にかけての	体部外面へラミガキ, 内面	細砂粒	P 106	PL49
	土師器	B (4.8)	破片。体部は内彎気味に外	横ナデ。口縁部内外面横ナ	にぶい橙色	30%	
			傾して立ち上がる。口縁部	デ。	普通		
			でわずかに外反する。				
18	高 坏	D 13.9	坏部欠損,裾部一部欠損。	脚部は中空で外面縦ヘラナ	細砂粒	P 107	PL50
	土師器	E (8.6)	脚部は中位が膨らむ棒状で,	デ。裾部内外面ナデ。	にぶい黄橙色	50%	
			裾部でほぼ水平に広がる。		普通		
19.	有孔鉢	A 15.2	平底で,ほぼ中央に焼成前	底部外面ナデ。体部から口	細砂粒	P 108	PL50
	土師器	B 9.2	の穿孔を持つ。体部は内彎	縁部外面ヘラケズリ後ナデ,	浅黄色	100%	
		C 3.8	気味に外傾して立ち上がり,	内面ナデ。	普通	穿孔は内→外	ю
			口縁部に至る。				
20	有孔鉢	A 12.0	体部から口縁部にかけて一	底部外面ヘラケズリ。体部	砂粒	P109	PL50
	土師器	B 7.0	部欠損。平底で端に焼成後	外面ヘラケズリ後横ナデ,	にぶい橙色	60%	
		C 4.2	穿孔。体部は外傾して立ち	内面横ナデ。口縁部内外面	普通	穿孔は外→内	l
			上がり、頸部でくびれ、口	ナデ。			
		Ì	縁部で外傾。				

第26号住居跡出土石製品一覧表

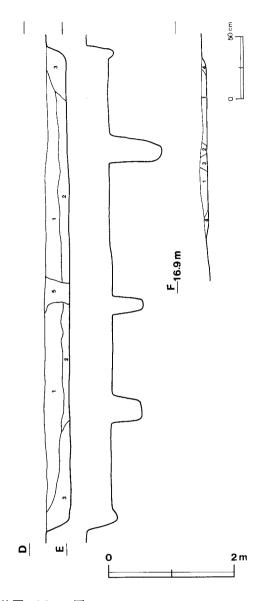
		505	注	ž		i	石 質	備考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第159図 23	台	石	18.8	13.4	5.5	2149.1	安山岩	Q47,上面黒光り,被熱で	
24	磨	石	12.2	8.8	4.7	791.9	ホルンフェルス	Q48,敲き兼用	PL
第160図 26	磨		(6,2)	6.0	3.9	(196.1)	砕屑岩	Q49,凹石兼用,一部欠推	1
第159図 25	敲	石	(3.4)	(5.3)	2.2	(43.1)	安山岩	Q 50,一部欠損	
22	石	鏃	2.3	1.3	0.5	0.9	黒曜石	Q51	PLe
21	剣形	奠 造 品	(2.1)	1.3	0.3	(1.5)	雲母片岩	Q52,一部欠損	PL6

第160図27~35は覆土中から出土した縄文式土器片で32のみ口縁部片,他は胴部片である。27は 細沈線が施されており早期中葉(田戸下層式),28~30は条痕文系土器で早期末(茅山式)の時期である。28・29にはアナダラ属の貝殻背圧痕が施され,30は縄文条痕文土器である。31は前期前半(関山式)の時期で,羽状縄文にコンパス文が施されている。32~35は前期後半から末の時期で,32・33は浮線上に縄文の施文された諸磯 b 式,34は三角彫去文の施された十三菩提式,35は 粟島台式である。36~41は弥生式土器片で,後期の時期である。36~39は複合口縁部片で,口縁下端に36はキザミが1段,38は2段施されている。37・39にキザミは見られない。37の口唇上は円形押圧文で,他は付加条縄文を施文している。40は頸部片で,6本櫛歯のゆるい波状文が施されている。無文部が広く,施文間隔は粗いと思われる。41は付加条縄文が施された胴部片である。

第34号住居跡 (第161図)



第161図 第34号住居跡実測図



S I -34 土層解説

- 1 黒 褐 色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子酸量
- 3 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量,ローム粒子・ローム小ブ ロック多量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック多量,炭化材
- 5 極 暗 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック微量,炭化材細片中量, ローム粒子・ローム小ブロック少量

S I -- 34 炉土層解説

- 1 暗 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量,炭化粒子・ローム 小ブロック少量
- 2 褐 色 焼土小ブロック・焼土粒子少量,炭化粒子微量,ローム小ブロック中量
- 3 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量,ローム小ブロック多量
- 4 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック多量,焼土小ブロッ ク少量,炭化粒子微量

S 1 -34 貯蔵穴土層解説

- 1 暗 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック中量,炭化粒子・ローム 小ブロック少量,炭化材
- 2 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量,炭化材
- 3 暗赤褐色 木炭細片多量,焼土粒子・炭化粒子中量,焼土小ブロック微量
- 4 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 5 暗 赤 褐 色 ローム小ブロック多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少 量

位置 M15g₂区。

重複関係 北東コーナー部で、第49号住居跡の一部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸7.80m・短軸7.70mの方形。

主軸方向 N-48°-W。

壁 壁高37~40cmで,ほぼ垂直に立ち上がっている。壁質はしっかりしている。壁下を壁溝がほぼ全周している。上幅12~20cm・深さ9cmで,断面形はU字形をしている。

床 平坦である。出入り口施設用ピット・主柱穴・炉に囲まれた部分が,よく踏み締められている。また,西壁際に円形状に床の硬化部分が 2 か所認められる。床には,間仕切り用の溝が 7 条 $(a \sim g$ で表示)ある。 $a \cdot b$ は北東壁から延びている。a は長さ150cm・幅15cmで, P_{11} につな

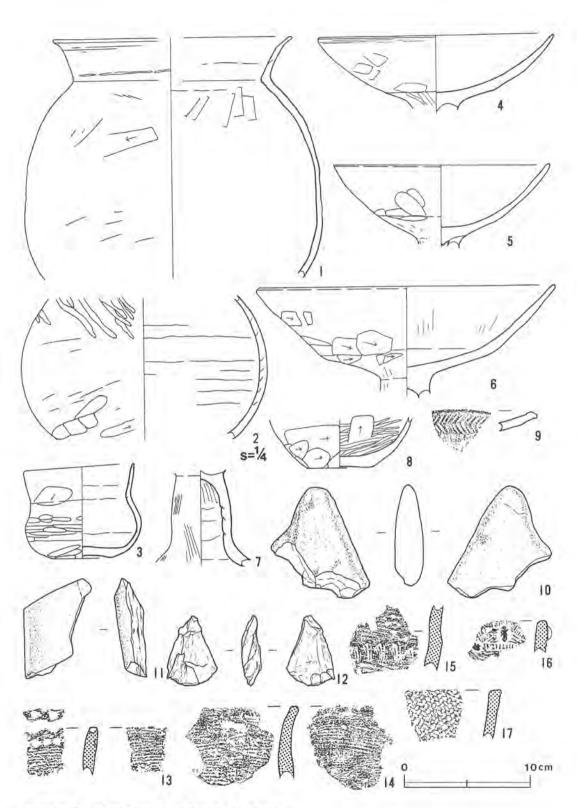
がっている。b は長さ150cm・幅32cmで P_1 に近接している。a・b 間は190cmである。c は南東壁から延びており,長さ140cm・幅18cmで P_6 につながっている。南西壁からはd・e・f が延びている。d は壁からはやや離れて P_2 につながっており,長さ114cm・幅20cmである。e は長さ110cm・幅22cmで, P_8 を意識した溝なのか約40cm程離れている。f は長さ144cm・幅19cmで, P_3 につながっている。g は北西壁から延びている。長さ120cm・幅14cmで, P_3 に近接している。d・e 間は210 cm,e ・f 間は200cm程である。

ピット 11か所。 $P_1 \sim P_4$ は長径47~57cm・短径40~49cmの不整円形で深さが50~88cmあり,配列及び規模から主柱穴である。 P_7 は長径62cm・短径46cmの楕円形で,深さ60cmの外傾した掘り込みである。位置及び規模から出入り口施設に伴うピットである。 $P_6 \cdot P_8 \cdot P_{11}$ は径20~39cmの不整円形で,深さ30~34cmである。位置から判断して,間仕切り施設に伴うピットであろう。 P_5 は径28 cmのほぼ円形で深さが14cmあり,位置関係から判断して補助柱穴と考えられる。 P_{11} は径26cmの円形で深さ12cmであるが,性格は不明である。 P_{12} は炉を一部掘り込んだピットで,径30cm程の不整円形・深さ50cmである。 $P_3 \cdot P_4$ の主柱穴線上に位置するが性格は不明である。

 $p_3 \cdot P_4$ の主柱穴間に付設されている。長径146cm・短径78cmの楕円形で,床を7 cm程皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で硬くなっている。

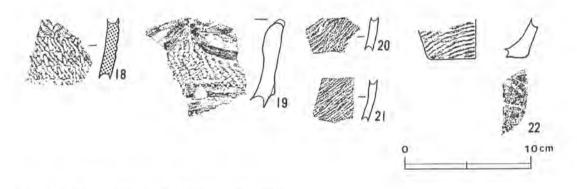
貯蔵穴 南コーナー部に付設され、長軸100cm・短軸78cmの長方形で深さ48cm、平坦な底である。 第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備	考
第162図	甕	A [19.0]	体部中位から口縁部にかけ	体部外面ヘラナデで一部へ	白色細砂粒、スコリア	P120	PL50
1	土師器	B (19.4)	ての破片。体部は球形状で,	ラケズリ,内面へラナデ。	にぶい黄橙色	30%	
			最大径を中位に持つ。口縁	口縁部内外面横ナデ。	普通		
			部は強く外反して立ち上が				
			る。				
2	甕	B (15.1)	体部片で球形状である。最	体部外面ナデで一部ヘラミ	白色細砂粒	P121	PL50
	土師器		大径は中位と思われる。	ガキ、内面横ナデ。	にぶい橙色	20%	
					普通	内面輪積みれ	炱。
3	坩	A [8.9]	底部から口縁部にかけて半	底部外面ナデ。体部外面へ	白色細砂粒	P 122	PL50
	土師器	B 7.5	分欠損。上げ底気味の底部。	ラナデ,内面横ナデ。口縁	にぶい黄橙色	50%	
		C 4.5	体部はつぶれた球形である。	部内外面横ナデ。	普通	胴部内面に	卜剝離痕多
			口縁部は弱く外傾して立ち			し。	
			あがる。				
4	高 坏	A 18.9	坏部のみ。下半にごく弱い	坏部外面ヘラケズリ後ナデ,	白色細砂粒	P 123	PL50
	土師器	B (5.9)	稜を持ち,内彎気味に外傾	内面横ナデ。	にぶい黄橙色	50%	
			して立ち上がる。		普通		
5	高坏	A 17.2	坏部のみ。下半にごく弱い	坏部外面ヘラケズリ後ヘラ	細砂粒	P124	PL50
	土 師 器	B (6.7)	稜を持ち,内彎気味に外傾	ナデ,内面ナデ。	浅黄橙色	50%	
			して立ち上がる。		普通		
6	高 坏	A 23.7	坏部のみ。下半に稜を持ち,	坏部外面ヘラケズリ後横ナ	長石,石英,雲母	P125	PL50
	土師器	B (8.8)	内彎気味に外傾して立ち上	デ内面ナデ。	にぶい黄橙色	50%	
			がる。		普通		
7	高 坏	E (7.3)	脚部のみ。中位でやや膨ら	外面縦ハケ目整形後,ナデ。	白色細砂粒	P126	
	土 師 器		みを持つ中空の脚で、裾部	内面ハケ目整形及びナデ。	にぶい橙色	30%	
			は水平に広がると思われる。		普通		
8	埦	B (3.8)	底部から体部中位にかけて	底面ナデ。体部外面ヘラケ	細砂粒	P 127	PL50
	土師器	C 5.2	の破片。平底。体部は内彎	ズリ後ナデ,内面ナデ。	にぶい橙色	40%	
			気味に外傾して立ち上がる。		普通		



第162図 第34号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

覆土 5層に分層される。ローム小ブロックを多く含む暗褐色の3層が壁際に堆積している。炭化材細片を含む焼土層である4層は炉の直上に見られる。1・2層は皿状の窪地に堆積した黒褐色の腐食土であるう。5層は炭化材細片などを含む極暗褐色土であるが、後世の埋土である。 遺物 壁側の2・3層中から土師器片が多く出土している。縄文式土器・弥生式土器片は覆土上層からの出土が多い。西壁際の北コーナー寄りで床からやや浮いて1・2の甕、4~6の高坏が脚部を欠いて正位で出土している。3の坩は床面レベルで、貯蔵穴上から横位で出土している。7は高坏の脚部で、東コーナー寄りから出土している。8は境の体部下半であろう。貯蔵穴の南側床上からの出土である。また、果実の炭化種子1個(PL77)が貯蔵穴覆土中から出土している。覆土中からは10の打製石斧・11の石製品・12の石箆が出土しているが、流れ込みであろう。 所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期(和泉式期)と考えられる。当遺跡では最大の住居跡であり、間仕切り溝と柱穴がよく対応している。焼失の大型住居跡であるが、完形になる土器はない。炭化材等が少ないのは、焼失後、片付けが行われたためであろう。また、その時、使用可能な土器類は運び出したものと考えられる。



第163回 第34号住居跡出土遺物実測。拓影図(2)

第34号住居跡出土石製品一覧表

enterior are enti-		rin:	-		Ħ	ŧ		歌	75	質	備考		
図版番号		器	種		長さ(cm)	幅 (cm)	厚き(cm)	重量(g)	石	A	MI d		
第162図 10	打	製	石	斧	9.1	8.0	2.5	159.5	安山	出岩	Q71,一端に刃部を作り出す。		
11	石	- 5	Ų.	品	8.0	5.4	2.4	73.1	砂	岩	Q72.一端が刃部である。		
12	石			篦	5.6	4.0	1.5	27.5	* 1	ノウ	Q73,自然面を残す。		

第162図 9 は覆土上層から出土した土師器壺の大きく外反する口縁部片で,口唇内面に櫛歯による矢羽根状の刺突が施されている。第45号住居跡覆土中から出土した第153図13とは同一個体と思われる。第162・163図13~19は覆土中から出土した縄文式土器片である。13~15は早期末(茅山式)の表裏条痕文土器で,13・14は口縁部片である。13の口唇上及び口縁直下には円形押圧文,

14にはアナダラ属の貝殼腹縁文が施されている。15は貝殼背圧痕列が横位に施された胴部片である。16~18は前期前半(関山式)の時期で,16はいぼ状突起が付されている山形の口縁部片である。17は組紐文の口唇部・18は前々段多条の羽状縄文とループ文の胴部片である。19は中期後半(加曽利EⅢ式)の口縁部片で,隆帯区画内に単節縄文RLが施文されている。20~22は弥生時代後期の土器片でやはり覆土中の出土である。20・21は胴部片で直前段反撚の縄文であろう。22は底部片で木葉痕が見える。縄文は軸縄がはっきりせず,絡条体のように見える。

表 5 住居跡一覧表

				規 模 (m)	壁高			内	部施	設					
番号	位置	長軸方向	平面形	(長軸 × 短軸) (径) (径)	(cm)	床面	壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	九口	炉	覆土	出土遺物	備考
1	J 12 h ₀	N-42*-W	長方形	5.50 × 4.62	34~40	平坦	/	0	1	4	1	1	自然	土師器・縄文式土器・弥生式土器・ 土玉・礫石斧・石鏃	古墳、床に満状掘り方。 焼失
2	J 12 h ₇	N-41*-W	方 形	4.00 × 3.90	40~44	平坦	/	0	1	4	1	1	自然	土師器・縄文式土器・弥生式土器	古墳,床に溝状掘り方
3	J 12 js	N-53*-W	方 形	5.37 × 5.06	27~30	平坦	/	0	/	1	0	1	自然	土師器・縄文式土器・土玉・石鏃	古墳、床に溝状掘り方、 焼失
4	k 12 d _s	N-52°-W	長方形	5.10 × 4.49	20~35	平坦	/	0	1	3	1	1	自然	土師器・縄文式土器・土玉・石製模造 品・打製石斧	古墳、床に溝状掘り方、 焼失
5	k 12 c ₁	N-49°-W	長方形	4.86 × 4.25	40~44	平坦	有	4	1	9	1	1	自然	土師器·縄文式土器·土玉	古墳, 焼失
6	k 12 i₄	N-46°-W	方 形	4.25 × 4.15	10~20	平坦	/	0	1	4	0	1	自然	土師器・縄文式土器・土玉	古墳, 33号土坑と重複
7	k 11 g ₆	N-33'-W	方 形	5.10 × 5.00	31~38	平坦	/	4	2	8	1	1	自然	土師器·縄文式土器·砥石·磨石	古墳, 焼失
8	k 11 j _s	N-42*-W	方 形	5.15 × 4.90	36~40	平坦	/	4	/	12	1	1	自然	弥生式土器·縄文式土器· 土師器·土製紡錘車·磨石他	弥生, 25・37号住居と重複, 焼失
9	k 12 d ₂	N-37*-W	不整円形	4.20 × 3.80	10~15	平坦	/	0	/	0	0	1	自然	縄文式土器・磨製石斧・打製石斧・ 磨石	縄文
10	j 11 i,	N-37*-W	隅丸長方形	3.66 × 3.12	12~16	平坦	/	4	/	8	1	1	自然	弥生式土器・縄文式土器・砥石・敲石	弥生,11号住居と重複
11	j 11 is	_	不整円形	4.05 × 3.80	20~29	平坦	/	7	/	10	0	1	自然	縄文式土器	縄文,10号住居と重複
12	j 11 h _s	_	[円形]	(4.49 × 4.12)	/	平坦	/	9	/	24	0	1	/	縄文式土器・弥生式土器・土師器・ 磨製石斧・磨石他	縄文,70号土坑と重複
14	j 11 g ₁	N-42'-E	[隅丸方形]	(3.84 × 3.38)	0~21	平坦	1	4	/	15	0	1	自然	縄文式土器	縄文
15	k 11 f ₉	N-2*-E	柄 鏡 形	4.16 × 3.34	38	平坦	/	8	1	25	13	1	自然	縄文式土器	縄文
16	j 11 i,	_	円形	4.34 × 4.30	6~14	平坦	/	3	/	22	0	1	自然	縄文式土器・打製石斧・石錐・軽石・ 磨石・石鏃	縄文, 32号土坑と重複
18	j11 c₀	N-114°-E	隅丸長方形	4.62 × 4.00	30~38	平坦	1	4	/	9	0	1	自然	縄文式土器・石匙・敲石	縄文
19	K 11 a,	N-17*-W	[柄鏡形]	(4.45)× 3.94	17~30	平坦	1	7	/	11	(3)	1	自然	縄文式土器・弥生式土器	縄文
20	J 11 gs	N-8*-W	不整方形	4.93 × 4.79	4~8	平坦	1	8	/	20	0	1	自然	縄文式土器	縄文
21	j 11 i ₃	N-23°-E	不整方形	5.13 × 4.20	14~17	平坦	1	6	1	21	0	1	自然	縄文式土器·弥生式土器	縄文,11・34号土坑と重複
22	L 12 c2	_	[楕円形]	(6.54 × 5.90)	10~18	平坦	/	9	/	19	2	1	自然	縄文式土器·打製石斧·磨石	縄文,40号土坑と重複
23	K 11 j,	N-16'-E	柄 鏡 形	5.28 × 4.96	9~14	平坦	/	10	/	30	(9)	1	自然	縄文式土器・石鏃・磨石・凹石・ 磨製石斧	縄文, 71 号土坑
24	L11b.	N-37*-E	[長方形]	(5.88 × 4.50)	/	平坦	1	8	1	30	0	3	自然	縄文式土器・磨製石斧・石皿	縄文
25	K 11 js	N-9°-W	[長方形]	(4.34 × 3.22)	1	凹凸	1	6	/	17	0	1	自然	縄文式土器·打製石斧·砥石·石皿	縄文, 8号住居と重複
26	L 15 g ₁	N-33*-W	長方形	5.68 × 4.96	11~26	平坦	有	4	1	19	1	1	自然	土師器·縄文式土器·弥生式土器· 石製模造品·石鏃他	古墳,焼失,間任切, 28 号住居他重複
27	L14gs	N-46'-W	隅丸長方形	4.90 × 3.95	17~25	平坦	1	4	1	10	1	1	自然	弥生式土器・縄文式土器・敲石	弥生, 115・116 号土坑と重複
28	L 15 g ₂	N-12*-W	〔不整長方形〕	(6.10 × 4.03)	11~16	平坦	/	8	/	23	0	1	自然	縄文式土器・土師器・石鏃・掻器・ 蔵石	縄文,26号住居, 2号溝と重複
29	L 15 i ₃	_	不整方形	3.96 × 3.90	8~15	平坦	/	4	1	12	0	1	自然	縄文式土器・敲石	縄文
30	M 15 a ₁	N-78*-W	不整楕円形	6.08 × 4.27	10~13	平坦	1	0	1	11	0	1	自然	縄文式土器·敲石	縄文
31	L14j,	N-60*-W	隅丸長方形	5.33 × 4.80	30~32	平坦	/	4	1	39	1	1	自然	弥生式土器・縄文式土器・土師器・ 土製円板・磨石	弥生,144号土坑と重複
32	M 14 b.	N-55*-W	楕 円 形	4.25 × 3.65	8~15	平坦	1	5	1	7	0	7	自然	縄文式土器・石匙・礫石斧・敲石	縄文

				規模 (m)	壁高			内	部 施	設		107		all and the	
番号	位置	長軸方向	平面形	(長軸 × 短軸) (径) 〔径〕	(cm)	床面	壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	九口	炉	覆土	出土遺物	備考
33	M 15 b ₂	-	不整円形	5.15 × 4.80	10~12	平坦	/	5	1	15	0	2	自然	縄文式土器・敲石・磨石	縄文,76・89 号土坑と重複
34	M 15 g ₂	N-48°-W	方 形	7.80 × 7.70	37~40	平坦	有	4	1	11	1	1	自然	土師器・縄文式土器・弥生式土器・ 炭化種子 (果実)	古墳, 49号住居と重複, 焼失,間仕切
35	M 14 h ₉	N-43*-W	方 形	4.50 × 4.49	14~30	平坦	/	0	2	3	1	1	自然	土師器·縄文式土器·弥生式土器· 石鏃·磨石·敲石	古墳,111号土坑と重複
36	M 14 a ₇	N-32°-E	不整方形	2.70 × 2.45	15~23	凹凸	/	0	/	7	0	/	自然	縄文式土器・弥生式土器・土師器・ 磨製石斧	縄文
37	K 11 i5	N-84*-W	不整楕円形	(6.38 × 5.66)	/	平坦	/	12	/	26	0	1	自然	縄文式土器・磨石・石錘・貝	縄文,8号住居・58・60・62・ 69号土坑と重複
39	N 15 a ₁	N- 8*-E	隅丸方形	6.58 × 5.80	44~50	平坦	有	4	2	8	1	1	自然	土師器・縄文式土器・弥生式土器・ 土玉・土製円板他	古墳
40	M 14 f ₆	N-32*-W	不整楕円形	7.40 × 6.50	16~20	平坦	/	7	/	19	0	1	自然	縄文式土器・土製円板・石鏃・ 打製石斧・軽石・凹石他	縄文, 60 号住居・140・143 号 土坑と重複
41	N 14 C ₉	N-41°-W	方 形	3.75 × 3.70	14~22	平坦	/	0	/	2	1	1	自然	土師器・縄文式土器・土玉・石皿・台石	古墳、120号土坑と重複
42	N 14 d ₈	N-15*-W	不整方形	3.95 × 3.75	4~14	平坦	/	0	/	10	0	1	自然	縄文式土器・磨製石斧・磨石・石鏃	縄文
43	N 14 d ₇	N-18*-E	不整長方形	4.86 × 4.20	22~28	平坦	1	4	1	15	1	1	自然	縄文式土器·石皿·石棒	縄文
44	N 14 cs	N-43°-E	楕 円 形	5.88 × 4.67	12~18	平坦	1	5	/	9	0	1	自然	縄文式土器・土師器・磨石	縄文,123・146 号土坑と重複
45	N 14 h ₈	N-48°-E	長方形	5.16 × 4.00	57~70	平坦	有	0	1	3	1	1	自然	土師器・縄文式土器・土玉・石匙・磨石	古墳, 51 号住居と重複, 焼失
46	N 14 f ₆	_	不整円形	4.55 × 4.25	10~16	平坦	1	0	/	7	0	0	自然	縄文式土器・土器片錘	縄文
47	N 14 f ₄	N-28°-E	楕 円 形	6.12 × 5.45	10~18	平坦	1	6	/	9	0	1	自然	縄文式土器·石錘·凹石·掻器·石刃	縄文,142 号土坑と重複
49	M 15 f ₃	-	[方 形]	不明	2	平坦	(/)	(0)	(1)	(0)	(0)	(/)	自然	土師器•縄文式土器	古墳、34 号住居と重複、焼失
50	N 14 g ₂		(円 形)	5.20 × 不明	4~10	平坦	1	(4)	(/)	(6)	0	1	自然	縄文式土器・敲石	縄文
51	N 14 h,	-	〔不整楕円形〕	5.73 × 不明	18~20	凹凸	1	(3)	(/)	(8)	(0)	(/)	自然	縄文式土器·磨製石斧·石鏃·砥石	縄文,45・61号住居と重複
52	N 10 is	_	不整円形	5.10 × 5.00	28~34	凹凸	/	8	/	12	0	1	自然	縄文式土器・石皿・敲石	縄文
53	N 10 h ₈	N-45°-E	精 円 形	4.05 × 3.60	12~14	平坦	/	0	1	6	0	1	自然	縄文式土器	縄文, 54 号住居・147 号土坑 と重複
54	N 10 h ₉	(N-58*-E)	不整長方形	不明 × 4.20	7~12	平坦	/	3	1	7	0	3	自然	縄文式土器・凹石	縄文、53 号住居と重複
55 A	N 10 a ₇	-	楕 円 形	(6.11 × 5.39)	/	平坦	1	10	1	27	0	2	自然	縄文式土器・内耳土器・カワラケ	縄文, 55 B号住居と重複
55 B	N 10 a ₇		不整長方形	[6.54 × 5.40]	/	平坦	/	14	/	42	0	2	自然	縄文式土器	縄文, 55 A号住居と重複
56	N 10 h.	N-14*-W	柄 鏡 形	5.20 × 5.15	28~34	平坦	/	6	/	20	1	1	自然	縄文式土器	縄文
57	N 10 j ₄	_	不整楕円形	不明 × 4.40	10~16	平坦	/	5	1	16	0	/	自然	縄文式土器	縄文
58	N 10 j ₂		不整円形	4.70 × 4.65	25~30	平坦	1	4	1	11	0	2	自然	縄文式土器・土器片錘	縄文
59	N 9 i,	_	(不整円形)	4.70 × 4.40	16~18	平坦	/	5	1	14	0	1	自然	縄文式土器·石皿·剝片	縄文
60	N 14 f ₇	-	不整円形	4.50 × 4.27	1	平坦	/	13	1	21	0	1	自然	縄文式土器·石鏃	縄文
61	N 14 i ₇	N-77°-W	(楕円形)	4.80×(4.26)	10~30	凹凸	1	0	1	18	0	1	自然	縄文式土器·打製石斧·敲石·土器片錘	縄文,51号住居と重複
62	N 9 h ₈	N-23*-E	不整楕円形	3.30 × 2.80	10~18	凹凸	7	0	1	3	0	1	自然	縄文式土器	縄文

2 十坑跡

当遺跡からは、159基(A地区68基・B地区16基・C地区75基)の土坑が確認されている。それらの土坑は形状や規模に差異は認められるものの、一部を除いては出土遺物も少なく、時期や性格に不明なものが多い。

ここでは土坑のうち、形状や規模、覆土の状態や出土遺物に特徴がある34基について、地区ごとに解説を加え、その他については一覧表に記載した。

(A地区)

第3号土坑 (第164図)

位置 K12b3区。

規模と平面形 長径1.72m・短径1.68mのほぼ円 形で、深さ0.86mである。

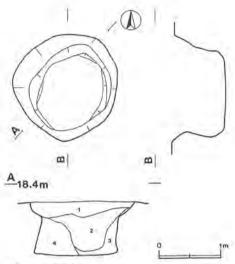
壁面 壁高80~85cmで、やや袋状をしている。

底面 平坦である。

30

覆土 下層にはロームブロック・炭化粒子を含み、 上・中層は暗褐色土で焼土粒子・炭化粒子がわず かに含まれている。

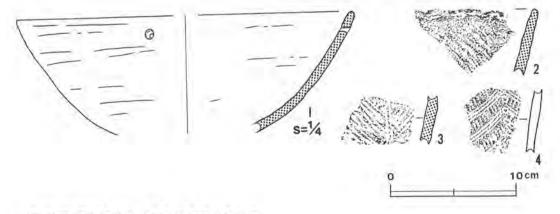
遺物 上・中層から縄文時代前期の土器片が出土 している。1の浅鉢は2層中からの出土である。 所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代前期 後半頃と考えられるが、性格については不明であ



SK-3 + 機能器

- 1 暗褐色 烧土粒子、炭化粒子南量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 4 億 色 ロームプロック多量、炭化粒子少量

第164図 第3号土坑実測図



第165図 第3号土坑出土遺物実測·拓影図

第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第165図	洩	鉢	A [36.4]	胴部下半欠損。内外面横へラミガキ。	白色細砂粒, 繊維少量	P241	PL51
1	則文式	(土器	B (12.7)		赤褐色 普通	15%	

第165図2~4は覆土中から出土した縄文式土器片である。2は小波状の口縁部片で、単節縄文 RLが施文されている。3は半截竹管による肋骨文の施された胴部片で、2とともに前期前半(黒 浜式)の時期である。4はアナダラ属の貝殻腹縁文を地文に、円形竹管文列に竹管による肋骨文 状のモチーフが描かれている。前期後半(興津式)の時期である。

第 4 号土坑 (第166図)

位置 J11h.区。

規模と平面形 長径1.76m・短径1.64mの楕円形 で、深さ35cmである。

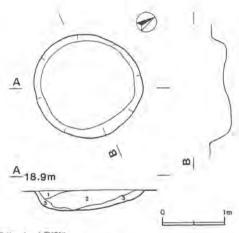
壁面 皿状の掘り込みで、なだらかに立ち上がる。

底面 やや凹凸がある。

覆土 3層に分層される。2・3層にはロームブ ロックが含まれる。

遺物 覆土中層を中心に、縄文時代前期後半の土 器片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代前期 後半頃と考えられるが、性格については不明であ 30



5K-4 土庵解説

- 1 褐 色 暗褐色土ブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック・褐色土プロック少量
- 3 明褐色 ロームブロック中量・褐色土ブロック中量

第166図 第 4 号土坑実測図



第167図 第 4 号土坑出土遺物実測 • 拓影図

第167図1~3は覆土中から出土した縄文時代前期後半の土器片である。1はアナダラ属の貝殻 腹縁による細かい波状文の施された胴部片で浮島II式、2・3は縄文地文にキザミの施された浮 線文によってモチーフが描かれており、諸磯b式の時期である。

第8号土坑 (第168図)

位置 K12i 区。

規模と平面形 長径2.50m・短径2.33mの不整形で、深さ28cmの炉穴である。

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がっている。

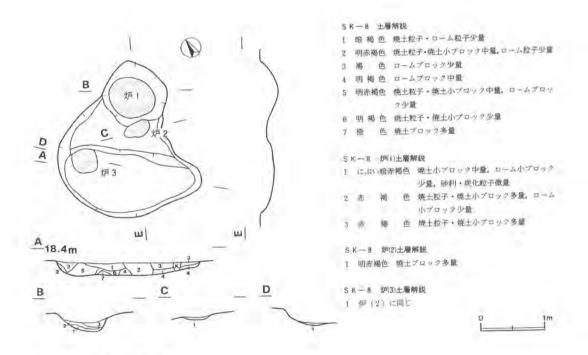
底面 やや凹凸があり、炉床部分が低くなっている。

炉床部 3か所。炉1は北東壁際に位置し、長径50cm・短径40cmの楕円形である。20cmの厚きで焼土が堆積しており、炉床は火熱で硬くなっている。炉2は炉1のすぐ南側で、炉1の掘り込みに一部接するように位置している。長径42cm・短径22cmの楕円形で、6 cmの厚さで焼土が堆積しており、炉床は火熱で硬くなっている。炉3は西壁際に位置し径50cm程の円形で、9 cmの厚さで焼土が堆積している。炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 2層に分層される。炉3の搔き出し部にあたる6・7層には、焼土ブロックや火熱で硬くなったロームブロックが含まれている。

遺物 出土していない。

所見 炉2は炉1に先行すると考えられるが、炉3との前後関係は不明である。遺構外からは縄 文時代早期末の条痕文系土器片が出土しており、該期の遺構と考えられる。



第168図 第8号土坑実測図

第10号土坑 (第169図)

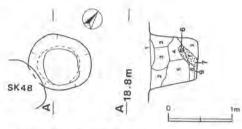
位置 J11h7区。

重複関係 第48号土坑がわずかに掘り込んでいる。

規模と平面形 径約97cmの円形で、深さは77cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり、壁質もしっかりしている。

底面 平坦である。



第169図 第10号土坑実測図

- 畔 褐 色 黒褐色土ブロック・赤褐色土ブロック中量
- 職 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 極暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 暗 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 遅土貝屬 カキ主体でハマグリ・オキシジミなどに炭化材細片・灰少量
- 7. 提土貝屬 カキ主体でハマグリ・オキシジミなどに炭化材細片・灰少量
- 色 混貝土層でハマグリ・カキなどに炭化材細片・ローム粒子少量
- 色 炭化材細片・ローム粒子少量

遺存体組成表

貝 種 名	総重量(g)	組成比(%)
シオフキ	18.9	0.5
ヤマトシジミ	7.5	0.2
オキシジミ	309.0	8.29
ハマグリ	610.1	16,36
力 キ	2759.1	74.0
ウミニナ類	24.1	0.65
炭 化 物	0	0
合 計	3728.7	100.00

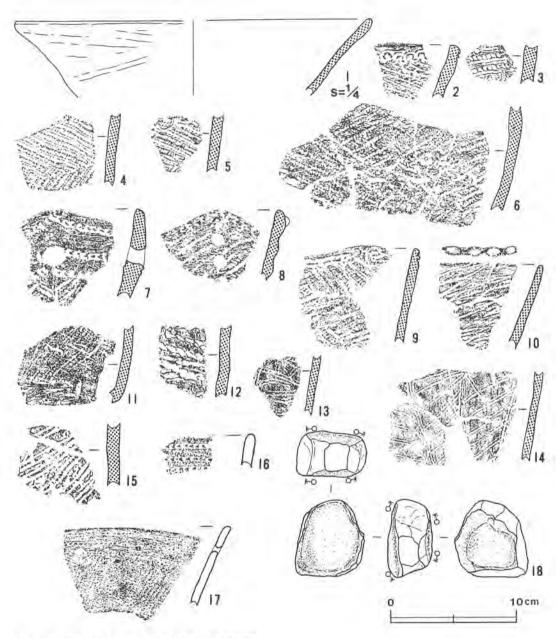
覆土 9層に分層される。4層は極暗褐色土である。1~3* 表6 第10号土坑内貝塚動植物 5層は暗褐色土で、ロームブロック・炭化粒子などを含ん でいる。6・7層は混土貝層である。6層中にはオキシジ ミ・ハマグリ・カキが多く含まれ、灰・炭化材細片も混じ っている。 7層はカキが中心で、やはり灰・炭化材細片が 混じっている。8・9層は褐色土で、しまりのない土層で ある。8層にはわずかに貝が混じっている。

遺物 6・7層中から縄文時代前期前半の土器片が、貝に 混じって出土している。また、1層中からは縄文時代前期 後半・中期後半の土器片も出土している。1の浅鉢は3層 中,18の磨石は覆土中の出土である。

所見 本跡は土坑内貝塚である。貝以外の獣骨魚骨等は検出されなかった。ハマグリについては 貝殼成長線分析を行い, その結果は付章に示した。貝層中の出土遺物から, 本跡の時期は縄文時 代前期前半(黒浜式期)であると考えられる。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と 組成比は表6に示した。

第10号土坑出土遺物観察表

図版番号	器器	i 法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第170図	浅 多	A [38.2]	口縁部片。内外面横位ヘラミガキ。	白色細砂粒, 繊維少量	P242 PL5
1	縄文式土物	B (8.1)		赤褐色 普通	10%



第170図 第10号土坑出土遺物実測·拓影図

第10号土坑出土石製品一覧表

matries est and	an-	26	12	£	4	趾	E	675	借養
図版番号	版番号 器 種 長さ(cm) 幅 (cm) 厚さ(cm) 順量(g) 仁	- 4.1	34	(m · · · · ·					
第170図 18	磨	T	(6.1)	(5.6)	3.5	(164.5)	砂	岩	Q133、欠損品,覆土中

第170図 2~17は覆土から出土した縄文時代前期前半の土器片である。2 は付加条縄文の施文された口縁部片で、口縁直下にコンパス文が巡る。3~5 は直前段合撚の縄文が施文された胴部片

で、4 は羽状に施文され、5 にはコンパス文が見られる。2~5 は関山式の時期である。6~15 は黒浜式の時期で、6 は絡条体による縄文の施文された胴部片である。7 は小波状の口縁部片で、波頂下に円孔を持つ。円孔を含む口縁部には半截竹管による押引き爪形文が3 列巡り、胴部は直前段合撚の縄文である。8 も小波状の口縁部片で、波頂下に貼瘤があり、その下に円形押圧文が垂下するのであろう。地文は絡条体による縄文である。9 は口縁直下に半截竹管による沈線文が巡り、胴部は直前段合撚の縄文を羽状に施文している。10は口唇上に指頭による押圧文が巡り、縄文は直前段反撚である。11は縄文の施文された底部にかけての破片である。12は原体の太い絡条体による縄文、13~15は半截竹管による沈線で木葉文や肋骨文の施された胴部片である。16・17は前期後半(諸磯a式)の時期で、縄文地文に半截竹管による押引き爪形文が施された口縁部片である。

第17号土坑 (第171図)

位置 J11g6区。

規模と平面形 径約1.36mの円形で、深さ78cmである。

壁面 わずかに下位が袋状をしており、中位から外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

第171図 第17号土坑実測図

覆土 6層に分層される。1層は暗褐色土であり、2・3層は褐色土で焼土ブロック・炭化粒子が含まれている。5層は混土貝層で、カキが主体でオキシジミ・ハマグリ・ウミニナ類が多く含まれ、シオフキ・アサリ・サルボウなどは極めて少ない。ウミニナ類はカキ付の割合も高い。各貝種とも大きさは揃っている。6層は混貝土層で貝の細片が含まれ、炭化材細片・焼土粒子・ロームブロックもわずかに混じっている。

遺物 覆土及び貝層中から、縄文時代前期前半の土器片が出土している。1・2は貝層中から出

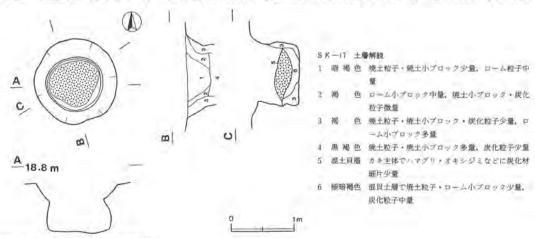
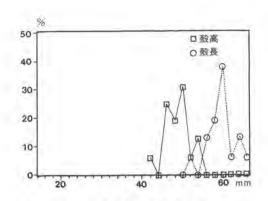


表 7 第17号土坑内貝塚動植物遺存組成表

貝種	名	重量(g)	組成比(%)
1 1 1	8 3	8.3	0.02
シオフ	+	10.3	0.03
才 半 乡 ;	1 3	9670.4	26.26
ハマグ	9.	574.7	1.58
7 #	9	14.0	0.04
サルボ	ウ	11.8	0.03
カ	+	22133.1	60.98
ウミニ	ナ 類	565.3	1.56
カキ付から	ニナ	3306,8	9.11
微小陸	産 貝	Ø.	0
炭化	物	0	0
合	計	36294.7	100



第172図 ハマグリ殼長・殼高分布図

土した縄文の施文された口縁部片である。1は単節RL縄文が施文され、2には縄文地文に半載竹管による平行線文が巡っている。

所見 本跡は土坑内貝塚である。貝層中の出土遺物から、時期は縄文時代前期前半(黒浜式期)と考えられる。カキが主体を占めるのは第10号土坑と変わらないが、オキシジミとハマグリの比率は逆になっている。中位の深さまでで貝の投棄は終わり、その後自然に埋まったものと考えられる。貝以外の獣骨魚骨は検出されなかったが、5層中から炭化したドングリ類の表皮が1点(PL77)検出された。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と組成比は表7に、また、計測可能な16個のハマグリの設長・設高についてはグラフ(第172図)で示した。



第173図 第17号土坑出土遺物実測·拓影図

第22号土坑 (第174図)

位置 J11c4区。

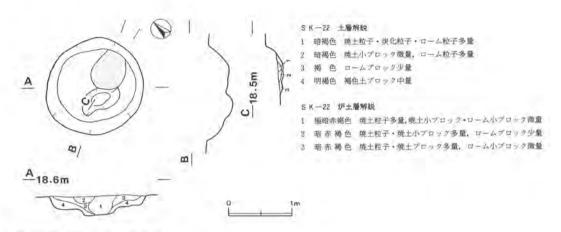
規模と平面形 長径1.61m・短径1.50mの円形で、深さ42cmの炉穴である。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 やや凹凸があり、炉床部分が低くなっている。

炉床部 1か所。東壁際に位置し、長径60cm・短径52cmの楕円形である。10cmの厚さで焼土が堆

積しており、炉床は火熱で硬くなっている。



第174図 第22号土坑実測図

覆土 4層に分層される。しまりのない土の1・2層は堆積状況から後世の掘り込みと考えられる。3・4層にはロームプロックが含まれている。

遺物 出土していない。

所見 炉床の焼け方が強い。周囲からは縄文時代早期末の条痕文系土器片及び前期前半の土器片が出土しており、遺構の性格から早期末の時期を考えておきたい。

第25号土坑 (第175図)

位置 J11e2区。

規模と平面形 長径

1.84m・短径1.34mの 不整惰円形で, 深さ36 cmの炉穴である。

壁面 緩やかに外傾し て立ち上がっている。 底面 緩い起伏があ る。炉床部分が低くな っており、北側は一段 S K -25 土層解脱
1 暗褐色 ロームゼ子多量
2 楊 色 ロームブロック少量
3 明褐色 ロームブロック中量
3 明褐色 ロームブロック中量
4 S K -25 炉土層解脱
1 赤 褐 色 焼土松子多量、焼土小ブロック・ロームブロック微量
2 明赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ロームブロック少量

第175図 第25号土坑実測図

高くなっている。

炉床部 1 か所。南壁際に位置し,長径70cm・短径52cmの楕円形である。20cmの厚さで焼土が堆積しており、炉床はあまり硬くなっていない。

覆土 3層に分層される。ローム粒子・ロームブロックが含まれている。

遺物 覆土上層から縄文時代早期末・前期前半の土器片が出土している。

所見 炉の覆土は2層に分かれ、1層中からこぶし大のシルト岩が出土している。用途は不明である。本跡は周囲から出土している遺物及び遺構の性格から、縄文時代早期末の時期を考えておきたい。

第34号土坑 (第176図)

位置 J111i(区。

重複関係 第21号往居 跡によって西側部分が

掘り込まれている。

規模と平面形 長径

2.22m・短径1.06mの 不整形で、深さ36cmの

炉穴である。

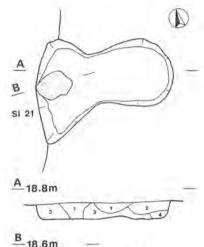
壁面 垂直気味に立ち

上がっている。

底面 平坦であり、炉

床部分がわずかに低く

なっている。



SK-34 土層解脱

1 褐 色 明褐色土ブロック甲量 2 研 褐 色 焼土粒子微量。褐色土ブ

2 研 褐 色 焼土粒子微量。褐色土ブ ロック中量

3 にぶい褐色 ロームブロック多量

4 掲 色 焼土粒子・ロームブロッ ク多量

SK-34 炉土磨解脱

1 極暗赤褐色 蝶土粒子・焼土小ブロック・ ローム粒子中量

2 明赤褐色 能士小ブロック少量,ローム ブロック多量

3 明赤褐色 焼土粒子・廃土ブロック多量



第176図 第34号土坑実測図

炉床部 1か所。西壁際に位置し、長径55cm・短径40cmの楕円形である。10cmの厚きで焼土が堆積しており、炉床はあまり硬くなっていない。

覆土 4層に分層される。 $3 \cdot 4$ 層にはロームプロックが多く含まれている。1層の堆積状況は不自然であり、後世の掘り込みと見られる。

遺物 底面から縄文時代早期末の土器細片が出土 している。また、1層からは第177図1の縄文時代 前期(初頭か)の胴部片も出土している。

所見 西側に向いた炉で、東側は足場として充分 な広さがある。本跡は細片のため拓影図で示せな かったが、底面から出土している遺物及び遺構の

示せな **第177区** 遺構の

-241-

0 10cm

第177図 第34号土坑出土遺物実測·拓影図

性格から、縄文時代早期末の時期と考えておきたい。

第35号土坑 (第178図)

位置 J11i。区。

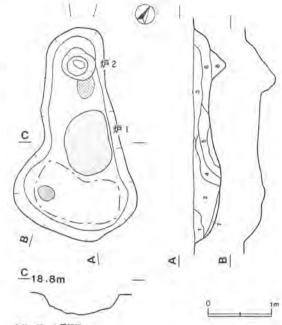
規模と平面形 長径3.20m・短径1.98mの 不整形で、深さ46cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 緩い起伏があり、炉床部分がわずか に低くなっている。炉の南東側に踏み締ま り部分が見られる。

炉床部 2か所。炉1は中央部に位置し、 北西から南東に傾斜している。長径100cm・ 短径72cmの楕円形で、10cmの厚さで焼土が 堆積しており、炉床は火熱で硬くなってい る。炉2は北西壁際に位置し、径46cmの円 形で、26cm程の厚さで焼土が堆積している。 それぞれの炉の南側に径25cm程の楕円形の 焼土のごく薄い広がりが見られたが、炉の 焼土の置き出しによるものだろう。

覆土 8層に分層される。1・2・6・7 層にはロームプロックが含まれている。4・ 5・8層には焼土粒子が多く含まれている。



SK-35 土層解説

- 1 暗 掲 色 蟯土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 極 稲 色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム小ブロック少 量
- 3 福 色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量
- 5 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロッツ多量
- 6 明 掲 色 焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 7 にぶい褐色 ロームプロック多量
- 8 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量 (炉の土層)

第178図 第35号土坑実測図

土層の堆積状況から, 西側から埋まっていった様子がわかる。

遺物 底面及び炉内から、縄文時代早期末の土器片が出土している。また、覆土上層からは縄文 時代前期の土器片も出土している。

所見 覆土の堆積状況から、炉2が炉1に先行することがわかる。本跡は底面及び炉内から出土

している遺物及 び遺構の性格か ら、縄文時代早 期末(茅山式期) の時期と考えら れる。



第179図 $1 \sim 3$ は床上及び覆土中から出土した縄文式土器片である。1 は条痕の施された胴部片である。裏面に条痕は見られない。2 は縄文条痕文土器の口縁部片で, $1 \cdot 2$ とも本跡に伴うものであろう。3 は胴部片で,単節縄文LRが施文されている。早期末から前期初頭の時期か。

第40号土坑 (第180図)

位置 L12b2区。

重複関係 第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 径2.00mの円形で、深さ50cmである。

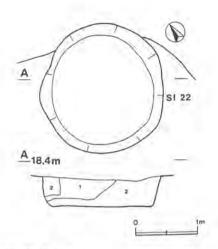
壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 2層に分層される。両層ともロームブロック・ローム粒子を多く含む締まりのない土であり、色層で分層した。

遺物 両層から縄文式時代前期後半~後期中葉の土器片が出土している。5の磨石は覆土中の出土である。

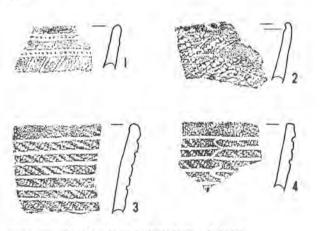
所見 締まりのない土層で、後世の掘り込みとも考えられる。遺物は縄文式土器片であるが、時期の特定は難し

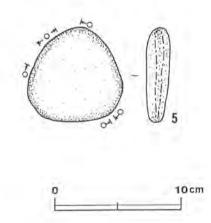


SK-40 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 2 暗 褐 色 極暗褐色土ブロック少量,ローム粒子・ ローム小ブロック多量

第180図 第40号土坑実測図





第181図 第40号土坑出土遺物実測·拓影図

第40号土坑出土石製品一覧表

CORRECT ARE CO.	ner.	266	祖			1	70	WT.	(株 多
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	-44	д	VHI 95
第181図 5	唐	石	7.5	7.5	1.9	136.3	砂	岩	Q138,覆土中

第181図 $1\sim 4$ は覆土中から出土した縄文式土器片である。1 は撚糸文地文に半截竹管による押引き爪形文が施された口縁部片で前期後半(浮島 I 式)の時期,2 は縄文(単節RLの横回転)施文の口縁部片, $3\cdot 4$ (同一個体か)は縄文(単節RLの横回転)地文に平行沈線が施されており,4 には平行沈線をつなぐように蛇行沈線が垂下する。 $2\sim 4$ は後期中葉(加曽利B 1 式)の時期であるう。

第45号土坑 (第182図)

位置 L12d2区。

規模と平面形 長径1.30m・短径1.19mの円形で、 深さ57cmである。

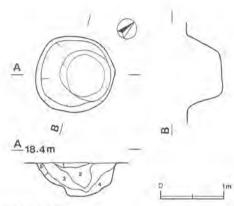
壁面 外傾してなだらかに立ち上がっている。

底面 中央部がくぼむ。

覆土 5層に分層される。2・3層の暗褐色土中 には土器片が多く含まれている。また、各層中に は焼土粒子・炭化粒子が含まれる。

遺物 覆土中層から縄文時代前期後半・後期前半 の土器片が出土しているが、器形の分かるものは ない。

所見 締まりのある土層であり、また縄文時代後期前半(堀之内1式期)以降の遺物を含まないことから、該期の土坑と考えられるが、性格は不明である。



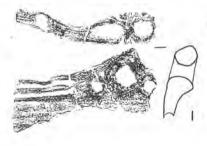
SK-45 土層解説

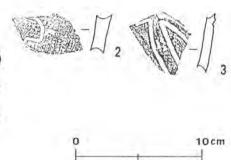
- 1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子中重、炭 化粒子・ローム小ブロック酸量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗 掲 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量。ローム粒子多量
- + 福 色 競土粒子・炭化粒子・ロームルブロック酸量。ロ ーム粒子少量
- 5 明 褐 色 焼土粒子・炭化粒子塩量

第182図 第45号土坑実測図

第183図1~3は 覆土中から出土し た縄文時代後期前 半(堀之内1式) の土器片である。 1は口縁直下に2 本の沈線が巡り,

小波状の波頂下に





第183図 第45号土坑出土遺物実測·拓影図

は円孔を持ち、それを挟むように円形押圧文が配される。また、それと対応する位置の口唇上にも円形押圧文が見られる。 $2 \cdot 3$ は縄文(単節LR)地文に沈線によるモチーフが描かれている。

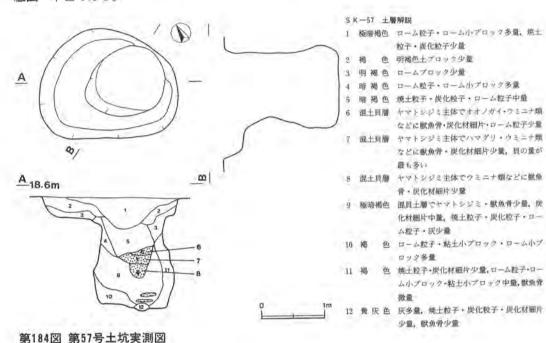
第57号土坑 (第184図)

位置 K11i4区。

規模と平面形 長径2.23m・短径1.80mの不整楕円形で、深さ1.83mである。

壁面 下部でやや膨らむ筒形で、北東壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦である。



覆土 12層に分層される。12層は黄灰色の灰層で、焼土・炭化物の混じり合ったべたべたした土である。中に魚骨・小動物骨等が含まれている。10・11層は粘土ブロックを含む締まりのない褐色土である。6~8層は貝を含む土層である。6層は混土貝層で、ヤマトシジミが主体でわずかにウミニナ類・オオノガイ等が混じっているほか、炭化材細片も含まれている。7層は混土貝層で6層とほぼ同じ貝種が含まれているが、貝の重量は最も多い。8層も混土貝層であり、7層に比べてヤマトシジミは小粒である。これは投棄の時間差を示すものと見られる。いずれの層中にも魚骨・獣骨・小動物骨を含んでいる。9層は極暗褐色の混貝土層で、小ブロック状に入ったヤマトシジミとともに6~8層よりも多量の魚骨・小動物骨・

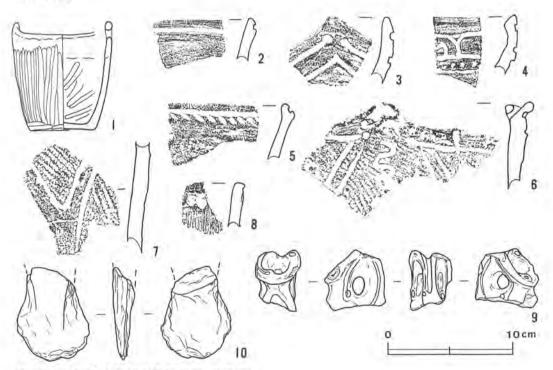
表 8 第57号土坑内貝塚動植物 遺存体組成表

貝 種 名	総重量(g)	組成比(%)
オオノガイ	48.4	0.26
ヤマトシジミ	18236.3	98.39
オキシジミ	10.6	0.06
ハマグリ	75.6	0.41
アサリ	1.9	0.01
サルボウ	3.8	0.02
力 牛	15.6	0,08
ウミニナ類	130.6	0.7
小卷貝類	12.4	0.03
健産微小巻貝類	0	0
獣 骨	0	Q
小動物·魚骨	0	0
炭 化 物	0	0
合 計	18535.2	100.00

炭化材細片、少量の獣骨が含まれている。12層同様べたべたした土である。 $4 \cdot 5$ 層は締まりのない暗褐色土である。5 層より上層には貝・魚骨等は含まれていない。

遺物 各層中から土器片が出土している。貝・魚骨等を含む層からは、縄文時代後期前半(堀之内1式)の土器が出土している。1の小型鉢は9層中の出土で、鉢内には魚骨片等の混じった土が詰まっていた。10の打製石斧は覆土中の出土である。

所見 土坑内貝塚である。貝及び魚骨等の投棄は6~12層までで終わっている。貝層出土の獣骨は、小さく砕かれた焼骨が多い。焼骨以外ではネズミにかじられた猪の腓骨などが6層から出土している。なお、魚骨はウグイやタナゴなどの稚魚の可能性が指摘されており、付章でヤマトシジミの貝殼成長線分析の結果と共に詳述している(付章参照)。本跡の時期は貝層出土の土器から、縄文時代後期前半(堀之内1式期)と考えられる。なお、貝はすべて取り上げ、それぞれの総重量と組成比は表8に示した。また、各層ごとに取り上げた土はすべて水洗いし、可能な限り骨は拾い出した。今回はすべての骨を分析することができなかったので、稿を改めて、骨について報告したい。



第185図 第57号土坑出土遺物実測。拓影図

第57号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第185図	小型深鉢 鋼文式土器	1000 600 1790	口縁部一部欠損。口縁部の対になる位置に孔を有す。孔 は鉢を作った後、孔を作る部分に粘土紐を山形に貼って		P245 PL51 95%
		C 5.2	いる。平底の底部から胴部はほぼ直線的に立ち上がる。 施文は一切なく,外面線位のヘラミガキ,内面上半機。 下半網位のヘラミガキ。	良好	内面暗黒色で赤色顔料痕あり。

第57号土坑出土石製品一覧表 (PL67)

図版番号		49	406		往	2		量	T 50	ám ac
区加入银马	4 2 2	100	棚		長さ(cm)	WA (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	口 黄	懶考
第185図 10	打	製	石	斧	(7.9)	5.7	1.8	(64.6)	オルンフェルス	Q139,欠損品,分銅型,覆土中

第185図2~9は覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものである。2~4は口縁下 に沈線が巡っており、3は波状口縁である。4は隆帯上に円形刺突文が施されている。5は口縁 直下を巡る沈線下にキザミが施されている。6は小突起を持つ口縁部片で、口縁部直下に沈線が 巡り縄文(単節RL)地文に蕨手文や沈線によるモチーフが描かれている。7は胴部片で、縄文(単 節RL) 地文にやはり沈線によるモチーフが描かれている。8 は幅の狭い口縁下に円形押圧文が巡 り、縦位に条線文が施されている。9は把手片で、円形刺突文をつなぐC字状の隆帯によって造 形されている。中央に貫通孔を有する。

第67号土坑 (第186図)

位置 L11b5区。

規模と平面形 径約80cmの円形で、深さ19cmである。

壁面 外傾して立ち上がっている。

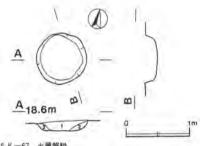
底面 平坦である。

覆土 2層に分層される。1層は暗褐色土、2層は褐色 土で、ともに炭化粒子・ローム粒子を含んでいる。

遺物 1・2層中及び底面から、縄文時代後期前半の土 器片が出土している。

所見 本跡の時期は、遺物から縄文時代後期前半(堀之 内1式期)と考えられる。性格については不明である。

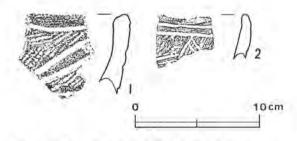
第187図1・2は覆土中から出土した縄 文式土器片で、本跡に伴うものと考えら れる。いずれも口縁部片で、沈線による モチーフが描かれており、1は縄文(単 節RL) 地文である。2 も縄文地文である が原体がはっきりしない。



暗褐色 炭化粒子・ローム粒子・ローム小プロ ック商量

炭化粒子少量, ローム粒子多量

第186図 第67号土坑実測図



第187図 第67号土坑出土遺物実測·拓影図

第77号土坑 (第188図)

位置 L14j8区。

規模と平面形 長径3.63m・短径1.96mの 不整楕円形で、深さ20cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

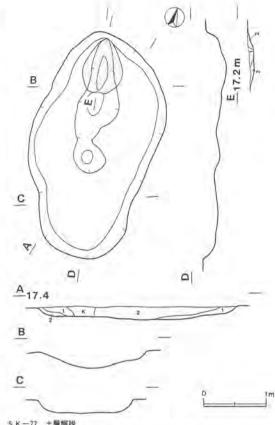
底面 緩やかな起伏がある。中央部から炉 床部にかけて、わずかに掘り下げられてい る。

炉床部 1か所。北東壁際に位置し、長径 90cm・短径66cmの楕円形で、10cmの厚さで焼 土の堆積が見られる。炉床はあまり硬くなっていない。

覆土 2層に分層される。焼土粒子・炭化 粒子をわずかに含む、締まりのある土層で ある。

遺物 底面から縄文時代早期末の土器片が 出土している。1の深鉢は2層下の出土で ある。

所見 北側に向いた炉で、南西側は足場として充分な広さがある。南西壁際にごく薄い焼土の広がりがあるが、炉の焼土の掻き出しであろう。本跡の時期は、底面から出土している遺物及び遺構の性格から、縄文時代早期末(茅山式期)と考えられる。



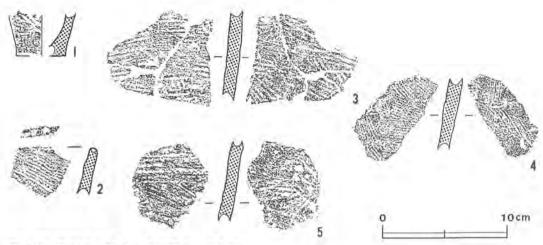
- SK-77 土層解説
- 1 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子微量、ローム粒子・ローム小ブロック少量
- SK-77 炉土層解説
- 1 明赤褐色 烷土粒子多量
- 2 明赤褐色 焼土小ブロック微量、焼土粒子多量
- 3 明赤褐色 焼土粒子中量

第188図 第77号土坑実測図

第77号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第189図	深 鉢	B (3.2)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外傾	砂粒橙色	P247
1	縄文式土器	C [4.0]	して立ち上がる。外面は斜位の条痕文。繊維脱痕有り。	普通	5 %

第189図1~5は底面及び覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものである。2は口縁部片で、口唇上には棒状工具による刺突文が施されている。3~5は表裏条痕文の胴部片である。5の表面にはアナダラ属の貝殼腹縁文が施されている。



第189図 第77号土坑出土遺物実測·拓影図

第78号土坑 (第190図)

位置 N14j7区。

規模と平面形 長径2.10m・短径1.70mの不整楕 円形で、深さ51cmの炉穴である。

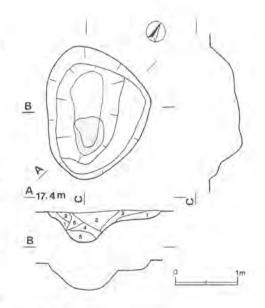
壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 炉床を含む中央部から、長径方向に沿って掘り下げられている。

炉床部 1か所。ほぼ中央に位置し、長径60cm・ 短径26cmの楕円形で、18cmの厚さで焼土が堆積し ている。

覆土 6層に分層される。5層は炉内覆土である。 4層も焼土が多い。

遺物 炉から北西寄りの覆土中にかけて、4個の際に混じって縄文時代早期末の土器片が出土している。4と5の磨石は覆土中の出土である。第191図1~3の土器片は本跡に伴うもので、いずれも表裏条痕文の胴部片である。3の表面にはアナダラ属の貝殻腹縁による引きずった波状文がある。他は条痕が施されている。

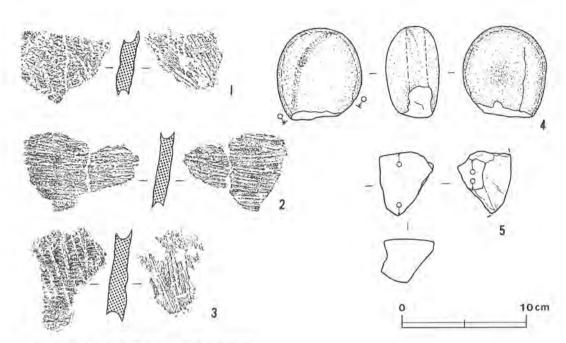


SH-78 土脂膦胶

- 1. 明 赤 褐 色 施土粒子・ローム粒子微量
- 2 赤 楊 色 明赤褐色土プロック少量
- 3 極暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗 赤 褐 色 魔土小ブロック微量、廃土粒子多量
- 5 所 掲 色 院土小ブロック多量、廃土粒子中量
- 6 にぶい赤褐色 廃土粒子・廃土小ブロック微量

第190図 第78号土坑実測図

所見 焼土の多い炉穴である。本跡の時期は、覆土中から出土している土器が限られた時期であること及び遺構の性格から、縄文時代早期末(茅山式期)と考えられる。



第191図 第78号土坑出土遺物実測·拓影図

第78号土坑出土石製品一覧表

mac as o	96	26	22	Š.	- 3	86		Rep	/AM 445	
図版番号	器種		長さ(cm) 幅	幅 (em)	(cm) 厚さ(cm)	重量(g)	石	質	We -5	
第191回 4	磨	石	7.3	6.8	4.4	254.3	砂	岩	Q143.覆土中	
5	蘑	石	(5.0)	(4.3)	3.5	(69.9)	砂	岩	Q144、破片、覆土中	

第80号土坑 (第192図)

位置 L15ji区。

規模と平面形 長径1.85m・短径1.40mの不整形で、深さ51cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

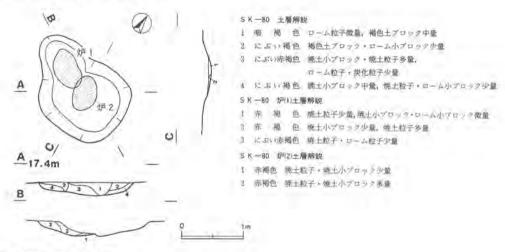
底面 緩やかな起伏がある。炉床部がわずかに掘り下げられている。

炉床部 2 か所。炉 1 が炉 2 に重なっており、炉 2 が先行する。炉 2 は中央部に位置し、長径58 cm・短径38cmの楕円形で、5 cmの厚さで焼土が堆積している。炉 1 は北西壁際に位置し、長径52 cm・短径40cmの楕円形で、10cmの厚さで焼土が堆積している。

遺物 出土していない。

所見 炉1・2の先後関係がわかる炉穴である。覆土中にも遺物がなく時期の特定は難しい。周辺から縄文時代早期末(茅山式期)の土器片が出土していること及び遺構の性格から、本跡の時

期は早期末 (茅山式期) と考えられる。



第192図 第80号土坑実測図

第81号土坑 (第193図)

位置 L15h2区。

規模と平面形 長径1.82m・短径1.66mの不整円 形で、深さ14cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

炉床部 1か所。北東壁側に位置し、長径53cm・ 短径40cmの楕円形である。

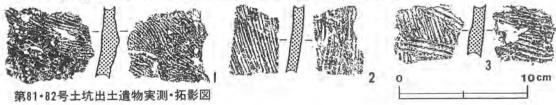
覆土 2層に分層される。両層に褐色土がブロック状になって含まれいる。土色と締まり具合で分層している。

遺物 1層中から下図1の縄文時代早期末の表裏 条痕文土器片が出土している。表面にアナダラ属 の貝殻背圧痕が巡っている。 SK-81 土層解設 1 にぶい褐色 褐色土・明褐色上ブロック

中量 2 明 福 色 福色土小ブロック少量

第193図 第81号土坑実測図

所見 焼土層はごく薄い。覆土中から縄文時代早期末 (茅山式期) の土器片が出土していること 及び遺構の性格から、本跡の時期は早期末 (茅山式期) と考えられる。



第82号土坑 (第194図)

位置 L15i,区。

規模と平面形 長径2.26m・短径1.90mの 楕円形で、深さ27cmの炉穴である。

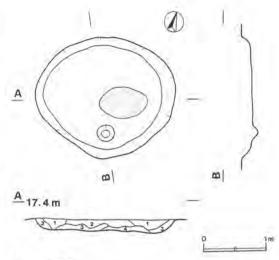
壁面 緩く外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。南壁側に径27cmの円形 のピットが掘られており、底面からの深さ は12cmである。

炉床部 1か所。東壁側に位置し、長径80 cm · 短径50cmの楕円形である。

覆土 4層に分層される。4層は焼土層で 締まりがある。3層も締まりがあり、焼土 粒子・ロームブロックを少量含んでいる。 2層は土器片を含む層である。

遺物 覆土上層から、2・3の表裏条痕文土 第194図 第82号土坑実測図 器の胴部片が出土している(前ページ下図)。



SK-82 + 服解(株

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・明褐色土ブロック少量
- 3 明褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 4 赤褐色 烷土粒子多量

所見 4層下が炉である。覆土中から縄文時代早期末 (茅山式期) の土器片が出土していること 及び潰構の性格から、本跡の時期は早期末(茅山式期)と考えられる。

第96号土坑 (第195図)

位置 M15b1区。

規模と平面形 長径3.52m・短径2.95mの楕円形で、深さ20cmである。

壁面 緩く外傾して立ち上がっている。

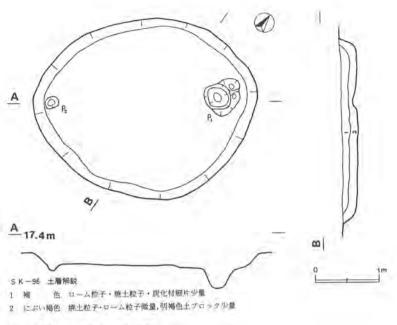
底面 平坦である。

ピット 2 か所。P1は長径62cm・短径54cmの不整楕円形で深さ33cm, P2は径24cmの円形で深さ12 cmであり、北東と南西壁に分かれて位置している。性格は不明である。

覆土 2層に分層される。1層は褐色土で土器片・木炭片を含み、2層は鈍い褐色土である。両 層にもに焼土粒子・ローム粒子が含まれ、締まりがある。

遺物 覆土上層から縄文式土器片が出土している。1の底部、4の石製品は覆土中の出土である。 所見 土器は縄文時代早期末から前期末にかけての時期であるが、本跡の時期の特定は難しく、

性格も不明である。

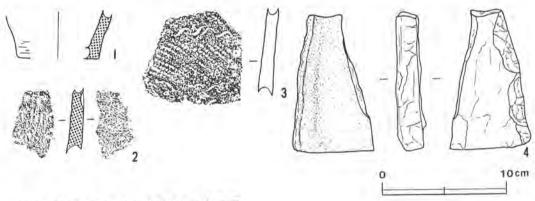


第196図2・3は覆土中から出土した縄文式土器片である。いずれも胴部片で、2は表裏条痕文でアナダラ属の貝殻背圧痕文が見られる。早期末(茅山式)の時期である。3は結節縄文の施文された胴部片で、前期末(栗島台式)の時期である。。

第195図 第96号土坑実測図

第96号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第196図	深鉢		底部から胴部下端にかけての破片。平底と思われる底部		P 250
1	剿文式土器	C [6.6]	から外傾して立ち上がる。外面は横ナデで内面はナデ。	橙色 普通	5 %



第196図 第96号土坑出土遺物実測。拓影図

第96号土坑出土石製品一覧表 (PL67)

(may a may be first			社	法			T=	ger	備者
図版番号	器和	H.	長さ(cm)	幅 (cm)	厚き(cm)	重量(g)	- 43	M	WE -0
第196図 4	不明石事	品	11.1	6.4	2,3	190.4	砂	岩	Q149.打製石斧の未製品か

第107号土坑 (第197図)

位置 M15ei区。

規模と平面形 長径1.96m・短径1.22mの不整楕円形で、深さ30cmの炉穴である。

壁面 緩く外傾して立ち上がっている。

底面 皿状にくぼんでいる。

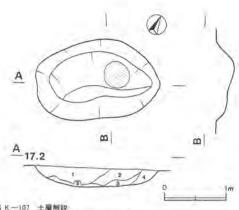
炉床部 1か所。北東壁側で傾斜面に位置し、径 42cmの円形である。

覆土 5層に分層される。5層は橙色で焼土ブロ ックが含まれ、締まった土層である。4層も橙色 であるが、焼土ブロックは含まれてない。2・3 層は褐色土で焼土ブロックをわずかに含んでいる。 1層は暗褐色土である。各層に焼土粒子が含まれ ている。

遺物出土していない。

所見 周囲の覆土中から、縄文時代早期末 (茅山 第197図 第107号土坑実測図 式期) の土器片が出土していること及び遺構の性

格から、本跡の時期は早期末(茅山式期)と考えられる。



SK-107 十層解認

- 暗褐色 ローム粒子・廃土粒子少量
- 2 褐 色 烧土粒子少量, ローム粒子微量
- 3. 褐 色 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 4 稷 色 焼土粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック中量
- 5 檀 色 焼土粒子・焼土小ブロック少量、ロームブロック中量

第108号士坑 (第198図)

位置 M15d。区。

規模と平面形 長径3.30m・短径2.71mの不整楕円形で、深さ20cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

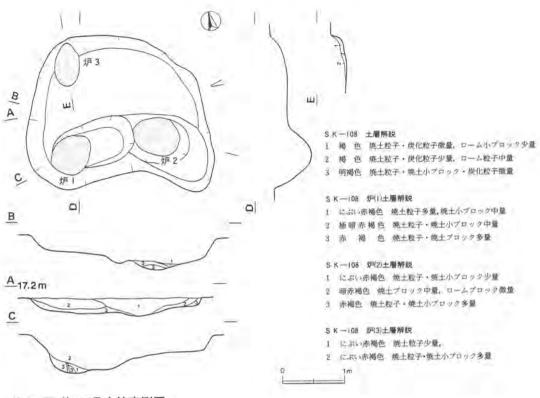
底面 平坦である。炉床は掘り込まれている。

炉床部 3か所。炉1は南西壁側に位置している。長径70cm・短径58cmの楕円形で、17cmの厚き で焼土が堆積している。炉2は炉1の東側に位置し、長径74cm・短径60cmの楕円形で、15cmの厚 さで焼土の堆積が見られる。炉3は北壁寄りに位置し、長径64cm・短径40cmの楕円形で、5cmの 厚さで焼土の堆積が見られる。

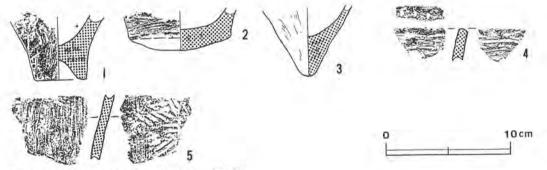
覆土 3層に分層される。3層は明褐色土、1・2層は褐色土で、各層に焼土粒子・炭化粒子が 含まれている。

遺物 覆土中から1~3の底部を含め、縄文時代早期末の土器片が出土している。5は覆土中か ら出土した表裏条痕文の胴部片である。4 も表裏条痕文で口唇上に刺突文が巡っている。

所見 炉2は炉1によって足場が掘り込まれており、炉2が先行する。炉3との前後関係は不明 である。本跡の時期は、覆土中から縄文時代早期末(茅山式期)の土器片が出土していること及 び遺構の性格から、早期末(茅山式期)と考えられる。



第198図 第108号土坑実測図



第199図 第108号土坑出土遺物実測。拓影図

第108号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第199図 1	深細文式土	鉢器	B (4.8) C [4.0]	半球状に凹んだ上げ底の底部片。胴部は外傾して立ち上 がる。外面は荒れがひどいが、縦に条痕文を施している。 底部外面及び内面はナデ。	白色彩砂粒,繊維 明赤褐色 普通	P 286 10%	PL51
2	深	鉢 器	B (3.2) C [8.1]	底部片。凸レンズ状の底面で不安定。胴部下端は横の条 痕文で、内面は横・斜位の条痕文である。繊維脱痕有り。	白色細砂粒,繊維多量 量 橙色 普通	P287	
3	深縄文式土	鉢器	B (5.4)	尖底土器の底部片。外面は斜位の条痕文である。繊維脱痕が甚だしい。	白色細砂粒, 繊維多量 暗褐色 普通	P 288 10%	PL51

第110号土坑 (第200図)

位置 M14f。区。

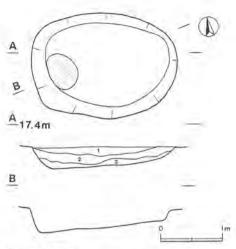
規模と平面形 長径2.30m・短径1.70mの楕円形 で、深さ40cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。 底面 西側に緩く傾斜している。

炉床部 1か所。西壁に接して位置し、径60cmの 円形である。

覆土 3層に分層される。3層は褐色土で、ロー ムブロックを多く含んでいる。1・2層は暗褐色 土である。各層に焼土粒子・焼土ブロック・炭化 粒子が含まれている。

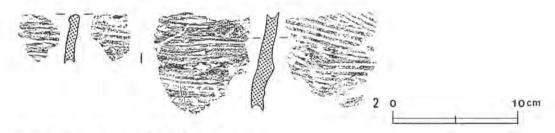
遺物 覆土中から縄文時代早期末の土器片が出土 している。1・2はいずれも表裏条痕文の土器で、 1は口縁部片である。2は胴部との境に段を持ち、 第200図 第110号土坑実測図 刺突文が施されている。



SK-IID 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量、ローム 粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量、ローム 小ブロック多量

所見 本跡の時期は、覆土中から縄文時代早期末(茅山式期)の土器片が出土していること及び 遺構の性格から、早期末(茅山式期)と考えられる。



第201回 第110号土坑出土遺物実測·拓影図

第111号土坑 (第202図)

位置 M14fo区。

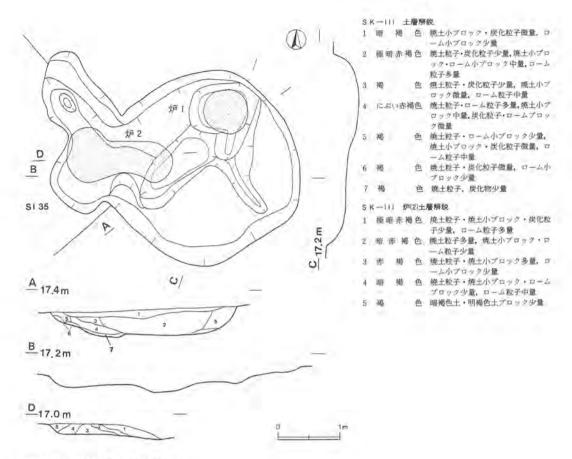
重複関係 第35号住居跡によって、西側が掘り込まれている。

規模と平面形 長径4.50m・短径3.05mの不整形で、深さ40cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 わずかに起伏があり、北西側に緩く傾斜している。

炉床部 2か所。炉1は北壁寄りに位置し,径50cm程の円形で,15cmの厚さで焼土が堆積してい

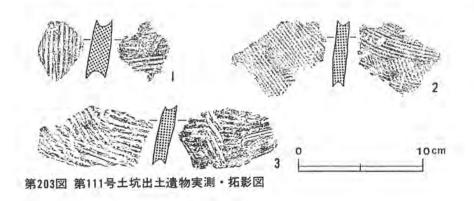


第202図 第111号土坑実測図

る。炉2は西壁に接して位置し、長径170cmの瓢簞形で、10cmの厚さで焼土が堆積している。

覆土 7層に分層される。2層は厚い土層で40cm程あり、粘土ブロックもやや多く含まれる極暗褐色土である。 $3 \cdot 5 \sim 7$ 層は褐色土で,焼土粒子・炭化粒子が少量含まれている。4層は鈍い赤褐色土で,1層は暗褐色土である。

遺物 覆土中から縄文時代早期末の土器片が出土している。 $1\sim3$ は表裏条痕文の胴部片である。



所見 本跡の時期は、覆土中から縄文時代早期末 (茅山式期) の土器片が出土していること及び 遺構の性格から、早期末 (茅山式期) と考えられる。

第115号土坑(第204図) 位置 L14i₈区。

重複関係 第27号住居 跡によって掘り込まれ ている。

規模と平面形 長径

0.91m・短径0.89mの

円形で, 深さ35cmである。

第204図 第115号土坑実測図

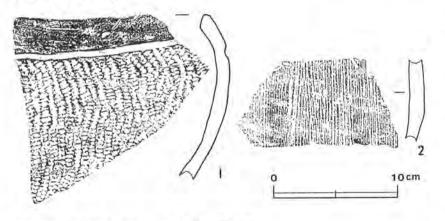
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状をしている。

覆土 3層に分層される。1層は赤褐色である。 $2 \cdot 3$ 層は鈍い赤褐色の焼土層であり、炭化物・焼土プロックの有無で分層した。

遺物 1層中から縄文時代前期後半~中期後半にかけての土器片が出土している。

所見 焼土に混じって土器片が出土している。土器片は火熱を受けた様子はなく、焼土の中への 投棄である。1・3層上に床と同質のロームブロックがあり、第27号住居跡構築時に本土坑は床 面の高さまで掘り込まれたものと考えられる。出土遺物及び規模から、炉穴というよりは火焚き 場状遺構としておく。時期の特定はできないが、土器は縄文時代中期後半までであり、それ以降 は含まれていない。



第205図 第115号土坑出土遺物実測。拓影図

第205図 1・2 は覆土中から出 土した縄文時代 中期後半 (加曽 利 E III式) の土 器片である。 1 は内彎する口縁 部片で, 沈線で 区画された口縁 部は無文で, 以

下に縦走する縄文 (単節RL) が施文されている。2は縦位に条線文の施された胴部片である。

第116号土坑 (第206図)

位置 L14g₈区。

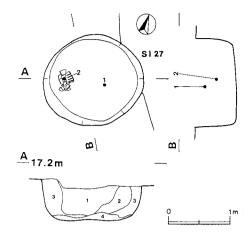
重複関係 第27号住居跡によって掘り込まれている。 **規模と平面形** 長径1.54m・短径1.50mの円形で, 深さ68cmである。

壁面 円筒状で,ほぼ垂直に立ち上がっている。 **底面** 平坦である。

覆土 4層に分層される。4層は明褐色で褐色土 ブロックを含んでいる。2・3層は褐色土でロー ムブロックの有無で分層した。1層の暗褐色土に は炭化粒子・焼土粒子・ロームブロックが多く含 まれている。

遺物 $1 \cdot 2$ 層中から縄文式土器片が多く出土している。 $1 \sim 3$ の深鉢は1 層中の出土である。

所見 1層中には焼土粒子が多い。遺物には縄文



SK-II6 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック多量
- 2 褐 色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 褐 色 ローム粒子・ロームブロック多量
- 4 明褐色 褐色土ブロック中量

第206図 第116号土坑実測図

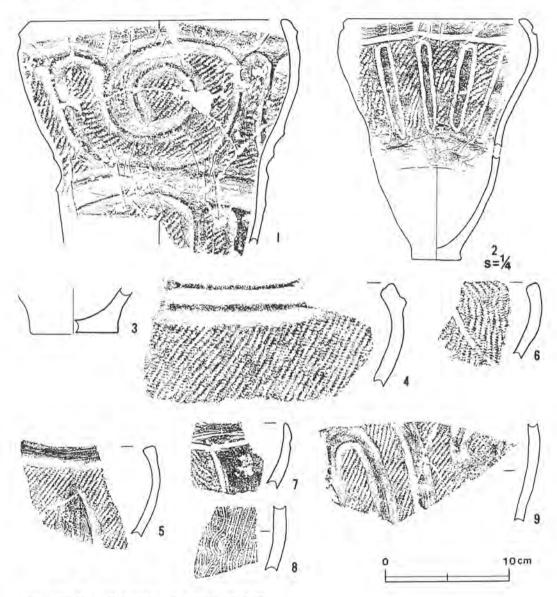
時代早期末の土器片もわずかに含まれるが,大半は中期後半(加曽利EⅢ式期)であり,本跡の時期は該期と考えられる。性格については不明である。

第116号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第207図	深 鉢	A 20.6	胴部下半欠損。口縁部は緩く内彎する。断面三角形の微	白色細砂粒多量	P 251 PL52
1	縄文式土器	B (17.8)	隆線によって区画される文様帯は胴くびれ部の無文帯で	にぶい橙色	60%
			上下に二分される。上下はそれぞれ微隆線によって渦巻	普通	胴部下半二次焼成著し
			文を構成している。微隆線間には縄文(単節RL)を充		Λ7°
			塡している。微隆線によって区画された口縁部は無文で		
			ある。内面斜位のヘラミガキ。		
2	深 鉢	A 19.6	胴部中位で一部欠損。突出気味の底部は平底。胴部中位	白色細砂粒, スコリア	P 252 PL52
	縄文式土器	B (23.4)	でわずかにくびれ、口縁部は緩く内彎する。無文の口縁	浅黄橙色	80%
	:	C [5.4]	部は一条の沈線によって区画される。胴部上半は縄文(単	普通	
			節RLの縦回転)地文上に,沈線による縦長楕円形の区		
			画文が16単位構成される。区画内は磨消している。胴部		
			下半は無文でナデ。内面横位のナデ。		
3	深鉢	B (3.6)	底部から胴部下端にかけての破片。平底でやや突出気味	白色細砂粒	P 253
	縄文式土器	C [7.0]	の底部から外傾して立ち上がる。無文の外面はヘラミガ	橙色	5 %
			キで内面ナデ。	普通	

第207図 $4 \sim 9$ は覆土中から出土した縄文式土器片で、 $1 \sim 3$ とともに本跡に伴うものと考えられる。 $4 \sim 7$ は口縁部片で、4 は口縁直下に隆線が巡っており、胴部は単節縄文R Lの縦回転である。 5 は幅の狭い無文の口縁部で、縄文地文の胴部になぞりによる磨消帯を持っている。 6 は縄文地文に沈線によるモチーフが描かれている。 7 は口縁下に沈線が巡り、縄文(単節RLの縦回転)地文に磨消帯が垂下する。 8 はゆるい曲線の条線文が施された胴部片である。 9 も胴部片で、

縄文(単節RLの縦回転)地文に磨消帯によって曲線的なモチーフが描かれている。



第207図 第116号土坑出土遺物実測·拓影図

第118号土坑 (第208図)

位置 M14e6区。

規模と平面形 長径1.93m・短径1.78mの不整円形で、炉床部までの深さ46cmの炉穴である。

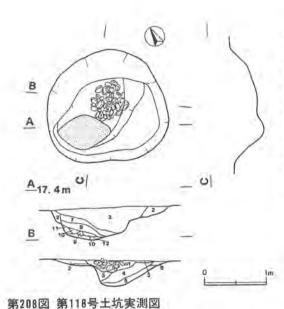
壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 起伏のある皿状をしている。

集石部 1層中に集石遺構がある。長径0.65m・短径0.57mの楕円形で,0.17mの深さで石が詰ま

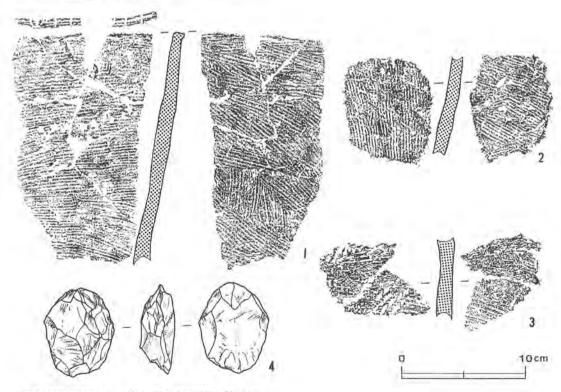
っていた。火熱で赤くなっている石が1個見られたが、他は被熱した状態ではない。石の間に縄 文時代早期末の土器片が含まれている。

炉床部 1か所。西壁側に位置し、長径50cm・短径26cmの楕円形で、15cmの厚さで焼土が堆積し



- ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック酸量
- 施土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 昭 赤 褐 色 焼土粒子多量、焼土プロック・ローム小ブロッタ少量
- 11 赤 褐 色 施土粒子中量、施土ブロック・ロームブロック少量
- 13 明 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロッケ少量



第209図 第118号土坑出土遺物実測·拓影図

ている。

覆土 12層に分層される。 $6 \sim 11$ 層は炉の堆積層である。1層は集石を含む極暗褐色の土層で、 $2 \cdot 3$ 層を掘り込み,その中に堆積している。2層は褐色土, $3 \cdot 4$ 層は暗褐色土で,いずれも焼土粒子ローム粒子を含んでいる。5層は明褐色土で,ロームブロックを含む締まりのある土層である。6層は焼土粒子を含む鈍い褐色土である。

遺物 集石の中から縄文時代早期末の土器片が出土している。 $1 \sim 3$ の土器片及び 4 の礫石斧は集石中の出土である。 $1 \cdot 2$ は表裏条痕文の土器で, 1 は平坦な口唇上にキザミが施されている。 3 は縄文条痕文土器で条痕地文に単節 L R縄文を雑に施文している。

所見 炉穴が埋まってから集石遺構が掘り込まれており、炉穴は集石遺構に先行する。集石遺構は、含まれていた土器片から縄文時代早期末(茅山式期)の時期である。炉穴はそれに先行して使用されたものである。

第119号土坑 (第210図)

位置 M14g₅区。

規模と平面形 長径4.73m・短径2.24mの不整形で、炉床部までの深さ68cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 緩やかな起伏がある。

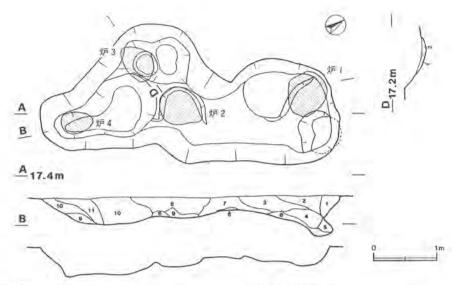
炉床部 4 か所。炉 1 は北壁側に位置し,長径74cm・短径60cmの楕円形で,20cmの厚さで焼土が堆積している。炉 2 は中央部に位置し,径68cm程の不整円形で,16cmの厚さで焼土の堆積が見られる。炉 3 は西壁寄りに位置し,長径66cm・短径46cmの楕円形で,5 cmの厚さで焼土の堆積が見られる。炉 4 は南壁側に位置し,長径52cm・短径34cmの楕円形で焼土が7 cmの厚さで堆積している。

覆土 11層に分層される。6・9層は焼土粒子・焼土ブロックを含み、炉の上層になる。各層中には焼土粒子が少量ずつ含まれている。4・10層は極暗褐色土で、土器片の有無で分層した。 遺物覆土中から縄文時代早期末の土器片が出土している。

遺物 及び遺構の性格から、本跡の時期は早期末(茅山式期)と考えられる。

第211図 $1 \sim 3$ は覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものと考えられる。いずれも表裏条痕文の胴部片で、1 は半截竹管による爪形文の施された段が巡っている。 2 は 2 列の円形押圧文が巡っている。

所見 炉の先後関係は不明であるが、覆土中の遺物は縄文時代早期末 (茅山式期) の時期である。



SK-119 炉(3)土層解説

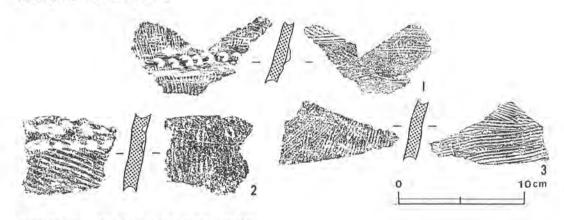
1 によい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量

2 赤 褐 色 集土粒子・ローム小ブロック少量

SK-119 土層解脱

- 1 にぶい福色 焼土粒子。炭化粒子敷造、ロームブロッタ少量
- 2 掲 色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック酸量
- 8 暗 褐 色 焼土粒子・ローム粒子少量・ローム小ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量
- 6 明 褐 色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小フロック塩量
- 7 掲 色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 8 昭 徳 色 焼土粒子・焼土小ブロック中量、ロームブロック微量
- 9. 明 製 色 焼土粒子多量、焼土ブロック少量
- 10 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 11 褐 色 廃土粒子微量

第210図 第119号土坑実測図



第211図 第119号土坑出土遺物実測·拓影図

第123号土坑 (第212図)

位置 N14c5区。

重複関係 第44号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長径3.16m・短径2.54mの不整形で、深さ22cmの炉穴である。

壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 東側は平坦で、北西側が皿状 に下がっている。

ピット 炉1の西側に位置し、径40 cmの円形で深さ68cmであるが、性格は不明である。

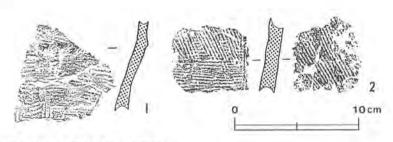
炉床部 2か所。炉1は北西壁側に位置し、長径56cm・短径40cmの楕円形で、12cmの厚さで焼土が堆積している。炉2は南壁寄りに位置し、径44cm程の円形で薄い焼土層である。

覆土 3層に分層される。3層は焼土層である。1・2層はロームプロック・ローム粒子を含む締まりのある土層で、焼土の有無で分層した。
 遺物 1層中から縄文時代早期末の土器片が出土している。

所見 炉の前後関係は不明であるが、

第212図 第123号土坑実測図

覆土中の遺物は縄文時代早期末 (茅山式期) の時期である。遺物及び遺構の性格から、本跡も該期と考えられる。



第213図 第123号土坑出土遺物実測·拓影図

第213図1・2 は覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものと考えられる。1 は表面 条痕文で、ゆるい段を持ち、段上にアナダラ属の貝殻背圧痕文が巡っている。2 は表裏条痕文の 胴部片である。

第128号土坑 (第214図)

位置 N14e1区。

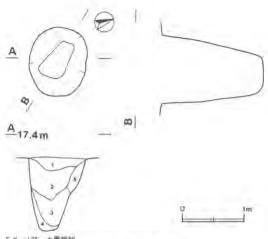
規模と平面形 長径1.14m・短径0.94mの 楕円形で、深さ118cmである。

壁面 わずかに外傾して立ち上がっている。 底面 平坦である。

覆土 5層に分層される。1・2層は焼土 粒子を含むしまりのある土層である。下層 はローム粒子を多く含む。

遺物 2・3層から縄文式土器片が出土し ている。第239図1の尖底土器は土坑すぐ脇 の覆土中の出土である。

所見 土器は縄文時代早期中葉 (三戸式) の沈線文系土器である。土坑の性格は不明 であるが、時期は該期であろう。



5 K-128 土庸解說

1 贈 褐 色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量

2 暗 権 色 ローム小ブロック・焼土粒子極少量、

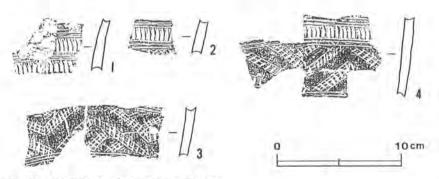
ローム粒子少量、土器片を含む

色 ローム粒子多量、ローム粒子多量、 土器片を含む

によい福色 ローム粒子多量,ローム小ブロック・

ローム粒子中量 色 ローム粒子少量

第214図 第128号土坑実測図



第215図 第128号土坑出土遺物実測·拓影図

第215図1~4は覆土中から出土した縄文式土器片で,本跡に伴うものであろう。同一個体の胴 部片で、3本単位の横沈線間に爪形状の短沈線を配し、3、4にはさらに細沈線によって梯子状 文が描かれている。

第132号土坑 (第216図)

位置 N14i3区。

規模と平面形 長径2.48m・短径1.85mの不整楕円形で,深さ26cmである。

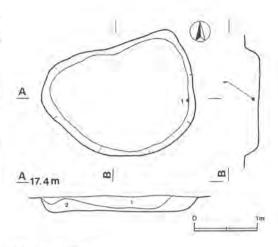
壁面 なだらかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。

覆土 2層に分層される。1層は暗褐色土で 焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。2層は褐 色土で炭化粒子をごくわずか含んでいる。

遺物 1層中から縄文時代中期後半の土器片が多く出土している。1の深鉢は東壁に接して、1層中から正位で出土している。

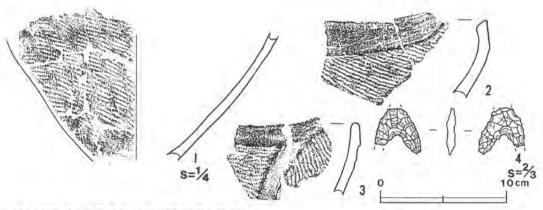
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曽利EIV式期)である。性格は不明である。



SK-132 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 掲 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第216図 第132号土坑実測図



第217回 第132号土坑出土遺物実測。拓影図

第132号出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び女様	胎土・色調・焼成	備	考
第217図 1	No. Acres	鉢 先上器		底部及び胴部上半欠損。外帳の強い胴部下半である。胴部の立ち上がりは無文で斜位のヘラナデ,胴部に縄文(単節LRの縦回転)を施文する。内面は縦位のヘラミガキ。	にぶい黄橙色	P255 30%	PL52

第132号土坑出土石製品一覧表

emilier and ten	na:	dip.	泔			0	T ##	Atte	*
図版番号	器	EIB	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	ALL MA	1/8 79	
第217図 4	石	鏃	(1.8)	(1.9)	0.5	(0.8)	チャート	Q155.一部欠損	PI

第217図 2・3 は覆土中から出土した縄文式土器片で、1 とともに本跡に伴うものと考えられる。 2・3 は口縁部片で、微隆線によってモチーフが描かれており、口縁部は無文である。 2 の縄文は単節LR、3 は単節RLである。

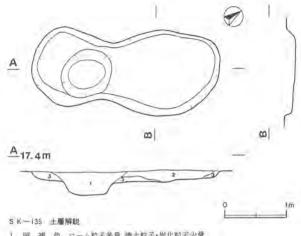
第135号土坑 (第218図)

位置 N14i4区。

規模と平面形 長径3.00m * 短径 1 37mの不整形で、深さ12cmである。 壁面 外傾して立ち上がっている。 底面 平坦である。

ピット 南東壁側に径76cmの円形の ピットがあり、28cmの深さである。

覆土 3層に分層される。1・2層 とも焼土粒子・炭化粒子を含んでい る。3層は明褐色土でロームブロッ クを含んでいる。いずれも締まりの ある土層である。



- 1 暗 補 色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 にぶい褐色 焼土粒子・蚊化粒子微量

第218図 第135号土坑実測図

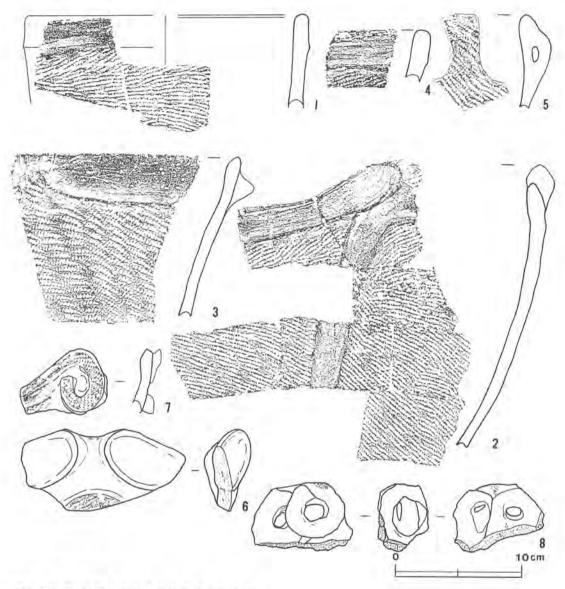
遺物 1層中から多量の縄文時代中期後半の土器片が出土している。2層中もわずかに土器片を 含んでいる。1は深鉢の口縁部片である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曽利EIV式期)である。性格は不明で あるが、第132号土坑と近接しており関連が考えられる。

第135号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	퓼	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
				口縁部片。断面三角形の微腫線によって口縁部が区画される。口縁部は無文で横位のナデ。胴部は縄文 (単節 R L) を施文しており、隆線下は縦回転でその下は横回転である。内面へラミガキ。	にぶい褐色	P 256 10%

第219図2~8は覆土中から出土した縄文式土器片で、1とともに本跡に伴うものと考えられる。 2 は口縁部無文で小波状をなし、胴部は微隆線によって曲線的モチーフが描かれ単節RLの縄文を 充塡している。3は無文の口縁部に舌状突起を持ち、縄文は単節LRの縦回転である。4も微隆 線によって無文の口縁部が区画されている。5 は橋状の把手で単節LR縄文が施されている。6~8 も口縁部片である。6は2と同様の口縁部形態である。7は縄文(単節LR)の施文された逆「の」 字状隆帯が付いている。8も「の」字状隆帯が組み合わさっている。7・8は後期初頭の時期に はいる可能性もある。



第219回 第135号土坑出土遺物実測。拓影図

第140号土坑 (第220図)

位置 M14g6区。

重複関係 第40号住居跡に一部掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.78m・短径1.20mの不整形で、深さ37cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

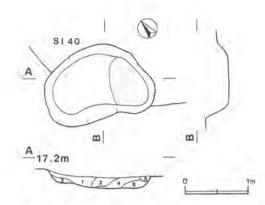
底面 平坦である。

炉床部 1か所。南東壁側に位置し,長径70cm・短径62cmの楕円形で,掘り込みはほとんど見られ

ないる

覆土 6層に分層される。5層は炉穴の焼土層である。6層も焼土ブロック・焼土粒子を含む明赤褐色土である。2・4層は暗赤褐色土で焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子などを含んでおり、その量で分層した。3層は明褐色土で、ロームブロックを含んでいる。また、1・4層は土器片を含む層である。

遺物 覆土上層から縄文時代中期後半の土 器片がわずかに出土している。1は雑な条 線文の深鉢口縁部片である。覆土下層から は縄文時代早期末の土器片が出土している。

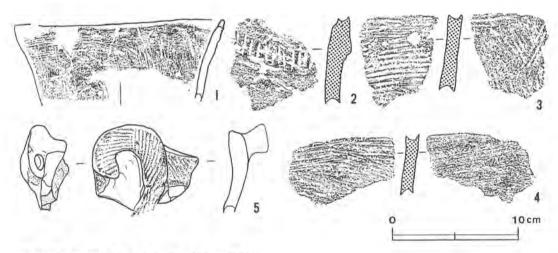


SK-148 土層解説

- 」 暗 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・コーム粒子少量
- 3 明福色 ロームプロック中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量,焼土小ブロック中量,炭化粒子・ローム粒少量
- 5 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量
- 6 明赤褐色 院上粒子微量、売土小ブロック少量

第220図 第140号土坑実測図

所見 本跡の時期は、覆土下層出土の土器及び遺構の性格から縄文時代早期末(茅山式期)で、 炉の北西側は足場になるものと考えられる。



第221図 第140号土坑出土遺物実測。拓影図

第140号土坑出土遺物観察表

図版番号	200	80	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土·色調·焼成	ith.	考
		林 A [16.8] 胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は緩い波状式土器 B (6.7) である。無文で横位のナデ。口縁部にあたる部分は横の条線文、胴部は離な条線文を縦に施す。内面はナデ。			P261 PL52 5 %		

第221図2~5は覆土中から出土した縄文式土器片で、2~4が本跡に伴うものと考えられる。 2は段上にキザミが巡らされている。3・4は胴部片で3が表裏条痕文、4は擦痕文である。5 は中期後半の時期であろう。第219図7に類似し「の」字隆帯及び口縁部に単節LRが施されている。

第143号土坑 (第222図)

位置 M14e7区。

重複関係 第40号住居跡に、南半が掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.16m・短径1.56mの不整楕円形で、深さ55cmの炉穴である。

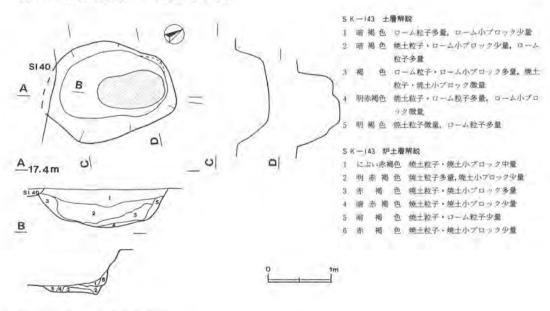
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦である。炉床部がわずかに掘り込まれている。

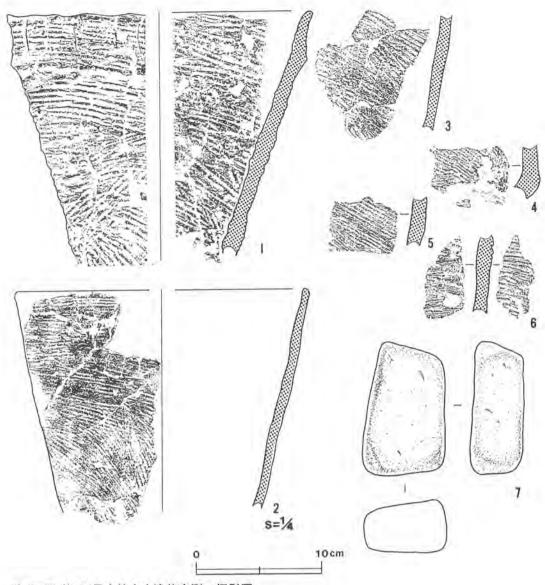
炉床部 1か所。北壁に接して位置し、長径110cm・短径60cmの楕円形で,約20cmの厚さで焼土が 堆積している。炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 5層に分層される。4層下が炉である。5層は明褐色土で焼土粒子を含んでいる。 $1 \cdot 2$ 層は暗褐色土でロームブロック・ローム粒子などを含んでおり、焼土粒子の有無で分層した。3層は褐色土で、 $1 \sim 3$ 層が土器片を含む層である。

遺物 縄文時代早期末の土器片が出土している。 2 層からは器形の分かる $1 \cdot 2$ の深鉢が横位の状態で出土している。 $3 \sim 6$ は覆土中から出土した胴部片で, $1 \cdot 2$ とともに本跡に伴うものである。 $3 \sim 5$ は表面には条痕が施されているが, 裏面には見られない。 6 は表裏条痕文土器である。 7 の台石は中層からの出土である。



第222図 第143号土坑実測図



第223図 第143号土坑出土遺物実測・拓影図

第143号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特飯及び文様	胎土·色調·焼成	備考
第223图	深錄	A [24.4] B (19.2)	胴部下半から口縁部にかけての破片。胴部下半から外傾 して立ち上がる。平縁の口縁下に段を持つ。口唇部は内 そぎ状で上面に条痕文。口縁部内外面横位の条痕文。胴 部上半横位の条痕文、下半斜位の条痕文で内面斜位条痕 文。内面下半纖維脱痕甚だしい。条痕はアナタラ風の貝 聚による。	砂粒、繊維 明赤褐色 普通	P266 PL5 30%
2	源 鉢 縄文式土器	A [31.0] B (23.6)	胴部下半から平縁の口縁部にかけての破片。胴部下半から外傾して立ち上がる。口唇上面に貝盤背圧慎文を巡らしている。胴部上半から口縁部横位の条痕文、胴部下半は斜位の条痕文である。胴部内面はナデで下半にスス付着。条痕はアナダラ属の貝殻によるが、施文は浅い。胴部下半は二次焼成で赤変。	白色細砂粒,纖維少 量 橙色 普通	P267 PL5

所見 本跡の時期は覆土中の土器及び遺構の性格から、縄文時代早期末(茅山式期)である。炉 の南側は平坦で、足場になるものと考えられる。

第143号土坑出土石製品一覧表

図版番号	gur	nn 14	注	去			7 100	/te as
	no.		長さ(cm)	柳 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	CI NE	/ 写
第223図 7	台	石	10.7	6.8	4.4	520.3	安山岩	Q159,上面平滑

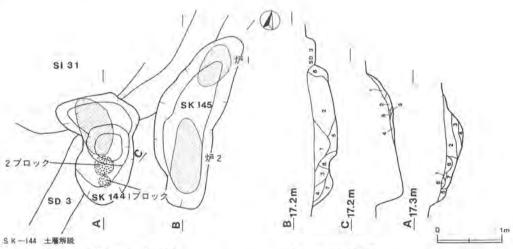
第144号土坑 (第224図)

位置 M14a。区。

重複関係 第31号住居跡によって西側部分が、第3号溝によって中央部が掘り込まれている。 規模と平面形 長径1.82m・短径1.29mの不整楕円形で、深さ27cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや起伏があり、中央部分がわずかに掘り込まれている。



- 1 暗褐色 ローム粒子多量、もろい貝細片少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小ブロック少量
- 3 赤 褐 色 焼土粒子多量,焼土小ブロック中量
- 4 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量
- 5 暗 掲 色 ローム粒子・ローム小ブロック多量、もろい貝細片少量
- 6 提土貝欄 ハイガイ主体でカキ・オキシジミなどに灰・炭化材細片少量
- 7 黒 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- SK-145 土層解説
- 1 極 暗 褐 色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量
- 色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量,ローム粒少量
- 6 にぶい褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム小ブロック中量 7 梅
- 色 明褐色土プロック中量

第224図 第144 • 145号土坑実測図

SK-145 炉(1)土層解脱

- 1 明赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 2 赤 褐 色 焼土粒子・焼土小ブロック多量
- 3 赤 褐 色 端土粒子・焼土小ブロック多量
- 4 明 褐 色 焼土粒子少量、ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 5 掲 色 焼土粒子・焼土小ブロック少量、ローム粒子・ローム 小ブロック中量

炉床部 1か所。北壁に接して位置し、長径100 cm・短径50cmの楕円形で、15cmの厚さで焼土が 堆積している。炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 7層に分層される。2~4層は炉穴の堆積土で、この土坑に重なるように1・5~7層が堆積している土坑が掘り込まれていると考えられる。6層は混土貝層で、小さな貝ブロック2か所(1・2ブロック)が接しており、貝種は同じである。貝はハイガイが主体であり、ウミニナ類・カキ・ハマグリなどがわずかに入っている。二枚貝はみな殻がぼらばらで、保存も良くない。灰も含まれている。1・5層は暗褐

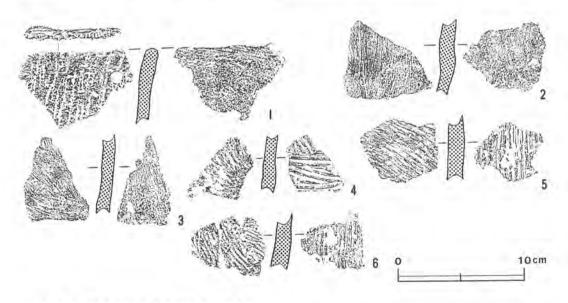
表 9 第144号土坑内貝塚動植物遺存体 組成表

	171	270	2 プロック		
貝 種 名	総重量(g)	組成比(%)	総重量(g)	組成比(%)	
オオノガイ	2,3	0.8	-6	/	
ヤマトシジミ	1	-2	2.0	0.2	
オキシジミ	3.8	0.9	13.4	1.2	
ハマグリ	4.0	1.0	2.7	0.2	
ハイガイ	368.5	95.0	1019.5	93.5	
力	5.5	1.4	49.2	4.5	
ウミニナ類	3.8	0.9	4.6	0.4	
炭 化 物	0	0	-1/-	1	
合 計	387.9	100.0	1091.4	100.0	

色土であるが、わずかに風化貝片が混じっている。3・4層は赤褐色の焼土層である。2層は極暗褐色土であり、焼土粒子が多く含まれている。

遺物 3層及び6層の貝に混じって縄文時代早期末の土器片が出土している。

所見 炉の南東側は足場として使われたと考えられる。また、炉穴が機能しなくなり埋まってから、南側が掘り込まれ、貝が投棄されたものと考えられる。土器からは両者の時期差がほとんど 認められない。本跡の時期は、貝層中及び覆土中の土器や遺構の性格から、縄文時代早期末(茅山式期)と考えられる。貝以外の獣骨魚骨等は検出されなかった。なお、貝はすべて取り上げ、



第225図 第144号土坑出土遺物実測·拓影図

それぞれの総重量と組成比は表9に表した。

第225図 $1 \sim 6$ は覆土中から出土した縄文式土器片で、本跡に伴うものである。1 は口縁部片で、アナダラ属の貝殻腹縁による波状文が施されている。補修孔があり、裏面にわずかに条痕が認められる。 $2 \cdot 3$ は表裏擦痕文土器の胴部片、 $4 \sim 6$ は表裏条痕文土器の胴部片である。

第145号土坑 (第224図)

位置 M14a。区。

重複関係 第3号溝によって北西側が掘り込まれている。

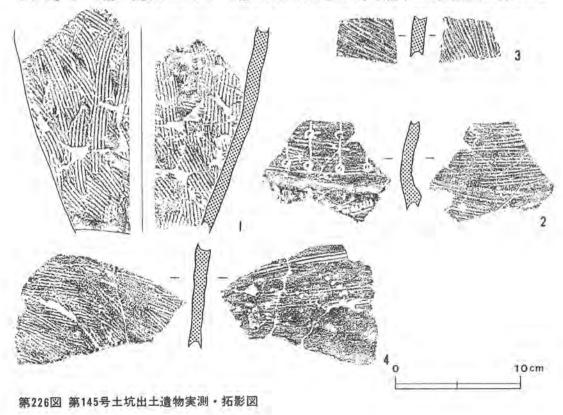
規模と平面形 長径2.90m・短径0.98mの不整楕円形で、深さ45cmの炉穴である。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 やや起伏がある。

炉床部 2か所。炉1は北壁に接して位置し、長径74cm・短径44cmの楕円形で、8 cmの厚さで焼土が堆積している。炉2は南壁に接して位置し、長径138cm・短径54cmの楕円形で、16cmの厚さで焼土が堆積している。炉床は火熱で硬くなっている。

覆土 8層に分層される。5層下に薄い焼土の広がりが見られ、炉 2 からの焼土の搔き出しと思われる。 $3 \sim 8$ 層が堆積してから $1 \cdot 2$ 層が入っている。また、各層中には焼土粒子が含まれて



いる。

遺物 縄文時代早期末の土器片が出土している。1は覆土中の出土である。

第145号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第226図	深鉢	B (16.3)	外傾して立ち上がる胴部片。内外面に縦・斜位条痕文を	砂粒, 繊維	P 268	PL52
1	縄文式土器		施している。条痕はアナダラ属の貝殻による。	赤褐色 普通	10%	

第226図 $2\sim4$ は覆土中から出土した縄文式土器片で,1 とともに本跡に伴うものである。2 は口縁下に段を持ち,条痕地文に沈線による区画文で,縦位の沈線上に円形刺突文が付く。段の下にも斜位沈線による区画文があるがはっきりしない。 $3\cdot4$ は表裏条痕文の胴部片である。

表 10 土坑一覧表

土坑	位置	長径方向	平面形	規 村	莫	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
番号	加圓	(長軸方向)	十 画 ル	長径×短径(m)	壁高(cm)	25. HI	#ZIEI	1发上	ш д д 10	ун - 7
1	J 12 j ₃	N-15°-E	不整楕円形	3.00 × 2.65	26	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
2	K 11 e ₉	N-28°-E	楕 円 形	0.80×0.67	17	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
3	K12b ₃	_	円 形	1.72×1.68	86	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
4	J 11 h ₁		楕 円 形	1.76 × 1.64	35	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
5	J 12 i2	N-65°-W	楕 円 形	3.05×2.44	23	緩斜	凹凸	自然		
7	K12g1	N-47°-W	不整円形	3.47×3.15	25	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
8	K 12 i ₁	N-50°-E	不 整 形	2.50 × 2.33	28	緩斜	凹凸	自然		炉穴
9	J 11 i2	N-3°-W	不整楕円形	2.21 × 1.16	21	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
10	J 11 h ₇	_	円 形	0.97 × 0.89	77	垂直	平坦	人為	縄文式土器,貝,磨石	土坑内貝塚 48 号土坑と重複
11	J 11 i2	N-51°-W	不整楕円形	[3.72]× 1.21	50	外傾	凹凸	自然	縄文式土器, 弥生式土器	21 号住居と重複
12	J 11 i ₈	N-54°-E	不整楕円形	3.83 × 3.40	27	緩斜	平坦	自然	縄文式土器,凹石	
13	J 11 g ₃	N-20°-E	楕 円 形	[2.20]× 1.96	33	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
14	J 11 e ₀	N-72°-W	不整楕円形	3.16 × 2.18	75	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
15	K 11 f ₈	N-64°-E	楕 円 形	0.93×0.71	19	緩斜	四凸	自然		
16	J 11 h ₃	N-12°-E	楕 円 形	(2.30) × 1.55	24	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
17	J 11 g ₆	_	円 形	1.37 × 1.36	78	内傾	平坦	人為	縄文式土器,貝	土坑内貝塚
18	J 11 h ₂	N-25°-E	楕 円 形	0.98 × 0.75	35	外傾	凹凸	自然		
19	J 11 h _s	N-46°-W	楕 円 形	0.77 × 0.65	14	外傾	平坦	自然		
20	J 11 f ₈	N-51°-W	楕 円 形	1.57 × 1.00	23	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器,砥石	
21	J 11 C ₅	N -80°-W	楕 円 形	1.88 × 1.50	36	外傾	平坦	自然	縄文式土器,磨石	
22	J 11 C₄	-	円 形	1.61 × 1.50	42	緩斜	凹凸	自然		炉穴
23	J 11 C4	_	円 形	1.83 × 1.67	30	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	

## 9	 土坑		長径方向		規	奠					
15		位置		平面形			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
26 X11a, N-47-E 相 円 形 1.28 × 1.68 27 根条 田次 自然 株文土経 27 月1b, 一 円 形 1.37 × 1.30 42 成条 甲延 自然 株文土経 28 月1b, N-37-E 相 円 形 1.48× 1.20 43 株条 甲延 自然 株子 田次 自然 株文土経 27 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本	24	J 11 e ₃	N-69°-E	不整楕円形	3.03 × 1.96	72	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
27 1115 一 円 形 1.37 × 1.30 41 根郵 平和 自然 風文主格 123 1116 N-37 × 1	25	J 11 e₂	N-11°-W	不整楕円形	1.84 × 1.34	36	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴
28	26	K11a6	N-42°-E	楕 円 形	1.28 × 1.08	27	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
11 to N-73*-W 核 円 形 1.63 × 1.20	27	J 11 h₄	_	円 形	1.37 × 1.30	41	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
11 11 11 12 13 14 15 16 17 18 17 18 18 18 18 18	28	J 11 i2	N-33°-E	楕 円 形	1.76 × 1.40	36	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
No. 11 11 12 13 14 15 15 15 16 16 16 16 16	29	J 11 e ₁	N-73°-W	楕 円 形	(1.80) × 1.26	43	緩斜	凹凸	自然		
11 11 12 13 14 15 15 15 16 16 16 16 16	30	J 11 e ₃	N-51°-W	楕 円 形	1.63 × 1.20	45	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
33 K 124 N -127 W P F F 1.45 × 0.99 88 外領 四次 自然 自然 自然 伊久、21号住居之重複 分別 月 1.45 × 0.99 88 外領 四公 自然 超文式土器 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久、21号住居之重複 分別 日本 日本 伊久 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	31	K11c ₆	N-0°	楕 円 形	0.85×0.78	17	緩斜	平坦	自然		
34	32	J 11 i,	_	円 形	1.22 × 1.17	34	内傾	平坦	自然		16 号住居と重複
	33	K 12 i4	N-32°-W	楕 円 形	1.43 × 0.99	88	外傾	皿状	自然		6号住居と重複
37 K 11j。 N-20-W 核 円 形 1.75 × 1.30 47 外傾 皿状 目然 風文式土器 極麗 石田 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	34	J 11 i4	N-80°-W	不整楕円形	2.22 × 1.06	26	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴、21号住居と重複
38 Lila 一 円 形 0.75 × 0.68 17 外線 皿状 自然 縄文式土器 石皿 日本 10 × 12 × 12 × 13 × 14 一 円 形 0.75 × 0.68 17 外線 平坦 自然 縄文式土器 日本 10 × 12 × 13 × 14 一 円 形 0.65 × 0.50 40 外線 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 重直 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 重直 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 重直 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 重直 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 重直 平坦 自然 縄文式土器 上部線 内容 2.04 × 2.00 (59) 乗車 日本 2.05 × 1.05 (40) 外線 平坦 自然 縄文式土器 日本 2.05 × 1.05 ×	35	J 11 i4	N-34°-W	不整楕円形	3.20×1.98	46	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴
1	37	K 11 j,	N-20°-W	楕 円 形	1.75 × 1.30	47	外傾	皿状	自然	縄文式土器,搔器	
40 L12b, 一 円 形 2.04×2.00 (50) 垂直 平坦 自然 薦文式士器, 土部器, 陶器, 22号住居と重複 信石 41 K11i。 N-80-W 梢 円 形 0.65×0.50 40 外領 四次 自然 屬文式士器 42 L11b。 N-38-E 杭 円 形 1.30×0.90 18 緩斜 平坦 自然 編文式士器 43 L11c。 N-20-W 不整楕円形 1.20×0.70 50 外領 平坦 自然 編文式士器 44 L11b。 N-23-W 不整楕円形 1.14×0.85 10 緩斜 平坦 自然 編文式士器 46 L12b。 一 円 形 1.30×1.19 57 外領 回次 自然 縄文式士器 47 L11a。 一 不整 円 形 1.50×1.40 30 緩斜 回次 自然 縄文式士器 48 L11b。 一 不整 円 形 1.20×0.12 22 緩斜 平坦 自然 第文式士器 49 L11b。 N-41-E 杭 円 形 0.52×0.44 53 外領 平坦 自然 第文式士器 50 K11i。 一 円 形 0.00×0.75 57 通直 四凸 自然 縄文式士器 51 K11i。 N-53-W 栋 円 形 1.00×0.75 57 通直 四凸 自然 縄文式士器 51 K11i。 N-41-E 杭 円 形 1.01×0.84 46 外領 四凸 自然 縄文式士器 52 K11i。 N-41-E 杭 円 形 1.01×0.84 46 外領 四凸 自然 縄文式士器 53 K11i, 一 円 形 0.99×0.98 24 緩糾 回次 自然 縄文式士器 54 K11i、 N-43-W 不整楕円形 1.00×0.84 57 通直 平坦 自然 縄文式士器 55 K11i、 N-67-W 杭 円 形 0.82×0.70 104 煙直 平坦 自然 縄文式士器 56 K11b、 N-10-W 栋 円 形 0.84×0.51 21 外領 回次 自然 縄文式士器 12 外領 四次 自然 縄文式士器 57 K11i、 N-47-E 不整楕円形 2.23×1.80 183 内領 平坦 自然 第文式士器 13万号住居と重複 59 K11b、 N-67-W 楠 円 形 0.667×0.53 50 垂直 四凸 自然 第文式士器 13万号住居と重複 60 K11i、 N-87-W 楠 円 形 0.65×0.73 114 垂直 四凸 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-87-W 楠 円 形 0.65×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-87-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-87-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-87-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 目 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 目 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 目 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 目 自然 37号住居と重複 61 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 日 自然 37号住居と重複 51 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 日 自然 37号住居と重複 51 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 日 自然 51 K11i、 N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 日 自然 51 K11i N-67-W 楠 円 形 0.95×0.73 114 垂直 四六 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	38	L11a,	_	円 形	0.75 × 0.68	17	外傾	皿状	自然	縄文式土器,石皿	
## K 11 is N -80 * W	39	L 11 c ₈	N-33°-W	不整楕円形	1.40×0.75	14	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
42 L11b, N-38*E 核 円 形 1.30 × 0.90 18 繊幹 平坦 自然 43 L11c, N-20*W 不整楕円形 1.20 × 0.70 50 外傾 平坦 自然 44 L11b, N-23*W 不整楕円形 1.14 × 0.85 10 緩斜 平坦 自然 45 L12d, 一 円 形 1.30 × 1.19 57 外傾 皿状 自然 縄文式土器 46 L11b, N-5*W 不整楕円形 1.35 × 0.95 23 外傾 皿状 自然 縄文式土器 47 L11a, 一 不 整 円 形 1.50 × 1.40 30 緩斜 皿状 自然 縄文式土器 48 L11b, 一 不 整 円 形 1.00 × 0.12 22 緩糾 平坦 自然 組文式土器 50 K11j, 一 円 形 0.90 × 0.84 14 緩糾 平坦 自然 縄文式土器 51 K11j, N-41*E 楕 円 形 1.00 × 0.75 57 垂直 凹凸 自然 縄文式土器 52 K11j, N-41*E 楕 円 形 1.00 × 0.84 46 外傾 凹凸 自然 縄文式土器 53 K11j, N-41*E 楕 円 形 0.99 × 0.98 24 緩糾 皿状 自然 縄文式土器 54 K11j, N-67*W 楕 円 形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K11j, N-67*W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器, 打製石斧, 具, 土坑内具塚 東・魚骨等 56 K11j, N-67*W 楕 円 形 0.80 × 0.75 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器, 打製石斧, 具, 土坑内具塚 東・魚骨等 57 K11i, N-64*W 楕 円 形 0.00 × 0.98 34 外値 四式 自然 縄文式上器, 打製石斧, 具, 土坑内具房 銀・魚骨等 58 K	40	L 12 b2	_	円 形	2.04 × 2.00	(50)	垂直	平坦	自然		22 号住居と重複
1.11 c, N-20'-W 不整楕円形 1.20 × 0.70 50 外債 平垣 自然 縄文式土器 1.11 b, N-23'-W 不整楕円形 1.14 × 0.85 10 緩斜 平垣 自然 縄文式土器 1.12 b, N-5'-W 不整楕円形 1.35 × 0.95 23 外頃 皿状 自然 縄文式土器 1.11 b, N-5'-W 不整楕円形 1.35 × 0.95 23 外頃 皿状 自然 縄文式土器 1.11 b, N-5'-W 不整楕円形 1.35 × 0.95 23 外頃 皿状 自然 縄文式土器 1.11 b, N-11'-E 捨 円 形 1.20 × 1.12 22 緩斜 平坦 自然 48 上11 b, 一 不整 円形 1.20 × 1.12 22 緩斜 平坦 自然 49 上11 b, N-41'-E 捨 円 形 0.52 × 0.44 53 外槓 平坦 自然 48 42 43 44 45 45 45 45 45 45	41	K 11 i ₈	N-80°-W	楕 円 形	0.65 × 0.50	40	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
Hamilton Hamilto	42	L11b ₈	N-38°-E	楕 円 形	1.30 × 0.90	18	緩斜	平坦	自然		
45 L12dz	43	L11c,	N-20°-W	不整楕円形	1.20 × 0.70	50	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
46 L11b, N-5'-W 不整楕円形 1.35 × 0.95 23 外傾 皿状 自然 縄文式土器 47 L11a, - 不整円形 1.50 × 1.40 30 級針 皿状 自然 縄文式土器 48 L11b, - 不整円形 1.20 × 1.12 22 級針 平坦 自然 10号土坑と重複 49 L11b, N-41'-E 楕円形 0.52 × 0.44 53 外傾 平坦 自然	44	L11b ₈	N-23°-W	不整楕円形	1.14 × 0.85	10	緩斜	平坦	自然		
Hamilton	45	L 12 d ₂	_	円 形	1.30 × 1.19	57	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
48	46	L 11 b ₉	N-5°-W	不整楕円形	1.35 × 0.95	23	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
Hamilton Hamilto	47	L 11 a ₈	_	不整円形	1.50 × 1.40	30	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
50 K11js — 円 形 0.90 × 0.84 14 緩斜 平坦 自然 繩文式土器 51 K11js N-53*-W 楕 円 形 1.00 × 0.84 46 外傾 凹凸 自然 縄文式土器 52 K11js N-41*-E 楕 円 形 1.01 × 0.84 46 外傾 凹凸 自然 縄文式土器 53 K11js — 円 形 0.99 × 0.98 24 緩斜 皿状 自然 縄文式土器 54 K11is N-43*-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K11is N-67*-W 楕 円 形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K11is N-10*-W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿址 人為 縄文式土器 土坑内貝塚 土坑内貝塚 土坑内貝塚 土坑内貝塚 土坑内貝塚 東京 1.24次月長 大り貝塚 平坦 自然 縄文式土器 1.24次月長 大り貝塚 平坦 自然 銀文式土器 1.24次月長 <t< td=""><td>48</td><td>L 11 h₇</td><td>_</td><td>不整円形</td><td>1.20 × 1.12</td><td>22</td><td>緩斜</td><td>平坦</td><td>自然</td><td></td><td>10 号土坑と重複</td></t<>	48	L 11 h ₇	_	不整円形	1.20 × 1.12	22	緩斜	平坦	自然		10 号土坑と重複
51 K11 ja N-53°-W 楕 円 形 1.00 × 0.75 57 垂直 凹凸 自然 縄文式土器 52 K11 ja N-41°-E 楕 円 形 1.01 × 0.84 46 外傾 凹凸 自然 縄文式土器 53 K11 ja N-43°-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 54 K11 ja N-43°-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K11 ja N-67°-W 楕 円 形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K11 ja N-10°-W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K11 ja N-47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内頓 平坦 人為 縄文式土器 打製石斧,具 土坑内貝塚 58 K11 ja N-64°-W 椅 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37号住居と重複 59 K11 ja N-83°-W 楕 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 <t< td=""><td>49</td><td>L 11 b₈</td><td>N-41°-E</td><td>楕 円 形</td><td>0.52 × 0.44</td><td>53</td><td>外傾</td><td>平坦</td><td>自然</td><td></td><td></td></t<>	49	L 11 b ₈	N-41°-E	楕 円 形	0.52 × 0.44	53	外傾	平坦	自然		
52 K 11 j ₈ N-41°-E 楕 円 形 1.01 × 0.84 46 外傾 凹凸 自然 縄文式土器 53 K 11 j ₇ 一 円 形 0.99 × 0.98 24 緩斜 皿状 自然 縄文式土器 54 K 11 i ₈ N-43°-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K 11 i ₇ N-67°-W 楕 円 形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K 11 i ₇ N-10°-W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K 11 i ₄ N-47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内傾 平坦 人為 縄文式土器, 打製石斧, 貝, 土坑内貝塚 58 K 11 i ₅ 一 円 形 1.00 × 0.98 34 外傾 平坦 自然 37 号住居と重複 59 K 11 i ₅ N-64°-W 楕 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 60 K 11 i ₅ N-83°-W 楕 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 37 号住居と重複 61 K 11 i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 <	50	K 11 j ₈	name.	円 形	0.90 × 0.84	14	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
53 K 11 j, 一円 形 0.99 × 0.98 24 緩斜 皿状 自然 縄文式土器 54 K 11 i, N - 43°-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K 11 i, N - 67°-W 楕円形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K 11 i, N - 10°-W 楕円形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K 11 i, N - 47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内傾 平坦 人為 縄文式土器, 打製石斧, 貝, 土坑内貝塚 58 K 11 i, N - 64°-W 楕円形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 59 K 11 i, N - 64°-W 楕円形 0.95 × 0.73 114 垂直 四状 自然 37 号住居と重複 60 K 11 i, N - 83°-W 楕円形 0.95 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 61 K 11 i, N - 0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	51	K 11 j ₈	N-53°-W	楕 円 形	1.00 × 0.75	57	垂直	凹凸	自然	縄文式土器	
54 K 11 i ₈ N-43°-W 不整楕円形 1.00 × 0.84 57 垂直 平坦 自然 縄文式土器 55 K 11 i ₇ N-67°-W 楕円形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K 11 i ₇ N-10°-W 楕円形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K 11 i ₄ N-47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内傾 平坦 人為 縄文式土器, 打製石斧, 貝, 土坑内貝塚 58 K 11 i ₅ 一円形 形 1.00 × 0.98 34 外傾 平坦 自然 37 号住居と重複 59 K 11 i ₅ N-64°-W 楕円形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 60 K 11 i ₅ N-83°-W 楕円形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37 号住居と重複 61 K 11 i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 62 K 11 i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 </td <td>52</td> <td>K 11 j₈</td> <td>N-41°-E</td> <td>楕 円 形</td> <td>1.01 × 0.84</td> <td>46</td> <td>外傾</td> <td>凹凸</td> <td>自然</td> <td>縄文式土器</td> <td></td>	52	K 11 j ₈	N-41°-E	楕 円 形	1.01 × 0.84	46	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
55 K 11 i ₇ N-67'-W 楕 円 形 0.82 × 0.70 104 垂直 平坦 自然 縄文式土器 56 K 11 i ₇ N-10'-W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K 11 i ₄ N-47'-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内傾 平坦 人為 概文式土器, 打製石斧, 貝, 土坑内貝塚 軟・魚骨等 58 K 11 i ₅ 一 円 形 1.00 × 0.98 34 外傾 平坦 自然 37 号住居と重複 59 K 11 i ₅ N-64'-W 楕 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 60 K 11 i ₅ N-83'-W 楕 円 形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37 号住居と重複 61 K 11 i ₅ N-0' 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 62 K 11 i ₅ N-0' 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	53	K 11 j ₇	_	円 形	0.99×0.98	24	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
56 K11h ₇ N-10°-W 楕 円 形 0.84 × 0.51 21 外傾 皿状 自然 縄文式土器 57 K11i ₄ N-47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内傾 平坦 人為 縄文式土器,打製石斧,貝, 土坑内貝塚 獣・魚骨等 58 K11i ₅ 一 円 形 1.00 × 0.98 34 外傾 平坦 自然 37 号住居と重複 59 K11h ₅ N-64°-W 楕 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 60 K11i ₅ N-83°-W 楕 円 形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37 号住居と重複 61 K11i ₅ 一 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 37 号住居と重複 62 K11i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	54	K 11 i8	N-43°-W	不整楕円形	1.00 × 0.84	57	垂直	平坦	自然	縄文式土器	
57 K 11 i ₄ N-47°-E 不整楕円形 2.23 × 1.80 183 内領 平坦 人為 縄文式土器,打製石斧, 貝, 土坑内貝塚 58 K 11 i ₅ 一 円 形 1.00 × 0.98 34 外領 平坦 自然 37 号住居と重複 59 K 11 i ₅ N-64°-W 楕 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複 60 K 11 i ₅ N-83°-W 楕 円 形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37 号住居と重複 61 K 11 i ₇ 一 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 62 K 11 i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	55	K 11 i,	N-67°-W	精 円 形	0.82 × 0.70	104	垂直	平坦	自然	縄文式土器	
************************************	56	K11h ₇	N-10°-W	楕 円 形	0.84 × 0.51	21	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
59 K11hs N-64°-W 椿 円 形 0.67 × 0.53 50 垂直 凹凸 自然 37号住居と重複 60 K11 is N-83°-W 椿 円 形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37号住居と重複 61 K11 is 一 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 62 K11 is N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37号住居と重複	57	K 11 i4	N-47°-E	不整楕円形	2.23 × 1.80	183	内傾	平坦	人為		土坑内貝塚
60 K 11 i _s N-83°-W 楕 円 形 0.95 × 0.73 114 垂直 皿状 自然 37 号住居と重複 61 K 11 i _s 一 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 62 K 11 i _s N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	58	K 11 i ₅	_	円 形	1.00 × 0.98	34	外傾	平坦	自然		37 号住居と重複
61 K 11 i ₇ 一 円 形 0.80 × 0.75 122 垂直 平坦 自然 62 K 11 i ₅ N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	59	K11h ₅	N-64°-W	楕 円 形	0.67 × 0.53	50	垂直	மும	自然		37 号住居と重複
62 K 11 is N-0° 不整楕円形 1.24 × 0.59 54 垂直 凹凸 自然 37 号住居と重複	60	K 11 is	N-83°-W	楕 円 形	0.95 × 0.73	114	垂直	皿状	自然		37 号住居と重複
	61	K 11 i,	_	円 形	0.80 × 0.75	122	垂直	平坦	自然		
63 K 11 i。 N-87-W 楕 円 形 0.53 × 0.46 25 外傾 凹凸 自然 縄文式土器, 磨石	62	K 11 i ₅	N-0°	不整楕円形	1.24 × 0.59	54	垂直	阳凸	自然		37 号住居と重複
	63	K 11 i ₆	N-87-W	楕 円 形	0.53 × 0.46	25	外傾	凹凸	自然	縄文式土器,磨石	

土坑		長径方向		規 榜	ŧ					
番号	位置	(長軸方向)	平面形		壁高(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
64	K 11 i ₆	-	円 形	0.45 × 0.42	50	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
65	K 11 h ₆	N-82°-W	楕 円 形	2.00 × 0.90	66	外傾	凹凸	自然	縄文式土器,打製石斧	
66	L 11 as	-	円 形	0.76 × 0.72	17	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
67	L 11 b ₅	-	円 形	0.81 × 0.78	19	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
68	K 11 i ₆	N-21°-E	不整楕円形	0.90 × 0.64	61	垂直	凹凸	自然		
70	J 11 h ₈	N-70°-E	不整楕円形	0.80 × 0.58	18	外傾	平坦	自然		炉穴,12号住居と重複
71	K 11 j,	N-49°-W	不整楕円形	1.80 × 1.09	(34)	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴,23号住居と重複
72	L 11 i2	_	円 形	1.08 × 1.02	8	緩斜	平坦	自然		
73	L 15 i1	N-78°-E	楕 円 形	1.02 × 0.89	14	緩斜	平坦	自然		
74	L 15 i,	N-41°-E	楕 円 形	1.47 × 0.85	22	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
75	L 14 i8	N-85-W	楕 円 形	1.16 × 0.80	12	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
76	M 15 C2	N-20°-E	楕 円 形	[1.72] × 1.35	91	外傾	皿状	自然	縄文式土器,敲石	33 号住居と重複
77	L 14 j ₈	N-26°-E	不整楕円形	3.63 × 1.96	40	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴
78	L 14 j ₇	N-34°-W	不整楕円形	2.10 × 1.70	51	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器,磨石	炉穴
79	L 15 j ₁	_	円 形	1.03 × 1.00	10	緩斜	平坦	自然		
80	L 15 j ₁	N-55*-W	不整楕円形	1.85 × 1.40	27	緩斜	凹凸	自然		炉穴
81	L 15 h ₂	_	不整円形	1.82 × 1.66	14	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	炉穴
82	L 15 j ₂	N-65°-E	楕 円 形	2.26 × 1.90	27	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	炉穴
83	L 14 j ₀	N-10°-W	楕 円 形	2.50 × 1.05	15	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
84	L 15 J4	N-57°-E	楕 円 形	1.21 × 0.80	15	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
85	L 15 i ₃	_	不整円形	1.56 × 1.54	54	緩斜	回凸	自然	縄文式土器,磨石	
86	L 15 j ₃	N-0°	楕 円 形	2.50 × 2.10	15	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
87	L 15 j ₂	_	円 形	1.85 × 1.70	18	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
88	M 15 a ₃	N-11°-E	不整楕円形	1.55 × 1.22	17	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
89	M 15 a ₂	N-90°	楕 円 形	3.05 ×[2.65]	26	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	33 号住居と重複
90	M 14 a ₉	N-52°-W	楕 円 形	1.66 × 1.20	10	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	炉穴
91	M 14 a ₈	N-25°-E	楕 円 形	2.20 × 1.46	12	緩斜	平坦	自然	縄文式土器,礫器	
92	M 14 b ₉	N-28°-E	楕 円 形	1.75 × 1.20	20	緩斜	平坦	自然		
93	M 14 a ₇	N-83°-E	楕 円 形	1.74 × 1.07	13	緩斜	皿状	自然	礫石斧	
94	M 14 b ₈	N-76°-W	不整楕円形	1.74 × 1.44	12	緩斜	平坦	自然	縄文式土器,敲石	
95	M 14 b ₈	_	不整円形	2.30 × 2.15	13	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
96	M 15 b ₁	N-41°-E	楕 円 形	3.52 × 2.95	60	緩斜	平坦	自然	縄文式土器,不明石製品	
97	M 15 C2	_	円 形	1.05 × 1.00	28	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
98	M 14 c ₀	N-90°	不整楕円形	2.20 × 1.32	30	緩斜	四凸	自然	縄文式土器	
99	M 15 C ₁	_	不整円形	3.60×3.45	78	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
100	M 14 d ₉	N-0°	楕 円 形	1.60 × 1.28	20	緩斜	平坦	自然		
101	M 14 d ₈	N-72°-E	精 円 形	1.48 × 1.22	43	緩斜	凹凸	自然		
102	M 14 d ₈	N-50°-E	不整楕円形	1.95 × 1.25	33	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
103	M 14 e ₉	N-35°-W	精 円 形	2.00 × 1.25	48	緩斜	皿状	自然	縄文式土器,土師器	
104	M 14 e ₉	N-67°-W	楕 円 形	1.12 × 0.77	18	外傾	平坦	自然		
105	M 14 e ₈	_	円 形	1.16 × 1.06	40	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
106	M 14 e ₀	N-32°-W	楕 円 形	3.10 × 2.44	16	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
107	M 15 e ₁	N-66°-E	不整楕円形	1.96 × 1.22	30	緩斜	皿状	自然		炉穴
108	M 15 d ₃	N-37°-W	不整楕円形	3.30 × 2.71	64	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	炉穴

1.45		E 47 士台	T	+H +	##	T	T			T.
土坑 番 号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規 相 長径×短径(m)	英 壁高(cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
109	M 15 c ₁	N-38°-E	精 円 形	1.67 × 1.21	12	緩斜	平坦	自然		
110	M 14 f ₀	N-69"-W	楕 円 形	2.30 × 1.70	40	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	炉穴
111	M 14 f ₀	N-65°-W	不 整 形	4.50 × 3.05	40	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴,35号住居と重複
112	M 14 h _o	N-90°	不整楕円形	2.45 × 1.83	53	垂直	凹凸	自然	縄文式土器,敲石	
113	M 14 e ₇	N-78°-W	不整楕円形	1.15 × 0.75	27	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
114	M 14 i ₀	N-20°-E	不 整 形	3.43 × 2.52	42	緩斜	면凸	自然	縄文式土器	
115	L 14 i ₈	_	円 形	0.91 × 0.89	35	外傾	皿状	自然	縄文式土器	27 号住居と重複
116	L 14 g ₈	_	円 形	1.54 × 1.50	68	垂直	平坦	自然	縄文式土器,弥生式土器	27 号住居と重複
117	M 14 b ₀	_	円 形	1.89 × 1.77	42	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
118	M 14 e ₆	N-76°-W	不整円形	1.93 × 1.78	49	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器,礫石斧	炉穴
119	M 14 g ₅	N-30°-E	不 整 形	4.73 × 2.24	68	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴
120	N 14 b ₉	_	円 形	1.22 ×[1.15]	67	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	41 号住居と重複
121	N 14 b ₆	N-51°-W	楕 円 形	2.35 × 1.62	27	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
122	N 14 f ₂	N-37°-W	楕 円 形	1.16 × 1.02	62	垂直	平坦	自然	縄文式土器	
123	N 14 C ₆	N-54°-W	不 整 形	3.16 × 2.54	66	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	炉穴, 44号住居と重複
124	N 14 f ₉	_	円 形	1.35 × 1.33	38	外傾	平坦	自然	縄文式土器,石鏃,凹石	
125	N 14 d ₉	N-90°	楕 円 形	1.77 × 1.20	50	外傾	四凸	自然	縄文式土器	
126	N 14 i ₂	N-90°	不整楕円形	1.74 × 1.42	66	外傾	平坦	自然	縄文式土器, 土器片鍾, 敲石	
127	N 14 e ₈		円 形	1.20 × 1.15	118	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
128	N 14 e ₆	N-60°-W	楕 円 形	1.14 × 0.94	162	垂直	平坦	自然	縄文式土器	
129	N 14 g ₄	N-18°-E	不整楕円形	1.43 × 0.94	35	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
130	N 14 g ₉	N-82°-W	楕 円 形	0.97 × 0.85	77	外傾	平坦	自然	縄文式土器,凹石	
131	N 14 f ₅	N-90°	楕 円 形	1.54 × 1.17	115	外傾	皿状	自然	縄文式土器	
132	N 14 i ₃	N-90°	不整楕円形	2.48 × 1.85	26	緩斜	平坦	自然	縄文式土器,石鏃,磨石	
133	N 14 f ₉	_	円 形	0.78 × 0.76	27	外傾	皿状	自然		
134	N 10 j ₈	N-65°-E	楕 円 形	1.94 × 1.58	33	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
135	N 14 i ₄	N-30°-E	不 整 形	3.00×1.37	12	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器,磨石	
136	N 14 h ₆	N-42°-E	楕 円 形	2.10×1.50	60	垂直	면다	自然	縄文式土器,土器片錘	
137	N 14 i ₀	N-16°-E	楕 円 形	1.92×1.17	20	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
138	N 10 j,	N-79°-W	楕 円 形	1.52×1.10	24	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
139	N 14 e ₉	N-50°-W	不整楕円形	1.10 × 0.90	48	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
140	M 14 g ₆	N-57°-E	不整楕円形	1.78 × 1.20	37	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	炉穴,40号住居と重複
141	N 14 a ₆	N-25°-W	不整楕円形	2.03 × 1.16	60	外傾	凹凸	自然	縄文式土器	
142	N 14 e4	N-34°-W	楕 円 形	1.66 × 1.08	37	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
143	M 14 e ₇	N-14*-E	不整楕円形	2.16 × 1.56	55	外傾	四凸	自然	縄文式土器,台石	炉穴, 40 号住居と重複
144	M 14 a,	N -7°-W	不整楕円形	1.82 × 1.29	27	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器,貝,磨石	炉穴,土坑内貝塚,31 号住居・3号溝と重複
145	M 14 a ₀	N-9°-E	不整楕円形	2.90 × 0.98	45	緩斜	四凸	自然	縄文式土器	炉穴, 3号溝と重複
146	N 14 d _s	N-57°-E	不整楕円形	1.30 × 1.05	70	内傾	平坦	自然	縄文式土器,磨石	44 号住居と重複
147	N 10 f ₈	N-0°	楕 円 形	2.85 × 1.13	26	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
148	N 10 e ₈	N-0°	楕 円 形	2.71 × 1.64	53	緩斜	凹凸	自然		
149	N 10 f ₉	N-90°	不整楕円形	2.53×1.59	34	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
150	N 10 e ₉	N-58°-W	不整楕円形	2.70 × 1.70	22	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
151	N 10 g ₆	N-90°	不整楕円形	2.29 × 0.80	57	緩斜	凹凸	自然		

土坑	/.L. POS	長径方向	₩ Œ 1K	規	奠	Bis and	皮炭	we ⊥	出土遺物	
番号	位置	(長軸方向)	平面形	長径×短径(m)	壁高(cm)	壁面	底面	覆土	山 工 現 物	加 5
152	N 10 e ₇	_	不 整 形	2.56 × 2.45	20	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
153	N 10 d ₇	N-83°-W	楕 円 形	2.30 × 1.30	22	緩斜	平坦	自然	縄文式土器	
155	N 9 i ₈	N-57°-E	不整楕円形	2.28 × 1.30	40	緩斜	凹凸	自然	縄文式土器	
158	N 10h1	N-70°-E	不整楕円形	2.55 × 2.05	33	外傾	平坦	自然	縄文式土器,石皿	
159	N10h1	_	円 形	0.86 × 0.84	19	外傾	平坦	自然	縄文式土器	
161	N 9 h ₉	N-43°-E	不整円形	1.50 × 1.42	74	垂直	ЩД	自然	縄文式土器,敲石	
162	N 10 e1	N-64°-W	不整楕円形	2.22 × 1.77	40	緩斜	皿状	自然	縄文式土器	
163	N 10d ₂	_	円 形	1.41 × 1.30	18	緩斜	皿状	自然		
164	N10g2	N-57°-W	不整楕円形	1.84 × 1.52	30	外傾	皿状	自然		
166	N 9 j ₇	N-12°-E	楕 円 形	0.96 × 0.78	32	外傾	凹凸	自然	縄文式土器,敲石,磨石	7.70
168	J 11 g ₉	N-57°-W	不整楕円形	4.37 × 3.15	24	緩斜	凹凸	自然		

第2号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第227図	深刻	B (6.5)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で,胴部	砂粒	P239	PL51
1	縄文式土器	C [6.4]	は底部から直立気味に立ち上がる。胴部下半に沈線によ	橙色	30%	
			る直線的懸垂帯が施されている。懸垂帯間は縄文である	普通		
			が、原体は不明。			

第21号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	<u>t</u> .
第227図	深鉢	A [16.0]	胴部上半から口縁部にかけての破片。平縁で強く内彎す	白色細砂粒多量	P 282	PL51
2	縄文式土器	B (19.5)	る。口縁部は太い沈線によって胴部と区画され,無文帯	にぶい橙色	10%	
			となっている。胴部は縄文(単節RL)を不規則に施文	普通		
		ļ	している。内面横位のナデ。			

第43号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考	
第227図	深	鉢	A [25.6]	底部から口縁部にかけての破片。底部から外傾して立ち	砂粒多量	P 283	PL51
3	縄文	式土器	B (26.7)	上がり,胴部中位で緩い膨らみを持つ。平縁の口縁部は	赤褐色	40%	
			C [9.4]	外反して開く。施文は縄文(単節RLの横回転)のみで	普通	外面スス付着。	
				全面に施している。			

第48号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・	焼成	備	考
第227図	深	鉢	B (4.3)	尖底土器の底部片。底部外面は縦ヘラナデ。	白色細砂粒		P 285	PL51
4	縄文式土				浅黄橙色	普通	5 %	

第85号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備	考
第227図	深鉢	B (8.5)	底部から胴部下半の破片。胴部はやや突出気味の底部か	砂粒, 繊維	P 248	PL51
5	縄文式土器	C [5.2]	ら外傾して立ち上がる。施文はなく,胴部は縦・斜位の	橙色	10%	
			ヘラナデ。繊維脱痕が甚だしい。	普通		

第141号土坑出土遺物観察表

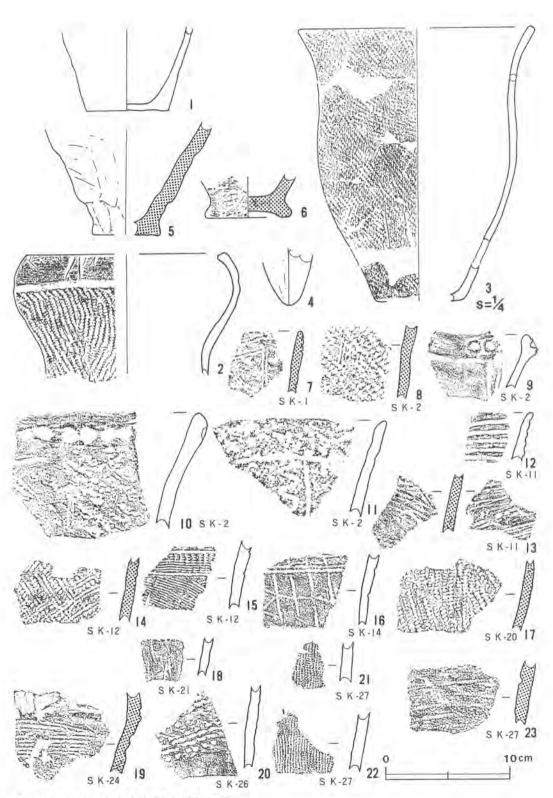
図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第227図	深鉢	B (3.3)	上げ底気味の底部片で,張り出しが見られる。底部外面	砂粒,繊維	P 264 PL52
6	縄文式土器	C 7.0	ヘラミガキで,底部からの立ち上がりは無節縄文が施文	橙色	5 %
			されているように見える。繊維脱痕が見られる。	普通	内面黑色

一覧表 (表10) で示し、遺構実測図を掲載しなかった各土坑から第227~229図 1~69の縄文式 土器片が出土している。

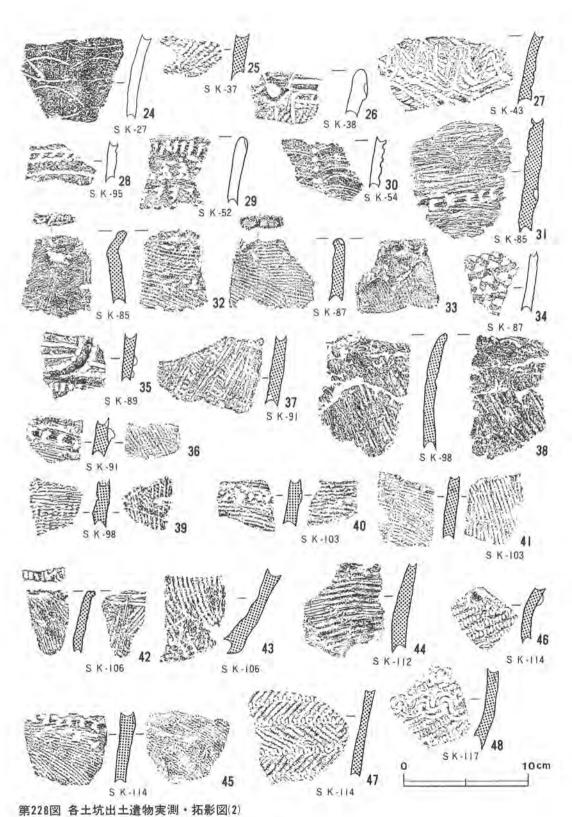
21・22は縄文の縦走する胴部片で早期前葉(井草式)、12は横位の沈線が施された口縁部片で早期中葉(田戸下層式)、4も同時期であろう。13・19・31~33・36~45・51は条痕文系土器片で早期末の時期である。19は区画文に円形刺突が施された胴部片で鵜力島台式期、他は茅山式期であろう。33・51は口縁部片で、口唇上に貝殻背圧痕文が施されている。5は早期に入ると思われる。6・8・14・17・23・25・27・46~50・55は前期前半の時期である。14・46~50・55は関山式期で50のみ口縁部片、他は胴部片であり縄文が多用されている。46~48の縄文は前々段多条であろう。47・49・50はループ文で、特に49・50は多段構成である。48は縄文地文にコンパス文、55は組紐文である。6~8・17・23・25・27は黒浜式期で、7のみ口縁部片で他は胴部片である。7は竹管文のみで幾何学文、27は縄文地文に雑な波状文、23は絡条体による縄文である。15・16・18・20・24・28~30・34・60は前期後半の時期で、29・60のみ口縁部片で他は胴部片である。16・28は撚糸文地文に竹管文が施されており、浮島II式期である。18・20・29は貝殻腹縁文が施されており、浮島II式期であるう。34・60は三角刺突文に特徴があり、浮島III式期である。15は磨消貝殻文で興津式期、24は木葉文で30とともに諸磯式期であろう。3も前期後半であろう。

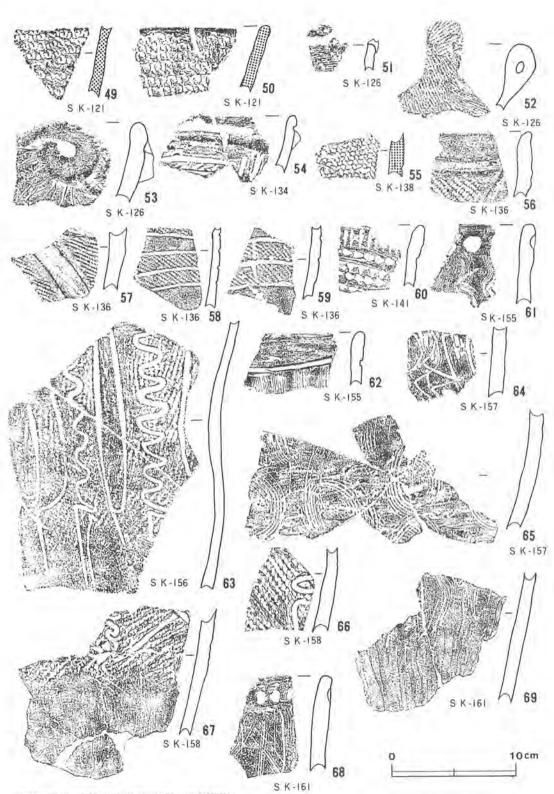
35は中期中葉(阿玉台式)の時期で,隆帯区画に角押文が巡っておりさらに横沈線を充塡している。口縁部にかけての破片であろう。 2 は中期後半(加曽利EIII式), $52 \cdot 56 \cdot 57$ は中期後半(加曽利EIV式)の時期で, $52 \cdot 56$ は口縁部片,57は胴部片である。 $56 \cdot 57$ は微隆線によってモチーフが描かれており,縄文は単節LRである。52は把手の部分である。

 $53\cdot64$ は後期初頭(称名寺式)の時期で,53は波状口縁部分に逆「の」字状隆帯が付いている。64は沈線区画内に列点文が施された胴部片である。 $9\sim11\cdot26\cdot54\cdot61\sim63\cdot65\sim69$ は後期前半(堀之内 1 式)の時期で, $63\cdot65\cdot66\cdot69$ が胴部片,他は口縁部片である。 $9\cdot63\cdot66\cdot67$ は縄文地文に蛇行沈線や蕨手文が施されている。また, $11\cdot26\cdot54$ は縄文地文に沈線によるモチーフが描かれ,9 は無文地に円形の貼付刺突文と沈線文である。 $61\cdot62\cdot65\cdot68\cdot69$ は条線文が施されたグループである。10は口縁部に円形押圧文が巡り,胴部は雑な縄文である。 $58\cdot59$ は胴部片であり,後期中葉(加曽利 B 1 式)の時期で,横帯区画の磨消縄文が特徴的である。59には縦線区画がある。同一個体になるか。



第227図 各土坑出土遺物実測・拓影図(1)





第229図 各土坑出土遺物実測・拓影図(3)

3 井戸跡

当遺跡からは 6 基(A地区 1 基・B地区 5 基)の井戸跡が確認されている。それらの井戸は形状や規模にはわずかに差異は認められるものの,井戸の時期に伴うと考えられる遺物はなく,時期については不明である。

(A地区)

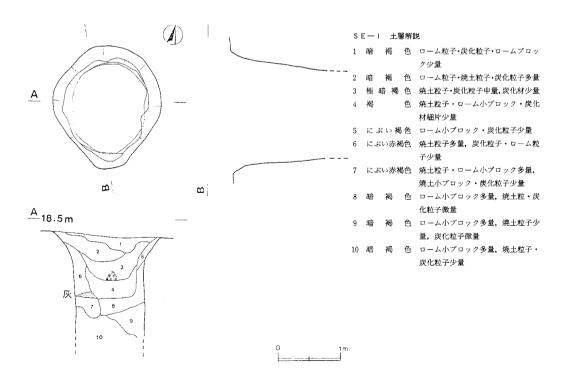
第1号井戸 (第230図)

位置 K12e₁区。

規模と形状 掘り方は上面が長径1.96m・短径1.76mの不整円形で,調査できた深さは1.60mまでである。深さ40cmまでラッパ状をしており、それ以下は径1.12mの楕円筒状に掘り込まれている。 **覆土** 10層に分層される。 3 層は炭化材などを含んだ極暗褐色土で、 6 層には焼土・灰が多量に入っている。 $8\sim10$ 層にはロームブロックが多量に入っている。また、各層中には焼土粒子・炭化粒子も含まれている。

遺物 覆土上層から縄文式土器片が出土している。

所見 確認面下1.60mまで調査したが,危険が伴うため,それ以下の掘り込みは断念した。本跡から蛇行しながら南側の第7号土坑に向かって第1号溝が延びており,本跡に伴うものと考えられる。なお,本跡の時期は不明である。



第230図 第1号井戸実測図

(B地区)

第2号井戸 (第231図)

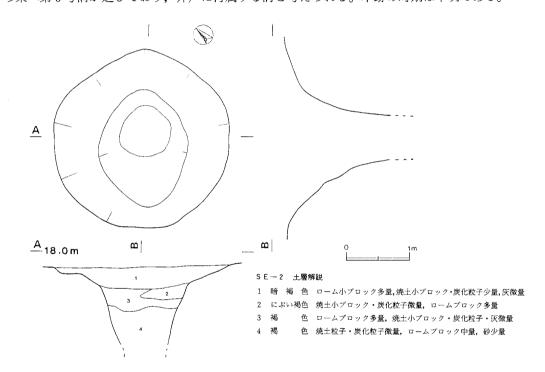
位置 N10c3区。

規模と形状 掘り方は上面が径2.80mのほぼ円形である。確認面から1.20mの深さまでラッパ状で、 それ以下は径70cm程の円筒形に掘り込まれている。

覆土 4層に分層される。各層ともロームブロックを多く含んでいる。 $1 \cdot 3$ 層には灰が含まれている。 $3 \cdot 4$ 層の褐色土は締まりがなく、さらさらした感じである。

遺物 覆土中から縄文式土器片がわずかに出土している。

所見 確認面下1.80mまで調査したが、危険が伴うため、それ以下の掘り込みは断念した。本跡から東へ第6号溝が延びており、井戸に付属する溝と考えられる。本跡の時期は不明である。



第231図 第2号井戸実測図

第3号井戸(第232図)

位置 N10g₃区。

規模と形状 掘り方は上面が長径1.88m・短径1.24mの不整楕円形で,二段掘り込み状をしている。 確認面から60cm以下は径80cmの円筒状に掘り込まれている。

覆土 3層に分層される。1層が暗褐色土, 2・3層は褐色土で各層中に焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックが含まれている。いずれも締まりのある土層である。

遺物 覆土上層から縄文式土器片が出土し ている。

所見. 確認面下1mまで調査したが、それ以 下の掘り込みは断念した。なお、本跡の時 期は不明である。

第 4 号井戸 (第233図)

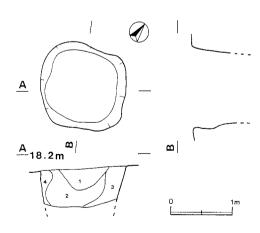
位置 N9h。区。

規模と形状 掘り方は上面が長径1.18m・短 径1.00mの楕円形で、確認面からほぼ円筒状 に掘り込まれている。

覆土 3層に分層される。褐色土で各層中 に焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックな どが含まれる。

遺物 出土していない。

所見. 確認面下0.9mまで調査したが,それ 以下の掘り込みは断念した。なお,本跡の 時期は不明である。

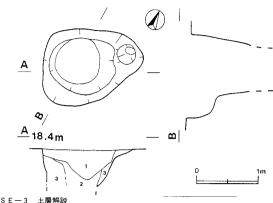


SE一5 土層解説

暗褐色 ローム小ブロック多量,焼土粒子中量,焼土小ブロック少量 ▽虽 −ム小ブロック**多量,焼土粒子・焼土**小ブロック・炭

ロームホンロック多葉、焼土粒子・焼土ホフロック・仮 化粒子分量 ローム小ブロック多量、焼土粒子・焼土小ブロック・炭 化粒子微量 ローム小ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量

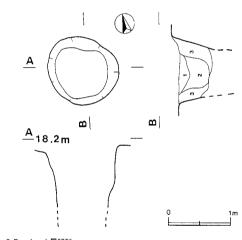
第234図 第5号井戸実測図



1 暗褐色 ローム粒子中量,焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量 褐 色 ローム粒子多量,ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量

褐 色 ロームプロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第232図 第3号井戸実測図



土層解説 1 褐色 ローム粒子多量,ローム小ブロック中量,焼土粒子・炭化粒子酸量

ローム粒子多量,ロームブロック少量,焼土粒子微量 ローム粒子多量,ローム小ブロック中量,焼土粒子 炭化粒子微量・ローム中ブロック少量

第233図 第 4 号井戸実測図

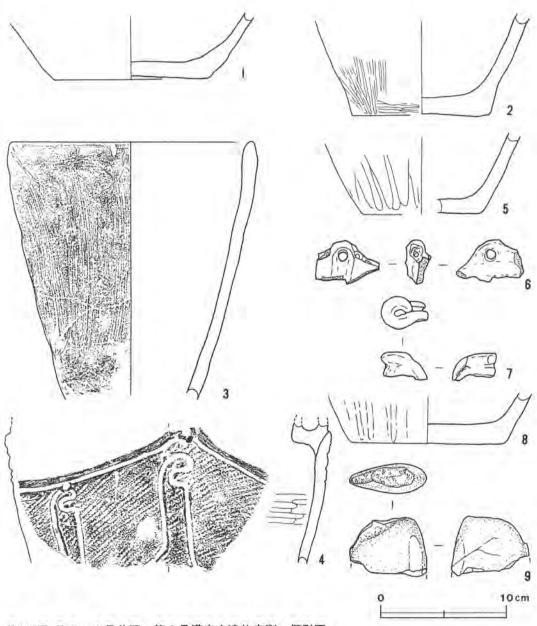
第5号井戸(第234図)

位置 M10i₃区。

規模と形状 掘り方は上面が径1.40mの不整円形 で、確認面から円筒状に掘りまれている。

覆土 4層に分層される。1層が暗褐色土・2~4 層は褐色土である。各層中にはロームブロックが 多量に含まれている。

遺物 1層中から第235図 1・2の縄文式土器の底部片が出土しているが、後世の混入である。 所見 確認面下0.66mまで調査したが、それ以下の掘り込みは断念した。なお、本跡の時期は不明 である。



第235図 第5·6号井戸·第2号溝出土遺物実測·拓影図

第6号井戸 (第236図)

位置 N 9 g7区。

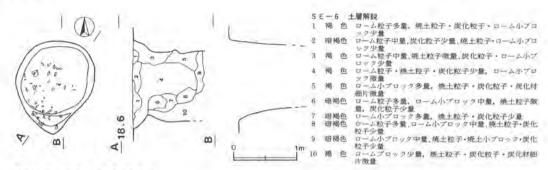
規模と形状 掘り方は上面が径1.24mのほぼ円形で,確認面から24cm前後の深さまでなだらかに掘

り込まれ、それ以下は円筒状をしている。

覆土 10層に分層される。各層中にはロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が含まれている。 3 $\sim 5 \cdot 10$ 層は褐色土、 $6 \sim 9$ 層は暗褐色土である。

遺物 4・9層から第235図3~7の縄文式土器片が出土しているが、後世の混入である。

所見 確認面下1.10mまで調査したが、それ以下の掘り込みは断念した。なお、本跡の時期は不明 である。



第236図 第6号井戸実測図

第5·6号井戸出土遺物観察表

図版番号	器 痲	法量(cm)	器形の特徴及び文標	胎土・色調・焼成	備 老		
第235図 1	深鉢	B (5.0) C 12.4	白色彩砂粒,スコリア にぶい黄橙色 普通	P275 PL53			
2	深鉢縄文式土器	B (7.5) C [11.0]	底部から胴部下半にかけての破片。平底の底部から外傾 して立ち上がる。胴部下半は無文でヘラミガキ。底面に は植物質の圧痕がわずかに見られる。	P 276 PL53			
3	深 鉢 興文式土器	A [19.4] B (20.3)	胴部下半から口縁部にかけての破片。胴部下半から外傾 して口縁部までそのまま立ち上がっている。口縁部は無 文で横へラミガキ。胴部は6本単位の櫛歯状工具による 縦の条線文で、下半は無文である。内面へラミガキ。	まま立ち上がっている。口縁部は無 褐色 関部は6本単位の櫛歯状工具による 普通			
4	深鉢	B (10.9)	胴部上半から波状の口縁部にかけての破片。口縁部は直 角に内側に折れ、幅広の口唇上面は平滑である。口縁部 に沿って沈線が巡り、幅狭の無文帯となる。胴部には縄 文(単節LRの横回転)地文上に蕨手文が数単位垂下す る。また、蕨手文と対応するように沈線上には円形刺突 文が付される。波頂部には環状把手が付く。	白色細砂粒 にぶい 黄橙色 普通	P278 PL53		
5	深 鉢 縄文式土器	B (6.3) C [9.4]	底部から胴部下半にかけての破片。平底の底部から外傾 して立ち上がる。外面は無文で縦へラミガキ。	砂粒 橙色 普通	P281 5%		

第235図 $6 \cdot 7$ は縄文時代後期前半(堀之内 1 式)の時期で、口縁部片である。 6 の波頂部には円孔が見える。 7 の波頂部には「の」字状隆帯がある。

4 溝

当遺跡からは6条(A地区1条・B地区3条・C地区2条)の溝が確認されている。溝は規模にそれぞれ差異は認められるものの、遺構の時期に伴うと考えられる遺物もなく、時期や性格が不明である。

(A 地区)

第1号溝(第237図)

位置 K12e₁区~K12g₁区。

規模と形状 全長9.2m, 上幅0.60m~1.26m・下幅0.42m~0.74m, 深さ0.48m~1.02mである。 断面は逆台形状をしているが、底面はやや起伏があり、中央がやや盛り上がっている。

方向 K12e₁区から南方向へ蛇行しながら延びている。

覆土 5 層に分層される。 $1 \sim 3$ 層には焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックが含まれている。 遺物覆土中から縄文式土器・土師器片が出土している。

所見 第1号井戸に付属する溝と考えられるが、時期は不明である。

(B地区)

第4号溝 (第238図)

位置 N10a₅区~N10b₀区。

規模と形状 調査できた範囲で全長25m,上幅0.80m ~ 1.05 m・下幅0.40m ~ 0.86 m,深さ0.14m ~ 0.20 mである。底面はほぼ平坦で,断面形は皿状をしている。

方向 N10b₀区から北西方向に20m直線的に延び、そこから南方向に直角に折れて延びている。

覆土 3層に分層される。いずれも褐色土で焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックがわずかに含まれている。

遺物 覆土中から縄文式土器・内耳土器片が出土している。

所見 遺物は流れ込みであろう。時期及び性格については不明である。

第5号溝(第238図)

位置 N 9 g₆区~N10h₂区。

規模と形状 調査できた範囲で全長17m, 上幅 $0.40m\sim0.60m$ ・下幅 $0.14m\sim0.30m$, 深さ0.34m である。底面は平坦で、断面形は皿状をしている。

方向 N10h₂区から北西方向に直線的に延びている。

遺物 出土していない。

所見 遺物もなく,時期及び性格については不明である。

第6号溝(第238図)

位置 N 9 g₇区~N10g₉区。

規模と形状 調査できた範囲で全長9.5m,上幅 $0.25m\sim0.46m$ ・下幅 $0.12m\sim0.25m$,深さ0.10m である。底面は平坦で,断面形は皿状をしている。

方向 第6号井戸から南東方向に直線的に延びている。

遺物 覆土中から縄文式土器片がわずかに出土している。

所見 遺物は流れ込みであろう。第6号井戸に付属する溝と考えられるが、時期及び性格については不明である。

(C地区)

第2号溝 (第237図)

位置 L15h₄区~M14b₃区。

重複関係 第26・28号住居跡, 第144・145号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 調査できた範囲で全長43m,上幅0.60m ~ 1.00 m・下幅0.15m ~ 0.30 m,深さ0.33m ~ 0.48 mである。断面形は深い皿状で,南方向へ延びる部分は二段に掘り込まれている。

方向 L15 i_4 区から北西方向に15m延び,第26号住居跡を掘り込んでいる所から南方向へ直角に折れて、23m延びてさらに西方向へ折れている。

覆土 2層に分層される。ローム小ブロック・焼土小ブロックをわずかに含む。にぶい褐色土である。 遺物 覆土中から縄文式土器・土師器片がわずかに出土している。第235図 8 の底部片・9 の磨石 も覆土中の出土である。

所見 遺物は流れ込みであろう。規格性のある溝である。切り合いから古墳時代以降の溝であるが、時期の特定はできない。溝の形状は根きり溝のようにも見える。

第3号溝(第237図)

位置 L14f₅区~L15g₁区。

重複関係 第26号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 調査できた範囲で全長13.4m, 上幅0.33m~0.62m・下幅0.10m~0.40m, 深さ0.30m~0.45mで, 断面形は逆台形状をしている。

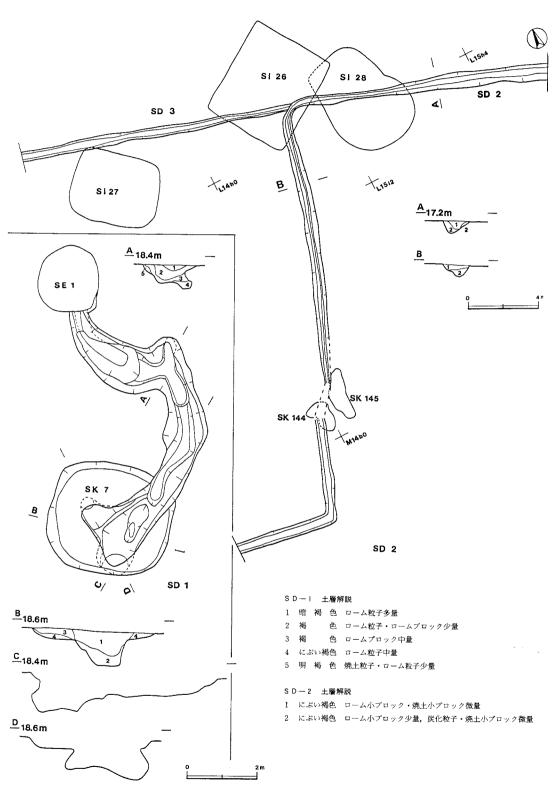
方向 L15g1区から西方向に直線的に延びている。

遺物 土師器片がわずかに出土している。

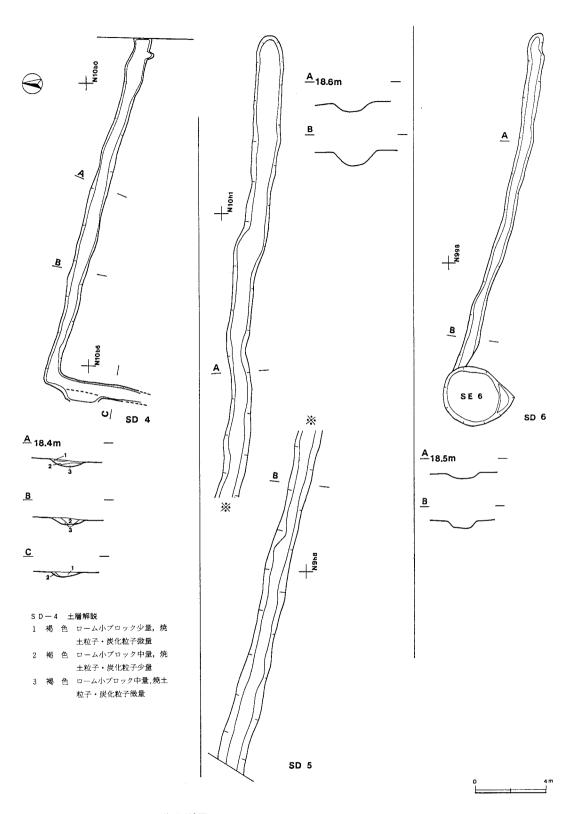
所見 第2号溝に接続するように延びていることから、同じような性格の溝と考えられる。時期は不明である。

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第235図	深 鉢	B (3.8)	底部から胴部下端にかけての破片。平底の底部から外傾	砂粒	P 289
8	縄文式土器	C [12.0]	して立ち上がる。無文の外面は縦ヘラミガキで内面ナデ。	にぶい橙色 普通	5 %



第237図 第1・2・3号溝実測図



第238図 第4・5・6号溝実測図

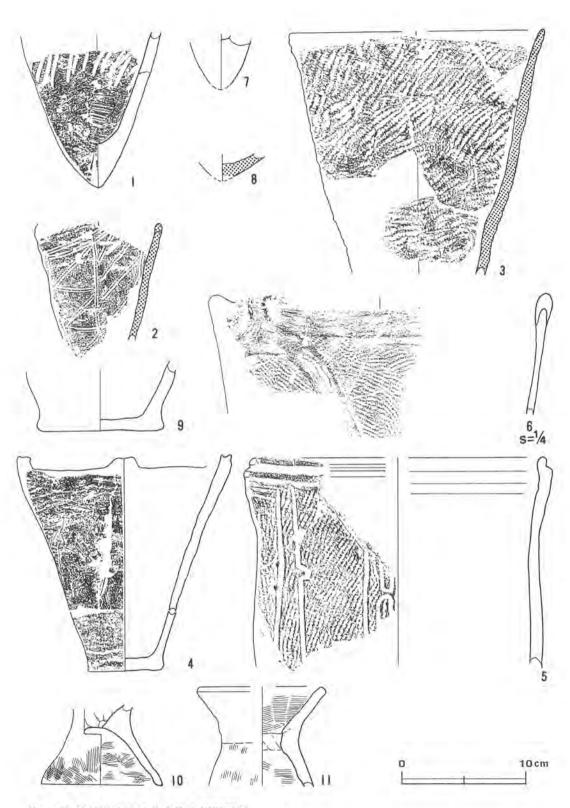
第2号溝出土石製品一覧表

	ны	200	法	法		Ē.	石 質	備	考	
図版番号	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第235図 9	磨	石	4.8	6.2	2.4	86.6	安山岩	Q178,覆土中		

5 遺構外出土遺物

各調査区からは、直接遺構に伴わない土器や土製品、石器・石製品、古銭が出土している。ここではそれらについて実測図(第239~247図)及び観察表、一覧表で一括して報告する。

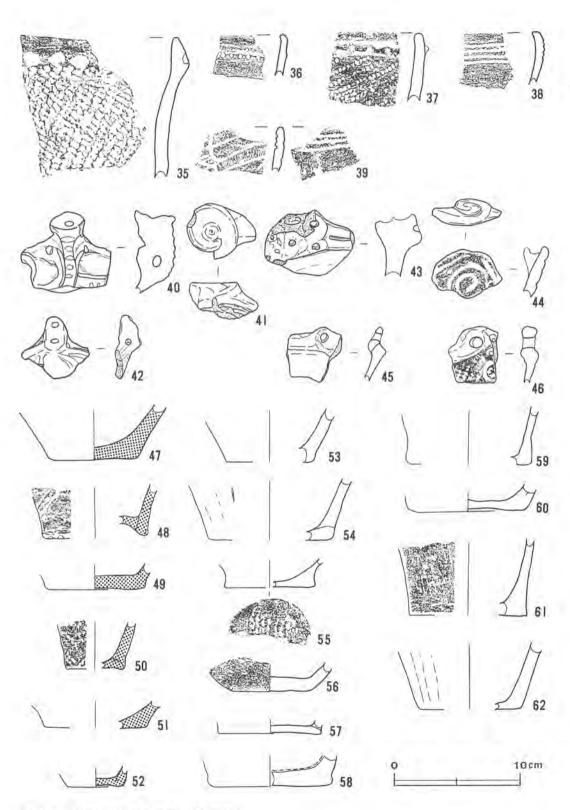
1は縄文時代早期中葉(田戸下層式),7・8も早期の底部片である。2・3は前期前半(黒浜 式), 6 は中期後半(加曽利EIV式), 4 ・ 5 は後期前半(堀之内 1 式)の時期である。 9 は時期 不明である。12~39は遺構外出土の縄文式土器片である。12~14は前期前半(関山式)の時期で、 12は梯子状の沈線区画にいぼ状突起の付された口縁部片,13は組紐文の施文された胴部片,14は 合撚の縄文の口縁部片である。 $15\sim26$ は前期後半(浮島・諸磯・興津式)の時期である。 $15\sim17$ は撚糸文地文に竹管による円形刺突文・沈線文の施されたグループで,15は胴部,16・17は口縁 部片である。18はアナダラ属の貝殼腹縁による波状文の施された胴部片である。19・20は縄文地 文にキザミのある浮線が施された口縁部片で、20は口縁端部が強く内屈曲する。21~23は無文地 に沈線による平行線文や弧線文・木葉文の施されたグループで、23は口縁部片である。24~26は 貝殼腹縁文及び磨消貝殼文が施されており,24・25は口縁部,26は胴部片である。27・28は後期 初頭(称名寺式)の時期で,沈線区画に列点文が施された胴部片である。28は列点が密である。 29~35は後期前半(堀之内1式)の時期である。29~33は縄文地文に蕨手文や蛇行沈線が垂下し ている。34は縄文 (単節LR) 地文に,2本単位の沈線により幾何学的モチーフが描かれている。 35は口縁部に円形押圧文が巡り,胴部は単節縄文LRの横回転である。36は口縁部にキザミのあ る隆起線が巡っている。37も口縁部に押圧の施された降起線がめぐっており,胴部は単節縄文LR の横回転である。 $36\cdot 37$ は堀之内2式の時期であろうか。 $38\cdot 39$ は後期中葉(加曽利11式)の 時期で,横帯区画の磨消縄文の口縁部片である。39は横帯に区画孤線文が入る。また,内面にも 3本の沈線が巡っている。 $40\sim46$ は後期初頭から前半の時期の口縁突起部である。 $47\sim62$ は底部 片で,47~52が前期前半の時期であろう。48は上底状で半截竹管による斜位沈線が見える。50は 無節縄文が施文されている。 $53\sim62$ は時期の特定は難しい。55の底面は網代痕でザル編みである が,素材の本数がはっきりしない。10・11は古墳時代前期(五領式)の時期である。



第239図 遺構外出土遺物実測·拓影図(1)



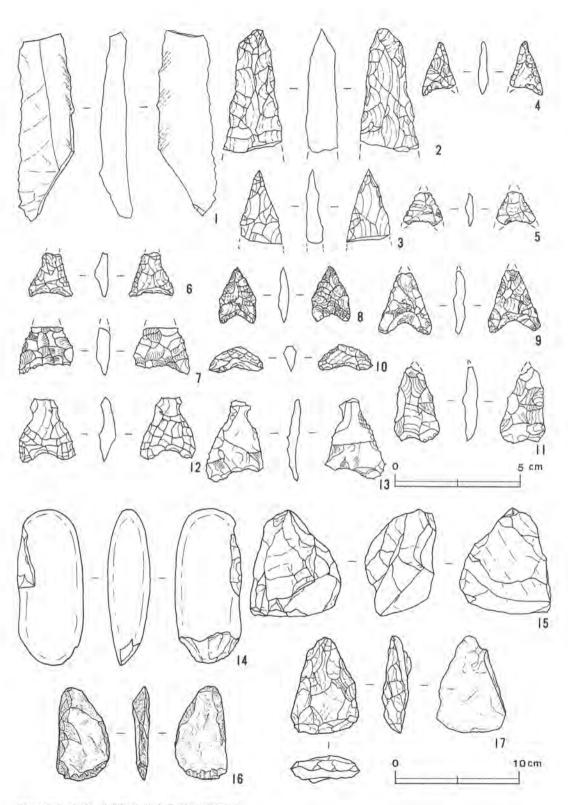
第240図 遺構外出土遺物実測·拓影図(2)



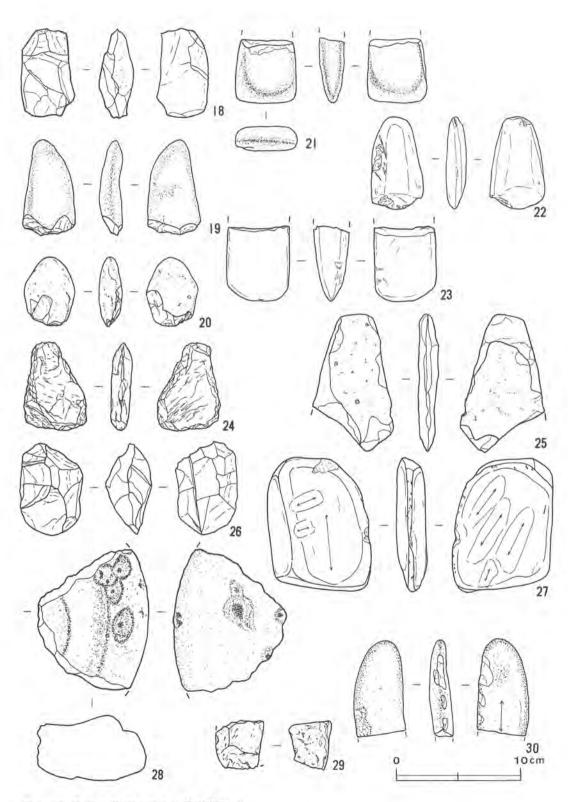
第241図 遺構外出土遺物実測·拓影図(3)

遺構外出土遺物観察表

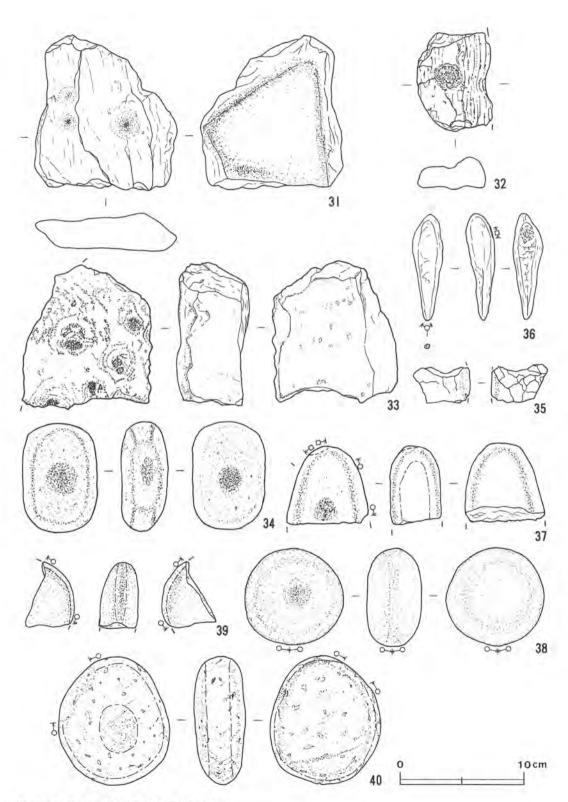
図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴 及 び 文 様	胎土・色調・焼成	備考				
第239図 1	深 鉢 縄文式土器	B (12.3)	逆円錐形状の尖底土器で,胴部上半欠損。胴部下半縦・ 斜位へラケズリ,胴部中位は斜位の太沈線が施されてい る。内面は縦ナデ。	白色細砂粒多量 橙色 普通	P 254 40% 128号土坑脇。				
2	深 鉢 縄文式土器	A [9.9] B (9.2)	胴部下半から口縁部にかけての破片。口縁部は波状である。竹管状工具による沈線で文様を構成する。沈線で区 画された口縁部は無文で,胴部には肋骨文・鋸歯文を施 している。繊維脱痕有り。	細砂粒,繊維 にぶい橙色 普通	P290 PL53 10% A地区				
3	深 鉢 縄文式土器	A [20.6] B (19.5)	胴部下半から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。全面に縄文(単節LRの横回転)を施文する。原体の長さは2.7cmである。内面ナデ。	ち上がり口縁部に至る。全面に縄文(単節LRの横回転) 繊維					
4	深 鉢 縄文式土器	A 17.2 B (17.3) C 6.0	胴部一部欠損。やや突出気味の底部から外傾して立ち上がり,口縁部に4単位の山形突起を持つ。突起頂部は楕 円形にくぼむ。施文は一切なく,内外面縦・横位のナデ。	大粒の長石・石英多 量 にぶい赤褐色 普通	P 313 PL53 90%, A 地区内面炭化 物付着。				
5	深 鉢 縄文式土器	A [23.4] B (16.7)	胴部中位から口縁部にかけての破片。平縁の深鉢で胴部 上半でわずかにくびれ、外傾して立ち上がる。口縁部に は円形刺突文を配し、そこから一条の凹線が巡る。胴部 は縄文(単節LRの横回転)地文に蕨手文が数単位垂下 する。口縁部内面に指による凹線状のなぞりが見られる。 内面横位のナデ。	白色細砂粒,スコリア にぶい橙色 普通	P317 PL53 20% A地区				
6	深 鉢 縄文式土器		胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は緩い波状である。断面三角形の微隆線によって文様帯を区画する。口縁部は無文で横へラミガキ,波頂下に微隆線によって逆U字形、V字形のモチーフを描く。微隆線間は無文で、モチーフ内に縄文(単節RL)を充塡している。内面横位のヘラナデ。	白色細砂粒 暗褐色 普通	P324 PL53 10% C地区				
7	深 鉢 縄文式土器	B (3.8)	尖底土器の底部片。施文はなく,縦位のナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P322 5%, A地区				
8	深 鉢 縄文式土器	B (2.2)	尖底土器の底部片。厚みはない。	白色細砂粒 橙色 普通	P312 5%, A地区				
9	深 鉢 縄文式土器	B (5.3) C [10.2]	底部から胴部下半にかけての破片。平底で張り出し気味 の底部から,外傾して立ち上がる。	砂粒,スコリア にぶい橙色 普通	P319 PL53 5%, A地区				
図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考				
10	台付甕土師器		「ハ」字状に開く台部のみ。 台部内外面ハケ目整形。 甕との接合部に空洞がある。	長石,石英 橙色 普通	P297 PL53 10%, A地区				
11	粗製器台土 師器	A [10.4] B (8.0)	粗製器台で,脚部下半を欠 損。脚部は「ハ」字状に開き, 器受部は外傾して立ち上が る。 とのでは使いである。 とのでは、 とのでも。 とのでも。 とのも。 とのも。 とのも。 とのも。 とのも。 とのも。 とのも。 との	砂粒 にぶい橙色 普通	P323 PL53 30% A地区				



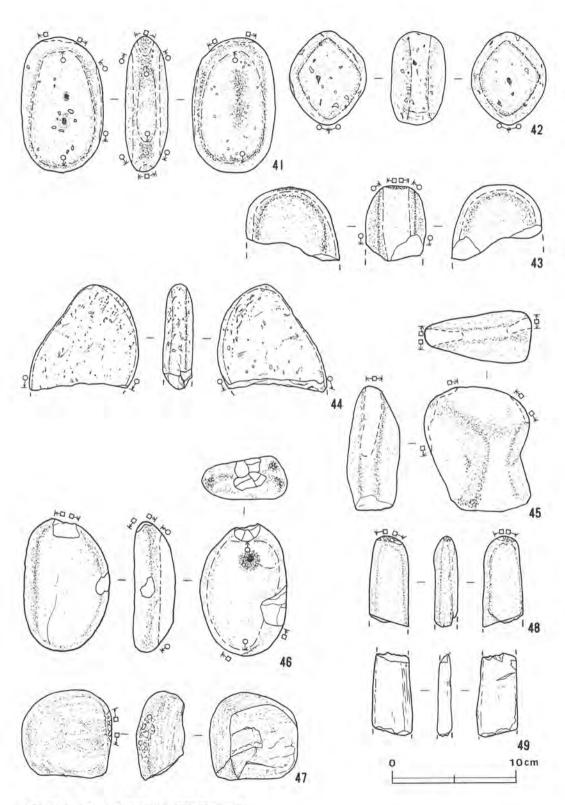
第242図 土坑・遺構外出土石器実測図(1)



第243図 土坑・遺構外出土石器実測図(2)



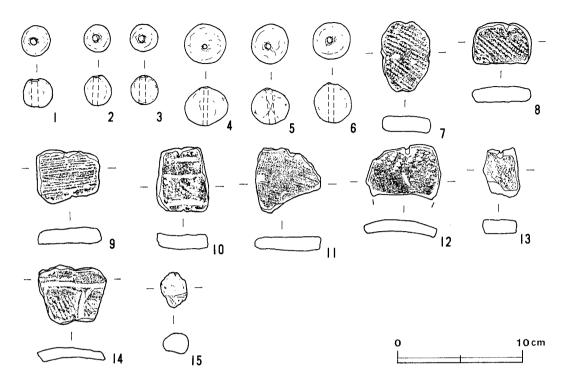
第244図 土坑。遺構外出土石器実測図(3)



第245図 土坑・遺構外出土石器実測図(4)

土坑及び遺構外出土石製品一覧表

		法			<u> </u>			
図版番号	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備考	
第244図 34	凹 石	8.7	5.9	3.8	266.2	安山岩	Q134,12号土坑	PL68
第243図 30	砥 石	(7.8)	4.0	1.9	(66.7)	安山岩	Q174,20号土坑1層中,欠損品	PL68
第244図 36	磨石	(3.0)	(4.5)		(41.3)	砂岩	Q175,21号土坑,破片	
第242図 16	播 器	7.5	4.4	1.3	44.4	砂岩	Q135,37号土坑,石篦状である	PL67
第243図 28	石 皿	(9.9)	(11.5)	5.3	(547.1)	安山岩	Q137,38号土坑,欠損品	PL68
第244図 39	磨 石	(5.3)	(4.0)	3.1	(72.4)	砂岩	Q140,63号土坑1層中,破片	
35	磨石	8.6	2.5	2.3	50.5	粘 板 岩	Q145,85号土坑,先端に磨り面	Î
第242図 15	礫 器	8.6	7.2	5.8	390.7	安山岩	Q146,91号土坑	PL67
第243図 18	礫 石 斧	7.2	4.4	2.8	96.9	ホルンフェルス	Q147,93号土坑覆土中	PL67
第245図 47	敲 石	7.1	7.3	3.9	265.6	結晶片岩	Q148,94号土坑	
48	敲 石	(7.3)	3.3	2.0	(70.2)	凝灰岩	Q176,112号土坑,欠損品	
第242図 4	礫 石 斧	7.1	5.7	2.7	95.3	ホルンフェルス	Q177,118号土坑	PL67
第244図 32	凹石	(7.9)	(6.0)	2.6	(157.0)	緑泥片岩	Q152,124号土坑,破片	PL68
33	凹石	(11.1)	(9.7)	5.8	(509.3)	安山岩	Q154,130号土坑2層中,破片	PL68
第245図 43	磨 石	(6.0)	7.6	4.9	(229.7)	半花崗岩	Q164,146号土坑覆土中,欠損品	PL69
第243図 29	石 皿	(3.8)	(3.8)	3.4	(46.5)	安山岩	Q165,158号土坑,破片	
第245図 45	敲 石	10.1	8.8	4.3	461.8	砂岩	Q166,161号土坑,被熱	PL69
42	磨石	7.5	6.2	4.4	264.1	安山岩	Q167,166号土坑	PL69
第244図 40	磨石	10.3	8.9	4.1	524.9	安山岩	Q160, M14a ₀	PL69
第242図 5	石 鏃	(1.4)	(1.6)	0.3	(0.6)	チャート	Q200, A地区, 欠損品	PL66
4	石 鏃	2.1	(1.4)	0.4	(0.7)	チャート	Q201, A地区, 欠損品	PL66
第245図 44	磨石	8.6	8.7	2.5	209.9	安山岩	Q185, K11, 欠損品	PL69
第242図 13	石 匙	3.2	2.4	0.6	2.0	チャート	Q186, K12e ₁	PL66
7	石 鏃	(1.9)	(2.3)	0.6	(2.1)	黒 曜 石	Q199, A地区, 欠損品	PL66
14	局部磨製石斧	12.6	5.5	3.5	(319.4)	半花崗岩	Q194, A地区, 一部欠損	PL67
第245図 46	敲 石	10.8	7.1	3.5	339.9	礫岩	Q196,M15,磨石兼用	PL69
第242図 17	礫 石 斧	7.8	5.5	2.3	74.2	頁 岩	Q197,106号土坑周辺,石箆状	
第243図 22	磨製石斧	7.4	4.2	1.5	(77.7)	蛇紋岩	Q204, A地区,定角式,一部欠損	PL67
23	磨製石斧	(6.1)	5.1	2.9	(158.2)	蛇紋岩	Q205, A地区, 定角式, 欠損品	
25	打製石斧	(11.0)	6.5	1.7	(94.8)	安山岩	Q206, A地区, 撥型, 一部欠損	
21	磨製石斧	(5.2)	4.8	2.0	(83.4)	凝灰岩	Q207, A地区, 定角式, 欠損品	PL67
第245図 49	石 剣	(6.7)	3.3	1.3	(40.4)	角閃岩	Q208, A地区, 欠損品	PL67
第243図 19	礫石斧	7.7	4.5	2.0	74.1	ホルンフェルス	Q209, A地区	PL67
20	礫 石 斧	5.6	4.1	1.9	49.0	頁 岩	Q210, A地区	PL67
24	打製石斧	7.0	5.0	1.7	72.6	緑泥片岩	Q211, A地区, 撥型	PL67
26	打製石斧	7.3	5.1	3.8	113.5	砂岩	Q212, A地区, 片刃石斧片か	PL67
第245図 41	磨石	10.9	6.7	3.5	400.7	安山岩	Q214,A地区,敲石兼用	PL69
第244図 31	石 皿	12.6	11.4	3.1	552.6	緑泥片岩	Q218, A地区, 凹石兼用	PL68
第242図 10	石 鏃	1.0	2.2	0.5	0.8	チャート	Q202, A地区,変形品	PL67
2	石槍	(4.9)	2.4	1.3	(14.4)	頁 岩	Q203, A地区, 欠損品	PL67
9	石 鏃	(2.6)	2.1	0.5	(2.0)	チャート	Q222, B地区, 一部欠損	PL67
12	石 匙	2.4	2.3	0.7	3.0	チャート	Q29, J 11	PL67
第244図 37	磨石	(6.3)	6.5	4.1	(243.9)	安山岩	Q172,一部欠損, J11	PL69
第242図 8	石鏃	2.3	1.6	1.3	1.1	黒曜石	Q151,124号土坑	PL66
11	石鏃未製品	3.0	1.8	0.6	3.3	チャート	Q181, C地区	PL66
6	石鏃未製品	1.8	1.8	0.5	1.2	チャート	Q182, K11	PL66
1	削器	7.5	2.4	1.4	16.3	安山岩	Q183, K11	PL65
3	石植	(3.0)	(1.7)	0.6	(2.6)	チャート	Q24,一部欠損, J11	PL66
第243図 27	低 石	10.8	8.8	2.5	314.4	砂岩	Q112,両面に溝状のくぼみ有	
第244図 38	上磨 石	9.2	7.8	4.4	399.8	安山岩	Q156, N14	PL69



第246図 各土坑・遺構外出土遺物(土製品)実測・拓影図

土坑及び遺構外出土土製品一覧表 (PL64・65)

図版番号	器	種	法		量 (cm)	孔 径	重 量	現存率	備考
凶放备亏	36°	悝	最大長	最大幅	最大厚	(cm)	(g)	(%))##
第246図 1	土	玉	2.2	2.4	-	0.5	11.9	100	DP78,A地区
2	土	玉	2.5	2.2	_	0.4	9.8	100	DP79,同上
3	土	玉	2.1	2.2	_	0.5	9.2	100	DP80,同上
4	土	玉	3.1	3.3	_	0.3	30.6	100	DP81,C地区
5	土	玉	2.9	3.0	-	0.5	25.3	100	DP82,同上
6	土	玉	3.2	3.0	_	0.4	27.6	100	DP83,同上
7	土 器	片 錘	5.6	3.8	1.4		29.1	100	DP70,126号土坑 1層,胴部片利用
8	土 器	片 錘	(3.3)	4.8	1.2		(22.4)	50	DP71,126号土坑覆土,厕部片利用
9	土 器	片 錘	4.4	5.1	1.4	-	32.4	100	DP72,136号土坑覆土,胴部片利用
10	土 器	片 錘	5.1	4.1	1.3	-	30.5	100	DP73,M14a。,胴部片利用
11	土器	片錘	(5.2)	5.3	1.2	_	(30.3)	70	DP74,同上,口綠部片利用
12	土器	片 錘	(4.4)	5.8	1.3	_	(34.2)	60	DP76, C地区, 胴部片利用
13	土器	片 錘	(3.9)	3.0	1.2		(15.4)	90	DP77,同上,胴部片利用
14	土 器	片 錘	4.8	5.5	1.2	-	35.0	100	DP84,同上,胴部片利用
15	球 状:	上 製 品	2.3	2.0	1.7	_	5.3	100	DP75,A地区





5 cm

第247図 古銭拓影図

遺構外出土古銭一覧表

図版番号	鋳 名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	出土地点	備考
第247図 1	寛永通寶	1736	江戸深川十万坪	N10 h 4	M 1
2	政和通寶	1111	北宋	M10 j ₇	M 2 SI-55Aピット内

第6章 まとめ

高崎貝塚の調査により明らかにされた遺構の内訳は以下のとおりで、大きく $I \sim IX$ 期に区分することができる。

竪穴住居跡59軒

I期 縄文時代早期末 7軒 (SI-28・29・30・32・33・36・60·・C地区)

II期 縄文時代前期前半 7 軒 (SI-11・20・21・24・25・A地区, SI-54・55B・B地区)

Ⅲ期 縄文時代前期後半 3軒(SI-12・14・18··A地区)

IV期 縄文時代中期後半 9軒 (SI-9 •16 ·· A地区, SI-40 •42 •43 •44 •47 •50 •61 ·· C地区)

V期 縄文時代中期末 1軒(SI─51··C地区)

VI期 縄文時代後期前半 10軒 (SI-15・22・23・37・A地区, SI-52・56・57・58・59・62・B地区)

〈縄文時代後期前半~後半 4軒(SI-19··A地区,SI-46··C地区,SI-53·55A··B地区)〉

VII期 弥生時代後期中葉 4 軒 (SI-8 • 10 · A地区, SI-27 • 31 · · C地区)

 VIII期
 古墳時代前期
 11軒(SI-1・2・3・4・5・6・A地区, SI-35・39・41・45・49・C地区)

IX期 古墳時代中期 3 軒 (SI-7·A地区, SI-26·34·C地区)

土坑跡 159基 (縄文時代の炉穴24基・土坑内貝塚4基を含む)

井戸跡 6基

ここでは、高崎貝塚の北側に菅生沼から延びる谷津に対して、極めて特徴的な分布を示しているA・B・C各地区で調査された59軒の住居跡と一部の土坑との関係について、集落の構成と変遷を中心にふれ、まとめとしたい。

高崎貝塚では縄文時代早期前葉(撚糸文系土器群)の土器片がわずかながらA・C地区から出土しているが、それらが伴うと考えられる遺構は確認できなかった。また、早期中葉(沈線文系土器群)は三戸式土器を出土する第128号土坑がC地区南半に見られるが、遺跡全体を見ても他に田戸下層式土器片がわずかに出土しているのみで、住居跡は確認できなかった。

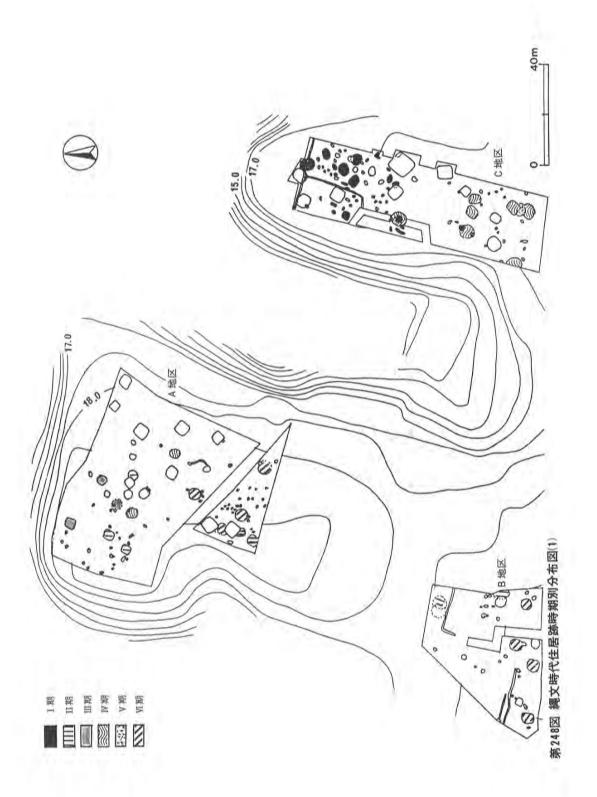
燃糸文系土器・沈線文系土器の出土は、それらを使用した人々の存在を示しており、この時期、 高崎貝塚一帯が地形的に狩猟などの活動の場になっていたことが考えられる。この時期の遺構に ついては、開発エリア外に存在する可能性が指摘できる。

集落の構成が見られるようになるのは、I期の早期末からである。居住地域として占地されたのはC地区の北半で、7軒の住居跡(形態に規格性は見られない)と15基の炉穴(第5章第2節

2の中で土坑の性格を炉穴としたものは、まとめでは炉穴と表現していく)が大きなまとまりと してある(第248図)。集落の構成は第60号住居跡を除いて、それぞれ $3\sim10$ mの間隔で西側に広場 を持つように, 弧状に組まれ, 第60号住居跡はそれらの南側に20m以上離れて位置している。 弧状 に展開する住居跡の内側には7基の炉穴(SK-77・78・80・81・82・144・145),外側には8m~16 m離れたところに8基の炉穴(SK-107・108・110・111・118・119・140・143)が住居跡に沿う ように位置しており,群集型の分布である。出土した土器では時期差はあまり認められず,住居 跡と炉穴の強い関連性がうかがわれる。第144号土坑(炉穴)は廃絶後、貝が投棄されており、当 該地方では類例の少ない早期末の小地点貝塚になる。投棄された貝の量は少なく,数回の分量で あろう。鬼怒川水系に属する早期末の貝塚としては水海道市の花島貝塚・築地貝塚があげられる が,これらはいずれも小型のヤマトシジミ・マガキを主体とする汽水性の小地点貝塚であるのに 対し、本貝塚はハイガイが大半を占める鹹水性のものである。水海道市の両貝塚は直線距離にし て高崎貝塚とは10km未満であるが、本貝塚が南に位置している分、水域の淡鹹度の違いによる貝 類生息環境が貝塚構成貝種に表れたものと考えられる。A地区では7基の炉穴 (SK―8•22•25• 34・35・70・71) を調査したが、C地区のようなまとまりは見られず散在型の分布であり、住居 跡も確認できなかった。また,A地区における該期の土器片は少なく,狩猟採集に伴うキャンプ サイトとしての炉穴の可能性が指摘できる。

II期の集落はA・B地区で確認された(第248図)。C地区には見られないことから、居住地域が小さな谷津を挟んだ西側に移ったようである。A・B両地区間の未調査部分を含めれば、細長い台地の西側に、南北に長く集落が構成されるものと思われる。両地区のグループ構成は第11・20・21号住居跡、24・25号住居跡(24号住の土器には竹管文が多用されており、黒浜式期内での若干の時間差が考えられる。近接しているのも併存というより、時間差のあることを示している。)、第54・55B号住居跡の3グループに分けられる。第10・17号土坑はいずれも貝が入っており、第11・20・21号住居跡の内側に囲まれるように位置している。それらの土坑から出土した土器からも、いずれかの住居に属する貝塚と考えられる。同時期の貝塚としてカキ・オキシジミ・ハマグリが主体貝種であることは同じであるが、第24・25号住居跡は住居内地点貝塚であり、土坑内貝塚とは異なった投棄のされ方である。両住居跡の地点貝塚については、谷津を挟んで北側に位置する北前遺跡の第25・26・30号住居跡内地点貝塚と時期も同じであり、同様のあり方を示している。

III期はA地区の北端に、3軒で集落が構成されている(第248図)。集落は北端に偏って見られ、 覆土からは前半の土器片も多く出土している。II・III期の住居形態は11号住居跡を除き、方形状 である。C地区でも、わずかではあるが該期の土器片が出土している。調査区外に住居跡の存在 も予想されるが、むしろII・III期にはC地区の台地は狩猟採集の場として利用されたものと考え られる。



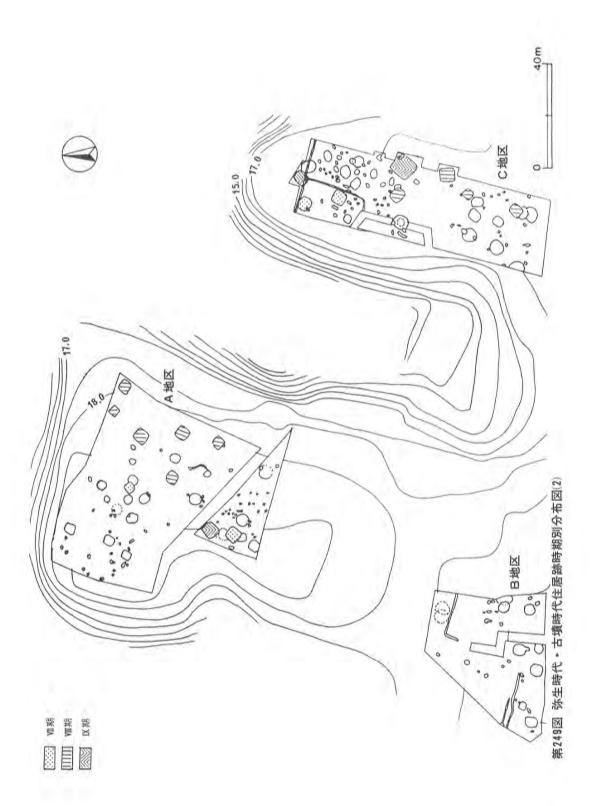
前期末から中期後半(加曽利 E III式)までは、高崎貝塚に集落は営まれていない。調査区域内で該期の違構は確認されなかった。前期末から中期中葉にかけての土器片の出土もごくわずかである。集落がしばらくの間、高崎貝塚から離れた時期であったようである。

IV期になって、再びA・C両地区に集落が構成されるようになるが(第248図)、A地区では調査区中央で、2 軒確認しただけである。C地区では調査区南半で7 軒確認した。第40号住居跡だけやや離れているが、第44・47・50号住居跡とともにほぼ同一等高線上で、西側の谷津に面している。また、住居形態も円形状である。第42・43・61号住居跡はそれらの東側に位置しており、西側に広場を持つ配置である。第40号住居跡の住居廃絶後の土器の投棄は吹上パターンに該当しよう。完形になるものは1個もなく、投棄された量は他の住居跡に比べ際立っていた。この時期、炉は地床炉がほとんどであるが、唯一第50号住居跡は土器埋設炉である。集落内で1 軒だけ径がおよそ50cmの大きな土器を埋設炉に使っていること、第42、43、44、47、61号住居跡に囲まれるように位置していることからすると、共同利用というような特殊な住居であったのであろうか。

V期はC地区の第51号住居跡 1 軒のみとなる(第248図)。西側に位置する第132・135号土坑は同一時期である。IV期の集落内ではあるが,1 軒のみというのは環境変化に伴う結果であろう。前期の集落のあり方と似ている。

VI期は、A・B地区に再び集落が営まれるようになる。A地区では4軒、B地区では6軒であるが、いずれも南側が調査区外であるため、さらに軒数は増えるものと思われる(第248図)。この中で、第15・23・56号住居跡は南側に柄部を持ついわゆる柄鏡形住居跡で、堀之内式期の特徴とされる矢作型(SI-23・時期を特定していないSI-19もこのタイプ)・深沢型(SI-15・56)というタイプである。一般的な住居のあり方かどうかは類例を検討しなければならないが、A・B両地区の住居跡をそれぞれ1グループと考えたとき、グループの中央に柄鏡形住居が位置しているということを指摘しておきたい。土器片のほとんど出土しなかった第19号住居跡は住居廃棄パターンから見れば、平和台パターンと言えるものである。A地区の第57号土坑はヤマトシジミを主体とする汽水性の貝塚で、原口遺跡第35号土坑とは同一時期の貝塚である。A地区の住居に伴う貝塚と考えられるが、貝や魚骨・小動物骨(ネズミ類など)に比べて獣骨は非常に少なく、砕かれた焼骨を含めわずかであった。小動物骨が非常に多く遺存していたことからすると、大・中型獣の骨も土坑内に捨てられたとすれば遺存しかるべきであるが、遺存していなかったのは、別な場所に捨てられたものと考えられる。

縄文時代後期中葉から後半の遺物は調査区からわずかに出土しており、高崎貝塚の位置する台地が原口遺跡(後期中葉の住居跡3軒が調査されている)などの縄文人の活動領域として利用されていたものと考えられる。その後、縄文時代晩期から弥生時代後期前半までの遺構・遺物は、高崎貝塚において確認されていない。しばらくの間、人々の活動領域外とされていたのであろう。



VII期は弥生時代後期中葉になって、A地区の台地中央にやや離れて2軒、C地区の台地西縁に2軒の計4軒の住居が集落を構成する(第249図)。住居形態は方形状で、4本主柱と出入り口施設と思われるピットを持つ点で規格性のある住居である。また、A地区の2軒が離れているが、両地区とも住居の規模は20㎡未満と25㎡以上の組み合わせであり、小集団の集落構成の1例と考えると興味深い。県西地方での弥生時代の住居跡調査例は、今までのところ熊の宮遺跡2軒(真壁町)・倉持遺跡3軒(明野町)・仲道遺跡2軒(関城町)・尾崎前山遺跡1軒(八千代町)・姥ケ谷津遺跡1軒(岩井市)の計9軒で、縄文時代や古墳時代の住居跡調査例と比べると非常に少ない。これは県西地方の弥生時代遺跡の少なさもその一因であり、高崎貝塚の4軒は貴重な追加例となる。しかも、尾崎前山遺跡が中期末で、姥ケ谷津遺跡を除く他の7軒が後期後半の時期であることを考えると、その間を埋める時期のものである。第8号住居跡出土壺の頸部に見られる縄文原体を押圧した縦区画線の手法は、笹原遺跡(柏市)や姥ケ谷津遺跡に類似例があり、利根川を挟んで地域的に限られた分布を示す土器群なのか、今後の周辺地域での類例増加に期待したい。高崎貝塚では弥生時代後期後半の遺構は確認されておらず、古墳時代前期との間に、また若干の空白期間が置かれることになる。

VIII期はA地区で6軒・C地区で5軒の計11軒の住居跡(第249図)で,方形及び長方形の住居形態である。当期は土器からさらに細分が可能であり,C地区が先行する様相を示している。住居形態及び規模にはばらつきがあるが5軒で1グループと考えられる。5軒は西側の谷津に沿った配置であり,その後,対岸のA地区に集落が移っていく。A地区は6軒で1グループと考えられ,東側に谷津を望むように,弧状に集落が構成されている。主軸方向はほぼ同じで,規模も面積が15.5㎡から27.5㎡の間である。また,谷津寄りの5軒(SI $-1\cdot2\cdot3\cdot4\cdot6$)は溝状掘り方を持つ住居跡である。やはりC地区の谷津寄りに位置する第35・41号住居跡に同様の溝が認められおり,立地的に住居内の除湿等にかかわりを持った施設ではないかとの指摘(橋本澄朗氏の班内研修時の指摘・1991年)もある。

IX期はA地区に1軒, C地区に2軒の住居跡のみとなる(第249図)。同一主軸方向でほぼ同規模の第7・26号住居はⅧ期の住居から外れたところに住居域を求めているが,面積が60㎡を超える規模の第34号住居跡は東コーナー部分で第49号住居跡を掘り込んでいる。東側が未調査であり集落の広がりは不明であるが,第34号住居跡は規模及び内部施設において,高崎貝塚においては傑出した住居跡である。また,第7号住居跡については高坏の出土状況などが特異(第69図)であり,周辺に該期の遺構もないことから一般の住居とは違った性格のものであったのであろう。

参考文献 (まとめ及び遺構・遺物の解説を含めて)

- (1) 斎藤進「炉穴の時代」『研究論集 X』東京都埋蔵文化財センター 1991年
- (2) 斎藤弘道『県内貝塚における動物遺存体の研究(1)』茨城県歴史館 1978年
- (3) 古河市史編さん委員会『原町西貝塚発掘調査報告書』1985年
- (4) 茨城県教育財団「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書 I 原口遺跡・北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第83集 1993年
- (5) 都築恵美子「竪穴住居址の系統について一縄文中期後半から後期初頭の住居変遷と時期的動態一」『東京考古 8』 東京考古談話会 1990年
- (6) 真壁町教育委員会『熊の宮遺跡発掘調査報告書』1984年
- (7) 明野町教育委員会『倉持遺跡―第1年次調査―』1983年
- (8) 明野町教育委員会『倉持遺跡一第2年次調査一』1984年
- (9) 関城町教育委員会『仲道遺跡発掘調査報告書』1991年
- (10) 八千代町教育委員会『尾崎前山』1981年
- (1) 茨城県教育財団「岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書姥ケ谷津遺跡·南開遺跡」『茨城県教育 財団文化財調査報告書』第89集 1994年
- (12) 笹原遺跡調査会『柏市笹原遺跡1980年度発掘調査報告書』1981年
- (は) 小出義治他『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会 1984年
- (14) 山内清男『日本先史土器の縄文』先史考古学会 1979年
- (15) 江坂輝弥『化石の知識―貝塚の貝・考古学シリーズ9』東京美術 1983年
- (16) 益富壽之助『原色岩石図鑑』保育社 1990年
- (17) 柴田徹「考古学のための岩石鑑定ミニ図鑑―王子ノ台遺跡出土石器をもとにした―」 『東海大学校地内遺跡調査団報告2』1991年
- (18) 石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 1990年
- (19) 新寛永クラブ『新寛永通宝』カタログ
- (20) 野田市郷土博物館『野田と貝塚』1989年
- (21) 古宮・下津谷還暦実行委編『東葛上代文化の研究』1988年
- (22) 遠原貝塚調査団編『遠原貝塚調査報告書』勝田市教育委員会 1980年



貝計測風景



土器実測風景

付 章



第24号住居跡・貝(サルボウ)ブロック

高崎貝塚出土動物遺体について

埼玉大学教養部 教授 **小池裕子** ウラジオストック・ロシア科学アカデミー 極東民族研究所 研究員 Vera Tolostonogova

〈高崎貝塚第10号土坑内貝層〉

縄文時代前期前半(黒浜式期)に属する直径80cmほどの第10号土坑覆土内に、マガキを主体とする貝層が検出された。第10号土坑の覆土は中央セクションで半割され、それまでの一括貝サンプル(SK-10一括)と覆土6層(混土貝層)・7層(混土貝層)が分析された(第250図)。

第10号の貝層はいずれのサンプルでもマガキを主体とし、ハマグリ・オキシジミがこれに混じり、シオフキやウミニナ類が含まれていた。獣骨魚骨は特に検出されなかった。

ハマグリの殻高は20mmから36mmまでの範囲にあり、ハマグリとしては小型であった(第250図)。ハマグリの年齢は分析貝すべて1つの冬輪を伴う2年貝で構成されていた。その成長経過を見ると、第1年目に成長は早く順調な成育を示していたが、第1冬輪近くから急速に成長が落ち、第2年目の春期から採集までもいくつか成長遅延が見られた。貝殻成長線の示す採集季節は第10号土坑一括では冬輪中心から60日目から150日目の範囲にあり、また6層では分析例は少ないが70日目から110日目であった。上記の成長経過は、第10号土坑一括サンプルと6層サンプルのいずれの分析貝でも認められ、ともに同一年の春期から初夏にかけて採取されたものと推定される。

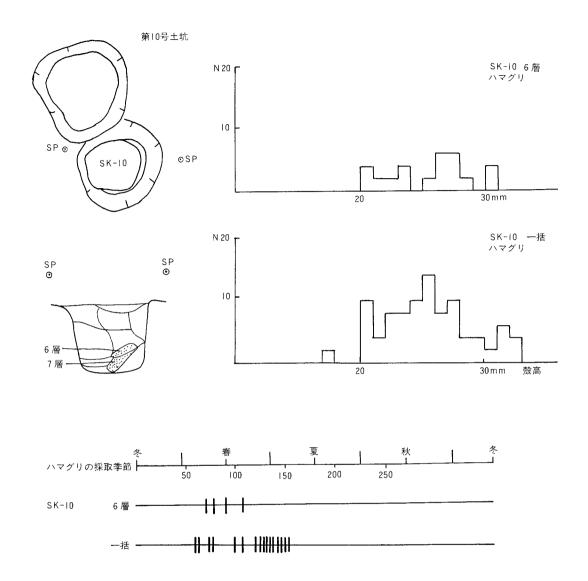
〈高崎貝塚第57号土坑内貝層〉

縄文時代後期前半(堀之内1式期)に属する第57号土坑はいわゆる巾着型で、土坑覆土からはヤマトシジミを主体とする貝層が検出され、またその直下から発見された堀之内1式期に比定される小型土器内には魚骨が多数発見された。第57号土坑の貝サンプルは、中央セクションまでの一括貝サンプル(SK-57一括)と6層混土貝層、7層混土貝層、8層混土貝層が分析された(第251図)。

6層貝層内から長骨破片の獣骨(No.473・PL70)が出土している。

7層貝層内獣魚骨サンプルは小型げっ歯類の獣骨と小型魚の魚骨,および焼骨破片(シカかイノシシの脊椎破片)が含まれていた。小型げっ歯類の獣骨は右下顎骨1,左右上顎切歯,寛骨左右各2,上腕骨左右各1,大腿骨破片1,脊椎骨8からなり,最小個体数は2個体と推定され,ほぼ全身の部位が出土していることから植物残滓とは考えにくい。小型魚の魚骨には,前上顎骨左右各1,前鰓蓋骨8,椎体34,咽頭骨6などが含まれいた。椎体はすべて5~7cmの小型魚のもので,種同定は困難であった。咽頭骨も5m以下で形態から未成熟魚ではないかと思われる。

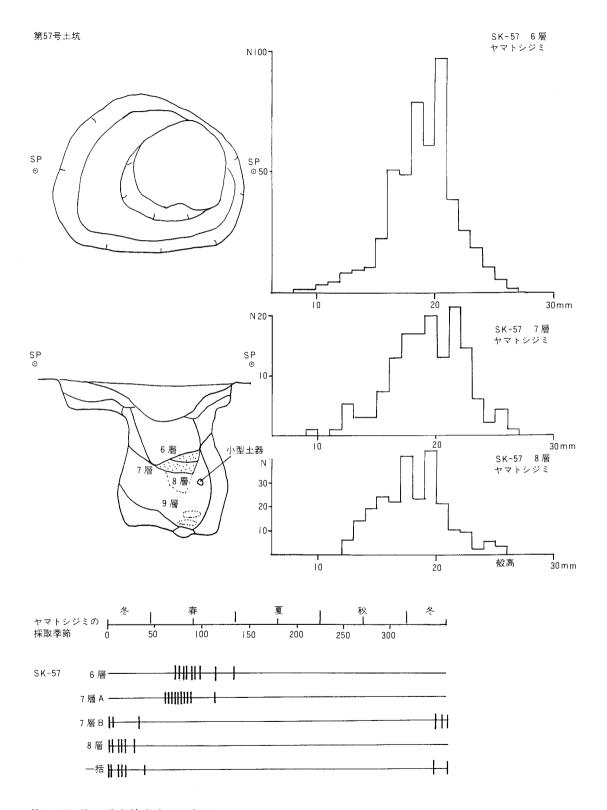
8層貝層内獣魚骨サンプルもその上層の7層獣魚骨サンプルと同様に、小型げっ歯類の獣骨と



第250図 第10号土坑出土貝分析図

小型魚の魚骨が含まれていた。小型げっ歯類の獣骨では左下顎骨1,脛骨破片1,脊椎骨7などが検出され、上層と同質のものと推定される。小型魚の魚骨には、前上顎骨左右各1,前鰓蓋骨8,椎体34,咽頭骨6などが含まれていた。椎体では2個のウナギ目に属すると思われる椎体を除いて小型魚のもので、種同定は困難であった。

また9層上部の小型土器内魚骨サンプル (No.472・PL73) は前上顎骨左2右1, 歯骨左2, 椎体29などが含まれていた。椎体はウナギ目に属すると思われる1個を除いてすべて5前後の小型魚のもので、やはり種の同定はできなかった。頭部・体部とほぼ全身の骨は集中して出土していることから、これらの魚骨も植物残滓とは考えにくい。第57号土坑の貝層の貝サンプルはヤマト



第251図 第57号土坑出土貝分析図

シジミを主体とし、それ以外の貝種は非常に少なく、わずかにマガキ・ハマグリやカワニナ・ウミニナが検出された。ヤマトシジミの殼高は6・7・8層で多少異なり、下層に位置する8層では平均12mmから26mmまでの範囲にあり平均18.3mmであり、上層の7層では9mmから27mmまで平均19.5mmとやや大きくなるものの、ヤマトシジミとしてもやや小型の殼高分布であった。ヤマトシジミの年齢は殼高25mm以上の個体を除いてほとんど1つの冬輪しか検出されなかった。成長経過は全般的に順調な成育を示していた。

貝殻成長線の示す採取季節は下層に位置する8層では大半は第1年目の冬輪が形成されるころであった。7層のヤマトシジミにもそのような冬輪形成期に採取された個体が含まれていたが、新たに60日目から90日目の春期前半を示す貝が見られ、その上層の6層は80日目から130日目の春期後半に推移していた。なお、第57号土坑一括サンプルのヤマトシジミは下層の8層に準ずる冬輪形成期に採取されたものが大半であった。

〈まとめ〉

縄文時代前期前半(黒浜式期)に属する第10号土坑内貝層では、獣骨・魚骨が検出されなかった。貝類組成はマガキを主体とし、ハマグリ・アサリなど干潟河口域に生息する種を幅広く含んでいた。ハマグリはやや小型でほぼ2年貝で構成されていた。殼成長は捕獲前年までは順調であったが、捕獲付近に障害輪が多く認められた。

縄文時代後期前半(堀之内1式期)に属する第57号土坑内貝層は、ヤマトシジミが優先した汽水域の貝類が主体となり、縄文時代前期の干潟河口の種組成から環境が大きく変遷したことを示唆した。そのヤマトシジミは非常に小型でその大半が1年目の冬輪のみの2年貝であった。殼成長が順調なことから生息環境の変化はあまり考えられず、捕食圧の増大が若齢化ひいては貝の小型化に関連したものと考えられる。

また獣骨・魚骨の出土もわずかながら伴うのも後期の特徴のひとつである。第57号土坑からハツカネズミのげっ歯類のほぼ全身部位の骨が出土した。今回検出された魚骨遺体は5~7㎜の小型魚の全身部位に属するもので、ボラ科およびコイ科のウグイ・タナゴなどいずれもその稚魚が相当する可能性が考えられるが、この時期の貝塚でよく見られるマダイ・クロダイ・アジ・サヨリなどの成魚は今回検出されなかった。

高崎貝塚遺構内出土炭化材の樹種同定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高崎貝塚(岩井市大字大崎所在)は、菅生沼西岸の台地上に立地する。台地を東西に開析する 谷を挟んだ北側には、縄文時代及び古墳時代の集落址である北前遺跡が存在する。

高崎貝塚では、これまでの発掘調査による縄文時代~古墳時代にわたる遺構・遺物が検出された。その中でも、A区第3号住居址(古墳時代五領式期)およびA区8号住居址(弥生時代後期中葉)は、住居址床面直上から炭化材が検出された。これらの住居址は遺物の出土状況などから焼失住居址と考えられている。

同定試料とされた炭化材は、A区3号住居址が垂木、A区8号住居址が柱材とされている。また、SI—01(古墳時代五領式期)の住居址床面上から土玉が検出された。土玉は祭祀用具あるいは錘として用いられたなど、用途について様々な説があるが、現時点では明確な用途は不明とされている。土玉内には材と思われる炭化物が認められ、検出状態から土玉に装着されていたものと考えられている。

今回の分析調査では、A区3号住居址およびA区8号住居址から検出された炭化材について材同定を行い、建築材の樹種を明らかにする。また、SI-01内より検出された土玉に装着されていた材についても材同定を行い、その素材について検討する。

1 試料

試料は、SI-01(古墳時代五領式期)出土土玉から検出された 5 点(No.23, 24, 25, 27, SI-01土玉内)の炭化材,A区 8 号住居址(弥生時代後期中葉)の床面直上から検出された炭化材 1点(床直丸材),A区 3 号住居址(古墳時代五領式期)の床面直上から検出された炭化材 1点(丸材の割木材)である。

2. 方法

試料を乾燥させたのみ横断面(木口)・放射断面(柾目)・接線断面(板目)の3断面を作製し、 走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

3. 結果

同定結果を表11に示す。A区3号住居址床直の試料には2種類の材が認められたため,a,b にわけて表記した。同定根拠とした主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。な お,一般的的性質などについては、「木の事典,第2巻,第4巻」(平井,1979,1980)を参考にした。

・ハンノキ属の一種 (Alnus sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に $2\sim 4$ 個が複合または単独、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し、段 (bar)数は $10\sim30$ 、壁孔は密に対列状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性、単列、 $1\sim30$ 細胞高のものと集合組織よりなる。柔組織は短接線状~散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、ハンノキ(Alnus japonica)の仲間(=ハンノキ亜属)とヤシャブシ(A. firma)やミヤマハンノキ(A. maximowiczii)の仲間(=ヤシャブシ亜属)に分けられる。後者についてはミヤマハンノキ属(Duschekia)として独立させる見解もある。いずれも根に根瘤菌が共生しているため痩地でもよく生育する。材はやや軽軟~やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具材などとして用いられるほか、炭が黒色火薬の原料となる種類もある。また樹皮や果実を染料とすることもある。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種(Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は $1\sim3$ 列,孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。 大道管は管壁は厚く,横断面では円形,小道管は管壁は中庸~厚く,横断面では角張った円形, ともに単独。単穿孔を有し,壁孔は交互状に配列,放射組織との間では柵状となる。放射組織は 同性,単列, $1\sim20$ 細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞 はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(Quercus acutissima)とアベマキ(Q. variabilis)の2種類がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽材として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、榾木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・イネ科タケ亜科の一種 (Gramineae subfam. Bambusoideae sp.)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが、現時点では解剖学的特徴で両者を区別することはできていない。

表11 高崎貝塚出土炭化材の樹種

検出遺構・試料名	時 代	樹 種 名
SI-01 土玉内出土炭化材 №23	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
SI-01 土玉内出土炭化材 No.24	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
SI-01 土玉内出土炭化材 No.25	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
SI-01 土玉内出土炭化材 №27	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
SI-01 土玉内	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
A地区第3号住居址床直丸材a	古墳時代五領式期	ハンノキ属の一種
A地区第3号住居址床直丸材b	古墳時代五領式期	タケ亜科の一種
A地区第8号住居址床直丸材	弥生時代後期中葉	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種

4. 考察

SI-01から出土した土玉に付着していた試料(No23, 24, 25, 27, SI-01土玉内)は、全てタケ亜科であった。タケ亜科は、繊維質で弾力性があるため曲げにも強い。したがって、土玉を包むような形で使用することも可能と考えられるが、土玉にどのような状態で付着していたのかなど検出状況が不明なため、詳細はわからない。

A区3号住居址とA区8号住居址から検出された試料は、検出状況から柱や垂木等の建築材である可能性が指摘されている。同定されたハンノキ属とクヌギ節はいずれも堅い材質であり、推定されている用途に使用されたとしても、充分に耐え得ると思われる。

今回の分析調査では、いずれの住居址についても同定点数が限られており、住居址の建築材に対する樹種構成を知ることはできない。しかし、同定されたハンノキ属とクヌギ節は、他地域の遺跡で行われた住居址建築材の分析調査例(例えば、高岡、1984;パリノ・サーヴェイ株式会社、1984、1987など)に従えば、いずれも当時建築材に使用されていたことが知られている樹種である。とくにクヌギ節は、関東地方において同属のコナラ節やクリとともに最も一般的な建築材であったと考えられる樹種である。この2種類は、現在の植生から考えて、遺跡周辺で比較的入手し易い樹種であったと思われ、建築材は遺跡周辺で生育していたものの中から選択され、利用されていたと考えられる。

A区3号住居址からハンノキ属とともに検出されたタケ亜科は、その材質から柱などに用いられていたとは考えにくく、屋根材、壁材、敷物等に用いられたものと思われる。

焼失住居址では、建築材の多くは火災とその後の埋積過程で失われており、建築材の樹種構成 を調べるのは困難であることが多い。したがって、建築材の検討を行う際には多数の住居址から 少数ずつ試料を選択するのではなく,一軒の住居址について部材が異なると思われる試料を可能な限り採取し同定することにより、当時の建築材の樹種構成により近い結果が得られると考える。

文 献

平井信二 (1979, 1980) 木然事典 第2巻, 第4巻。かなえ書房。

- パリノ・サーヴェイ株式会社(1984)古墳時代の樹種鑑定。「尾ヶ崎遺跡―縄文・古墳時代集落跡の調査―」,埼玉県庄和町・尾ヶ崎遺跡調査会,p. 159-162。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1987)炭化材・炭化種子同定。「一宇都宮競馬場附属総合きゅう舎 建設地内遺跡一御新田遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡」栃木県埋蔵文化材調査報告書第85集, p. 193-197。
- 高岡正之(1984) 赤羽根遺跡出土の炭化物について、「赤羽根 一般国道50号(岩舟〜小山バイパス) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告〈本文編〉」、栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団、p. 360-361。

写 真 図 版



菅生沼と高崎貝塚(中央)・北前遺跡(手前)



高崎貝塚上空から菅生沼を臨む



試掘(A地区)



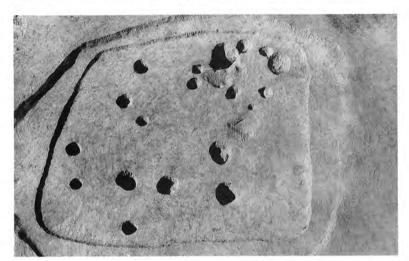
表土除去(B地区)



遺溝確認状況(C地区)



調査風景(C地区)



第20号住居跡



第24号住居跡



第24号住居跡 貝•遺物出土状況(1)



第24号住居跡 貝・遺物出土状況(2)



第24号住居跡 遺物出土状況



第24号住居跡 第1貝ブロック層断面



第25号住居跡 貝ブロック出土状況



第25号住居跡 遺物出土状況



第25号住居跡 第3貝ブロック



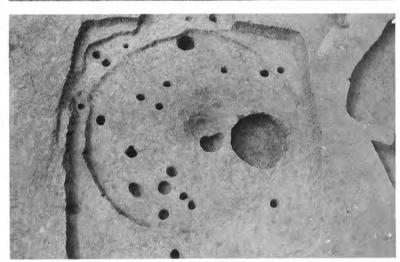
第12号住居跡 遺物出土状況



第 9 号住居跡 遺物出土状況



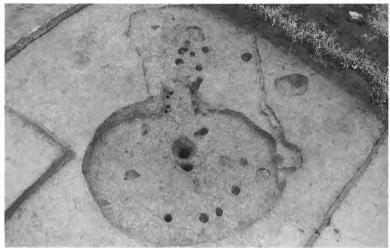
第 9 号住居跡 磨製石斧出土状況



第16号住居跡



第16号住居跡 遺物出土状況



第15号住居跡



第15号住居跡 遺物出土状況



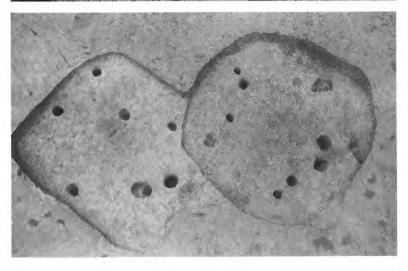
第22号住居跡



第22号住居跡 ミニチュア土器 出土状況



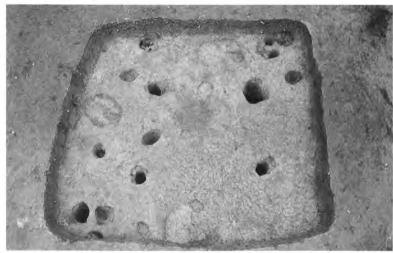
第23号住居跡 遺物出土状況



第10·11号住居跡



第10号住居跡 遺物出土状況



第8号住居跡



第 8 号住居跡 遺物・炭化材出土状況



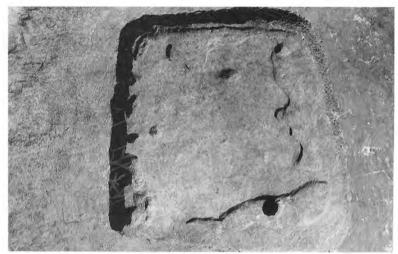
第 8 号住居跡 紡錘車出土状況



第 8 号住居跡 磨製石斧出土状況



第1号住居跡 溝状掘り方確認状況



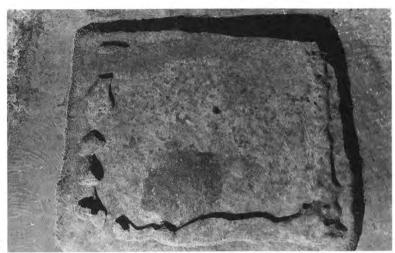
第1号住居跡



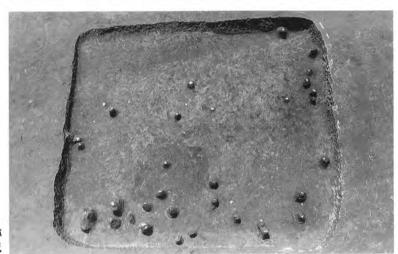
第1号住居跡 遺物出土状況



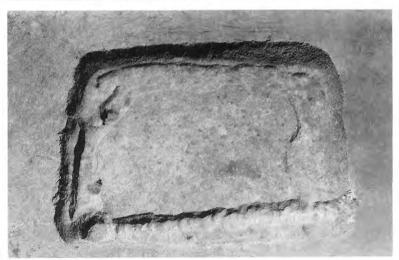
第2号住居跡



第3号住居跡



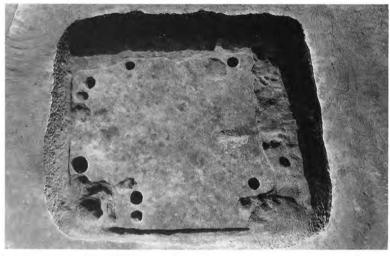
第3号住居跡 遺物出土状況



第 4 号住居跡



第 4 号住居跡 剣形模造品出土状況



第5号住居跡



第 5 号住居跡 遺物出土状況



第 6 号住居跡 遺物出土状況

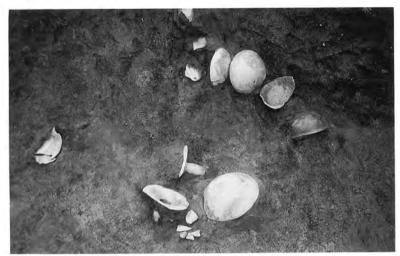


第7号住居跡



第 7 号住居跡 遺物出土状況

PL16



第7号住居跡 遺物出土状況



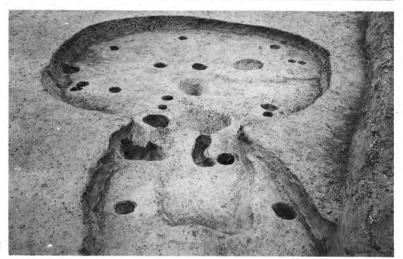
第54号住居跡



第52号住居跡



第52号住居跡 遺物出土状況



第56号住居跡



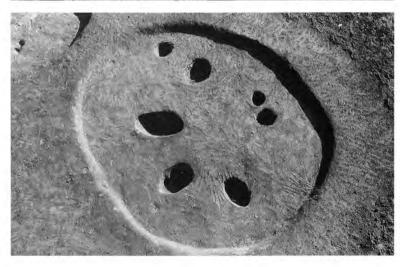
第58号住居跡



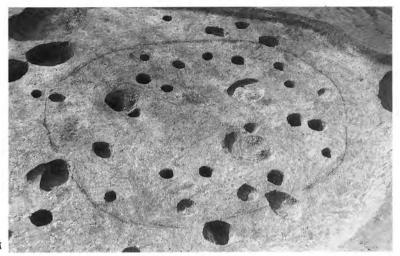
第29号住居跡



第30号住居跡



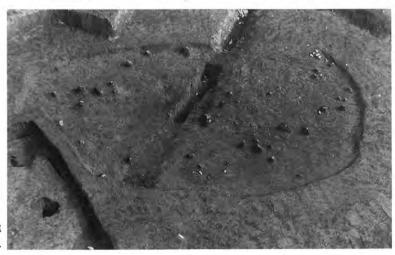
第32号住居跡



第60号住居跡



第28号住居跡



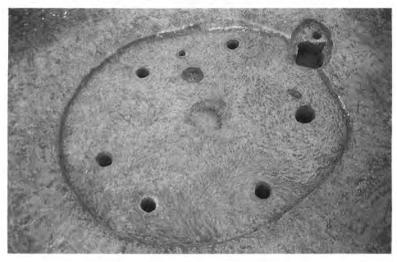
第28号住居跡 遺物出土状況



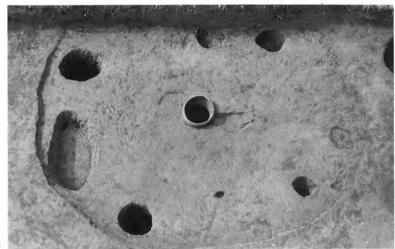
第40号住居跡



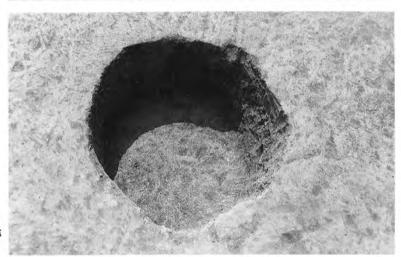
第40号住居跡 遺物出土状況



第47号住居跡



第50号住居跡



第50号住居跡 炉掘り方



第50号住居跡 埋甕炉



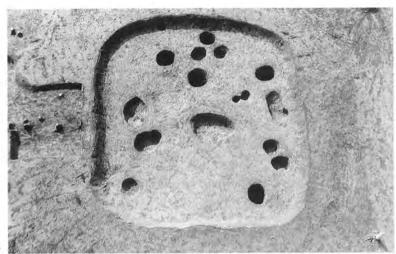
第50号住居跡 埋甕炉と石



第51号住居跡 遺物出土状況



第51号住居跡 磨製石斧出土状況



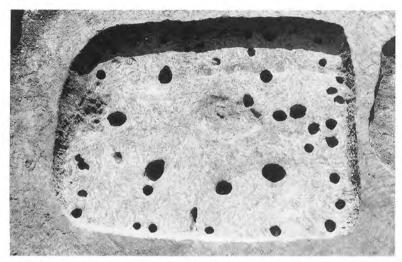
第43号住居跡



第61号住居跡 遺物出土状況



第27号住居跡 遺物出土状況



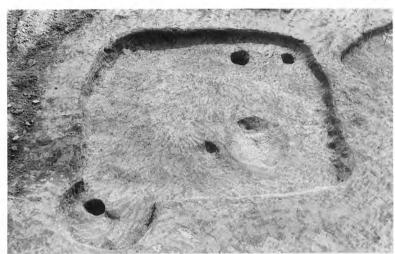
第31号住居跡



第35号住居跡



第39号住居跡



第41号住居跡



第41号住居跡 遺物出土状況



第45号住居跡



第45·51·61号住居跡



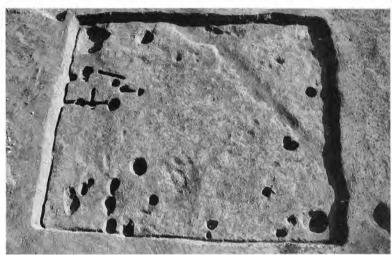
第45号住居跡 遺物出土状況



第45号住居跡 粗製器台出土状況



第49号住居跡 土層セクション・ 遺物出土状況



第26号住居跡



第26号住居跡 遺物出土状況



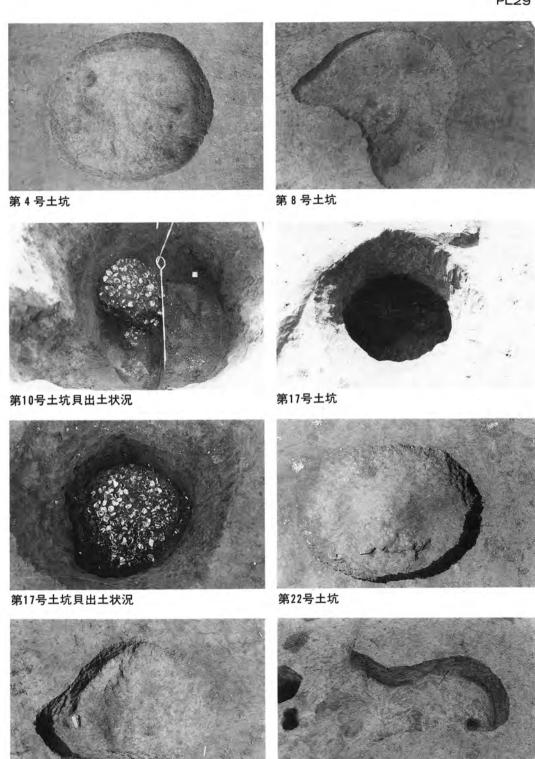
第26号住居跡 遺物·炭化材出土状況



第34号住居跡



第34号住居跡 遺物出土状況



第34号土坑

第25号土坑



第35号土坑



第45号土坑



第57号土坑



第57号土坑(6層内)長骨出土状況



第57号土坑(9層内)土器出土状況



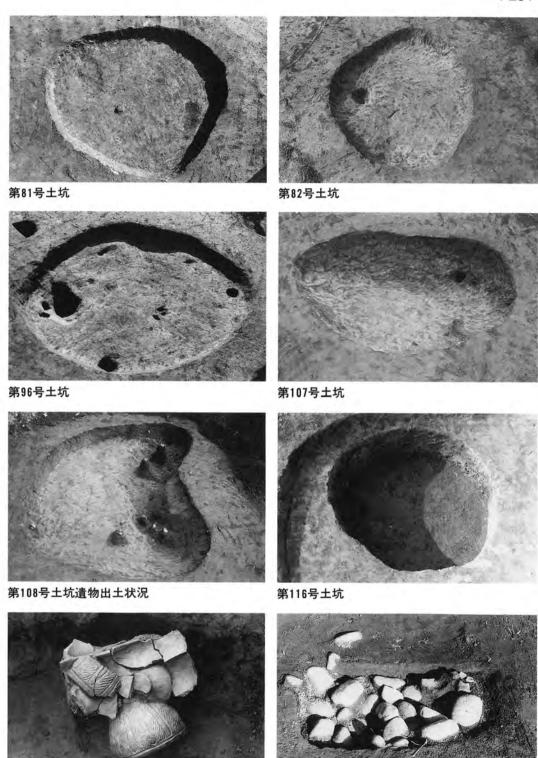
第57号土坑貝出土状況



第77号土坑遺物出土状況



第78号土坑

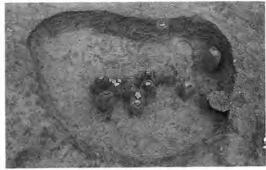


第118号土坑集石状況

第116号土坑遺物出土状況



第119号十坑



第132号土坑遺物出土状況



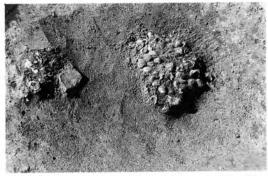
第135号土坑遺物出土状況



第140号土坑遺物出土状況



第143号土坑



第144号土坑貝ブロック出土状況



第145号土坑遺物出土状況



第5·6号溝



第1号溝·第1号井戸



第2号井戸



第3号井戸



第4号井戸



遺構外(A地区)遺物出土状況



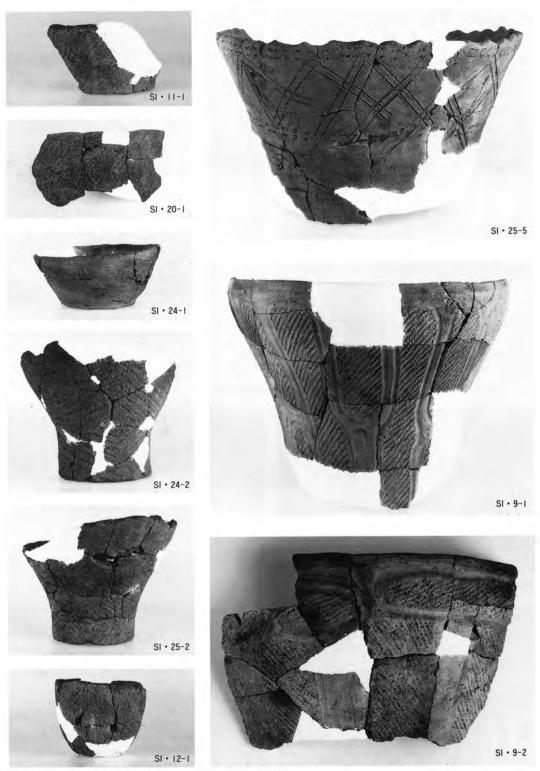
第6号井戸



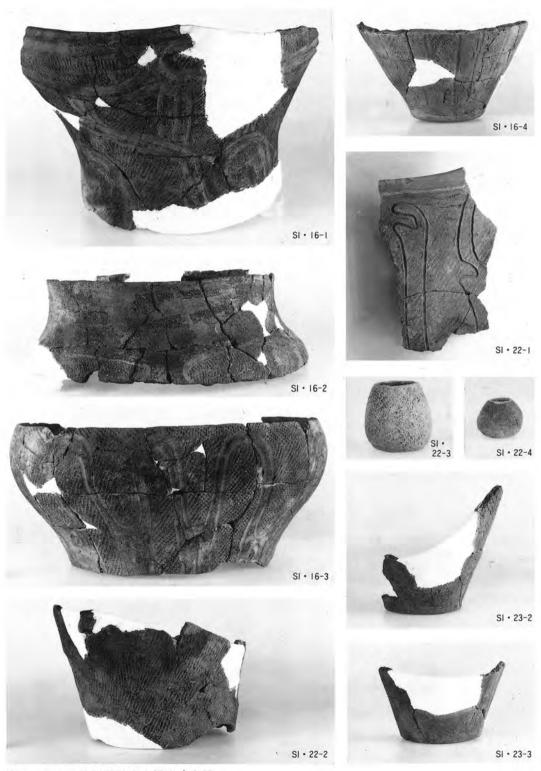
遺構外(C地区)遺物出土状況



第6号井戸遺物出土状況



第9・11・12・20・24・25号住居跡出土縄文式土器



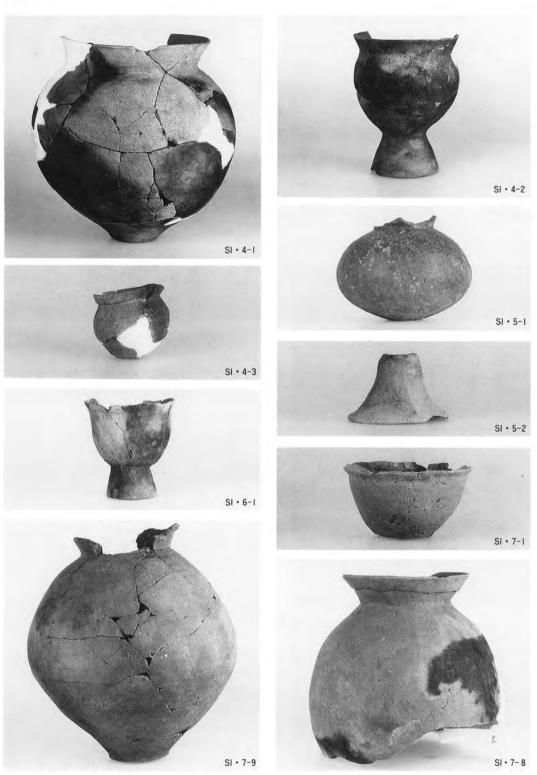
第16·22·23号住居跡出土縄文式土器



第1・8・10・23・37号住居跡出土縄文式土器・弥生式土器・土師器



第1・2号住居跡出土土師器



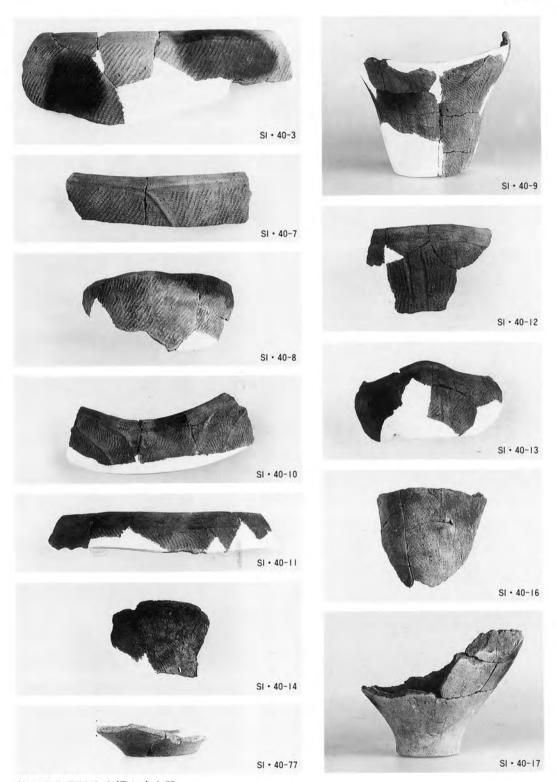
第4·5·6·7号住居跡出土土師器



第7号住居跡出土土師器



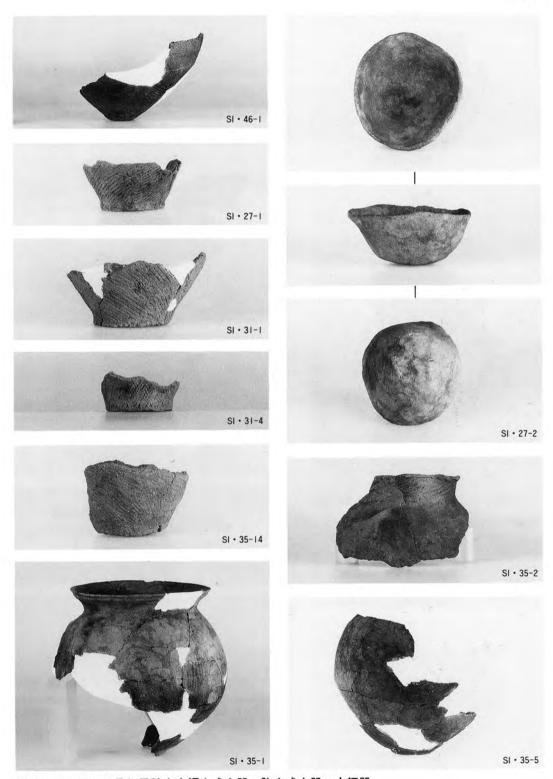
第7・30・33・40号住居跡出土土師器・縄文式土器



第40号住居跡出土縄文式土器



第40·47·50·51·61号住居跡出土縄文式土器



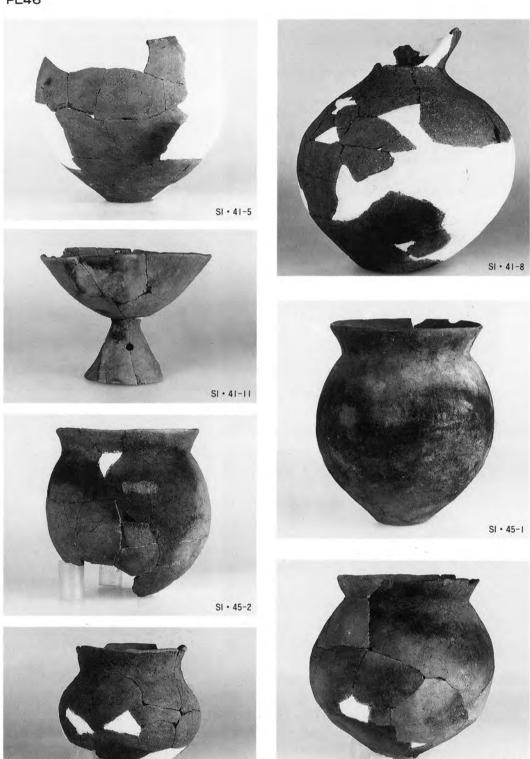
第27・31・35・46号住居跡出土縄文式土器・弥生式土器・土師器



第35·39号住居跡出土土師器



第39・41号住居跡出土土師器



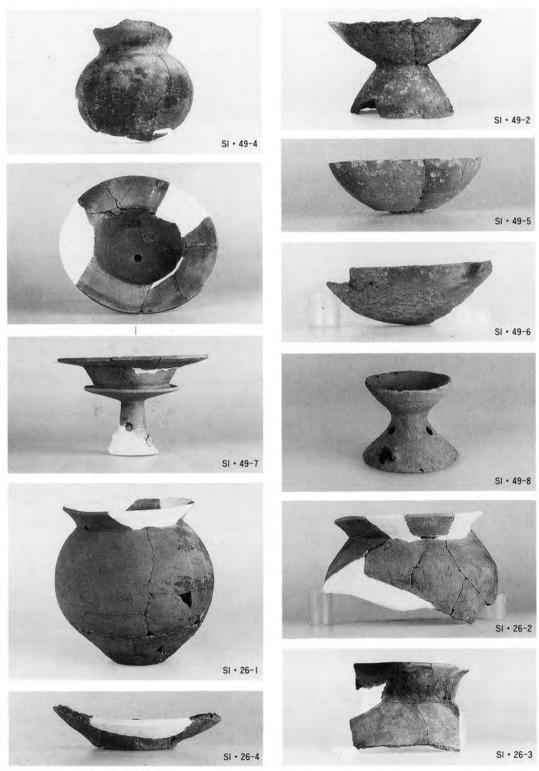
SI · 45-3

SI · 45-4

第41 • 45号住居跡出土土師器



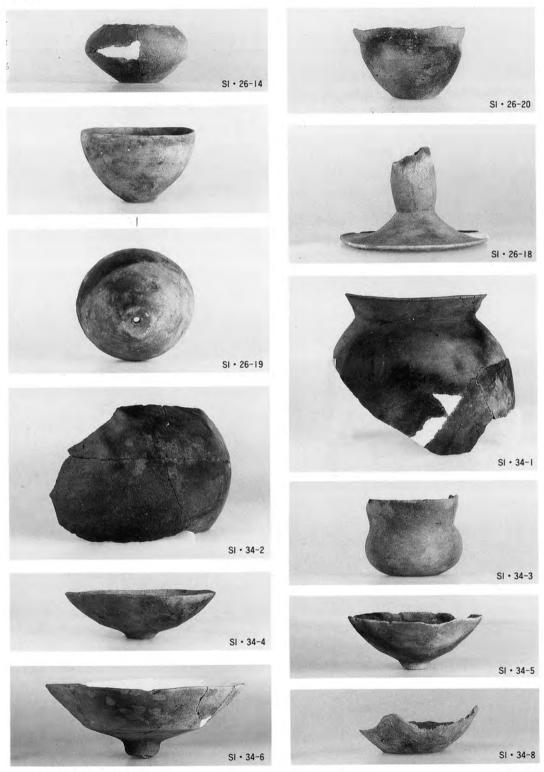
第45・49号住居跡出土土師器



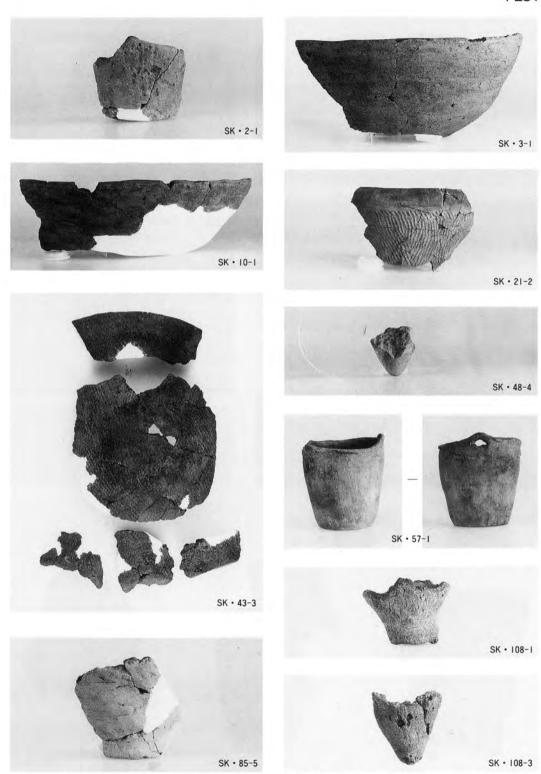
第26·49号住居跡出土土師器



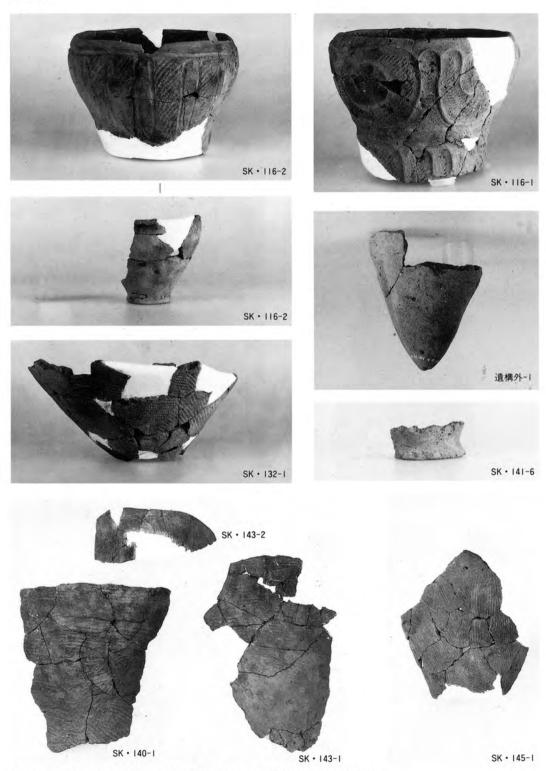
第26号住居跡出土土師器



第26・34号住居跡出土土師器



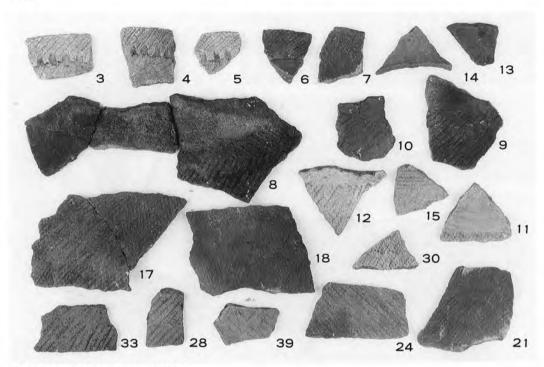
第2・3・10・21・43・48・57・85・108号土坑出土縄文式土器



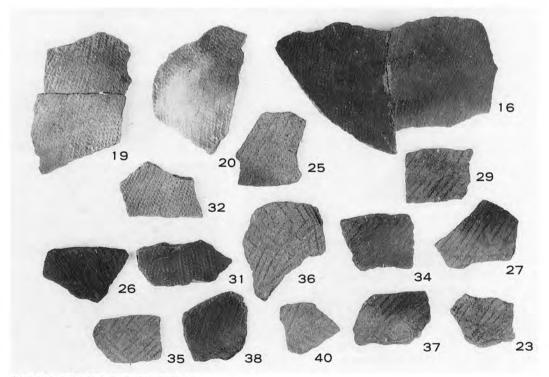
第116・132・140・141・143・145号土坑及び遺構外出土縄文式土器



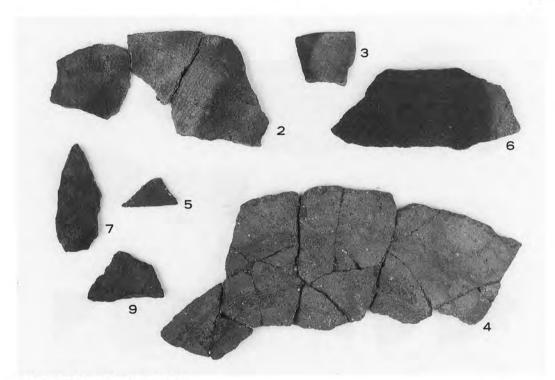
第5・6・号井戸及び遺構外出土縄文式土器・土師器



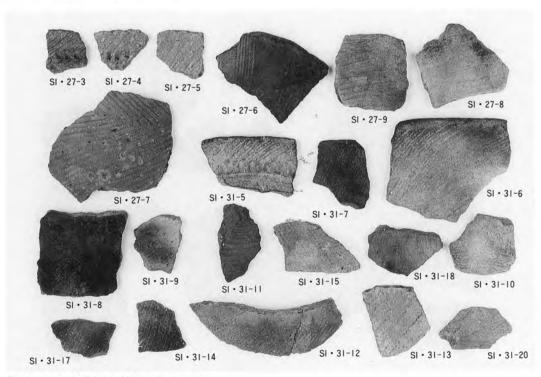
第8号住居跡出土弥生式土器片(1)



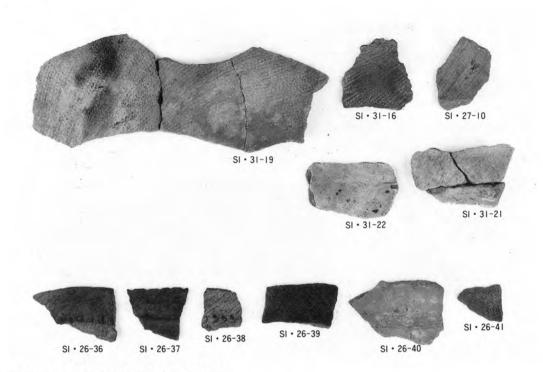
第8号住居跡出土弥生式土器片(2)



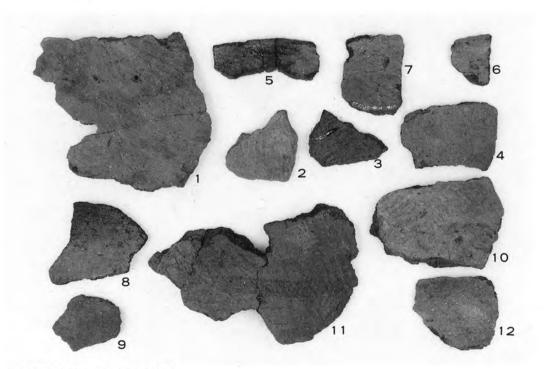
第10号住居跡出土弥生式土器片



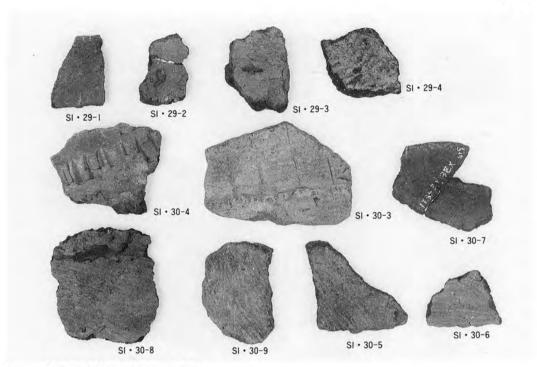
第27·31号住居跡出土弥生式土器片



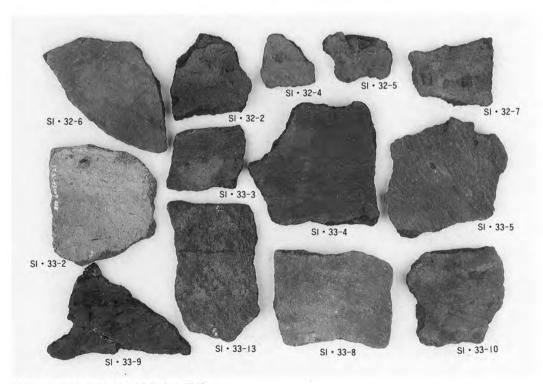
第26·27·31号住居跡出土弥生式土器片



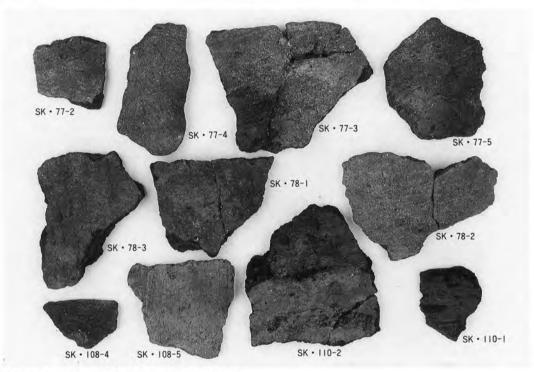
第28号住居跡出土縄文式土器片



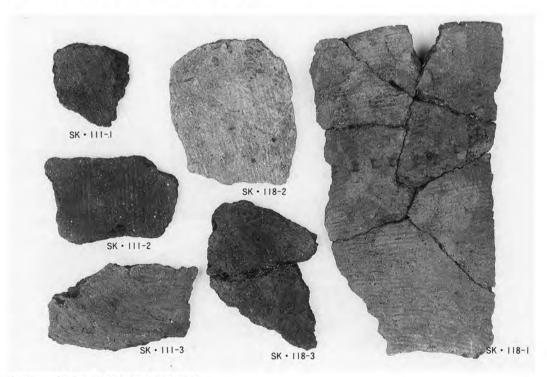
第29・30号住居跡出土縄文式土器片



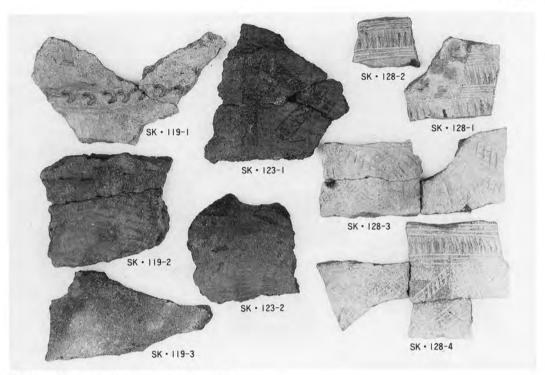
第32・33号住居跡出土縄文式土器片



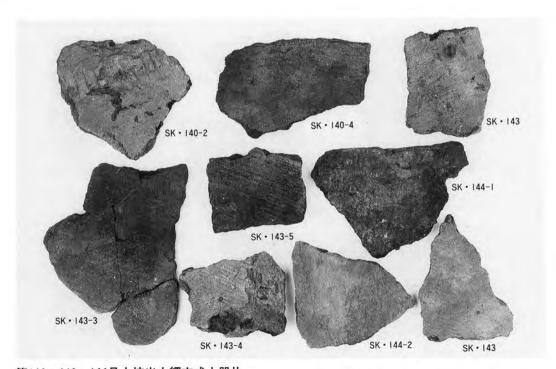
第77·78·108·110号土坑出土縄文式土器片



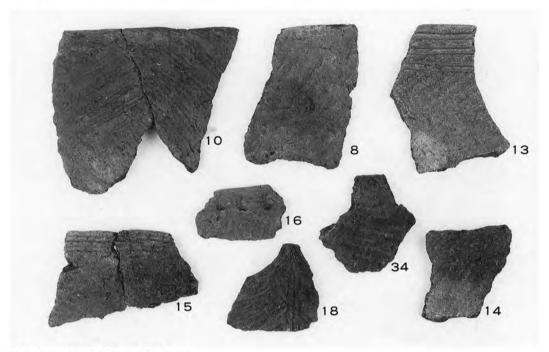
第111·118号土坑出土縄文式土器片



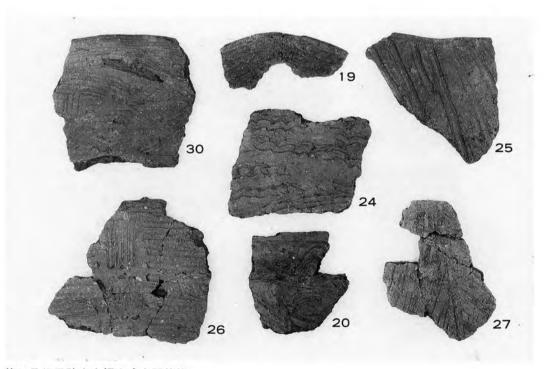
第119・123・128号土坑出土縄文式土器片



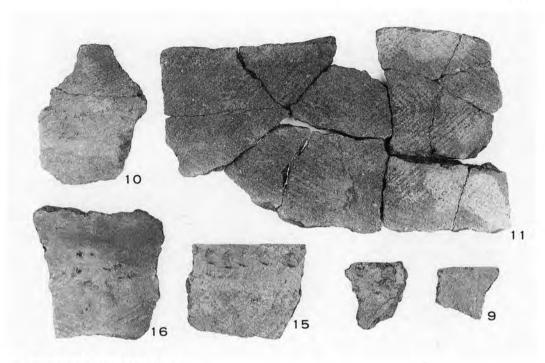
第140·143·144号土坑出土縄文式土器片



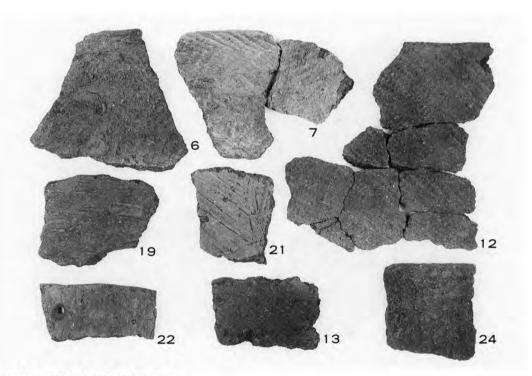
第24号住居跡出土縄文式土器片(1)



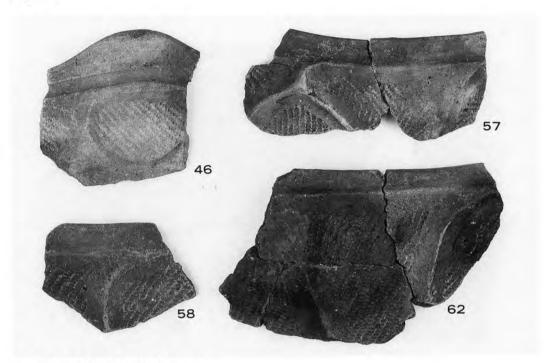
第24号住居跡出土縄文式土器片(2)



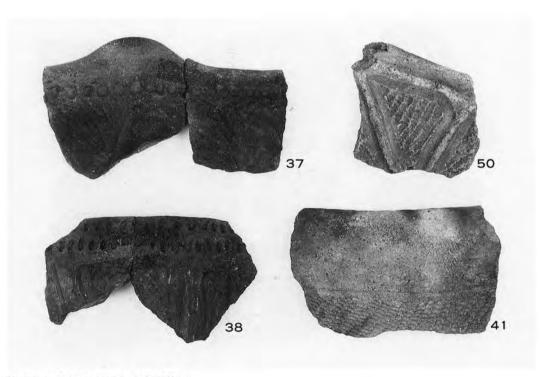
第25号住居跡出土縄文式土器片(1)



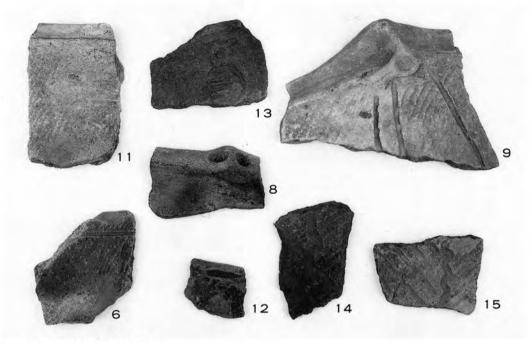
第25号住居跡出土縄文式土器片(2)



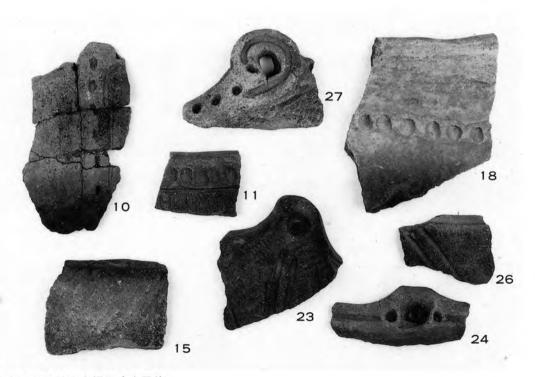
第40号住居跡出土縄文式土器片(1)



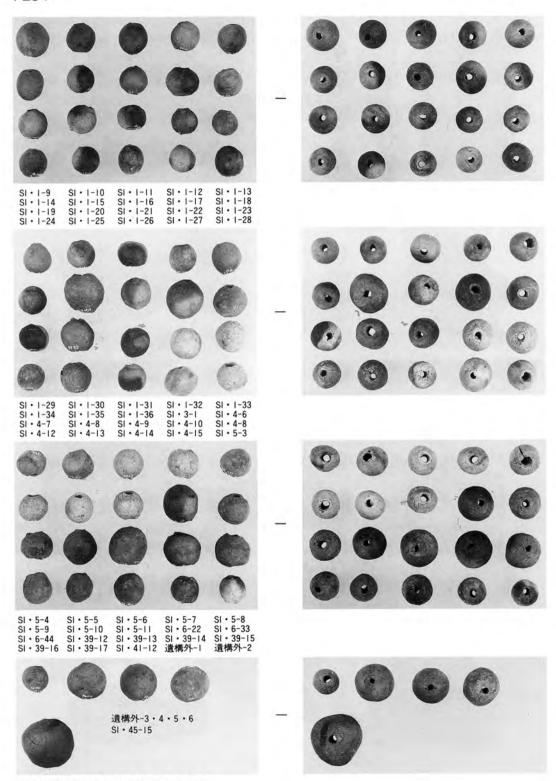
第40号住居跡出土縄文式土器片(2)



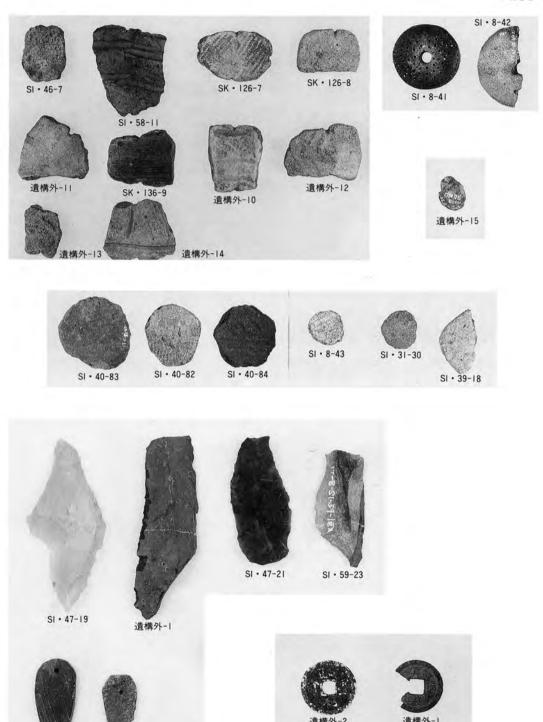
第22号住居跡出土縄文式土器片



第23号住居跡出土縄文式土器片



各遺構及び遺構外出土土製品(土玉)

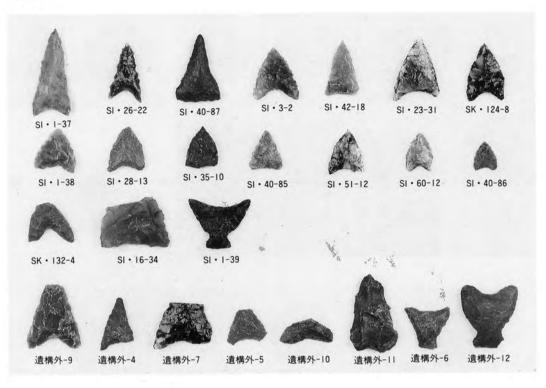


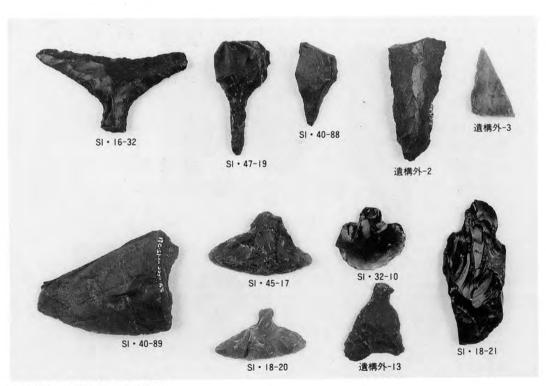
各遺構及び遺構外出土土製品・石器・石製品・古銭

SI · 26-21

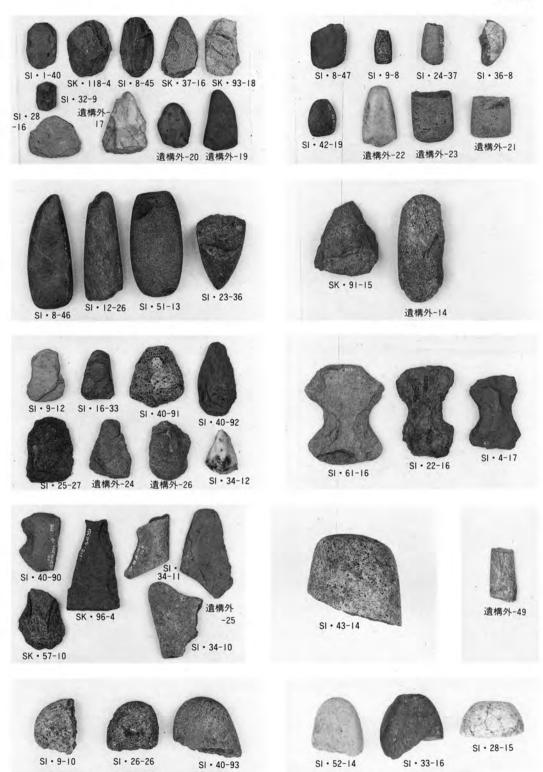
SI · 4-16

PL66

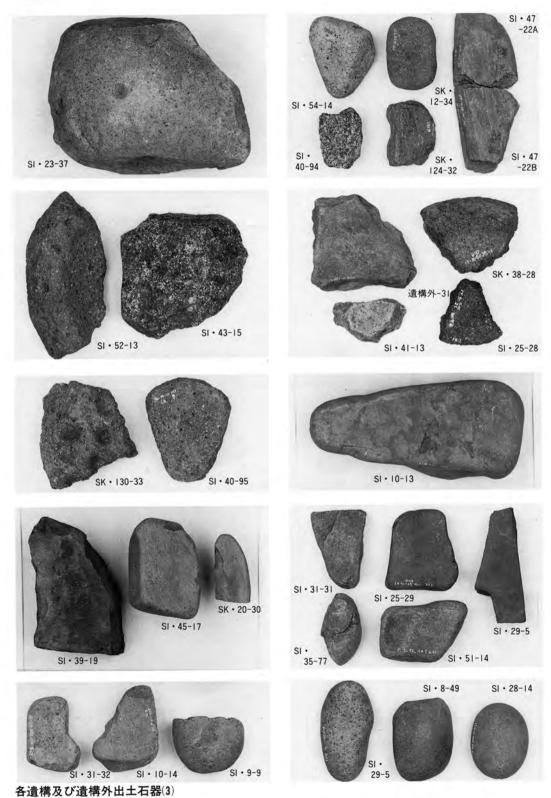


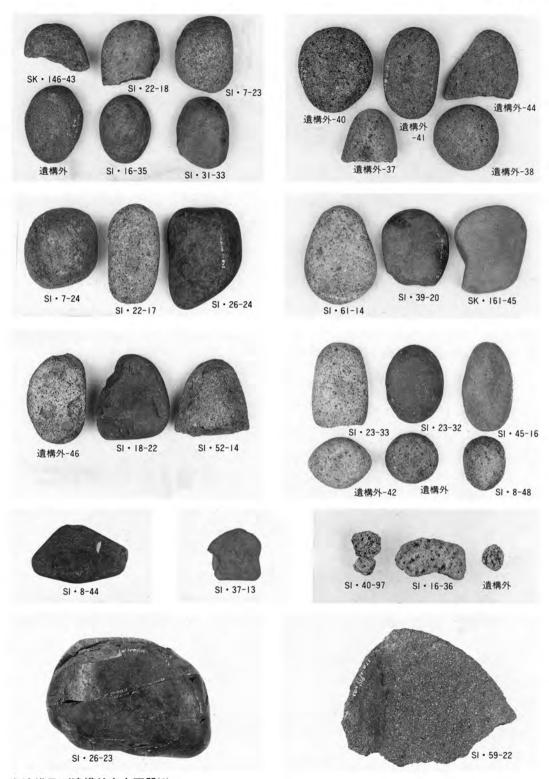


各遺構及び遺構外出土石器(1)



各遺構及び遺構外出土石器(2)

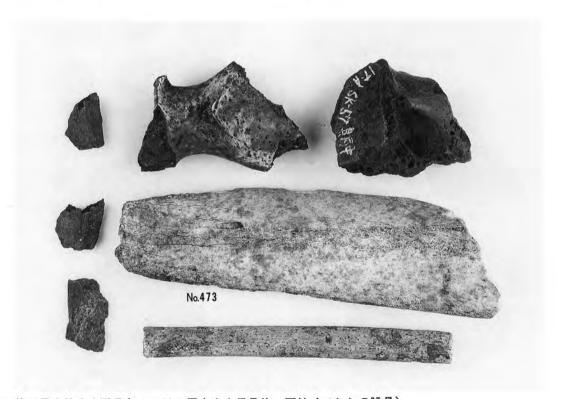




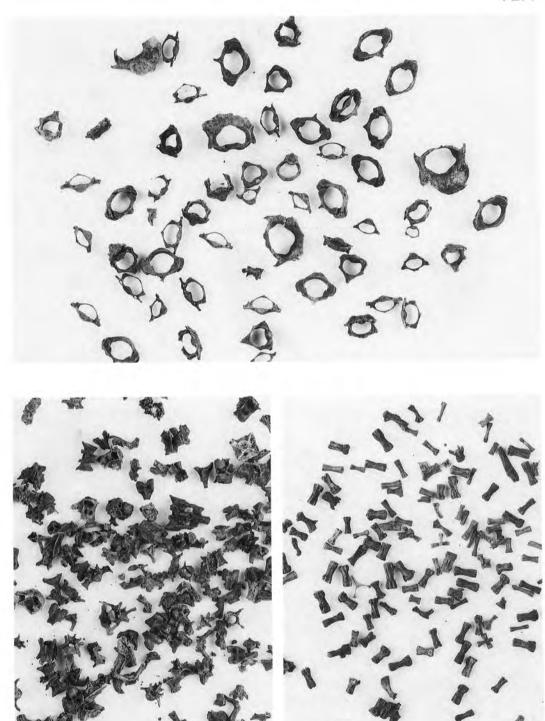
各遺構及び遺構外出土石器(4)



第57号土坑 9 層出土獣焼骨細片(左)・クロダイ歯骨(右)



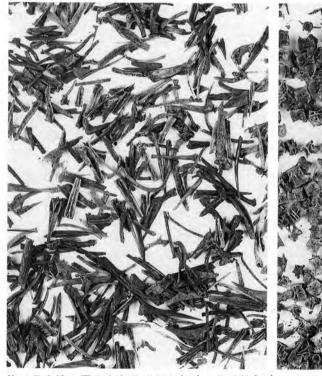
第57号土坑出土獣骨(No.473は 6 層中出土長骨片・下はイノシシの腓骨)



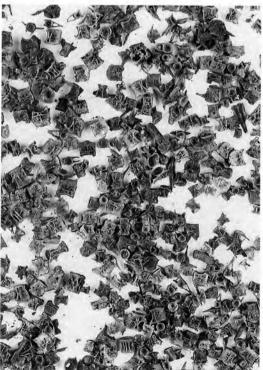
第57号土坑 9 層出土ネズミ類・脊椎骨(上)・椎体(下左)・尾骨(下右)



第57号土坑 9 層出土魚骨片など(左)・魚椎体(右)



第57号土坑 9 層出土魚骨片など(左)・魚椎体(右)

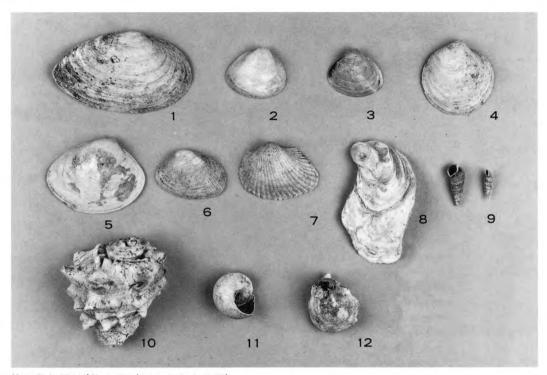




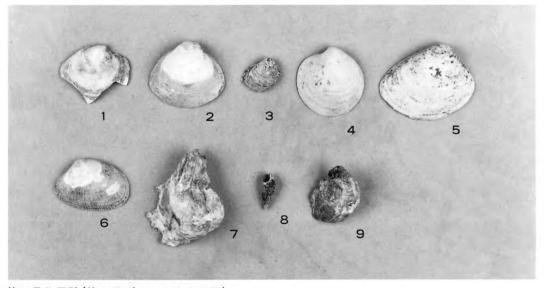
第57号土坑 9 層出土の土器内魚骨(No.472)



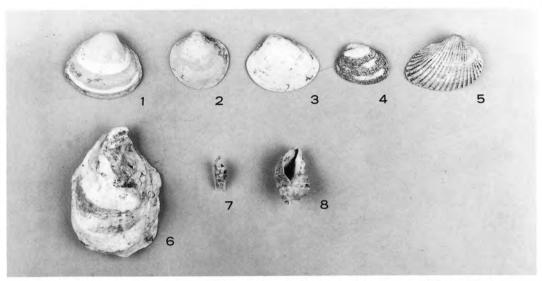
第57号土坑出土ネズミ顎骨・寛骨・大腿骨など



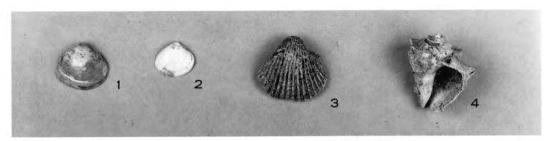
第24号住居跡(第1貝ブロック出土貝類) 1.オオノガイ 2.シオフキ 3.ヤマトシジミ 4.オキシジミ 5.ハマグリ 6.アサリ 7.サルボウ 8.カキ 9.ウミニナ類 10.アカニシ 11.巻貝 12.ウミニナ類付カキ



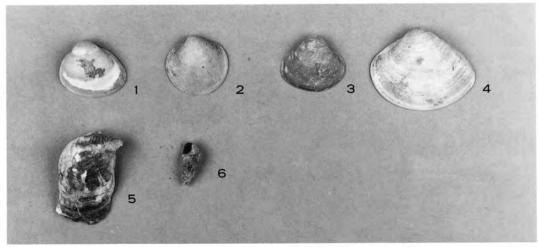
第24号住居跡(第2貝ブロック出土貝類) 1.オキシジミ 2.シオフキ 3.ヤマトシジミ 4.オキシジミ 5.ハマグリ 6.アサリ 7.カキ 8.ウミニナ類 9.ウミニナ類付カキ



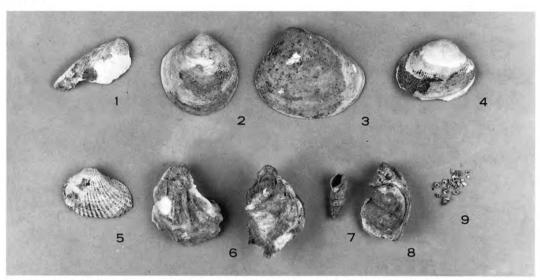
第25号住居跡(第3貝ブロック出土貝類) 1.シオフキ 2.オキシジミ 3.ハマグリ 4.アサリ 5.サルボウ 6.カキ 7.ウミニナ類 8.アカニシ



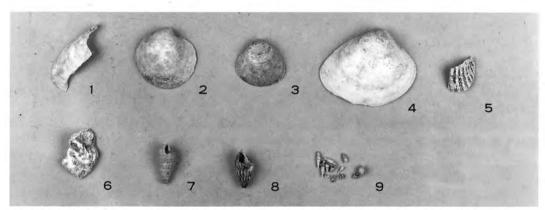
第37号住居跡出土貝類 1.ヤマトシジミ 2.ハマグリ 3.サルボウ 4.アカニシ



第10号土坑出土貝類 1.シオフキ 2.オキシジミ 3.ヤマトシジミ 4.ハマグリ 5.カキ 6.ウミニナ類



第17号土坑出土貝類 1.オオノガイ 2.オキシジミ 3.ハマグリ 4.アサリ 5.サルボウ 6.カキ 7.ウミニナ類 8.ウミニナ類付カキ 9.小巻貝類

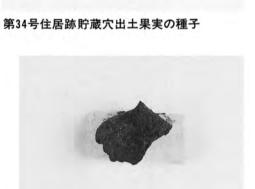


第57号土坑出土貝類 1.オオノガイ 2.オキシジミ 3.ヤマトシジミ 4.ハマグリ 5.サルボウ 6.カキ 7.ウミニナ類 8.ウミニナ類(フトヘナタリ) 9.小巻貝類



第144号土坑出土貝類 1.オキシジミ 2.ヤマトシジミ 3.ウミニナ類 4.カキ 5.ハイガイ





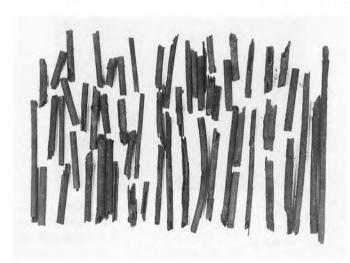
第17号土坑(5層中)出土ドングリ



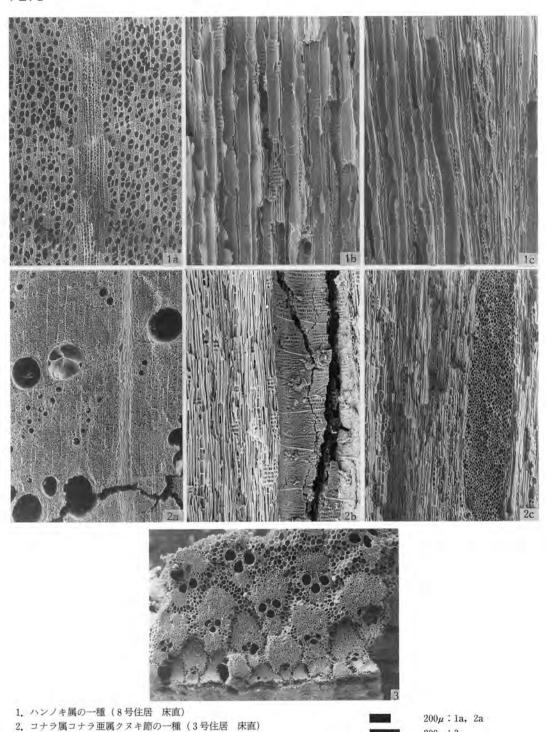
第15号住居跡炉出土クルミ



第26号住居跡出土甕(3)内面籾痕



第34号住居跡 出土カヤ



 $200\mu : 3$

200μ: 1b-c, 2b-c

3. タケ亜科の一種 (1号住居 土玉内)

a:木口, b:柾目, c:板目, 3:横断面

茨城県教育財団文化財調査報告第88集 茨城県自然博物館(仮称)建設 用地内埋蔵文化財調査報告書II

高崎貝塚

平成6年3月25日 印刷平成6年3月31日 発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団 水戸市見和1丁目356番地2号 Tel 0292-25-6587

印 刷 ㈱あけぼの印刷社 水戸市松が丘2-6-24 Tel 0292-51-5265



